

デスクゲームでの日常を

不苦勞

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「これはゲームであっても、遊びではない」

サービス開始初日からデスクゲームとなったVRMMO「ソードアート・オンライン」

その中でプレイヤーネーム『クレハ』

青崎あおさき紅葉もみじは店のカウンターでコーヒーを飲んでいた。

「……………ひまだな。」

『護衛、情報収集、料理、御使いなんでもどうぞ』

クレハが営む「万屋秋風」よろずやあきかぜにて、デスクゲームでの日常のひと時を……

武器屋とか情報屋がありなら万屋もありだろという考えではじめた小説です。

原作はすべて読んでいますが矛盾点や設定が違ふところも出てくるかもしれません、悪しからず

：追記

日常と銘打っていますが、3割ほどシリアスパートも含まれています。原作のストーリーが大きく進む場面等はシリアス多目になると思います。

目次

S A O 編

黒の剣士との日常	214
キツチリしたお店へ	197
龍使いからの依頼 後編	166
龍使いからの依頼 前編	140
マイルドベリー	113
鼠の陰謀	93
クレハ	61
再会、そして：	43
副団長からの依頼	25
物好きな情報屋	9
万屋の日常	1

鼠との日常	225
閃光との日常	237
商人との日常	257
払拭される悪名	282
団長からの依頼	300
決闘 前編	335
決闘 後編	354
鼠の憂さ晴らし	373
結婚報告	389
男だらけの祝賀会	410
ユイ 前編	425
ユイ 中編	446
ユイ 後編	463

軍への後始末	490
ドライ・ド・ライフ	514
暑さに負けず	532
河の主釣り	558
親友へ	591
相棒へ	620
作戦開始	640
あとは任せた	660
剣影のクレハ	680
番外編	
女子会	711

SAO編

万屋の日常

VRMMO ソードアート・オンライン

「世界初のフルダイブ空間」と称された夢の世界も、今では今世紀最大のサイバー犯罪として名を馳せている。

サービス開始初日から一万人のプレイヤーは期待に胸を膨らませ、続々とプレイを開始した。

ある人は自分で戦う楽しさに魅せられ、ある人は仲間と冒険に向かい、ある人は世界の美しさにただただ感嘆していた。

この世界がデスゲームとなることも知らずに・・・

・・・

そのデスゲームの中、俺こと青崎 紅葉・プレイヤー名『クレハ』は生き続けていた。現在アインクラッドは55層まで攻略され、デスゲームは少しずつだが順調に終わりに近づいてた。

俺もアインクラッドの攻略に参加し、いち早く現実世界に戻るために活動するべきなのだが、俺はとある理由から最前線で命を懸けて戦うことはできない。かといって全く攻略に関わらずにいるのにも気が引けるわけで…

そこで俺が取った選択肢は「プレイヤーのサポート」である。

いわゆる生産職と呼ばれるもので、武器屋や防具屋、商人などの直接戦闘に関わらずに攻略に協力する立場だが、俺はその中でも特殊な立場に立っている。

48層にある俺の店は、万屋「秋風」

『護衛、情報収集、料理、お使いなんでもござれ』ってことで、俺の技術でできる範囲なら報酬しだいでも何でも受け持っている。

今日も俺は、大して多くもない依頼を受けながらこのデスゲームを生き抜いている。

「……ひまだな。」

昨日から受けた依頼はたったの3個だけ。それも買い物付き添いとクエストの情報提供、あとは俺が作った料理を少し売っただけ。時間を合算しても30分にも満たないぞ。

「金になるのはいいけど、もう少し手ごたえがある依頼はこねーもんかねえ……命の危険が有るのはごめんだけ」

「客商売でわがままいってんじゃないわよ」

不意に入り口のほうから聞こえた声に釣られて振り返ると、ピンクのショートヘアをした少女が鍛冶用の片手サイズのハンマーをもってこつちをジト目で見ていた。

「なんだリズ来てたのか、店はいいのか？」

「あたしはあんたと違ってきちんと予定を組んで仕事してるから、今日の分の予約はもうないわよ」

「予定が組めないのは仕方ないだろ、俺の商売は客の都合しだいなんぞね」
「よくそんなのでやっていけるわね・・・」

彼女はリズベット俺と同じ48層で武具屋をしている鍛冶職人で、俺の店の常連さん・・・もといひやかしさんだ。

最初は普通に客としてきていたんだが、とある出来事から依頼もなしに俺の店に来るようになった。

「んで、今日は何の用だ？」

「決まってるでしょ、いつものコーヒーと洋菓子よ」

そう、とある出来事って言うのは大した事もない、ただ俺がリズにおやつを振舞っただけ。クッキーとコーヒーというかなり簡単なものだがリズはそれをずいぶんと気に入ったらしい。それからほぼ毎日俺の店におやつを食べに来るようになった・・・金も払わずに。

まあいつもの事だしいまさら気にして無いわけで、俺は文句を言いながらもいつも通り準備にとりかかる。

「またかよ……。そんなに好きなら自分で『料理スキル』上げればいいだろ」

「いやよめんどくさい、それに今から上げたってあんたの腕には追いつきやしないわよ。……というかあんたの料理スキルって今どのくらいなの？」

「めんどくさいっておまえな……。まあいいか、スキル熟練度は完全習得目前ってとこだな」

「はあ!?!完全習得ってあんたいくらなんでも早すぎじゃない!?アスナだつてこの前やつと半分を超えたつて言つてたのに……。あんた相当暇だつたのね」

「ほつとけ、というかアスナつてあの『閃光』のアスナか？ 攻略の鬼とか言われてる割に料理スキルなんて上げてるのか、変わり者だな」

まあ気持ちちはわかる。SAOの料理はどれも微妙すぎるからな、不味いのではなく微妙なのだ。

食えないわけではないが決して美味しくない。そのため美味しい料理はSAO唯一の娯楽とまで言つていい。だが当たり前なことに『料理スキル』は戦闘に関しては全く役にはたたないので、上げているプレイヤーなんて殆ど居ない。

「とうかりズ、お前なんで血盟騎士団の副団長と知り合いなんだよ」

「数少ない女子プレイヤー同士、自然と知り合ったのよ。今じゃ私の店の常連よ」

なに？こいつそんなビッグネームの常連客ゲットしてたのか、だからこいつの店は繁盛してんのか。いいなー俺の店にもビッグネームの客がこねーかなー。血盟騎士団団長のヒースクリフとか他の有名ギルドでもいいなー……

「……………うーん」

「何ブツブツ言ってるのよ」

「なんでもねーよ。ほらできたぞ、コーヒーもどきとクッキーもどきだ」

「まってましたー！相変わらずすごいできの良さね。いつも思うけど何でコレがもどきななの？完璧じゃない」

「俺がやってるのはあくまで味と見た目を極限まで似せてるだけだからな、現実世界の本物とは似て非なるものって訳だよ」

「なるほどねー。けどさっきのアスナの話じゃないけど、あんたは何で『料理スキル』を上げようと思ったの？言っちゃ悪いけど似合わないわよ？」

「……………」

料理スキル……

あげるのに無駄に時間がかかる上に戦闘では全く役に立たんスキル……

……俺が『料理スキル』を上げてる理由？

……そんなもん決まってるんだろ

「なに？どうしたの？似合わないって言ったのが気に障っちゃった……？」

「……」

「いや、その……いつもの軽口のもりだったのよ？別に本気って訳じゃなくて」

「……ヒー……」

「え？」

俺が『料理スキル』を極めている理由は……

「この世界にコーヒーがねえからだよ!!」バンツ!!

「うわあびつくりしたあ!・・・ってコーヒー?それだけ?」

「それ『だけ』だ?!?お前俺がこの世界にコーヒーが無いって知った時どれだけ絶望したか分かってんの?!?いいか、俺にとってコーヒーっていうのはだなあ・・・」

「いや、あの、クレハ?」

「クレハのコーヒー談義は日が沈むまで続いた、この日を境にリズベツトは「クレハの前でコーヒーの話題は出してはいけない」

と固く誓ったのだった。

物好きな情報屋

p i p i p i p i p i p i p i p i

耳元で、というより頭の中に直接音が響いてくる。

はつきりしない意識のなかで何とか体を起こし、ウィンドウを開いて起床用のアラームを止める。

「あー、まだ眠てー．．．」

時刻はAM8:00、あと一時間で店を開かなくちゃならんから、のんびり二度寝つて言うわけにもいかないな。

「．．．とりあえずコーヒー入れるか」

．．．

「よし、じゃあ開店するか」

AM9:00 ジャスト、万屋「秋風」開店！

つと意気込んで見たものの、武器屋みたいに固定客なんていないわけで、結局いつも通りカウンターでコーヒー飲んでだらだらするだけなんだけどな。

しかも昨日の夕方にリズが来て、

「明日から工房にこもるからクツキーの作り溜めして！」

と珍しくクツキーの代金を支払って大量のクツキーを持っていったため当分リズが店に来ることも無い。

ということはつまり・・・

「今日は暇な一日になるな」

俺の店は基本的に暇な上に唯一の常連が来ないことが確定してるため、今日は平和な一日になること間違いなし。

今日はこの前ついに完全習得した「料理スキル」でできることをいろいろ試してみるか。

いやー長かったなー完全習得までの道のり。初めて作ったコーヒーは本当にただの泥水だったからなー……。

それからほぼ毎日時間が有れば料理して料理してコツコツ熟練度上げたかいたってのもんだな。

まあやってて気づいたことだが俺は案外料理が好きみたいだ。というより何かを作るって事を楽しいと思えるから、俺と料理は相性がいいんだろう。

今日は久しぶりに一日料理付けの一日。なんてのも悪くないかー

「まあ急に依頼者が来ることなんて……」

「相変わらず暇そうだな、クー坊」

「……」

来やがった。

しかもよりにもよってめちやくちや面倒なやつが

「おいアルゴ、お前いつからいた。」

「そうだな、『今日は暇な……』あたりからだな」

「最初っからじゃねえか！」

「にやははは！気づかないクー坊が悪いナ」

「はあ・・・んで何のようだ？遊びに来たって訳でもねーんだろ？」

「モチロン、情報の共有にサ」

こいつはアルゴ。目深にフードをかぶり、頬にネズミ髭のようなペイントをしている変わり者で「情報屋」をやっている。

『鼠のアルゴ』なんて呼ばれていて、金さえ払えばどんな情報（一部の例外はあるが）も提供する凄腕の情報屋ってやつなんだが、俺はこいつと情報の共有をしている。

万屋の仕事の中にも情報提供や情報収集ってのがあつた。そのため俺もアルゴほどじゃないが情報ってモノを扱っている訳だ。

さらに仕事の内に「討伐系クエストの助っ人」ってのもあるから、アルゴよりクエストの内容に詳しい場合もあるし、「安全マージンはこのくらいのレベル」「こういうパーティ編成がオススメ」っていう情報も手に入る。

そういうことで、俺はアルゴから「俺の知らない情報を貰う」、アルゴは俺の情報から「情報のクオリティを上げる」って感じでWinWinの関係築いてる訳だ。

「悪いが最近仕事が少なくてな、有力な情報なんてのは全く無いぞ」

「イヤイヤ何言ってるのサ、今クー坊しかもって無いとっておきの情報があるだロ？」

「はあ？そんなもん持ってるわけが……」

「料理スキル、完全習得したんだロ？その情報が欲しいのサ」

「こいつなんで知ってやがる……。完全習得したのは一昨日だし、まだ誰にも喋っていないんだぞ。」

「まあアルゴ相手にこんなこと考えても仕方ないか。ホントにこいつの情報収集能力はどうなってるんだよ、隠しスキルでも有るのか？」

「確かに完全習得はしたが、俺しかもって無い訳無いだろ。料理スキルを完全習得してる奴なんて俺以外にも居るだろうし……」

「いないヨ」

「へ？」

「今現在『料理スキル』を完全習得まで持っていたやつはいないヨ、みんなせいぜい60%がいいとこサ」

「まじかよ・・・」

完全習得ってそんなにレアなことだったの？

・・・いや、レアって訳じやなくて単純に「この階層」で完全習得してるのがおかしいのか。戦闘に必要なスキルでもないし上げるのに時間がかかるのもうなずける。

ということは・・・

「俺って・・・」

「相当暇だったんだナ」

「……………」

「にやははは！よくもまあコーヒーに対する愛情だけでこんな短時間で完全習得まで持ってたものだナ！オネーサン感心しちゃうナー！」

こいつ絶対バカにしてやがる・・・

仕方ないだろ、武具屋や商人と違って客が来ない間にする準備なんて無いんだから。

カウンターから離れてる間に客が来るかもしれないから店は空けられないし、必然的

に部屋の中でできることをやり続けることになるだろ。

「はあ・・・」

「まあまあ名誉なことじゃないか！『初の料理スキルを完全習得したのはクレハ』っていう情報も広めておこうか？」

「絶対にやめろ」

「なんだつまらないなー。それで、完全習得してからなにか新しいことはできるようになったの力？」

「あーそうだな、『料理スキル』を極めたって奴にはうれしいことが出来るようにはなったな」

「料理スキル」の完全習得によって出来るようになったことは大きく分けて3つだ。

1つ目は味覚エンジンの可視化。かなり簡単にあらわすと「この調味料とこの調味料を組み合わせるとこのくらいの辛さ」っていうのがパラメーターで分かるようになった。細かい味の調整とか味付けの幅を広げるのにかなり役立つ。

2つ目は。調味料の作成。料理で出来た調味料をアイテムとして作ることが出来るようになった。たとえばグログワの種とシユブルの葉とカリム水をあわせると、醤油に

似た味がするんだが、その味をアイテムとして保存できて、他の食材に付けて食べるこ
とが出来るとってわけだ。

そして3つ目が・・・

「外見の変更だ」

「外見の変更？それって見た目が変わるって事力？なんだか他の2つと比べてずいぶん
地味だな」

「いや、俺はこのスキルが一番嬉しかったとっていいな」

「そうなのカ？正直言ってみた目が変わるだけっておまけみたいなものじゃないカ」

「誰も見た目が変わる『だけ』とは言って無いだろ」

「？」

「まあコレに関しては実際に見せたほうが早いな。コーヒー入れてやるよ」

「おーそれはありがたいネ！甘いお菓子も一緒に頼むヨ！」

「はいはいと・・・」

アルゴからの注文を聞きながら俺は完全習得した料理スキルを使うためにカウ

ターに戻る。

1つ目と2つ目の追加スキルは今はいらないからおいといて、今回は3つ目の追加スキルを思う存分使ってやるか。

・ ・ ・

「ほらできたぞ」

「まちくたびれたヨ！今日のお菓子は．．．え？」

そこでアルゴが驚いたように目を見開いた、期待通りの反応でなによりだな。

「なかなかいい出来だろ？」

「これは．．．なるほどナ。確かにおまけなんかじゃないスキルだな」

俺が差し出したのはいつもリスに作っているクッキーとコーヒーだが、違うところはクッキーが「鼠の形をしている」ことと、コーヒーではなく「カプチーノ」だということだ。

それもただのカプチーノではなく「デザインカプチーノ」で、こつちには2枚の紅葉と万の字を描いている。

「これが3つ目の外見の変更だ」

「コーヒー大好きのクー坊が喜ぶ理由が分かったヨ、ここまでクオリティが高いものが来るとは思わなかったヨ」

「そりやどうも、けど変わってるのは外見だけじゃないぞ」

「まだ何かあるの力？」

「いったら、外見を変える『だけ』じゃないってな、カプチーノを飲んでみれば分かるよ」

「そうなの力、けどなんだか飲むのがもつたいんだガ……」

「飲まないほうがもつたいないだろ」

「そ、それもそうだな。じゃあ遠慮なク……」

アルゴはゆっくりとカプチーノを口にしたが、ミルクの泡を口に含んだ瞬間アルゴはまた驚いたように目を見開いた。

こいつはホントに期待通りの反応をしてくれるな。

「本物みたいなのどごしだ……。泡の触感というかなんというか、そういうのがちゃんと分かるというカ……」

「そういうことだ、外見が変わるだけじゃなくて、それにあわせて触感や歯ごたえやのど越しまで調節できる。」

「これはすごいナ、料理スキルの需要がまた上がるナ」

「まあ今からスキルを取りはじめるとなると、その前にSAOが攻略されるだろうがな」
「……それもそうだな」

・ ・ ・

「いやあ美味かつタ！ついでにいい情報も貰えたしナ！」

「情報はついでかよ……」

「にやはははは」

一応貴重な情報のはずなんだがな、まあアルゴには普段から世話になっているから別にいいか。

俺の提供した情報以上に入手の難しい情報も共有してる訳だし、まだまだアルゴには借りがあるな。

「オットもうこんな時間カ、次の客が待つてるからオレツチはそろそろ行くヨ」

「繁盛しててうらやましい限りだな」

「クー坊も真面目に働けばこのぐらいい繁盛するヨ」

「……善処する。また新しい情報があったらよろしく頼む、俺も情報があったら連絡する。」

「そう……だナ……」

「？」

珍しく歯切れが悪いな、俺なんかへんなこと言ったか？

「なあ・・・クー坊」

「ん？どうした？」

「たまには・・・特に用が無くても・・・来ちゃダメかな？」
「？」

な、なんだ？いつものアルゴじゃない感じが……

いきなりしおらしくなってどうしたってんだ？

いや、しおらしくというか恥ずかしがってるというか……
……あーなるほどな。

「アルゴ、おまえ……」

「カプチーノが気に入ったんなら素直に言えよ」

「は？」

「カプチーノが飲みみたいから定期的に着たいってことだろ？」

「いや！そ、そうじゃなくてナ・・・」

「別に隠す必要も無いと思うぞ、仮にも女の子だから恥ずかしいがるのも分かるが」
「話をきけつて！」

結局こいつもただの女の子ってことだな、カフェとか甘いものが好きな。

なにを恥ずかしがる必要があるんだかわからんが。

「だからクー坊、そういうわけじゃなくテ・・・」

「いーよ別に、好きなときに遊びに来い」

「ふえっ？」

「お前が来たって言ったんだろ、暇なときがあったらいつでもコーヒー飲みに来い」

「・・・はあ、わかった。ありがとナ、クー坊」

「はいはいっと」

・
・
・

安請け合いするんじゃないか。

「おいクー坊、カプチーノおかわりたのむヨ」

「クレハー、クツキー無くなっちゃったんだけどー」

「ああうるさいなお前らー！」

アルゴはあれ以来たびたび俺の店に来るようになった、そして工房での作業が終わったのかりズもまた俺の店に来るようになった。

そのおかげで俺の店は万屋というよりただの喫茶店状態だ。

「お前ら遠慮というものを知らんのか」

「いつでも来いって言ったのはクー坊だゾ？」

「いつものことじゃない、なにをいまさら」

「こいつらマジか。」

「まあ正直この2人には逆らえる気がしないし、1人で居るよりはずっといいし、早めに諦めろって事なのか……」

「クレハー！」

「クー坊！」

「はいはい聞こえてるよ」

万屋「秋風」

客足は相変わらずだが、少しずつにぎやかになりつつある。

副団長からの依頼

AM 11:00

開店から2時間、いつもだったらまだのんびりとコーヒーを飲んでいる時間なのだが、今日はすでに4組のパーティからの依頼を終えている。

「ありがとう、助かったよ。」

「毎度ありー。また何かあったら依頼よろしくな。」

「それじゃあな」

カランカラン

と店の扉が閉まる音が店の中に響く。

「だあああ疲れたー……」

開店して数分でいきなり客が来たことには驚いたが、まさかその後連続で客が来るとは思わなかった。

しかもクエストアイテムの収集だったり討伐クエストの助っ人だったり、かなり精神的に疲れる依頼ばかり、レベルに余裕が有るから戦闘は楽なんだが、やはり疲れるモノはある。

いきなり依頼が来るようになった理由、それは多分アルゴの仕業だろう。

あれ以来たびたび俺の店に遊びに来てお茶をしていくアルゴだが、一応そのお礼って事なのか、俺の店の情報も少なからず流してくれているらしい。

ありがたいことだが、改めてこの世界での情報の重要さを実感させられるな。

昨日まで依頼は2日あわせて4件あればいいほうだったのだが、たった2時間で2日分の依頼が来てしまった。

いままでよくやってこれたなと思う人も居るかもしれないが、モチロンやっていけるわけが無い。けどそれは、ここが現実世界だったらの話だ。

ここはSAOというゲームの中だ。本業がうまくいかなくても金を稼ぐ方法はいくらでもある。たとえばフィールドに出てモンスターを倒すとか、自分で作ったものを売りに行くとか、今まで俺は万屋業とそういう小さな収入を合わせて生活していたわけだ。

「だいぶ落ち着いたな・・・」

時刻はPM3:00

客足もだいぶ落ち着いて、俺はいつも通りコーヒを飲みながら一息ついていた。

まあ午後から来た客の殆どが「お菓子を作ってくれませんか？」とか「カプチーノ入れてください！」という女性プレイヤーの依頼だったわけ・・・

万屋秋風というよりは喫茶秋風といったほうがいい状態だった。

「・・・午後だけ喫茶店として店開いたほうが儲かるんじゃないか？」

「それは確かにそうね」

「・・・」

振り向くとリズベットが店のドアの前に立っていた。

腕を組んで俺の発言にうんうんとうなずいているようだ。

「リズといいアルゴといい、なんで俺の知り合いは俺に気づかれないように店に入ってくるんだ」

「失礼ね、あんたがぼーつとしてるのが悪いんでしょ」

「今日は依頼に追われて疲れてるんだよ」

「あんたの店が依頼に追われてた？ 珍しいこともあるのね」

「おい」

こいつ何気に失礼なこと言ったな

「俺の店もついに評価されるようになったわけよ」

「どうせアルゴが情報回してくれたんでしょ？」

「.....」

「目そらしてんじゃないわよ」

なんなんだ、俺の知り合いは俺の心を折るのがそんなにすきなのか。

リズとアルゴは最近仲が良いらしい。前から素材とかの情報を作り取りしていて顔見知りだったようだが、最近はずの店でお茶してるせいなのかよく話している。

そして2人掛かりで俺をいびつて来るから、今までよりたちが悪くなっている。

「……それはそうと何のようだ、お茶の時間はまだ先だぞ」

「あんたあたしがお菓子食べる時にしか来ないと思つてんじゃないでしょうね？」

「……思つてました。」

「……じゃあ何しにきたんだ？」

「もちろん仕事の依頼によ」

「依頼？ホントに珍しいな、どんな依頼だ？」

「依頼主は私じゃないのよ」

「？」

そう言ったリズの後ろから1人のプレイヤーが顔を出した。

栗色の髪を腰の上まで伸ばした女性プレイヤーで、白を基調とした見覚えの有る鎧に

身を包んでいる。

あれは間違いなく血盟騎士団の鎧だ。

「はじめまして、クレハさん」

笑顔で俺に挨拶をしてきた。

やばい、すごい美人だ。SAOにこんなプレイヤーが居たとは・・・

リズも美少女ではあるが、この人はリズの活発なイメージとは違った種類の、いわゆる『お嬢様』って感じがする人だ。

リズの知り合いで血盟騎士団の女性プレイヤー・・・

「もしかして・・・『閃光』のアスナさん？」

「ええ、どこかでお会いしたことがありますか？」

「いやまったく。けど血盟騎士団の美少女副団長様といえは有名ですから」

「そ、そんな美少女だなんて・・・」

「ついでに鬼のような形相でボス戦に挑む攻略の鬼だとか」

「へえ・・・」

怖ええ…何だ今の。

一瞬で空気が凍った。

「クレハ、あんた怖いもの知らずね……」

「わるい、聞かなかったことにしてくれ」

「いえ、謝られるような事は何もありませんよ？」

「いや……本当に俺が悪かったから」

笑顔なのに目が一切笑ってない。

これは怖いわ、男所帯の攻略組でどうやって副団長なんてやってるのかと思っただけのことか。

女慣れして無いネットゲーマーは普通の美少女オーラでイチコロで、『女なんかには頼れるか!』みたいな私の強い男は今の冷たいオーラで文字通りイチコロって訳ですか。

「ま、まあ冗談はさておき、依頼っていうのはアスナさんが？」

「はい、そうなんです。」

「なるほど、じゃあ話を聞きましょうか」

「お願いします。あ、敬語は無しで大丈夫ですよ」

「それで・・・そうか、じゃあそっちも敬語は無しにしてくれ、そのほうが気が楽だ」
「そう、わかった。じゃあクレハ君って呼ばせてもらおうね」

見たところ年齢も俺とそう変わらないみたいだし、俺より1つか2つ年下ってところか。

大人びた雰囲気です実年齢以上に見えているかもしれないが。

「それで依頼の話だが、リズは居てもかまわないのか？」

「ええ、というより、リズが居てくれたほうが話しやすいというか・・・」

「ん？どういうことだ？」

「それについてはアスナから話を聞いて頂戴。そのほうが早いと思うから」

「つまり恋愛相談ってことか？」

「うん……」

恥ずかしそうに俯いたアスナからの依頼というのは

「気になる男の子が居るんだけど、どうしてもいいか分からない」

とのことだった。

「最初はあたしと2人で話してたんだけど、やっぱり男の意見があったほうがいいじゃない？」

「それは分かるが、何でわざわざ依頼しに俺の所に来たんだけ？男なら血盟騎士団に山ほど居るだろう？」

「ギルドメンバーにこんな相談恥ずかしくて出来ません！」

「あーなるほど……」

つまり相談できる男がいないから、リズの紹介で俺のところに来たって訳か。

こんな美少女なのにずいぶん初心なもんだ、微笑ましい。

と同時にこの美少女から好意を寄せられている幸せ野郎に殺意が沸くな、そいつには全男性プレイヤーを代表して制裁をくわえないといけない。こんだけ幸せな目にあつてるならバランスを取らないといけないし……これは俺にしか出来ない使命なのかもしれない。

「……………」

「クレハ、あんた目が怖いわよ？」

「あのークレハ君？」

「大丈夫大丈夫、死なない程度にはとどめておくから」

「なに分けわかんないこと言ってるのよ」

「気にしないでくれ」

まあ冗談はともかくとして、これはアスナから来た『依頼』だ。仕事を請けた以上、頼主が満足できる結果を出さないといけない。

相手がどんな奴かは分からんが、リズも少なからず関わっているみたいだしそんなに

悪い奴でもないだろう。

「参考までにその相手の名前を教えてくださいませんか？モチロン無理にとは言わないが」

「……言いふらさないって約束してくれる？」

「当然だ、俺は情報屋みたいな仕事もやっているが、他の依頼主のプライベートな情報を売る趣味は無いんでな」

「どこの鼠は「誰がどの情報を買ったか」まで商品にしてしているが、あいにく俺はそこまで商魂たくましくない。」

「アスナ、安心していいわよ。こいつは口も悪いし目つきも悪いし態度も悪いけど、筋はちゃんと通す奴だから。」

「それはほめてんのか？」

「あたりまえじゃない」

「ほめられてる気がせんで」

半分以上悪口だった気がするんだが。それと目つきの話はするなよ、気にしてるんだ

から。

「……わかったわ、けど他言無用でお願いね」

「もちろんだ、依頼主の情報は絶対に公開しない」

「ありがとう、その人の名前はね……」

アスナは照れくさそうに上目遣いでこつちを見ている。

かわいいなおい。こんな女の子に想われていて気づかないような唐変木が居るのか、一体どこのどいつだよ。十中八九同じ攻略組のプレイヤーだろうから、俺の知り合いの可能性は無いだろう。

一度顔を見てみたいもんだ……

「キリト君っていうんだけど……」

「!!」

やばい………!

なんで今になってそいつの名前がでてくるんだ、そいつだけはダメだ……
俺はそいつにだけは会うことが出来ない。

いや会いたくない………そいつはあれに気づくかもしれない唯一のプレイヤーだ。

「クレハ? どうしたのよ、もしかして知り合いだったの?」

「え? そうなのクレハ君」

「い、いや……知り合いつて訳じゃあないよ。そ、そう、『黒の剣士』っていえばア
スナと同じくらい有名だからな、驚いただけだ……」

「そうなの? まあいいわ。それでクレハくん、私はどうすればいいと思う? 男の人を好
きになったことなんてなくて……どうしていいかも分からないし……」

「そ、そうだな………」

やばい、どうにかしてこの話を早急に終わらせないといけない。キリトにだけは関わらないようにしてきたんだ。

『依頼』として受けた以上、俺も積極的に動いてサポートしてやるつもりだったがそうも行かなくなった……。

ここはなるべく無難で確実な方法を提示して俺は影から支える形を取らせてもらおう……。

「ま、まずはキリトの友達にアプローチをかけるのがいんじゃないか？外堀から埋めていくっていうかさ……」

「ああそれはいいわね、どう？アスナ」

「そうね……良い案だけどキリト君ソロだから、誰かと一緒に居ることあまりないよ？」

「そ、そうか……」

あのクソボツちやろう!!友達ぐらいつくつとけ!!

どうする。何か無いか、アスナが納得して早急にこの話を終わらせれるような答えは……。

「あ！そういうことなら良い案があるわ！」

「なんだ!? その良い案って」

「う、うるさいわね、急に大声出さないでよ」

「クレハ君、そんなに真剣に考えてくれるなんて・・・」

すまんアスナ確かに真剣に考えているがそういうことじゃないんだ。

「まずはキリトの友達にアプローチをかけるってのは良い案だと思うわ、けどコレが出来ないのは、キリトに男友達が居ないからでしょ?」

「まあ言い方は悪いけどそういうことね」

「じゃあ今からキリトに男友達を作ればいいのよ」

「それって・・・。。。。なるほど、それは確かに良い案かもしれないわね!」
「でしょ?」

この2人は何を言ってるんだ? そんなに簡単に今までソロでやってきた奴に友達が出来ないわけが無いだろう。大体友達になるってことはそれなりに歳が近くないといけないわけ。

アスナの事情を知っていて、それで居てキリトに近い年齢層の男性プレイヤーなんて……

「おい、まさか……」

「それじゃあ早速クレハを連れてキリトのところ行きましょう」

「おい！ちよつとまってえ！」

考えられる内で最悪の案を提案しやがった。

俺はあいつにだけは会いたくないんだ！

「キリトはいま5層の迷宮区ね、安全マージンはギリギリだけど、アスナが居れば大丈夫よね？」

「うん、マッピングは終わってるから最短ルートでいけるし、2人位なら守って進めるはずよ」

「ちよつとまで、俺は行くとは言って無いぞ！」

「あんたが受けた依頼じゃない。それにあんた以外の適任はいないんだから」

「いやそれはそうなんだが……」

「大丈夫だよクレハ君。55層の敵は攻撃力の低い敵が多いし、転移結晶も沢山あるから」

そういうことじゃないんだ！どうする、どうする、なにか良い案はないか……
……ダメだ思いつかん。

「じゃあ行くわよクレハ」

「行こう、クレハ君」

「……わかりました」

もう観念するしかないみたいだ。

仕方が無い、キリトに会うだけならまだ何とかなる。いつも通りでいればいいんだ、下手なことをしなければ……

「ホラさつさと歩くー！」

「わかったよ……」

重い足取りで俺は2人と一緒に転移門へ向かう。

ああ、カウンターでコーヒー飲んでいたら戻りたい……

再会、そして…

アインクラッド55層の迷宮区

現在の最前線に俺は来ている。というより連れて来られた。

アスナとリズと一緒に迷宮区にたどり着いた後、キリトを発見するのにそう時間はかからなかった。

というのもアスナが鬼のように強く、遭遇した敵は30秒もしないうちにポリゴンの破片になり、リズがフレンド追跡を使って最短ルートを案内していたので、15分ほどでキリトのところまでたどり着くことができたってわけだ。

いやたどり着いてしまったわけだ……

・ ・ ・

「こんにちはキリト君」

「うん？何だアスナか」

「あたしもいるわよ」

「リズ!?なんでこんなところに、安全マージンは大丈夫なのか？」

「アスナが居るんだから大丈夫よ、そんなことよりもう一人居るわよ」

「もう一人？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・どうも」

ガスツ！

思いつきり乗り気じやない俺の態度が癪に障ったのかリズに思いつきり蹴られた。

普通に痛い、というかここ圈内じやないからそんな思いつきり蹴るとダメージはいるかもしれないだろ。オレンジプレイヤーになっちゃうぞ。

とりあえずアスナが先導してキリトに俺の紹介をしてもらった。

まさか本当の目的をキリト本人に伝える訳にはいかないので、俺たち3人がここに居る理由は「リズの依頼でアスナと俺がレベリングを手伝っていた」って事にしておいた。

「へー万屋か、なかなか面白そうなことやってるんだな。俺はキリト、ソロだ。よろしく」

「……クレハだ、よろしく頼む」

「ここで会ったのも何かの縁だし、4人でパーティー組みましょうよ」

「そうね、それがいいわ！キリトも私のレベルリングに付き合いなさい！」

あくまで偶然遭遇したことにするのか、こういうときの女の子同士の間はすごいよな、打ち合わせもなしにキレイに口裏を合わせられるんだから。

こういうとき男は下手に口を出さずに居たほうがお互いのためだ、俺も下手なことを喋ってキリトに感づかれたら困るからな。

「なんだよそれ……まあ俺はかまわないが、クレハはそれでもいいのか？」

「ああ、俺はかまわないよ。リズと違ってレベルは足りているからな」

「そうなのよね、クレハ君のレベルってどうしてそんなに高いの？ 準攻略組位のレベルが有るし……」

「ほんとよね、普段店でだらだらしてるくせに」

「失礼だな」

2人が言うとおりに、俺のレベルはキリトやアスナには劣るがそれなりの数値まで上がっている。55層という最前線でもそれなりにやっていけるほどだ。

もちろんボスに挑めるほどのレベルは無いし、攻略組に混ざって戦えるほどではないが、俺のレベルが少し高いのには理由がある。

「俺のレベルが高いのは、俺の仕事が原因だな。いや原因というよりおかげって言った方がいいか」

「仕事のおかげ？万屋でそんなに経験値が稼げるのか？」

「稼げるって言えば稼げるな。そうだな・・・ヒントを出すなら『クエストの助っ人』かな？」

「クエストの助っ人？」

「それって・・・けどそんなこと可能なのか？ほかのMMOならともかく、SAOで出来るとは思えないぞ」

「現に俺ができてるだろ？まあ抜け道みたいなのがあるんだよ」

キリトはその一言だけで大体察したようだ、信じられないって感じだが。

リズとアスナはピンときていないようだが、まあコレに関してはネットゲームに詳しい奴のほうが理解しやすいか。

というか、意外とキリトと会話しても気づかれないもんだな、俺の気にしすぎだったのかのしれない、コレならアスナの依頼を達成するために俺が動くのも可能かな。

「ちよつとクレハ！2人で話を終わらせないでちゃんと説明しなさいよ」

「そうだよクレハ君、キリト君も分かったなら教えなさいよ！」

「ご、ごめんアスナ・・・」

「正直言つて説明するのが面倒なんだが・・・」

2人ともキリトみたいに察してくれば楽なのに、とか思っていたらリズが今にも俺を蹴り飛ばそうとしているのでおとなしく説明しよう。

「・・・クエストを達成したらNPCなりクエスト屋に報告に行つて、経験値と報酬を

貰うだろ？」

「・・・まあそうですね、報酬を貰うためにクエストを受けたわけだし」

「報酬以外にも、クエストによつてはたくさん経験値が貰えるものもあるから、それを貰うためでもあるわね」

「それが分かるなら簡単な話だ、俺はそういう割の良いクエストを何回も受けて、それで得られる経験値でレベルを上げたんだ」

「え？けどクエストって、普通は何回も受けられない一回限りのクエストだったりするじゃない。『村娘の病気を治してあげる』とかのクエストをクリアしたら、それ以降は『治してくれてありがとう』っていうお礼を言われるだけで、もう一回クエストが始まったりしないはずだけど・・・」

そうなのだ、SAOがVRMMOで有る以上、大抵のクエストは1回きりで何度も受けることは出来ない。モチロン例外はあるが、そういうったクエストは総じてたいした利益を得ることが出来ない。

「今アスナが言ったように、そういう割の良いクエストっていうのは何度も受けることが出来ない。けどそれは、『固定のパーティーや少人数ギルドに入っているプレイヤー』の

話だ。」

「?・どういうことよ」

「例えば、キリト・アスナ・リズ・俺のパーティで一回クエストを攻略したとしよう。そのあとは、この4人でクエストを受けようとしてもクエストは発生しない、たとえばパーティを解散してもな」

「そうだな、SAOはそういうところをリアルに作ってるから、パーティを変えても一人でもクリア者が居たらクエストは発生しないはずだ」

「その通り、けどコレにも一つ抜け道があるんだ。」

「「抜け道?」」

今回は3人ともピンと来ていないようだ。当然か、俺も殆ど偶然見つけたモノだな。

茅場晶彦もこういう仕様にするしかなかったんだろう。

「確かに『クエスト攻略者がパーティに居たらクエストを受ける事は出来ない』。けど、『クエストを受けたパーティにクエスト攻略者が後から加入する』のは有りなんだよ」

「！！！！」

そうなのだ、クエストを受けたパーティに後から入ることが出来れば、それが1度攻略したことのあるクエストでも報酬を貰うことができる。

まあ考えてみれば『そりやそうなるか』って感じた。クエストによつてはかなり長期にわたつて進むものも有る。『そのクエストを受けている時は新規にパーティを組み直せません』じゃああまりにも辛すぎる。そうすると、クエストの終了報告をした時のパーティに報酬が入るようになるしかない。

「そんな抜け道があつたのか・・・」

「あんだそれ結構反則じゃない？下手したら寄生みたいなものじゃない」

「失礼な、ちゃんと依頼主の了解は得てるし、俺がクエストをスムーズに進行させてるんだから文句を言われる筋合いは無いぞ。戦闘でもそれなりに戦力として働いてるしな」

「それはそうだけど・・・」

「それに、この抜け道にはかなり特殊な条件が有る」

「条件？どんな条件があるんだ？」

「もちろん『クエストを受ける時だけパーティに入っても文句を言われない立場』だ」

「「あー・・・」」

今回は全員が納得してくれたようだ。

この方法で経験値を稼ぐためには、当然だがすでにクエストを受けているパーティに入らなくてはならない。だが割の良いクエストはパーティの上限が4〜6人ぐらいだ。

すでに出来上がっているパーティに助っ人で入れるのは戦闘の連携を考えても1人が限界だ。そうなると、この方法を取れるのはソロプレイヤーぐらいしか居ない。

しかし、パーティでクエストを受けようとした時に、いきなりソロプレイヤーがきて『もう一度クエストを受けたいから入れてくれ』なんて言ってきたり、OKする奴なんているわけがない。たとえクエストの情報を持っていても煙たがられることのほうが多い。見ず知らずのプレイヤーをパーティに入れるよりは、情報屋からクエストの情報を買ったほうがはるかに安全だしな。

ここがデスクゲームじゃなかったら受け入れられるだろうが、命をかけたクエストをこなして、いい所だけを貰おうとしているプレイヤーを受け入れるやつはそうそう居ない。

仮に受け入れられても、それなりの見返りを求められる。そうなったら普通にレベリングをしたほうがはやい。

そのため、こつちからアプローチをかけてクエストに連れて行ってもらうことはほぼ不可能だ。

「結局この方法は、パーティ側からソロプレイヤーを指名した時にしか使えないんだよ」「なるほどねー、そう考えるとクレハ君の『万屋』っていう立場はぴったりだね。依頼者はクエストがスムーズに進行するし、クレハ君は報酬が貰えるし、お互いに利益があるもの」

「それにそういう店を開いているっていうのが大きいな。パーティ内での行動がそのまま店の評価に繋がるから、パーティ側も自分達に迷惑がかかるような行動をしないはずだって思える」

「そういうことだ、まあそれでも自分が受けたいクエストは受けれないっていう問題点は拭えないし、他の生産職より少し多い経験値が入るだけで、結局自分でレベリングはしないといけないんだけどな」

「なによ、すごい便利かと思っただらそうでもないのね、その抜け道」

「SAOだからな、100%良い話なんてのはないってこった。さあ、俺のレベルの謎が

解けたなら、さっさとリズのレベリングに行こうぜ」

・ ・ ・

「アスナー！スイッチ！」

「はいー！」

敵の攻撃をはじめたキリトがすばやく後ろに下がり、それと同時にアスナの細剣が敵に迫っていった。

薄い緑色に光った細剣はすさまじいはやさで敵の体を貫いて、そのまま敵の体をポリゴンの破片へと変えていく。

「……あの2人は化物か何かか？」

「気持ちは分かるけどれっきとした人間よ、安心しなさい」

さつきから殆どあの2人だけで敵を倒してるぞ、俺とリズはたまに2人に止めを刺されなかった瀕死の敵に一撃加えてるだけ。それなのに経験値は4人に入るからリズは今頃ガンガンレベルが上がっているに違いない。

他のパーティとクエストするより効率いいんじゃないか？

「なあ、俺たちホントの前に出なくてもいいのか？」

「ああ、クレハがリズを守ってくれていたほうが俺たちも動きやすいしな。クレハが前で闘いたって言うなら交代するが？」

「いや結構だ、お前達みたいに動ける自信が無い」

「そう？けどさつきのクレハ君の動きは無駄がまったくなくてすごかったよ！刀は扱いが難しいのに、クレハ君はすごくしなやかに動くわね」

「そりやどうも、一応『万屋』だからな、弱くちややつてられないさ」

アスナの言うとおり、俺はエクストラスキルである刀を使っている。敵の攻撃を受け止める、というより受け流すことが出来るこの武器は俺と相性が良い。

このくらいの敵なら遅れをとることは無いし、本気で戦う必要も無いからあれがキリトにバレる心配も無い。キリトと友達になるって目的は達成できたし。そろそろ潮時だろう。

「なあ、そろそろ切り上げないか？リズのレベルも結構上がったし」

「そうね、じゃあそろそろきりあげて・・・」

「……………うああああ!!」

「[[[[!!]]]]」

遠くのほうから微かだが声が聞こえてきた気がした。

それもただの声じゃない、今のはもしかして・・・

「悲鳴だ！」

「リズ！マップにプレイヤーの反応はあるか!？」

「え、ええつと・・・あるわ！二つ前の通路の端に6人！」

「すぐ行きましょう！」

最前線の迷宮区で悲鳴か、面倒なことになってないといいんだけど・・・

・・・

俺たち4人が到着した時、目の前の光景はすさまじいものだった。

ざっと見ただけで50体以上の骸骨の剣士がプレイヤーを囲んでいた。

赤い鎧を着た6人のプレイヤーは、迫り来る敵に一心不乱に剣を振り続けている。

あの状態で転移して無いって事は結晶無効化エリアか・・・!

「すいませんリーダー!俺の不注意でトラップに・・・!」

「過ぎたことを気にすんな!とにかく今は手を動かせ!気合入れろよお前ら!!」

「|||||おう!」

あの様子だと死人は出てないようだな、あのリーダーっぽい奴がうまいことパーティの志気を保ってくれてるみたいだ、けどあの様子じゃいつ限界が来てもおかしくないぞ・・・!!

「あの声、まさか・・・!」

「あっおい!キリト!!」

キリトが一人で突っ込んでいきやがった！何考えてんだあいつ！

けどこのままじやまずいのは確かだ、かといってキリト一人の助けじやここを突破するのは難しい、となると……やっぱ俺達もやるしか無いみたいだ……

「アスナ、いけるか？」

「ええ、もちろん。絶対に助けましょう」

さすが血盟騎士団の副団長。

判断が早いし、そういつてくれると思ったよ。

そうなると次は……

「リズ、転移結晶を使え、店で待ってろ」

「何いつてんのよ！そんなの……！」

「大丈夫だよリズ、私たちは死なないから。私達の帰りを信じて待ってて？」

レベルに余裕がある俺はともかく、この層の安全マージンまで達していないリズをここにおいておくのはまずい。戦いに参戦させなくても、その間リズを放っておくわけに

も行かないからな。

自分が渋ることで俺たちに迷惑が掛かると思ったのか、リズは意外と早く決断してくれた。

「……わかったわ。けど死んだら許さないから！」

「もちろんよ」

「あたりまえだ」

俺たちの返事を聞いたリズは無効化エリアから出た後、青い光に包まれていった。アスナが居てくれて助かったな、俺一人だったらリズは説得できてなさそうだ。

敵の数はまだまだ多い、これは……

「さすがに、本気でいかないとまずいよな……」

コレをやると絶対に俺のことキリトにがバレるだろうが、仕方が無い。俺のわがままと人の命だったら、どっちが大切ななんて考えなくても分かる。

大きく深呼吸をして集中力を高め、俺は武器を構える。

しかしそれはさつきまでの構えとはまったく違う。

本気で戦う時の構え。できるだけ人には見せたくない構えだ。

右手には今まで通り刀を。

左手には逆手で鞘を握り締める。

「・・・クレハ君？それは・・・？」

「俺の戦い方ってやつだ。まあ、悪いようにはならないよ」

アスナは一瞬不思議そうな顔をしていたが、すぐに目の前の敵に意識を切り替えたよ
うだ。

「それじゃあ・・・いくぞ！」

俺たち2人は敵の大群の中に突っ込んでいった。

本当に、面倒なことになったものだ・・・。

クレハ

アインクラッド55層迷宮区

俺たちが敵に囲まれたプレイヤーのところに駆けつけてから数十分が経過していた。

敵の数も徐々に減っていき、現状は打開されつつある。

しかし油断は出来ない、俺たちとはともかく、最初から戦っていたプレイヤーたちの回復アイテムはかなり減っているはずだ。それにくわえて精神的な疲労が大きいのか、その動きにさきほどのようなキレは無い。

「HPがイエローになったやつはすぐに下がれ！そのあいだ他のやつが敵をおさえろ！」

「「「了解！」」」

「アスナ、あつちのサポートに入ってくれ！こっちは俺1人でいける！」
「わかったわ」

各自が連携を取りながら確実に敵の数を減らし続けている。

ダメージを受けたプレイヤーが居ればサポートに入り、HPを回復し終わったら今度はサポートに入ったプレイヤーが回復に回る。

単純な流れだが、的確に複数のプレイヤーが統一された動きをするのには相当な技術が必要となる。各自の技術ももちろんだが、敵を抑えながら仲間に正確な支持を出しているバンダナ男の技量はずば抜けているな、おそらくあいつがリーダーだろう。

キリトとアスナは2人でパーティのサポートをこなしながら敵を倒し続けている、あいつ等は他のメンバーよりもレベルが高いから、命の危険は少なそうだ。

だが自分の身よりも他人優先って動きが多すぎる、何度か危ない動きも見て取れる。

パーティを組んでいる6人はパーティで固まってローテを組んで戦い、キリトとアスナは2人でそれをサポートしながら戦っている。

じゃあ俺はどうしているのかというと

一人で戦っている。

常に5体以上の敵に囲まれながら立ち回り、敵の数を減らすことに集中している。

別に見捨てられているわけではない、初めはアスナが俺を手伝いに来ようとしていたのだが、キリトがそれを制止した。

おそらく俺の構えと戦い方を見て気づいたのだろう。『俺が何者』なのか・・・

「なんだよ・・・あれ・・・」

俺の戦いを目にしたのか、誰かの呟きが微かに聞こえた。

確かに、知らない奴が見たら訳が分からないだろう。

左手に持った鞘で敵の攻撃を受け流し、右手の刀で敵の首を刎ねる。

時には鞘で敵の足をすくい上げ、敵に向かって蹴り飛ばす。

それもすべての行動が流れるように行われ、その動きには一切の無駄が無い。

1人で5体以上の敵を相手取りながら

まるで踊るように戦っているのだから……

……

「……全員……生きてるか……？」

「なんとかな……」

「ハア……ハア……」

それから1時間ほど後だろうか、トラップによって出現した大量の骸骨剣士はすべて消滅し、みんなは息を切らしながらその場に座り込み、自分たちが生きていることに安堵していた。

1番初めに腰を上げたのはさっきのバンダナ男だった。キリトとアスナに深々と頭を下げている。

「悪いキリト、俺たちのせいでお前達まで危険な目に……」

「いや……大した事じゃない、ともかく全員生き延びたんだ、今はそのことを喜ぼう」

「そうね、誰も死なずにすんだ。それだけで私達は頑張った甲斐があつたって思えるわ」
「アスナさん……すまねえ。この借りは必ず返します！俺の命に代えても！」

「それじゃあ助けた意味が無いだろ」

「うるせえな！こういうのは気持ちの問題なんだよ！」

ずいぶんと仲がいいな、キリトとあのバンダナ男は知り合いだったのか。どおりで声を聞いたとたんキリトが敵に突っ込んでいったわけだ。

ともかく皆助かってよかった。

．．．．．けど、キリトには俺の正体がバレただろうな．．．

それに、久しぶりに本気で戦ったから、もうそろそろ限界みたいだ．．．．．。

「．．．つとそういえばもう一人はどこだ？ あのとんでもなく強い刀使いのプレイヤー。あいつは何者なんだ？ 攻略組じゃないよな？」

「ああ、クレハのことか．．．．．とんでもなく強い、確かにな。けどあの構えとあの動き．．．．．もしかしてあいつは．．．．．」

「あんな戦い方をするやつは初めて見たぜ。俺達にも紹介してくれよ、礼が言いたいんだ」

「クレハ君ならたしかあつちに．．．．．ってクレハ君!?! どうしたの!?!」

アスナが慌てて俺のほうに駆けてくる。それに続いてキリトとバンダナ男、そしてそのパーティメンバーまでもが俺の所に駆け寄ってくる。

全員が心配そうな顔や驚いた顔で俺を見ている。

当然だろう。

なぜなら俺は、迷宮区の地面に体を倒したまま、ピクリとも動かなかつたのだから。皆に声をかけられても、体を揺さぶられても何の反応も無い。

いや、何の反応も出来なかつた。

HPが0になっている訳ではない、ただ体を動かすことが出来なかつた。

徐々に視界が狭まっていく

だんだんと意識が薄れていく

泣きそうな顔をしたアスナと驚きで言葉を失っているキリト達の顔がチラツと見え

たが、皆に声をかけることができないまま・・・

俺の意識は完全に途絶えてしまった・・・

・・・

「・・・ハ・・・レハ・・・！！」

うつすらと人の声が聞こえる、今にも泣き出しそうな震えた声が聞こえる。

記憶がはっきりしない、確かアスナの依頼でキリトに会いに迷宮区に行つて、キリトと合流してそれから……

そうだ、プレイヤーの悲鳴を聞いてものすごい数の敵と戦つたんだつた。さすが敵の数が多すぎてやばいと思つて、鞘を使って本気で戦つて……

ああそうか、それで意識を失つたのか。

「……………レハ……………!……………クレハ!起きなさい!」

うつすらとした声ははっきり聞こえるようになった。

このでかい声は多分リズだな、つてことはここは……………

「……………俺の店か?」

「クレハ!!……………あんたいつまで寝てんのよ!さつさと起きなさいよ!!」

「グヘエ……………!」

涙目のリズからボディーブローを食らわされて、俺の意識はもう一度飛びそうになつた。

こいつマジか……

「リズ……そこは『心配したんだから……』とか言つて静かに抱きつくところじゃないの？意識失つた友人が目を覚ました瞬間ボディーブローつてお前……」

「うっさいわね！キリトとアスナが動かないあんたを連れて帰つてきたときどれだけ心配したと思つてるのよ！」

「……ああ、悪かった。心配かけたな」

「フン……分かれればいいのよ」

そんなに目に涙浮かべて怒られたら素直に謝るしかないだろう。

まあリズ目線だと、店で心細く俺達の帰りを待つていたのに、帰つてきたうちの一人がピクリとも動かない状態になつてた訳だから、かなり怖かつたんだろう。

「本当によかったよ、クレハ君……」

「ああ、心配したんだからな」

「悪い、2人にも迷惑かけたな」

とりあえず生きて戻ってこれて何よりだ。明日からはまたのんびりと万屋業を続けて……

いや、そういうわけにも行かないかもしれない。あれをキリトに見られたんだ、気づかれているかもしれない。

いや間違いなく気づかれている。でないと俺のサポートに来たアスナを制止するなんて事はしないだろう。

「……クレハ、一つ聞きたいことが有る」

「……なんだ？」

ああ、来てしまった。もう観念するしかないみたいだ。

キリトが次に何を言うのかすら容易に想像できる。

「『アオバ』というキャラクターに心当たりは無いか？」

・・・やっばりな。

お前ならすぐに気づくと思っていた。だから会いたくなかった。

だからあの戦い方を見せたくなかった。

けど、ここまで来たらもう隠し通すことは出来ない。すべて話すまで、キリトは納得しないだろうしな。

「キリト君、誰なの？そのアオバって人。聞いたこと無いけど・・・」

「私も心当たりは無いわね。SAOのプレイヤーなの？」

「ああ、アオバは俺が知る中で最も強いプレイヤーだ。ヒースクリフと違って対等以上に戦えるぐらいの強さを持つてる」

「団長と対等以上に!?　嘘よ……だってそんな人が居たらSAOで名前を聞かないわけが無いじゃない」

「そうよ、それにそのアオバってやつとクレハに何の関係が……」

ずいぶんと過大評価してくれたもんだな。キリトが知る中で最も強いだって? ヒースクリフと対等以上に戦えるだって?

「さすがに、ヒースクリフには勝てないと思うぞ?」

俺の言葉にキリトは少し目を見開いたが、すぐに落ち着いて話を続けた。

「……やっぱり、お前は……」

「ああ、今まで黙ってて悪かったな」

「ちよ、ちよつと待ってよ……私達にも分かるように説明して!」

「まずアオバって誰なのよ!?　さつきも言ったけど、SAOにそんな名前ですっぽくら

スのプレイヤーは居ないはずよ！」

やっぱり2人も詳しく話を知りたいらしい。当然か、ここまで来てなんでもないじゃあ通らない。1から説明するしかないようだ。

だが、『アオバ』というプレイヤーに関してはキリトが説明してくれるだろう。

「アオバがいたのはこのSAOじゃない。一つ前のSAOだ」

「1つ前のSAO？ それって……」

「ああ、βテスト時代のSAOさ」

「!!」

「俺はβテストの時、アオバっていうプレイヤーと一緒にアインクラッドを攻略してたんだ。気が合う奴でいつもパーティを組んでいたよ。アオバはかなり戦闘が上手な奴でな、俺がβテストで10層まで攻略出来たのも、アオバとパーティを組んでいたからと言ってもいい。それにアオバは他のプレイヤーが何度挑んでも攻略できなかった11層を超えて、1人で12層まで攻略していた」

「そんなプレイヤーが居たんだ……」

「けどおかしいじゃない、そんなプレイヤーが本稼動したSAOの中に居ないなんて……」

「ああ、俺もそう思って、最初はアオバと合流しようと思って探し回ったさ。けどどこにも居なかった。特殊な戦い方をする奴だったから、すぐに噂になると思っていたが、どこにも情報は無かった」

「特殊な戦い方って……まさか……」

「ああ、アオバは『左手に逆手で鞘、右手に剣』を持って戦うんだよ。鞘で敵の体制を崩したり、敵の攻撃をすべて受け流してな」

「それって!! ついさつきクレハ君がやっていたことと同じ……」

「……じゃあアオバっていうのは……」

アスナの言葉でリズも察したらしい。

そうだ、キリトが最強と評する元βテスター『アオバ』は……

「お察しの通り、俺が『アオバ』だよ」

・ ・ ・

俺とキリトはβテストの時からともに戦っていた仲間だった。リアルでの年齢も近く、お互いに気が合う相手だったからか、俺達はβテスト中はほとんど一緒に攻略をしていた。

俺はβテストの時から韜と剣（そのときは刀が無かったから曲剣だった）を使った戦

い方でゲームをプレイし、キリトからは『なぜそんなに無駄の無い動きが出来るんだ？』などと呆れられたりもしていたが、俺からしたらキリトの反応速度も人のことをいえないだろうと思っていた。

そうこうしているうちにβテストは終了し、製品版発売までの1ヶ月間、俺はもう1度SAOの世界に入るのを待ち遠しく思いながら日々をすごしていた……

「聞かせてくれアオバ……いやクレハ。お前がどうして名前を変えてここに居るのか」
「ああ、話してやるよ。全部な」

俺はキリトの聞きたがっていることをすべて話してやることにした。
キリトが聞きたがっていることは大体想像がつく。

「まず名前が違うのはなんてことは無い、βテストの時のデータを引き継がなかったからだ。俺は1からインクラッドを攻略しなおしたかったから、新しくキャラクターを作ったんだ。そのときはデスゲームになるなんて思ってもみないからな」

そして、キリトが1番聞きたいのは名前の違いなんかではなくこれだろう。

「俺がお前と合流しなかった理由、そして、攻略組になっていない理由はな……」

βテスト時代に最強とまで評された俺がなぜ攻略組にならず、万屋なんてものをやっているのかについてだ。

リズもアスナも興味深そうに俺とキリトの話を静かに聴いている。いろいろと理由はあるが、一番の理由はコレだ。

「なりたくてもなれなかったからだ」

「「はっ」」

静かに聴いていた2人も俺の発言に虚をつかれたのか、ずいぶんと間の抜けた表情をしている。

そう、俺は攻略組にならなかつたんじゃない、なれなかつたんだ。

「ちよ、ちよつとまっつてくれ！お前ほどの実力がある奴が攻略組に入れないわけが無い
だろ！現に今日だつて……」

「そうよ！一人で沢山の敵を引きつけながら、それを全部倒し続けてたじゃない！」
「え、え、!? あんたそんなことしてたの!? めちゃくちゃじゃない……」

3人の反応が全く同じで見えて面白いな。

その場を見ていなかったリズに関しては別の意味で驚いているようだが……
けれど俺は嘘をついているわけではない。俺は攻略組になりたくてもなれなかった。
それは事実だ。

その理由は単純なうえに、ここに居る3人はその様子を目撃しているはずなんだが
な、ノーヒントじゃさすがに分らんか。

「確かにβテストの時みたいに、あの動きがずっと出来るなら、俺は今頃攻略組で戦つて
いただろうさ。けど、現に俺は今ベットの上だろ?」

「あの動きがずっと出来るなら……?」

「今ベットの上……?」

「クレハ……まさかお前……」

「……長時間戦闘ができないのか？」

キリトのその発言に俺は苦笑いで答えてやる。

「大正解。長時間本気で戦闘すると、今回みたいに意識を失っちゃうんだ」

そう、βテストの時と違い、今の俺は長時間戦闘することが出来ない。

敵密に言う『長時間集中し続けることが出来ない』というわけだ。

強力なボス敵や大量の敵に囲まれない限り倒れることは無い。早い話が、『あの構えで長時間戦うことができない』わけで、万屋業には全く影響が無い程度だ。

しかし命を掛けて戦うことの多い攻略組にとって長時間集中できないのは致命的す

きる。

コレに気づいたのは第1層の迷宮区で戦っていた時だった。

βテストの時の知識だけでダンジョンを攻略していた俺は、βテストから攻撃のモーションが変わっている敵の攻撃を食らって、そのまま敵に囲まれてしまった。

そこで、デスゲームになって初めて鞘と剣を使った戦い方で敵を全滅させたのだが、本当のピンチはここからだった。

急に体が動かなくなりその場に倒れこんだ俺は、さつきと同じようにじわじわと意識を失っていった。何がなんだか分からなかったが、このままではまずいと思い、偶然宝箱から発見した転移結晶（当時は超貴重だった）をなんとか取り出し、始まりの町へと帰還して意識を失った。

「そのときに睡眠PKの手法が広まって無くてよかったよ、転移門の前で1日気を失ってたからなー」

「危なすぎるわね・・・」

「とういかどうして誰も起こさなかったのかしら?」

「転移門の前で倒れてるプレイヤーなんて怖すぎて誰も近づかないだろ」

「おまえら言いたい放題だな」

その時は本気で焦ったんだぞ、未知の状態異常かと思つて情報を集めまくったりもしたがそんな報告は一切無かった。それで問題があるのは自分だつて事に気がついたんだ。

「俺は昔から集中力が異常に高い子供だつたらしくてな、集中しすぎて熱を出すこともあつたし、声を掛けても一切反応しない時もあったらしい」

「異常に高い集中力かー、それであんな神業戦闘ができるのね。SAOは脳で感じている世界だから、集中力がすべてだもの」

「ああ、本気で集中すると、敵の動きや周りの景色がスローモーションで見えるようになってな、攻撃を受け流したり隙を突いたりすることが出来るようになるんだ」

「チート臭いわねそれ・・・」

「キリトの反応速度も似たようなもんだろ」

β テストの時に1度デュエルをしたことがあるが、完璧に隙を突いたと思つても、どれだけ体制を崩しても紙一重で避けられて、結局決着はつかなかった。

俺がチートならあれも十分チートだろう。

「けど、どうして本稼動から意識を失うようになったのかな？βテストから仕様を変えたのかしら・・・」

「それは無いんじゃないか？集中力なんて人それぞれなんだ。それに、急に意識を失うなんて、いくらなんでも危険すぎる」

「そうねー、なんでかしら？」

3人は悩んでくれているが、正直なところ、俺にはもうその理由が分かっている。悪いのはSAOではなく俺なんだ。

「それは多分、俺の受けた手術のせいだろうな」

「手術って・・・あんたリアルでどこか悪いの？」

「いや、俺は健康そのものだよ、ただ俺はドナー登録しててな、SAOが始まる前に骨髄移植のドナーとして手術を受けたんだよ」

「骨髄移植ってずいぶん珍しい手術ね。そう簡単に行われるものじゃないと思うけど・・・」

「俺の体は珍しい型だったらしくてな、担当の先生が息を荒げながら話を持って来たよ。白人の1%にしか見受けられないかなりレアな種類らしい」

「白人の1%って、あんた日本人じゃない」

「俺はクォーターだぞ。ほら、目が青いだろ」

「それキャラメイクじゃなかったのか!？」

「失礼な、自前だよ」

リズムみたいなピンク髪にピンク目なんていうありえない色じゃないんだし・・・

まあ隔世遺伝ってやつで、俺の外見は明らかに日本人だから気づかないのも無理は無いか。・・・ちなみにこの目のせいで俺はずいぶんと深い中二病を患った。

「それで、実は手術が終わった後に『しばらくは激しい運動とかは控えて、安静にしてください』って言われてたんだ。SAOなら体を動かすわけじゃないから大丈夫だろうと思っただが、厳密には体を動かすことじゃなくて脳を酷使するのがまずかったみたいだな」

体を動かさずって事は脳が働いてるって事だし、血液の流れとかその辺にも影響が出

る。詳しい事は分からないが、問題なのは体を動かすってことじゃなくて、その結果起こる脳の酷使だったらしい。

「……ってことは自分のせいじゃない！」

「……否定できないな」

だつてSAOやりたかつたんだから仕方ないじゃないか、βテストが終わってからずっと待ってたんだぞ。

・ ・ ・

「ま、まあクレハが攻略組に入れなかつた理由は分かつたよ。けど、どうして俺や他のプレイヤーとの接触を避けたんだ？β時代の知り合いを誘えば、万屋ももつと利用者が増

えるだろうに」

「βテスター全員がお前みたいに素直に聞き分けてくれるわけが無いだろう。中には無理やり前線に出そうとする奴が居るかもしれないし、そもそも未だにβテスターを目の敵にしているような奴もいるんだ。広まったら今みたいな生活は送れないよ。過去に前線に立たなかつたことについて制裁を受けるだけだ。お前だけには話しても良かったかもしれないが、どこから情報が漏れるか分からないからな、アルゴに頼んで『アオバ』の情報は完全に抹消したのさ」

「アルゴが情報を操つてたのか……そりゃあお前の情報が見つからないはずだ……」

情報に関してはアルゴの右に出るやつは居ない。それにアルゴはβテスターの情報は売らないと宣言もしているから、俺の情報はあつという間に消えてくれた。

けど、俺の情報が早めに消えたのはそれだけが理由じゃない。

そして俺がキリトに会いたくなかつたもう一つの理由でもある。

「……キリトには謝らないといけないな」

「いや、お前の事情はわかつたよ。正体を隠していた理由も、元βテスターと関わらない

ようにしていた理由もな、全部仕方ないことじゃないか」

「そうじゃない。もう一つ有るんだ、俺がお前に会うのを避けていた理由が……」
「？」

そう、やりたくても出来なかった理由なんてものじゃない。完全に俺の自分勝手な理由だ。攻められても仕方が無い、キリトにずっと謝れなかった理由だ。

「俺の情報がすぐに消えた理由はな、お前が『ピーター』になったからだよ」

「!!」

「お前がピーターになって、『卑怯なβテスターはキリト』っていう認識を広めたから、『アオバ』の情報はすぐに消えていったんだ。俺はお前を犠牲にして逃げ延びたんだよ、お前を隠れ蓑にして俺はクレハになったんだ」

キリトがβテスターへの恨みをすべて受けたから俺は助かったんだ。本当に恨まれるのは俺だったのに。けど俺はキリトを助けるどころかそれを利用して完全に姿を消した。

「仕方ない理由なんてもんじゃない、俺は自分のことしか考えずに……」
「うそだな」

「……ええ？」

嘘つて何が嘘なんだ。俺はお前を見捨てたんだぞ？

「自分のことしか考えなかつたなんてうそだ。　じゃないと、　11層と12層のボス情報があつたことに説明がつかない」

「!!」

「確かにそうね、12層のボス攻略会議の時、確かにボスの攻略情報がアルゴさんの攻略本に載っていたわ。βテストで12層まで攻略できたのは『アオバ』君だけってことは……」

「そういうことね、その情報ってあんたがアルゴに渡したんでしょう？」

「それは……」

たしかにそうだ……けどそれだけじゃあ……

「その情報のおかげで俺達は死なずにすんだんだ」

「けど！ たった2層分だろう！ 自分勝手なことに変わりには……」

「じゃあ今日、どうしてお前は倒れるまで集中してあいつらを助けたんだ？」

「……」

「なあクレハ、もう自分を許してもいいんじゃないか？ 確かにお前はβテストのトツプランカード。自分が戦えていればって思うのかもしれない。けど、今のお前に助けられた奴もいるはずなんだ。命を助けることがすべてじゃない。小さな悩みを抱えた奴を助け続けてきたんだろ？ だってお前の店は、そういう店じゃないか」

万屋「秋風」

……あ、そうか。

結局俺は自分を許しちやいけないと思ひ込んでただけなのか。

俺がしないとイケないのは戦って命を掛けることだけなんだと思つてた。それが出来ない俺は卑怯者なんだと思つてた。

けどそうじゃないのか・・・

俺は間違つた訳じゃなかったのか・・・

・ ・ ・

次の日、俺の店は今までに見たことが無いほどにぎわっていた。

・・・客は一人もいないがな

「……結局こうなるのか」

「クレハ、クッキー切れたわよー」

「キー坊はオレンジジュースじゃなくていいの力？」

「子ども扱いするなよ！コーヒーぐらい飲める！」

「このカプチーノって一体どうやって作ったの!? まさか料理スキルの初完全習得者ってクレハ君のことだったの!?!」

ティータイムメンバーにキリトとアスナが追加されてかなり騒がしくなった。

なんなんだお前は、毎日きつちりPM3:00にきやがって!

というかというかアスナは副団長だろ!こんなところでコーヒー飲んでいいのか!

リスもアルゴも自分の仕事があるだろ!キリトは………ぼっちだからいいか。

「おい、今なんか失礼なこと考えなかったか!?!」

「気のせいだ」

日に日ににぎやかになっていく万屋「秋風」
相変わらず仕事は少ないが

今ならこんな日常も悪くないと思える。

鼠の陰謀

アインクラッド48層にある万屋「秋風」

俺が営んでいるこの店だが、以前と比べてにぎやかな日が多くなった。

アルゴの宣伝の力か、キリトとアスナなどのビッグネームが頻繁に顔を出しているからなのか、客足が増えて固定客も出来つつある。

……というか、俺があれだけ露見するのを恐れていた『βテストのトップランカー』という情報が、今となっては周知の事実になってしまった事が一番の要因だろう。

いうまでもないが、この情報を流したのはアルゴとキリトの2人だ。

あの一件でのキリトの言葉で、長い間心の中に押さえ込んでいた罪悪感や恐怖心が解消された俺は、唯一初めから俺の事を知っていたアルゴに、キリトに俺のことがばれてしまったという報告と、今まで俺の情報を守ってくれていた事について礼を言いに行った。

俺としては1年以上抱えていた不安だった訳で、それが少しでも解消されたことはそ

れなりに大きな事件だったんだが、キリトと一緒にアルゴに報告に行った時から、それを塗り替える事件が始まってしまった……

『……というわけで、キリトにばれちゃった。……けど、悪いようにはならなかったよ』

『だから前から言ってたじゃないか、気にし過ぎだつてナ』

『けど、俺がキリトに対してした事は許されることじゃないと思ってるよ』

『まだそんなこといつてるのか……俺は気にして無いし、むしろ怒ってるのはそこじゃなくて、早く連絡をくれなかった方だ』

『どこから情報が漏れるか分からなかったからな。他のプレイヤーにバレたら俺はSA Oでは生きていけないよ』

『そんなこと無いと思うけどな、ちゃんとした理由がある訳だし』

『いや、攻め立てられて闇討ちにでもあうのがオチさ、下手したらビーターよりたちの悪い扱いを受けることになるかもしれん』

『……クーフ坊のマイナス思考は筋金入りだな。……じゃあ試してみるか』

？』

『はっ？』

『にやはははは！まーまー明日をおたのしみにナ！』

．．．．というやり取りがあつた次の日、アルゴの号外新聞を見て愕然とした。

「攻略組を影から支え続けていた元βテスタートツプランカー！その生き様の裏に隠された真実とは．．．!?」

デカデカと載せられた無茶苦茶な見出しの下には、ご丁寧に俺の写真がしっかりと貼り付けられていた。

何を考えてんだあのバカ鼠は!? つと思つて新聞を読み進めるとその内容はまあひどいモンだった。

『βテスト時のノーダメージボス撃破伝説!』

『闘う事が出来なくなつた体、苦悩と絶望の日々』

『それでもなおプレイヤーのために! 万屋秋風開店!』

改めて、ひどいモンだった。

そこには俺がβテスト時にやってきたこと、俺が闘えなくなつた理由、12層までの情報を提供していた事、万屋を開いていることが全部書いてあつた。

それも200%ぐらい脚色されて。

なんだよノーダメージボス撃破つて! あれはただ俺がボスの攻撃を受け流してスイツチする役割で、仲間が攻撃担当だったから偶然ダメージを食らわずに戦闘が終わつただけだ!

前線で闘えない理由なんか必要以上に同情心を煽るような書き方してるし!

万屋は俺が出来て一番効率がいい仕事だったから開いてるだけだ!

アルゴを捕まえて問い詰めたら「嘘は書いてないだろ？」とか言つてウインク飛ばしてきやがった。反省の色無しかよ……

突っ込みどころ満載のその新聞はアインクラッドすべての層で販売されたらしく、ほぼすべてのプレイヤーに行き渡つたらしい。

最初は闇討ちや糾弾が怖くてびくびくしながら店を開かずに引きこもっていたのだが、その数日後におそるおそる店を開いたらその瞬間に大量のプレイヤーが店の中に押し寄せてきた。

大量のプレイヤーに囲まれた俺は、圈内にもかかわらず「ああ……俺はついに殺されるのか」と本気で思い、現実世界の家族のことを思っていた。

そしてプレイヤー達は皆まっすぐとした目で俺を見て……

「本物のクレハさんだ！」

「ファンなんです！握手してください！」

「倒れないくらいでいいんで『劍影』の戦いを見せてください！」

「料理スキル完全習得ってホントなんですか!？」

「ギルドに興味は無いですか？」

押し寄せてきたプレイヤーは新聞を読んで俺のことを知った人達で、俺の行動にえらく心を討たれたらしい。俺が引きこもっていた数日間間にアルゴはキリトに情報提供をさせて、何枚も新聞を発行していたようだ……

俺のことを悪く思わないでいてくれる人が少しでもいてくれたことに安堵しつつ、その場は何とか収めることが出来た。

けどまだ不安だった俺は意を決して町に買い物に行くことにした。

圏内ならさすがにそこまでひどいことはされないだろうと思って出かけたが、村についてから数分でプレイヤー達に気づかれ、俺はまたしても囲まれることになった。

本日2度目の家族の顔に懐かしさを感じながら絶句していると、1人のプレイヤーを皮切りに一気にプレイヤー達が口を開き始めた。

「すげー本物だ!」

「今日も万屋のお仕事ですか!？」

「ワイはβテスターを勘違いしとったんや!あんたみたいな人も居るんやな!」

『剣影』の戦いを生で見たいです!」

ただ店で起こったことが町で繰り返されたただけだった。

それから色々な事を試してみたが、俺のことを悪くいってくるやつは一人もいなかった。

アルゴの詐欺まがいの新聞のせいでは有名になってしまった俺だったが、これは俺が恐れていた事態とはまったく別のものだった。

まああの新聞が殆どの原因なのだが……

結局アルゴの言ったとおり、俺の気にしすぎだったのかもしれない。今となつてはもつとはやくこうするべきだったと後悔しているくらいだ。

アルゴとキリトには、大きな借りが出来てしまった……

「……いつか返さないといけないな」

「なにを？」

「……」

振り返ると店の入り口にはアスナが立っていた。俺の独り言の意味が分からず、小さく小首をかしげている。

こいつもなのか、俺に気づかれないように店に入ってくる女が多すぎるだろ、アスナはそういうところちゃんとしてると思つたのに！

「いや……なんでもない。最近忙しかったから、ちよつと疲れてな」

「あー、クレハ君大人気だったものねー。私も副団長になったばかりのとき大変だったよー……」

そういつてアスナは少し肩を落とした。

確かに、『閃光のアスナ』の名前が知れ渡ったときは町にいる奴らの殆どがその話をしていたな。俺と違って珍しい女性プレイヤーの上に、美少女で副団長ときたらそりや大変だっただろう。俺の噂なんか目でもなさそうだ。

「確かに、『閃光のアスナ』といええば、SAOで知らないやつはいないだろう」

「人の事言えないと思うよ、『剣影ケンエイのクレハ』君」

「ほんとうに、その名前誰が付けたんだよ、恥ずかしいってモンじゃないぞ?」

「しらないけど、そういうのって自然に出来ていくものなんじゃないの? 『黒の剣士』とか『閃光』とか。自称してる人なんてそうそういないし」

「そりや自分で二つ名なんて付けた日には、そのまま黒歴史まっしぐらだろうしな」

俺は今、『剣影ケンエイ』なんて呼ばれてもてはやされている。刀の鞘で戦う俺を見て誰かが名付けたらしい。刀の影である鞘を使っていることと、すべて攻撃を受け流して攻撃が当

たらない影のような動きから付けられたそうだ。

「この由来も脚色されてる気がする・・・」

「まあまあ、皆クレハ君を慕ってるんだから、そんなこといわないの」

「それはそうだけだな・・・」

「そんなことより、もうすぐ皆が来るんだし、お菓子用意しましょうよ」

「ああ・・・もうそんな時間か、じゃあさっさと始めるか」

・ ・ ・

P M 3 : 0 0

この時間は「俺の店でお茶をする時間」ということになった。

というか俺の知らない間に勝手になっていた。

キリト、リズ、アルゴ、アスナの中では常識だったらしい。なんで俺に知らせてないんだよ……

「じゃあ、今日もよろしくね、クレハ君」

「ああ、大事な『依頼』だからな」

アスナは俺が料理スキルをコンプしていることを知って、最初はかなりショックを受けていたが、アスナは直ぐに立ち直り、俺に『料理の先生』を依頼してきた。

先生といっても、料理スキルの発展的な使い方や、味の調整などを見ているだけなんだから。

ただこいつのストイックさは正直すごいと思う。出来ないことをできないままにしないというか、他人に厳しくて自分にはもつと厳しいみたいな感じだ。

ちなみに前の依頼である恋愛相談は、アスナ的には満足の行く結果になったというところで、無事に報酬をもらった。キリトと仲良くなるのが目的だった訳で、あの一件以来ほぼ毎日一緒にお茶が出来るようになって幸せらしい。結果オーライというやつだ。

「こんな感じでしょうか？」

「ああ、それなら大丈夫だ。味のバランスもいいから失敗にはならないだろう」

「よし、じゃあこれで完成ね」

「そうだな、あいつらもそろそろ来るだろうし、俺はそろそろコーヒーの準備するか」

「クレハ君のコーヒーは本当にすごいよね。いくら完全習得の追加スキルがあるって言っても、細かい苦味とか甘みとかもちゃんと私達の要望に答えてくれるし」

「コーヒーに妥協するわけが無いだろ」

「その愛もすごいよね・・・」

・
・
・

お菓子タイムも終わり、いつも通り5人で談笑をしていた。なんだかんだ忙しかったから、やっぱりこういう時間は必要だな。

「そうだクレハ、お前に会いたって奴がいるんだけど・・・」

「ん？どうした急に」

「お前を紹介してくれって言うプレイヤーがいるんだ」

俺に会いたがつてる奴？キリトの知り合いで俺に会いたがるような奴ってことはβ
テストターか？

「ま、まさかそれ・・・女性プレイヤー？」

『剣影のクレハ』は随分と人気者だナー。それで、その相手は誰なんだキー坊詳しく教
えて欲しいナ」

「い、いや・・・えっと・・・」

「女性プレイヤーだったらなんかまずいのか？というかアルゴ、目が怖いぞ。キリトが
ビビってるだろ」

「ビビッてなんかない！」

「まあまあキリト君・・・」

「まずくはないけど・・・ないけど・・・！」

「いいからキー坊？それどこのどいつダ？」

ただただアルゴが怖い・・・

なんだ、なんか2人ともまともじゃないぞ、リズはなんか動揺してるし、アルゴは目が怖いうえになんか嫌なオーラでてるし・・・

「とりあえずキリト。俺に会いたがってるプレイヤーってのは誰だ？」

「そ、そうだな。クラインっていうプレイヤーだよ」

クライン？だれだそれ？全く心当たりが無い上に明らかに男の名前だろ。

「なによクラインなの・・・って男じゃない！先に言いなさいよ！」

「そうだよ、まったくキー坊は・・・」

「俺は一言も女性プレイヤーだなんていってないだろ!？」

「あははは・・・」

なんか俺を置いてきぼりで話が進んでいる。

結局女性プレイヤーだったら何がいけないのかも分からんし、そのクラインって奴が

誰なのかも分からんしもう訳が分からん。

「おい、結局誰なんだそのクラインってやつは、βテスターじゃないよな？」

「ああ、クラインはβテスターじゃない。けど攻略組のギルドのリーダーをやってる奴なんだ、クレハも一回会ってるぞ？」

「は？そんな奴に会った記憶は無いぞ」

「つい最近よ、私とキリト君も一緒にいたわ」

「あー、もしかしてあのバンダナ男か？」

「そうだ、あいつがお前に助けられたお礼がしたいんだってさ。ここの所お前が急がしそうで、ゆっくり話が出来なさそうだったからな。明日の朝にギルドメンバーを連れて来るそうだ」

クラインというのはあの一件で俺達が助けたギルドのリーダーのことだったらしい。バンダナを付けていて、的確にギルドメンバーに指示を出していた野武士面の男。

確かにあれ以来どうなったのかを聞いていなかったが、俺に礼を言いたいとは……

「そんな必要ないんだがな……」

別に俺が助けたわけじゃないし、その後俺はぶつ倒れたわけだからな、逆に迷惑掛けたかもしれん。

あれ？というか俺あるときぶつ倒れたよな？なんで自分の店で目が覚めたんだ？
気絶してるんだから転移結晶も使えないし・・・

「そういえばキリト、俺ってあの時どうやってここに帰ってきたんだ？」

「え・・・・・・・・いやーそれは・・・・・・・・」

「それは・・・・・・・・ねえ？」

キリトとアスナの歯切れが悪い。こういうときは大体嫌なことが起こる。

こいつら一体俺に何をしゃがった？

もしかして俺の指を操作して転移結晶を使ったとかか？いやそれだったら事情を説明して終わりのはずだ。というか転移結晶は使用者が転移先を口にしないとけないし、回廊結晶は最初に俺の家に出口を設定してないと使えないし・・・

ダメだ分からん。

一体どうやったんだ？

「いやーびつくりしたわよあの時は、キリトが寝袋に入ったクレハを引きずって帰ってきたんだから」

「ちよ、リズお前!!」

「………ほうっ。」

聞き捨てならんな。

こいつ俺を寝袋につめて、無理やり引きずりながら帰ってきたって事か……
しかも迷宮区から一気に俺の家に来れるわけじゃないから、少なくとも町の転移門から俺の家までは人前を引きずりまわした訳で……

「キリト……おまえ……」

「い、いや仕方なかったんだって!だって他に方法がなかったし!」

「まあそれはたしかに……」

「いや?その場には他にもギルドのプレイヤーがいたんだ口?だったら一人だけ転移結晶で帰って、クー坊の家に回廊結晶の出口を設定してギルドの共有ストレージに入れれば、キー坊のところにゲートを開けるじゃないか」

「……たしかに」

「それに、それだけ実力のあるプレイヤーがいたなら、安全圏までクレハを運んでから様子を見ることも出来たんじゃない？」

「ていうかキリト君、あの時真っ先に寝袋だしてクレハ君を寝袋に詰めたの、キリト君だよね？」

「え、えつと……その……」

キリトが汗をだらだら流して目を泳がせている。

なるほどな……こいつ何も考えずに一番最初に思いついた案を実行しやがったな。

確かに俺は助けられた、助けられたのだが……

「キリト……久々にデュエルしないか？」

「ちよつとまでクレハ！本気のお前とやるのはさすがにきつい！というかそんなことしたらお前が倒れるだろ！」

「かまわねえよ。今はお前を斬ればそれでいい」

「よくないだろ!!俺が悪かったからやめてくれ!!」

結局アスナにとめられてデュエルは出来なかったが、キリト懇親の土下座を受けて、この話なかったことにした。

まあ倒れた俺が悪いんだ、これ以上キリトを攻めるのは酷つてもんだ。

・ ・ ・

明日はクラインという奴が来るらしい。

何だかんだいって、新しいやつと知り合うのは楽しみなものだ。

話をしながらのんびりギルドの話聞くのも悪くない。

クラインとギルドメンバーが、コーヒー好きであることを祈ろう。

マイルドベリー

万屋「秋風」

俺が経営しているこの店は、いわゆる何でも屋だ。

報酬さえもらえれば、俺の出来る範囲なら何でもやる。

まあモチロン中には例外もあるのだが、大体そんな認識でいいだろう。
人をお願いされることが仕事なわけなんだが……

「俺に何でも依頼してくれ!!俺に出来る範囲ならなんでもするぜ!!」

俺は今、俺の仕事内容と全く同じようなことを言われている。

・ ・ ・

「だからさー、俺は別に何にもいらなくて」

「いや！それじゃ俺の気がおさまらねえ！何でもいいから言ってくれ！」

「なんでもいいっておまえな・・・」

俺に『依頼することを依頼』しているのはキリトが俺に会いたがっていると云っていた、バンダナ男のクラインだ。

初対面だったが気さくで話しやすい。波長が合うのか、会って数分で打ち解けることが出来た。ギルドでも慕われてるみたいだし、同姓に好かれる性格の持ち主らしい。

この前俺とキリトとアスナが助けた6人のプレイヤーというのはこのクライン率いる風林火山だったらしく、義理堅いギルドマスターが俺に恩返しに来たって訳だ。

正直めんどくさい。俺は別に恩を売ったわけでも無いし、何かしてもらいたいわけでも無いんだが、クラインはそれじゃあ気がすまないらしい。

適当な依頼もすぐには思いつかないし、どうしたもんか・・・

「なークレの字よー、お前ホントに何にも困ってねえのか？」

「何だよクレの字って……。実際何にも困ってなんかねえよ、今日は店も休みだから、人手が足りないなんてことも無いしな」

「そうか……。けどそれじゃあ俺の気が治まらないんだよ！俺達ギルドの命はお前に救われたんだぜ!？」

「それは大げさだろ、実際俺がいなくてもお前達は助かったと思うし。というかキリトとアスナもいただろ。何で俺だけなんだよ」

「キリトとアスナさんにはもう恩返しにいったぞ」

まじかよ……

「そうか、俺が数日間引きこもってた間にすませやがったな。俺もその時さっさと済ませておけばよかった……」

「ちなみにキリトとアスナには何をしたんだ？」

「ああ、キリトは穴場のNPCレストランを教えたな。アスナさんは、なんだかよく分からんが、47層にあるクエストの情報欲しいって言うからそれをあげたぜ」

「47層？なんでまた」

「さあ？ただ『思い出の丘』つてところに行きたいらしい」
「……ああなるほどね」

47層の『思い出の丘』つていえばカップル御用達のフラワーガーデンじゃねえか。大方キリトと一緒にそこに行きたいけど、素直に誘うのは恥ずかしいから2人で受けれそうなクエストを探してたつてどこか……

「……どんだけ初心なんだあいつ」

「だれがだ？」

「知らないほうがいい、お前には多分耐えられん」

「なんだよそりゃ？」

こいつ男から慕われてても女には縁遠そうだもんなー、アスナがキリトに気があるんなか知った日には発狂して廃人にでもなりかねん。

いや、なんだかんだ文句を言いながらも応援するのかな、こいつの場合。

そうやって他人を優先していつて、自分の幸せを逃していくタイプだな絶対。

「クレハ？」

「いや、お前にもいつか良い人が見つかるって」

「わけがわからん上に失礼だなお前」

「気にするな、こつちの話だ」

「よく分からんが・・・それより依頼だ！俺に何かさせてくれよ！恩返しだ！」

「だからそんな急には・・・」

「おいクレハ、邪魔するぜ」

俺とクラインの会話に低音のイイ声が割り込んできた。

割りと聞きなれた声の方には2mは有りそうな大男が立っていた。

色黒で筋肉質な体にくわえ、スキンヘッドがその威圧感を助長している。

だがイメージに反して、その男はにこやかに俺の店に入ってきた。

「なんだ、エギルか。どうしたんだ急に」

「お前に良い話が有ってな・・・ってクラインもいるのか」

「おうエギル！久しぶりだな」

「なんだ、お前達知り合いだったのか」

「ああ、クラインは俺の店の常連さんだからな」

「そういうなら、たまにはもっと安くしろってんだ……」

クラインとエギルのやり取りから察するに、結構昔からの知り合いみたいだ。

俺とエギルは俺が店を開いた時からの知り合いで、分野は違えど同じ商売人でことでお互いに情報交換やアイテムのやり取りをしていた。

かなり商魂たくましいやつで、俺が『剣影』なんて呼ばれ始めた時に入場料を取って握手会を開こうとしやがった。全力で止めたが……

「それで、何のようだエギル。握手会ならやらないぞ」

「あの時は悪かったって、その侘びもかねてお前に良い情報を持ってきたんだ」
「いい情報？なんだ？」

「おおエギル！たまには良い仕事するじゃねえか！俺にも聞かせてくれよ」

「まあ焦るなって、45層に新しいクエストが見つかったらしくてな、そのクエストの報酬で、確実にS級食材が手に入るんだと」

「S級食材!?すげーじゃねえか！」

「どんなクエストなんだ？」

「かなり特殊でな、NPCの出す飲み物が何なのかをすべて当てるクエストらしい。いわゆる『利き』ってやつだな」

「『利き』？それってワインとかを飲み比べてどのワインか当てる・・・みたいなやつか？」

「ああそうだ、いまだにクリアできたやつは居ないらしいが、クエストを受ける時にS級食材を見せられるらしい。『これができたらくれてやる』ってなものだ」

「なるほどな、それで？そのS級食材ってのは何なんだ？肉とかか？」

「いや、それがな・・・『豆』らしい」

「豆？なんだそりゃ、ずいぶん質素だな。S級食材にもそんなのがあんのか」

飲み物の『利き』がクエストで・・・

貰えるS級食材が『豆』・・・

それって・・・

「おいエギル、その『豆』ってまさか・・・」

「ああ、『コーヒー豆』だ」

「クライン！45層に行くぞ！」

「うわあ！どうした急に……」

「うるせえ！いいから行くぞ！俺からの依頼だ！」

「お、おいちよつと待てつて!!」

バタン！ダダダダ……

「さすがクレハ、コーヒーの事になると急にアクティブになるな……。けどあいつら、そのNPCがどこにいるか知ってんのか？」

45層市街地 喫茶店「プレーン」

エギルの話を聞いて数分後、俺達はクエストが発生すると言われているNPCのところに来ていた。

「……一回エギルのところに戻って聞き直してきた。」

「というより、この世界にコーヒーなんかあったんだな……」

「ああ、俺も店には無いもんだと思ってたよ。少なくとも低層にはなかったな。けど料理スキルで作れるってことは、一応存在はしてたってことなのかな」

コーヒーを飲むために料理スキルを完全習得した俺だが、層を上げるとコーヒーは存在はしていたみたいだ。けどNPCの作るものって基本的に微妙だしな……

あまり期待はできない。

店の中を見渡すと、喫茶店のカウンターの前にいる男の頭の上にクエストNPCを現すマークが点滅していた。

「いたな、あのNPCだ」

「そうみたいだな、けどクレハ。俺『利き』なんて出来ねーぞ?」

「そうだな・・・俺は多少出来なくも無いが、正直難易度がどれくらいのものか分からないことにはな・・・とりあえずクエストを受けてみようぜ」

「お、おう」

「すいません、どうかしましたか?」

NPCに向かってクエスト発生のために声を掛けると、頭の上にあるクエストマークが光りだし、クエストが始まった。

『ああ見てくれ!こんなにすばらしい豆を仕入れることが出来たんだ!飲んでもらいたいんだが、コーヒーのすばらしさを分かっていない奴に飲ませるなんてことはできないのさ。そうだ!僕の出すコーヒーの種類を言い当てることが出来たら君にこの豆をプ

レゼントしようじゃないか！どうだい？』

クエストを受けますか？というウインドウが表示され、Yesのボタンを押す。

ずいぶんと陽気なマスターだな。いやこの場合バリスタか？

まあともかく、こいつがだすコーヒーの種類を当てればいいのか、どこまで当てればいいのかによってクリアできるかがかわってくるな・・・

『じゃあ問題は2問出そう！まずはこの2つ！さあどっちがブレンドコーヒーかわかるかい？』

そういったNPCは俺達に2つのカップを差し出してきた。

香りはいつも俺が作っているコーヒーとあまり変わらない。もしかしたらNPCが作ったものもそれなりにいいものなんじゃないか？

「み、見た目ほとんど一緒じゃねーか・・・こんなんわかるわけが」

「正解は右のほうだな、左は明らかにストレートコーヒーだろ」

『OH！正解だ！すこしは分かっているみたいじゃないか！』

まあ最初はこんなもんか、多分2問目が難しいんだろう。

さすがにコレだけだと簡単すぎるし。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・クレハ、お前飲みもしないで
わかんのか？」

「え？いや、だつて明らかに違うだろ。わかんないか？」

「わかんねえよ!!飲んでもわからん自信があるわ!!」

そうなのか？俺からしたら別物なんだが・・・・・・・・

まあともかく1問目を正解したわけだしこのまま行きたいもんだ。

『じゃあ2問目だ！コレが分かったらこの豆をプレゼントしよう！』

「ほら2問目だぞ、クラインも考えてくれ」

「・・・・・・・・俺は自信ねえぞ」

『さあ！このコーヒーの豆の種類を答えてくれ！』

今度は俺達の前に1つのカップが差し出された。

さつきと同じように良い香りがする。

さて、豆の種類と来たか・・・想像していたよりは大分楽な問題だな。

S A Oの中にも俺以外にもコーヒーに詳しい奴は沢山いると思うんだが・・・リアルでカフェを経営していた奴とか、そういう仕事についていた奴とか・・・これがいまだにクリアされていないってのはどういうことだ？

「豆の種類って・・・クレハ、俺はもうお手上げだ・・・お前はこれも見ただけで分かっちゃうのか？」

「いや、さすがにそれは飲まないとわかんないだろうな。ブレンドされたすべてを当てろとかならまだしも、一種類なら何とかなるだろう」

「おおまじかよーこれでS級食材ゲットか!？」

クラインが期待したようにこつちを見ているが、正直すこし緊張するな。

はずすことは無いと思うが、これが俺が作る以外でS A Oでの初めてのコーヒーだ。

コーヒー好きとしては楽しみで仕方が無い。・・・では

ゆっくりとカップを口にあて、NPCのコーヒーを口に含む。

口の中にコーヒーの香りが広がっていく。

そして遅れてコーヒーの味が……

……これは!!

「……………」

「ど、どうしたクレハ？豆の種類は分かったか？」

「……………」

「まっ…」

「不味すぎてわからない……………」

「はあああああああああああああ!?!」

「これはもうコーヒーじゃねえ。泥水だ……」

「おいおい嘘だろ!?!そんなのクリアできねえじゃねーか!!」

NPCの作るものは微妙だとは言ったが、これは微妙なんてものじゃない。

飲み物ですらないだろこんなの……

分かるわけが無いじゃないか。そういうことか、SAOにいるであろうコーヒーに詳しい奴がこのクエストをクリアできない理由は。

飲んでも分からないんじゃないじゃあ賭けに出るしかない。けどその賭けもコーヒーに多少詳しくないと豆の種類なんてばつと出てこないし……

無理ゲーだろこんなの。

初めて俺が作った泥水と同じ味がしたぞ……

……ん? 同じ味?

『さあ答えてごらん！この豆の種類は!?!』

「ちくしょー！S級食材の夢もここまでかー!!」

「もしかして……」

「え？」

「この豆の種類……モカか？」

「も……もか？」

クラインは良く分からないという感じで俺のほうを見ていた。

怪訝そうなクラインの顔を横目で見ながら、NPCのほうを向くと、満面の笑みのNPCがこつちを見ていた！

『大正解!!!君は本当のコーヒー通のようだね！気に入ったよ!!さあこの豆を持って行っておくれ!!』

俺とクラインの前に「QUEST CLEAR」の文字がキラキラと光っている。少し遅れてウィンドウが強制的に開かれ、アイテム欄に新しいアイテムが入れられていた。

『マイルドベリー』

アイテムをオブジェクト化すると、濃い茶色をした丸い豆が大量に入った布袋が現われ、俺達2人は輝くようなその豆に目を奪われることになった。

「俺はコーヒーのことはよくわかんねえけど、この豆はなんていうかスゲーキレイだ……けど、俺の知ってるコーヒー豆とすこし違うな。なんていうか、少し小さくてまん丸だ」

「ああ、ピーベリーってやつだ。普通は実に2つの豆ができるから、コーヒー豆は片側が平たくなるんだが、まれに実に1つだけ豆が出来る時があるんだ。それがピーベリーってやつで、キレイに丸みを帯びた形になるらしい」

「なるほどな……ってことはかなりレアな豆ってことか？」

「レアなんてもんじゃないな。ピーベリーはコーヒー豆に収穫量の3%くらいしか取れないらしいから、これだけの量は現実ではそうそう拌めないだろ」

「すげえじゃねえか！さすがS級食材だな！」

ピーベリーは形がいびつじゃない分均等に火が通って風味がよくなるらしい。まるでやかでコクがあるよないいいコーヒーが作れそうだ……

ああ、早くかえってためしたい……

「それよりクレハよ、なんで最後の豆の種類が分かったんだ？不味くてろくなもんじゃなかったんだろ？」

「ああ、俺はあれをコーヒーとはよばせねえ」

「じゃあなんで……」

「まあ、俺が昔飲んだことある味だったからな……」

「？ますますわからねえ。説明してくれよ」

俺が最後の問題を解くことができた理由、それはいたってシンプルなものだった。

あの味がモカの味だと分かったのではなく、あの味を作るために何をしたのかがわ

かっただけだ。

「俺はコーヒーが飲みたくて料理スキルをあげたんだが、まだ料理スキルが全然だった時にコーヒーを作ってみたんだよ。結果はひどいもんで、泥水みたいな味だったさ。さっきのコーヒーみたいな味がしたよ」

「そ、そうなのか……けどそれとこれと何の関係が？」

「俺がその時作ろうとしたのがモカの豆を使ったコーヒーなんだよ、その味がさっきのコーヒーと殆ど同じだったってことは……」

「なるほど！お前のコーヒーは『モカを指したコーヒー』であのコーヒーは『モカで作ったコーヒー』だから、味が似てたってわけか」

「そういうことだ、いやー失敗の経験ってどこで生きるか分からんもんだな」

・ ・ ・

俺の店に帰ってきた俺とクラインは早速取ってきたマイルドベリーを調理しようと

したんだが……

「ほらクレハ、これはお前の分だ」

「は？ いやいや、それはお前が貰ったクエスト報酬だろう？」

「これは俺の恩返しの商品だ！……それに、俺クエスト殆ど役に立ってなかったし……」
「お前のクエスト報酬だろう。好きなように使えばいい。俺への恩返しは一緒にクエストに参加してくれたってだけで十分だ」

「け、けどよお……」

「お前はホントに……」

義理堅い奴だな。俺はただお前と一緒にクエストに行つて、楽しんで帰ってきて、S級食材が手に入ったってだけで十分なんだが、それじゃあこいつは満足しないんだろうな。

「……わかった。受け取ろう」

「本当か!? そうだ貰つてくれ！ 俺の気持ちだ！」

「ああ、その代わりもう一つ付き合ってもらおうぞ」

「……え？」

・ ・ ・ ・

「クー坊！S級食材取ったんだ口？飲みにきたゾ！」

「S級食材!?ちよつとクレハ！私にも見せなさいよ！」

「あれ？クラインじゃないか。クレハには恩返しが出来たのか？」

「こんにちは、クラインさん。クレハ君も」

いつも通りの時間にいつも通りの面子がきやがった。

しかもアルゴにいたってはすでに俺がS級食材を手に入れたことを知ってやがる。こいつだけ確信犯だな……。

「す、すげえ面子だなこりやあ……」

「ああ、『鼠のアルゴ』に『女鍛冶職人リズベット』、『黒の剣士キリト』に『閃光のアスナ』。そんでお前が『風林火山のクライン』だからな。有名人だらけだ」

「それに『剣影のクレハ』様もナ」

「うるせえよ」

「そ、それでよクレハ。俺は今から何すりやいいんだ？」

「ん？一緒にお茶するだけだが？」

「………は？」

クラインは意地でも俺にマイルドベリーを渡さないと気がすまないみたいだったからな、そんなに言うなら素直に受け取る。けどその後どうするかは俺の勝手だ。

「お前も飲んで行けよ、S級食材で作るコーヒー。絶対美味しいぜ」

「いやいや！それはお前が大事に使うべきだろ!!」

「大事に使った結果がこれだ。一人で飲んでも寂しいだけだろ？」

「それもそうだけだよ……あのNPCも言ってただろ？コーヒーを分かてるやつが飲むべきだってよ。俺はそういうの全然わかんねえし……」

「ああ、だからあいつのコーヒーは不味いんだよ」

「は？」

NPCだから料理が美味くないとか、NPCだからプログラムされたことを言っているだけだとか、そういうことはモチロン分かっているが、俺はあいつの発言は気に入らなかった。

「コーヒーを知っていようと知っていまいと、飲んで美味しいと感じることには変わりないだろ。むしろ知識を持っている奴が偉そうにしてる方が不味くなる。俺は分かっていると分かかってないとかより、飲んで欲しいかそうでないかで決めたいね。俺は俺の作ったコーヒーをクライアントにも飲んでもらいたい。コレじゃダメか？」

「……ああ、わかった。おめえはいい奴だな。クレハ」

「お前もな」

納得してくれたようでクラインはキリトたちがいるテーブルのほうへ向かってくれた。

クラインとキリトたちは初めから知り合いだったらしいから、すぐに打ち解けて楽しいティータイムになるだろう。

さあ、マイルドベリーの調理に取り掛かるか……

「……………クーフ坊。ちよつといいカ？」

「ん？どうしたアルゴ、まだ出来るには時間かかるぞ」

「そうじゃなくてナ」

「じゃあなんだ？」

「ええつと……………」

暗い表情、と言うよりはなんだか不安そうな表情で俺を見つめてくるアルゴはなんだか新鮮で、いつもより一回り小さく見えた。

一体何がそんなに不安なのか、俺にはさっぱり分らない。

特にこんなアルゴは初めてなせいで、なおさら分らない。

「なんだ？はつきり言ってくれないと分からんぞ」

「その……クー坊は……」

「俺は？」

「……………男のほうが好きとかじゃないよね？」

聞かなければ良かった。

「ええええええええ！ちよつとクレハ！？そうなの！？」

「絶対に違う！！リズムも信じるな！！アルゴ！！どうしてそうなる！！？」

「だって………なんかクラインを口説いてるみたいだったし……」

「どこがだよ！！普通にお茶に誘っただけだろ！？というかお前素が出てるぞ！」

「けど確かに、クラインさんが女の子だったら、確実に口説いてるような台詞だったわよね」

「あー確かにアスナの言うとおりだな。俺の作ったコーヒーを飲んでもらいたいか。口説き文句みたいだな」

「キリト!!アスナ!!お前らも掘り下げな!!」

「クレの字よお・・・悪いけど、俺は普通に女の子が好きなんだ・・・」

「俺だつて女のこのの方が好きだよ!!というかお前は当事者だろ!!悪乗りするなよ!!」

「女の子ってどんな女の子がいいんダ?」

「そ、そうね、それはちよつと興味あるわ・・・」

「なんでそういう流れになる!!」

・ ・ ・

ギャーギャーとうるさい時間はしばらく続き、落ち着いたのはずいぶんたってから

だった。

俺が新しく知り合うやつはどうもにぎやかな奴が多い気がする。
次に会うのは出来るだけおとなしい奴がいいな・・・。

龍使いからの依頼 前編

「ずいぶんと面倒な依頼がきたもんだ」

仕事も安定してきて、最近では固定客も着いてきた俺の店だが、今日は少しいつもと違った依頼が来た。いわゆるプレイヤー間の問題を扱うタイプの仕事だ。

今までも何度かあった。『あのプレイヤーの動きを探ってくれ』だとか『俺とこいつどっちが正しいと思う!?!』とか、情報も多少扱っている俺の店だからか、こういった依頼はまれに転がり込んでくる。

大体の客がイライラした状態で店に来るから対応がすごくめんどくさい。プレイヤーの動きを探ると言う依頼も、下手をしたら俺の情報が不味い方法に利用される可能性も有るので、精神衛生上あまりよろしくない。

アルゴはよくこんな仕事をメインでやっていけるもんだと感心するよ。

けど今回の依頼に関しては話が違う。本気で依頼者のために動きたいと思ったし、動かなくてはならないと思った。

「ここはいったん店を休止にして、この依頼に全力を注いだほうがいいだろう。」

「すまんクレハ、居るか？」

「うん？なんだキリトか。どうした、悪いが今少し忙しくてな。急ぎの用か？」

「え、そうなのか。まいったな、お前に依頼が有ったんだが・・・」

「依頼？」

キリトが俺に依頼だなんて珍しいな。この世界でキリトが困るようなことを俺が解決できるわけがないと思うんだが、わざわざ俺の所に来たつてことは、何か特殊なことでもおこったか？

さっきの依頼に時間を割くべきかもしれないが、ほかならぬキリトの頼みだ。話は聞いておこう。

「いや、大丈夫だ。すぐに力になれるかは分からんが、話ぐらいは聞こう」

「そうか、助かる。その前に一人連れが居るんだ。どちらかと言うと、依頼はその子の物とっていい」

「連れの依頼？」

いつぞやもこんなことがあったな。リズがアスナを連れて依頼に来た時みたいだ。コレでキリトの連れが男で、『アスナさんが好きなんだがとうしたらいい?』とかいう依頼だったら相当な修羅場が生まれそうだな。それだけは勘弁して欲しい。

「ああ、この子なんだが・・・」

「は、はじめまして・・・シリカっていいいます」

キリトに促されて小さい女の子が店に入ってきた。

薄茶色の髪をツインテールでまとめて、赤いリボンを結んでいる。一言であらわすと『小動物』って感じの女の子だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・これはこれで修羅場が生まれそうなんだが。」

「キリト・・・お前アスナがいながらそんな小さな女の子に手を出したのか」

「ふえ!!」

「まてまて何でそうなる!!誤解を招くようなことを言うな!!というか俺とアスナはそういうんじゃないかって・・・」

「ロリコンは皆そういうんだよ」

「だから違うって!!」

キリトは声を荒げて本気で焦っている。

こいつをからかうのは本当に面白いな、常に全力だからリアクションも大きいし。

アルゴやリズをからかうのも面白いんだが、そのあとの仕返し怖いからなかなか出
来ん。アスナにいたってはからかう前から怖い。

クラインとキリトをからかうのが一番楽しいかもしれない。

「まあ冗談はおいといて、シリカ……だっけか、どんな依頼だ？とりあえず話しを聞こ
う」

「冗談がきつすぎるぞ……。まあいいか、シリカ、クレハに事情を説明してやってく
れないか？少し辛いかもしれないが……」

「は、はい！大丈夫です。実はですね……」

「なるほど、それでピナの心を持って47層の思い出の丘に行きたいわけか」

「はい。けどわたしはレベルが足りてなくて……」

「俺もついていくつもりなんだが、少し心配だな。護衛とか慣れてるクレハにも着いてきて貰いたいんだ」

「なるほどね……」

要約すると、シリカの依頼はこうだ。

35層の迷いの森でパーティの女性とアイテムのことで衝突したシリカは、パーティを置いて一人で森を抜けようとした。けどそれは上手くいかず、3体のドラクエイプに囲まれてしまった。命の危機を通りすがったキリトに助けてもらったが、ビーストテイマーとしてタイムしたピナというドラゴンが死んでしまった。そのピナをよみがえ

らせる為に47層に行きたいが、レベルが足りない。キリトが護衛を買って出たが一人では不安が残る。そこでキリトの他にもう一人護衛をつけようってことらしい。

「それは結構時間がかかりそうだな・・・」

「できればクレハにも参加して欲しいが、忙しいって言ってたな。やっぱり厳しそうか？」

「・・・ああ、急いで解決しなきゃならん依頼がある」

「そう、ですか・・・」

シリカは隠そうとしているが、不安と悲しさが表情に現われている。

どうしたもんか。前の依頼もそうだが、シリカからの依頼も簡単には『うけません』と言えない様な内容だ。

・・・さてよ？

35層の迷いの森で、『女性プレイヤー』と衝突か・・・

かなり低いが、すこし気になる可能性が出てきたな。

「一つシリカに確認したいことがあるがいいか？」

「は、はいなんでしようか？」

「その衝突した女性プレイヤーのこと、もう少し詳しく聞けるか？」

「え？あ、はい。ええつと・・・赤い髪をした槍使いで、『ロザリア』さんっていう背が高い大人の女性プレイヤーです」

「・・・なるほど」

これはビンゴだな。赤い髪の女性プレイヤーで名前は『ロザリア』

これならうまくいこうと行けるかもしれないな。

・・・シリカをダシに使うみたいで申し訳ないが。

「わかった、俺も手伝おう。47層くらいなら余裕だろうし、さっさと行って、さっさとピナを生き返らしてやろう」

「ほ、本当ですか？ありがとうございます！」

「けど、いいのか？急ぎの依頼があったんじゃ・・・」

「まあ、問題ないさ。急がば回れっていうしな・・・」

「?」

「気にすんなよ、今日は35層の宿屋で準備と話し合いをして、明日の朝にでも出発しよう」

「・・・そうだなそれがいいだろう」

「ごめんなさい、ご迷惑掛けちゃって・・・」

「それも気にするな、困った時に頼られるのが俺の仕事だ」

・ ・ ・

アインクラッド35層

白いレンガ造りの町並みと、それを照らすオレンジ色の明かりがあたりを包んで、町の中は幻想的な雰囲気にも包まれていた。中層プレイヤーが拠点として利用しているか

らか、夜にもかかわらず街には活気があふれていた。

「やつぱり35層は綺麗なところだな」

「そうだな、リンダースとは違ったよさがある」

「はい！私もお気に入りなんですよ。あそこのお店のチーズケーキが結構おいしくて・・・」

「チーズケーキか・・・。いいな、今度作ってみるか」

「お、クレハのおやつに新しいメニューが追加されたな。シリカのお手柄だ」

「え？それってどういう・・・。クレハさんはケーキが作れるんですか？」

「ああ、一応料理スキルは完全習得してるからな」

「ええ!?完全習得だなんて、はじめてみました・・・」

「まあそりゃあそうだよな」

中層プレイヤーで料理スキルをあげていて、その上完全習得している奴なんて居ないだろう。というか武器のスキル以外を完全習得しているプレイヤー自体が少ないだろう。

「今度シリカも作ってもらおうといい」

「今度といわず今夜作ってやるよ。同じ宿屋なら飯を食う時に俺達の部屋に来ればいいだろうし」

「いいんですか!?!うわあ・・・すっごく楽しみです!」

シリカが笑ったのを初めて見たかもしれない。

相棒が死んでしまった悲しさと罪悪感からか、ずっと暗い顔をしてたからな。

この明るい笑顔シリカの素の顔なのかもしれない。このようすだと普段はさぞ男性プレイヤーに言い寄られただろうな。

「シリカちゃん発見!ずいぶん遅かったんだね、心配したよ」

「今度パーティー組もうよ!いい狩場が有るんだ」

「あ、あの・・・」

ああ・・・

早速といえないうか、俺が想像してたようなプレイヤーがでてきたな。

下心みえみえというか、自分をアピールしたい態度が前面に出てるといえるか・・・

明らかにシリカが困っているのにも気づいて無いようだし。

「あの、気持ちはありがたいんですけど。しばらくこの人たちとパーティーを組むこと二したので……」

「ええー！そりゃないよ……」

口々に不満を声に出しながらそのプレイヤー達は俺とキリトを邪魔な物を見るかのような目で見てくる。

あからさま過ぎるなこいつら、シリカの目の前でよくそこまで不満を言えたもんだ。それを聞いてシリカが不快に思うとか、辛い気持ちになるとか考えんもんかね？

「あいあんたら、抜け駆けはやめてもらえるか！俺達はずっと前から声を掛けてたんだぞー！」

「そうだそうだ！」

「いや、そういわれても……」

あーこれはだめだな。

自分が満足する結果が出ないときに周りに文句を吹っかけてくるタイプの奴らだ。キリトは何も言わずにいるみたいだが、ここで何とかしとかなないと後々面倒になる。

「おい、お前らいい加減にしろよ」

「な、なんだよ。抜け駆けをしてきたのはそっちだろ……こっちは前から……」

「前からって何だよ、お前らシリカが順番どおりに皆にまわってくるマスコットだとも思ってたのか？ 結局お前らは自分の思い通りに行かないことをガキみたいに喚いてるだけだろうが。それともシリカをパーティーに入りたい具体的な理由があんのか？」

「ぐ……それは……」

「無いならどけてくれ、俺達も暇じゃないんだ」

「ぐう……」

シリカに言い寄ってきたプレイヤーは苦い顔をして黙りこくってしまった。

その間に俺達はさっさと宿屋のほうへ向かい、その場を離れた。

プレイヤー達が見えなくなったあたりで、シリカが申し訳なさそうに口を開いた。

「なんだかごめんさい、わたしのせいで……」

「あいつらシリカのファンか？めんどくさそうな奴らだけど、人気があるのはいい事でもある」

「……マスコット代わりに誘われてるだけです。それなのに『竜使いシリカ』なんて呼ばれていい気になって……」

シリカはピナが死んだことを思い出したのか、また少し暗い表情に戻ってしまった。

こんな時に気の利いた一言でも言えればいいんだが、残念ながら俺にはそんな度胸もボキャブラリーもないんだよな。有るとすれば……

「心配ないよ」

「え？」

「必ず間に合うから」

「……キリトさん」

こいつだよな……。

一言でシリカの暗い顔をさつきまでの明るい顔に戻して見せた。こいつはこうやって数々の女の子を落として来たに違いない。シリカもすでにキリトに懐いてるようだ

し……

俺もしかして邪魔物？

「クレハさん？どうかしましたか？」

「いやなんでもない、できるだけ隅っこに居るから気にしないでくれ」

「？」

気を使えばいいのか自然にしていればいいのか分からん。アスナのときはリズが居たからなんともなかったが、こういう2人＋俺のときはどうして言いか本当に分からん。

あれ？アスナの依頼を受けた俺としてはシリカを遠ざけたほうがいいのか？あの態度は明らかにキリトに気があるか、なくても時間の問題だろうし……

「……うーん」

「えつと……ほんとになんでもないんですか？」

「シリカ、気にしなくていいよ。クレハは時々ああなるから」

「人聞きの悪いこというなよ。もういいから、さっさと宿屋に……」

「あら？シリカじゃない」

「！」

後ろから女の子の声が聞こえた。数人のプレイヤーの中に赤い髪をした長身の女性プレイヤーが居る。聞いたことが有る外見、それに少しおびえたシリカの態度で誰なのかが分かる。多分こいつが・・・

「ロザリアさん・・・」

「森から脱出できたんだー、よかったわねえ・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・シリカ、どうかしたのか？」

「・・・いえ、別に」

キリトもシリカの不安を見抜いたのか、シリカのことを気遣っている。

シリカことはキリトに任せておいたほうがいいだろう。

そのあいだに、俺はこの女を観察しておこう・・・

「あら？あのトカゲはどうしたの、まさかあ？」

「……………ピナは死にました。けど絶対に生き返らせませす！」

「そう……………じゃあ思い出の丘にいく気なんだあ。けどあなたのレベルで攻略出来るの？」

「それは……………」

終止ニヤニヤとしながらシリカが嫌がるような言葉を選んで話してやがる。それに加えて、シリカが思い出の丘に行くことの確認と誘導をしてやがる。

あんなことをするよな奴だ、さすがにバカでは無いらしい。

「できるさ、そんなに高い難易度じゃない」

「……………あんたもその娘にたらしこまれたくち？ 見たとこ、そんなに強そうじゃないけど」

シリカを庇ったキリトに突つかかるか。プライドと自意識の高さを隠しきれて無いあたり小物臭いな。

これなら間違いなくこいつはもう一度俺達の前に現れる。
……一応ダメ押ししとくか。

「若さに対する嫉妬は醜いと思うぜ、オバサン」

「オ……オバツ……!」

「男に人気のあるシリカが羨ましいわけ？ 残念だけど、シリカに対抗するのは無理があるからやめたほうがいいぞ。10年遅い」

「あんた黙って聞いてりやいい気になるんじゃないよ!! ……まあいいわ、思い出の丘で死なないようにせいぜい気をつけることね」

ロザリアは捨て台詞だけ吐いてさっさと消えてしまった。

あれだけ煽ったのに対して反論もせずに帰ったってことは、いよいよ間違いないだろう。おそらく明日が本番って感じだな。

「おいクレハ、お前何もあそこまでいわなくても……」

「いいんだよ。ちよつとした考えもあつたからな」

「考え？」

「ああ、お前には後で説明する。ちょっと協力してもらいたいからな」

「・・・？ よく分からないが、何かあるなら手伝うよ」

「助かる。さあ、邪魔が入ったがそろそろ飯時だ、宿屋に行こう」

「そうだな。行こうシリカ」

「え？ あ、はい！」

俺の行動に面食らっていたのか、シリカはどうしていいか分からないと行った表情で困惑していたが、キリトの声で落ち着いたのか遅れながらもトコトコと俺達の後ろをついてきた。

・ ・ ・

「ぐちそうさまでした」

「やっぱりクレハの料理は上手いな、さすが完全習得」

「そりやどうも、チーズケーキは初めてだったから不安だったが、問題なかったみたいだな」

「わたし、こんなに美味しい料理はこの世界で初めて食べました……」

宿屋について俺達は遅めの晩御飯を食べていた。宿屋にもレストランがあるが、各部屋に料理をするスペースがあるため、俺とキリトの部屋にシリカを招いて俺の料理を振舞ったわけだが、なかなか好評でうれしい限りだ。自分が作った物を上手そうに食ってくれると言うのはありがたい。

「食べ物はこの世界唯一の娯楽みたいなもんだからな、店に来てくれればいつでも振舞うよ」

「本当ですか!？」

「……お前の店って万屋だったはずだよな?」

「最近料理を作る依頼がやたら多くてな。本当に喫茶店になりそうで俺も怖い」

最近では半分ぐらい料理スキルに関する依頼だ。別に不満と言うわけではないが、

やっぱり万屋としては複雑な気持ちになる……

「じゃあ飯も食ったことだし、そろそろ明日に備えて47層の話しよう」

「ああ、このまま俺達の部屋で始めてもいいか？」

「はい、私は大丈夫です」

「なら早速始めよう」

そういつてキリトは小物入れ位の大きさの金属製のアイテムを取り出した。

キリトがアイテムをタップすると、立体映像のような形で47層の全体マップが現われ、机全体に広がっていく。小型のプラネタリウムのようでも幻想的だ。

「わあ……綺麗……」

「これ、ミラージュスフィアか。珍しいもの持ってるんだな」

「偶然手に入れたんだが、売らずに取っておいて正解だったな」

「そ、そんなに貴重な物なんですか？」

「パーティーメンバー全員でマップを確認することが出来るし、何より綺麗だからな。店で買えるものでも無いし、需要はたかいな」

「そんな、使っちゃって良かったんですか？」

「俺はソロだし、こんな時じゃないと使わないし、気にしないでくれ」

「ソロのくせにそういうレアアイテムは集めるんだよな」

「いいじゃないか、MMOの醍醐味だ」

こいつはレアアイテムを集めるくせに使わないからな、こういうときでもないと消費する機会がないんだろう。コレクターと言うわけではないから使えるなら使うけど、使わないからといって手放すのは惜しいってタイプだな。

俺も気持ちはわかる。店の倉庫にはいつか使うかもと思って装備しないタイプの武器や防具も眠ってる。レア度が高いとなかなか売りに出せないし、難しいところなんだよな。この前も……

いやいかんいかん、そんなことより話を進めないと。

「それより47層の話だ。ここが47層の市街地で、思い出の丘にはこの道を通っている」

「結構距離があるんですね」

「道中はそこまで問題じゃないんだけど、思い出の丘は植物系のモンスターが居て、そい

つが……………」

「……………？ キリトさん？ どうしました？」

「静かに……………」

キリトは突然立ち上がるとドアのほうに駆けて行って勢い良くドアを開け放った。

「誰だ!!」

キリトが開け放ったドアの向こうには誰も居ない。しかし少し遠くから微かに走るような足音が聞こえる。これはまさか……………」

「聞かれてたか？」

「ああ、そうみたいだな」

「けど、ノックをしなかったら部屋の中の音は聞こえないはずじゃあ……………」

「聞き耳スキルをあげてればそういうわけでも無いんだ。もつとも料理スキルよりマイナーなスキルだがな」

「そんな……………けど一体誰が……………」

「.....」

十中八九あいつ等だろう。思っていた以上に動きが早いな。これは早めにキリトに事情を説明しておいたほうがいいかもしれない。

.....

シリカに十分警戒するように伝えてから部屋に返した。心配だがまさか同じ部屋で寝るわけにも行かないし、何かあっても隣の部屋だから危険は無いだろう。

シリカにキリトと一緒にの部屋で寝るかと思つたあたりから顔を真っ赤にして慌てふためいてしまったが、決して嫌だとは言わなかつたあたりシリカの気持ちキリトに向いているのが良く分かる。この唐偏木は気が着いていないようだったけど.....

「……なあクレハ。宿屋に来る途中に説明するって言ってた事と、さっきの聞き耳を立てていたプレイヤーって何か関係があるのか？」

「どうしてそういう勘だけは鋭いんだろうな、お前は」

アスナの気持ちにもその調子でバシツと気づいてやれば俺もリズも苦労しないのにな。……いや、シリカもキリトに気があるみたいだし、気づいたら気づいたで面倒なことになるのか？

「いいから、早く説明してくれ」

「ああ、わかったよ。最初から説明してやるから」

・ ・ ・

俺はキリトにすべてを話した。俺が受けた依頼のことで、今回のシリカのことで俺が何をしようとしているのか、ロザリアを煽って見せた理由。全部を話した。

「なるほど、お前の事情は分かった。俺もほおつては置けないし、協力するよ」

「助かる。俺一人でも依頼はこなせるが、シリカも居るからな」

「問題はそれだ、シリカを巻き込むとは思わなかったのか？」

「巻き込むとなったら俺も連れては来なかったが、もうすでに巻き込まれてたからな。あいつ等の今回のターゲットはシリカだ。だったら目の届く場所に居たほうがずっと安全だろ？」

「……それもそうだな。となると、明日はシリカに危険が及ばないようにしないと
な」

「ああ、もちろんだ。それだけじゃなくピナを生き返らせることも依頼の一つだからな。そつちもきちんとかなすぞ」

「さすが万屋。頼りになるな」

「うるせーよ」

明日はシリカを連れて思い出の丘に行くことになる。

ピナの復活ともう一つの俺の依頼がスムーズに解決することを祈ろう。

．．．．．あと、思い出の丘でキリトとシリカがいい感じになったらどう気を使うかも考えておこう。

龍使いからの依頼 後編

アインクラッド47層フロア

「わあ．．．．綺麗．．．．夢の国みたい．．．」

「このエリアはフラワーガーデンといって、フロア全体が花だらけなんだ」

47層の転移門から出て真っ先に目に映ったのは一面の花壇だった。

花壇の中央には大きな噴水が有り、きれいな庭園ってかんじだ。

そういえばこの前アスナがキリトと一緒に来るために47層のクエスト情報をクラインから貰ったらしいけど、こりやあ確かに女の子が好きそうなエリアだ。シリカなんか目を輝かせて辺りを眺め続けてるしな。

すごく綺麗な場所だが、現実世界だったらちよつと勘弁して欲しい．．．

「俺花粉症なんだよなー、仮想世界でよかったわ」

「お前雰囲気ぶち壊しだな．．．」

「しかたないだろ、あれ結構辛いんだぞ」

「というか花粉症って、スギとかヒノキとかの木の花粉だから花は関係ないんじゃないか？」

「え？ そうなのか？ あまりに辛いからとりあえず植物のあるところはヤバイのかと思ってた」

「雰囲気壊してるのは2人共だと思えます・・・」

シリカからジト目で睨まれてしまった。

まあ花の綺麗さよりも花粉症がどうのこうのの話をされてたらそりゃあそうなるか。にしてもこの層はホントに・・・

「・・・カップルだらけで居心地が悪い」

「そうか？ 俺は別に気にならないけど」

どうもカップルのキヤツキヤウフフの空気の近くに長時間居るのは苦手だ。嫉妬とかではなくどうしていいのか分から無いっていうのが一番辛い。決して嫉妬とかではなく・・・

「嫉妬とかじゃないんだ・・・」

「クレハもそういうの気にするんだな、少し意外だな」

「当たり前だろ。お前も2年近く1人で店番してみろ、死にたくなるぞ」

「遠慮させてもらう」

「あはははは・・・」

ああ、思い出したらなんか悲しくなってきた。

依頼者のなかにもカップルで店に来る奴もいるし、女性プレイヤーが彼氏の為に何かしたいとか依頼してくることもあるし・・・

というかつい最近アスナがキリト関連で似たような依頼してきたな。よくよく考えたら俺ってキリトがアスナとくつついたら本格的に寂しいやつになるんじゃないか？

お茶の時間もキリトとアスナに気を使いながら過ごすことになるんじゃないか・・・

「・・・うーん」

「クレハさんまたこうなっちゃいましたね」

「ほっといてさっさと行こうか」

「え、あ、はい」

・ ・ ・

俺をおいてさっさと先に進んだ2人に追いつくのに少し時間がかかったが、俺達は思いの丘に向けての道のりをのんびり進んでいた。

正面から来る敵はキリトが一発で倒してくれるし、たまに後ろから敵が来ても、キリト程じゃないが俺がさっさと倒しているから、足が止ることが殆ど無い。これ以上無いほど順調だ。

シリカの顔色はあまりよくないけど・・・

「どうしてマップは綺麗なのに、モンスターはあんなに気持ち悪いですか・・・」
「モンスターだからな、やたらと可愛い花の妖精みたいなのが敵だったら倒しにくいだ

ろ」

「それはそうですけど・・・」

「まあまあ、この調子ならモンスターがシリカに近づくことも無いから安心していいよ」
「あ、ありがとうございます」

シリカはここのモンスターの見た目がダメらしい。3mはありそうな巨大植物が大口開けながら襲ってきたらそりゃあキモイか。女の子なら特にな。

けどキリトの言うとおり、この様子だとシリカがモンスターの襲われることもないだろう。

「きゃあああああああああああああ」

「シリカ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シリカが植物モンスターに捕まって宙吊りにされてしまった。

足元からツルだけ伸ばしてシリカだけを拘束したのか。なるほどー、前と後ろを警戒しててもこれだけは防げないか。

それにしても……

「さすがビーストテイマー。モンスターを使った高度なフラグ回収だな」

「わけが分からないなと言つてないで助けてくださいよおお!!」

「シリカ落ちていて!そいつすごく弱いから!」

「そんなこといわれても気持ち悪いですー!!」

「やれやれ」

シリカのレベルでもソードスキル一発で倒せるぐらいのモンスターなんだが、宙吊りにされたうえに至近距離にモンスターが居るから思いつきりテンパってるな。

落ちていて足に絡まったツタを切つて、そのままソードスキルを発動するのが一番だが、今のシリカにそれを求めるのはさすがに厳しいかな。

とかスカートのまま宙吊りにされてるからさつきから下着が見えるギリツギリだけど大丈夫なのか?

「シリカー!近づいたらパンツ見えちゃうけど助けに行つてもいいのカー!」

「だ、だめです!!見ないで!!見ないで助けてください!!」

「それは無理だな、自分で何とかしてくれ」

「お前は鬼か……」

「じゃあキリトが助けてやればいいだろ。見ないで」

「それは無理だな……けどさすがに何とかしないと」

「いや、これはちよūdい機会だろう。今のシリカは完全にテンパって冷静な判断が出来ない状態だ。そういうときに人の手を借りずに自分の力だけで解決することが出来れば、次からこういうことがあつたとき動けなくなることも無い。今なら俺とキリトもいるから、最悪の事態になることもないしな。ついでに敵も弱い」

「……結構考えてるんだな」

「俺がただ面白いからシリカを助けないとでも思ったのか？」

「……少し」

失礼な奴だな。さすがにそのくらい考えて行動しないと万屋は務まらんぞ。

分らない問題が有った時にその問題の答えじゃなくて解き方を教えておかないとそいつの力にならないだろう。万屋としては依頼者のその後まで考えておかないとな。

シリカも大分落ち着いたみたいだし、そろそろ自力で抜け出すだろう。

「この、いい加減に……しろうー!」

シリカは足元のツルを短剣で切り、落下の勢いを利用してソードスキルを敵に放った。真上から放たれたソードスキルはすべて命中し、敵はポリゴンのかけらとなって砕けていった。

「はあ……はあ……やった……」

「お疲れシリカ、自分だけの力で解決できたじゃないか」

「あ、ありがとうございます」

ちよつとは恨み言を言われるかと思ったが、俺の意図を理解してくれたのか意外とシリカは俺にお礼を言ってくれた。がんばったのはシリカだからお礼をいう必要は全く無いと思うが。

「いい動きだったぞ。今後不意打ちを食らっても、今みたいに冷静に対処すれば問題ない」

「そうだな、シリカはソードスキルへの繋ぎが上手だな。そこを鍛えていくともつと戦

闘が上手くなるんじゃないか？」

「・・・・・・・・・・見てたんですか？」

キリトと2人でシリカの動きをほめたんだが、シリカとしてはそれ以上に見られたかどうか気がなるらしい。というかこれだけ動きのよさとかを褒めたんだからそりゃあ見ていたに決まってる。が、少し涙目で祈るようにこっちを見ているシリカを前にしたら、

「・・・・・・・・・・見てない」

俺とキリトの答えは同じだった。

.....

それから対した障害に見舞われることも無く、俺たちは思い出の丘の最深部らしきところまでたどり着くことが出来た。道の終わりには小さな祭壇のような物が有り、シリカが近づくと、祭壇は急に光を放ち始めた。

何も無かった祭壇から芽が伸びてくると、それは急激に成長し、すぐに白くて綺麗な花となった。

「これが、使い魔蘇生アイテム『ブネウマの花』か」

「これでピナが生き返るんですね！」

「ああ、けどここは強いモンスターも多いから、生き返らせるのは街に帰ってからにしよう」

「はいー！」

無事にピナの蘇生アイテムを手に入れた俺達は、今まで来た道に戻る事になった。

シリカはピナが生き返らせる事が出来るようになり安心したのか、今まで異常の笑顔で町へ向かっていた。

だが俺達2人にはまだやる事が残っている・・・

「もうすぐ転移門ですね、とりあえず35層の宿屋に行きましょう！」

「ああ、それがいいだろう」

「俺も賛成だ。けどその前に……」

「え？」

シリカを制止するとキリトは進行方向に向けて声を投げかける。

「そこで待ち伏せてる奴！でてこいよ！」

すこし間を置いた後、キリトが声を駆けた方向から見覚えのあるプレイヤーが姿を現した。やっぱりというか、想定通りというか、出てきたのはあいつだった。

「ロザリアさん!?!」

「あたしの隠蔽ハイディングを見破るなんて、なかなか高い索敵スキルねえ剣士さん？その様子だと『 pneumaの花』はゲットできたみたいね……」

自分が優位に立っていると思っっているのか、自分の作戦通りにことが進んでいるのに満足しているのか、ロザリアは終止ニヤニヤとした笑いを浮かべながらこつちに近づいてくる。

「それじゃあ、早速それをこつちに渡して頂戴」

「な、なにを言ってるんですか！」

「そうは行かないぜオバサン。いや、オレンジギルド『タイタンズハンド』のリーダーさんって呼んだほうが良いか？」

「へえ……」

そう、俺とキリトは知っている。この女の正体を。

自分たちの利益の為に人を傷付けることを平気で行う集団であるオレンジギルドのリーダーであるこいつの正体を。

「相変わらず口の減らないガキね……。けど、気づいていたのね」

「そんな……。けどロザリアさんはグリーン……」

「簡単な手口だ、グリーンズのプレイヤーがパーティにもぐりこんで、オレンジの待ち伏せするところに誘導するのさ」

「夕べ俺達の話盗み聞きしているのもお前らの仲間だろ？キリトに気づかれて失敗したみたいだけどな」

「じゃあ、この2週間一緒にパーティに居たのは・・・」

「もちろん、獲物を見繕ったのよ。一番の獲物のあんたが抜けたのは残念だけど、使い魔蘇生用のアイテムをとりに行くっていうじゃない？」

俺達をなめているのか、べらべらと自分達の作戦を喋りやがって。どうにもこいつは小物臭さが抜けんな。

「けどそこまで分かっているのか、べらべらと自分達の作戦を喋りやがって。どうにもこいつは小物臭さが抜けんな。」

「いいや、キリトはどうか知らんが、俺の場合は仕事だ。その仕事のひとつとして、俺はお前を探してたんだよ」

「・・・どうということ？」

「おい、俺だって違うぞ」

あれ？そうなのか。てつきり可愛さにやられて俺の店に連れてきたもんだと思って

た。

まあとりあえずそれはおいておこう。

「お前、10日ほど前に『シルバーフラグス』っていうギルドを襲ったな。リーダー以外の4人が殺された」

「……ああ、あの貧乏な連中ね」

「リーダーだった奴は泣きながら俺の店に依頼に来たぞ。仲間を殺した奴らを監獄へ送ってくれてな。……殺してくれとは言わなかった。お前にあいつの気持ちに分かるか？」

「わかんないわよ」

俺の話聞いたロザリアは、あっさりと言つてのけた。

さつきと同じようにニヤニヤと笑いながら俺に対して言い放ちやがった。

「マジになつちやつてバカみたい。ここで人を殺したからつて、そいつが本当に死ぬ証拠なんて無いし。それより自分達の心配でもしてたら？」

パチンつとロザリアが指を鳴らすと後ろに潜んでいたロザリアのギルドメンバーがぞろぞろと出てきた。全部で7人のプレイヤーが現われ、その全員がオレンジプレイヤーだ。

ロザリアと同じようにニヤニヤとした笑いを浮かべているのが見える。

「クレハさん、キリトさん！数が多すぎます！逃げないと！」

「大丈夫だ。俺が転移しろっていうまでは、結晶を持つてそこで見てて」

「おいキリト、俺の依頼だ。相手なら俺が……」

「いや、俺にやらせてくれ。俺だってお前と同じ気持ちなんだ」

「……わかったよ。じゃあ頼んだ」

「おう」

キリトは剣を抜くとゆっくりとオレンジプレイヤーのほうへ近づいていく。あいつ等の笑みとは違う、余裕の笑みのような物を浮かべながら。

「……キリト？」

オレンジプレイヤーの誰かが異変に気がついたのか、キリトの名前を口にした。あれは気づいたかもな。

「黒の装備に盾無しの片手剣……まさか……!？」

「ロザリアさん! あいつ『黒の剣士』のキリトだ! 攻略組でビーターの!」

「攻略組……!？」

ロザリアのほか隣にシリカも驚いている。なんだ、キリトの奴言ってなかったのか。

あれ? というか俺シリカにちゃんと自己紹介したっけ? もしかしたらシリカは俺のこと知らないのかもしれない……

「攻略組がこんなところに居るわけじゃないじゃない! いいからさっさと身包み剥いじまいな!!」

「そ、そうだよな。それにたとえ本物でもこの人数相手に勝てるわけねえんだ!!」

「おっしややつちまえええええ!!」

ロザリアの言葉で立て直したのか、うろたえていたオレンジプレイヤーが叫びながらキリトの方に向かっていく。

とうかあいつらMMOやったこと無いのか？本物でも人数でごり押せるって無理に決まってるだろうに。

7人からの攻撃のラッシュをキリトは防ぐこともせずただ素直に食らっている。ソードスキルのエフェクト音やプレイヤーの気合の声のなか、キリトは涼しい顔で立っている。

あいつ結構性格悪いことするな……

「クレハさん！助けないと……キリトさんが！」

「え？ああ、大丈夫だろ。ほら、キリトのHPを見てみるよ」

「HP……？あれ？これって……」

散々攻撃を受けているはずなのに、桐とのHPは一向に減る気配が無い。いや、厳密には少しずつ減っているのだが、すぐに満タンまで回復している。

「クレハさん、これは一体……」

「そろそろキリトが説明してくれるよ。オレンジギルドのプレイヤー達に向けてだけだな」

俺が予想したとおり、攻撃を続けて疲れ果てたオレンジプレイヤー達が攻撃しても減らないキリトのHPにシリカと同じ疑問を抱いていた。

「くそ……なんなんだよこいつ……」

「HPが全然へらねえじゃねえか……!」

「あんたら何やってんだ!! さっさと殺しちまいな!!」

痺れを切らしたロザリアの怒号が飛ぶが、そいつらがキリトを殺すのは不可能だ。どれだけ時間をかけてもな。

「10秒当たり400ってどこか、それがあんた達7人が俺に与えることが出来るダメージの総数だ」

「ぐ……」

「俺のレベルは78。HP14500。バトルヒーリングスキルでHPは10秒に600回復する。あんた達じゃ、一生かけても俺を殺すことは出来ないよ」

「なんだよそれ・・・むちやくちやねえか・・・」

そりやあそうだろう、そんなのレベル制MMOに書いて回る弊害みたいなものだ。逆を言えば、レベルさえ上げれば誰でもその強さになれるってことだけどな。

もつとも、PKなんかで金を稼いでるような奴らには無理な話かもしれないが。

「ああ、たかが数字が上がるだけで無茶な差がつく。これがレベル制MMOの理不尽さなんだ!!」

「・・・クソ!!つだったら!!」

キリトの言葉を聞いたオレンジプレイヤーが俺とシリカのほうに向かってきた。

一人が突っ込むと、それに合わせて4人のプレイヤーがそれに続き、合計5人のプレイヤーが俺達に襲い掛かってきた。

なるほど。レベルで無茶な差がつくなら、その差が少なそう俺とシリカを狙おうって訳か。シリカを人質に取ればキリトも手を引かざるをえないだろうからな。

なかなか賢い選択だ……けど、MMOにはレベル以外にも差がつく点がある。

「クレハさん！」

「シリカ、下がってな。さすがにちよつと危ないから」

「この人数相手に1人で挑むってのか!? なめてんじやねえぞ!!」

「なめちやいないさ、だから俺もこうして剣ホシキと鞘を出してるわけだし……な！」

叫びながら切りかかってきたオレンジプレイヤーを鞘でいなしながら転倒させる。オレンジプレイヤーだから攻撃しても問題は無いんだが、さすがにきりつけるのはマズイだろう。

「な……なんだこいつ……」

「訳わかんない動きしやがって……」

「失礼な奴だな。攻撃を受け流して隙を作って、そこを叩くなんてのは戦闘の基本だろうに」

「いや、それを5人同時にするのはさすがにおかしいだろ……」

遠目で見ていたキリトに言われてしまったが、バトルヒーリングスキルだけで死なないような奴には言われたくない。

「剣と鞘で……攻撃を受け流して……こいつまさか、『剣影』のクレハか!？」
「あのβテスター最強の……!?嘘だろ……」

おお、大きさに広まった名前も意外と使えるもんだな。雑魚を牽制するのにはもってこいだ。正直この戦い方は長くもたないからそろそろやめてもらいたいってのが本音だし、ハツタリかまして諦めてもらうか。

「MMOの理不尽さはレベルだけじゃない。圧倒的なプレイヤースキルの差にはレベル差すら無意味になる。PKなんかして強くなった気であるガキ負けるほど、俺は弱いつもりは無いぜ」

「くそ……!」

逃げようとしても後ろにはキリトが居るし、シリカを人質にしたくても俺が居る。詰

みってやつだ。

そろそろ仕上げに取り掛かろう。

「これは俺の依頼人が全財産はたいて買った回廊結晶だ。監獄エリアを出口に設定してある。全員おとなしくしてもらおうか」

「グ、グリーンのあたしを傷付けたら、あんたがオレンジに……」

その言葉を聞き終える前に、俺はロザリアに急接近し、刀を首元に突きつける。

「俺は仕事柄知り合いが多いもんでね、カルマ回復イベントなんか一日あれば終わらせることが出来る。そうだな……せつかくだから試してみるか？」

「な……なにを……」

「この世界で死んでも現実で死ぬかどうかは分からないって言ったのは自分だろ？……じゃあお前自身で確かめてみな……」

「そ、そんなこと……あんたに出来るわけが……」

ロザリアは口では強気だが明らかに狼狽しているのがわかる。俺に出来るわけが無いと思っている反面、本当に殺されるかもしれないという恐怖が残っているのだろう。ならやってみせよう。

俺の刀が青色のライトエフェクトをまとい始める。

ロザリアは目を見開いて口を開け、俺が自分に何をしようとしているのかを悟ったらしい。

刀スキル『浮船』

下から敵を切り上げるような刀スキルの一撃がロザリアに向かって放たれ……

パリイン!!というポリゴンの碎ける音が響いた。

「あ……あああ……」

俺のソードスキルはロザリアの顔ギリギリをかすめ、手に持っていた黒い槍を破壊した。

間近で死の恐怖を味わったロザリアはひざから崩れ落ち、放心状態になっている。

「まあお前の言うとおり、俺に人を殺す度胸なんてなかったみたいだな。このゲームで死んだ後どうなるかは、俺の関係ないところで勝手に調べてくれ」

俺の声が聞こえているのか聞こえていないのか分からないが、ロザリアはその場から動くことなく膝たちのまま震えている。

．．．．．ちよつとやりすぎたかな。

．．．

無事に『タイタンズハンド』の全員を監獄エリアへ送った俺達は、『シルバーフラグス』のリーダーへの依頼完了の報告を済ませ、もう一度35層の宿屋へ戻ってきていた。

「しかし心臓に悪いな。本当に殺すのかと思ったぞ」

「さすがにそんなことはしない。けど、ちよつと位お灸をすえておかないと、俺の気が治まらなかつただけだ」

「あの．．．クレハさんは別の人の依頼で、ロザリアさんを探してたんですね？」

「ああ。そういえば、まだそのことをシリカに謝ってなかった」

結果はどうあれ、俺はシリカを餌にしてロザリアを釣ったことになる。怖い思いもさせってしまっただろうしな。

「すまなかった。シリカを餌にするようなことをしてしまつて、恨まれても仕方ないことをした」

「いいえ。クレハさんは私の依頼もきちんと受けてくれました。それに道中もわたしのことを考えていろいろとしてくれましたし、恨むなんてとんでもないですよ」

「……そうか、ありがとう。けどこの埋め合わせはどこかで必ずしよう」

もつとなにか言われても仕方が無いと思つたんだが、シリカは俺を攻めるつもりは無いらしい。前から思っていたが、まだ小さいのにずいぶんと人間が出来ている。

「俺もすまない。攻略組のことだまつていて。怖がられると思つたんだ」

「そんなことないです。キリトさんはやさしい人だから、怖がったりしません」

「……ありがとう」

「やつぱり、行っちゃうんですか？」

「ああ、前線からずいぶん離れちゃったからな。早く戻らないと」

「こ、攻略組なんてすごいですね！わたしじゃ何年かかっても成れそうにないですよ……」

なんだか寂しい空気が部屋に広がっている。というか主に2人の間だけだ。

俺やつぱり邪魔かな？ここは空気を読んでそつと部屋から出るべきなのか？

「ゲームの中の強さなんて幻想に過ぎない。それよりもっと大事な物をシリカは持つてるよ」

「キリトさん……」

「次は現実世界で会おう。そうしたらきつとまた友達になれるよ」

「は、はい！」

すこし沈みがちだったシリカの顔が前向きな物へと変わっていった。キリトもなかなかいいことを言う。けど2人の空間を作られると俺はどうしていいかわからんからやめてくれ。

「ん？どうしたクレハ？」

「クレハさん？」

「……なんでもない」

思えば今回の依頼の最中ずっとこんな感じだった気がするな。シリカは明らかにキリトに気があるし、キリトは自覚なしにときめき台詞を乱用するし。アスナが居たら抜群の修羅場になりかねん。みんな仲良くが一番だ。

「まあ、現実世界で友達になるのもいいが、この世界で新しい友達を作るのもいいだろう。今度また俺の店にコーヒー飲みに来るといい。騒がしいが気のいい奴らが集まっているから、シリカもすぐに仲良くなれるさ」

「分かりました！絶対に行きますね！」

「それじゃあ、まずは君の大切な友達を生き返らせてあげよう。クレハの店に来る時は、そのこも一緒だ」

「はいー！」

初めて会った時の無理をしたような笑顔ではない、心の底からの笑顔で、シリカは『プネウマの花』と『ピナの心』を取り出した。

花の蜜が青い羽に触れると、綺麗な光があふれ出し、凛々しい竜の鳴き声が聞こえてきた。

・ ・ ・

アインクラッド48層 万屋『秋風』

俺、キリト、クライン、アスナ、リズ、アルゴ。

いつものメンバーは新たに1人のプレイヤーが参加したことで、いつも異常ににぎやかに騒いでいる。

「シリカちゃん！ちよつとピナを抱かせてもらつていいかな？」

「あ！アスナ、次はあたしだからね！」

「ビーストテイマーの話を聞けるなんて滅多に無いからナ、今のうちに情報を集めたいところだ」

「あ、あの……えつと……」

約束どおり、ピナと一緒に俺の店に来たシリカは、年上の女性陣に囲まれてあたふたしていた。

それなのに知名度の高い面子が集まっているからな。中層プレイヤーのシリカとしてはかなり緊張することだろう。

「シリカちゃん……かわいいなーおい……」

「クライン、さすがにシリカに手を出すのはちよつと……」

「うるせえ！だいたいなんでキリトの周りにはこう女の子が集まるんだ！」

「いやいや……この店はクレハの店なんだから、俺の周りじゃなくてクレハの周りだろ？」

「けどアスナとシリカを連れてきたのはキリトだろ？それまではアルゴとリズしか女の

知り合い居なかったし。そもそもキリトはその2人ともはじめから知り合いだっただろ」

「そ、それはそうだけど・・・」

「だあああああおもしろくねえ！クレハ！もう一杯！」

「俺のコーヒーをビールみたいに言うな」

いつものように騒いではしゃいで、この様子を見てみると、やっと日常に戻ったんだと安心できる気がする。

キリトがシリカに言ったとおり、現実世界でもこの関係はつづくんだろうか？
できれば、現実世界でも今と同じようにいたいものだ。

キッチリしたお店へ

万屋「秋風」を開いてからずいぶん時間が経ったが、振り返ってみると色々なことがあった。

リズと知り合って俺の店に入り浸るようになって、アルゴと以前以上に情報交換をするようになった。

リズからアスナを紹介されて、そのままキリトと再会して、俺がずっと抱えてきた不安が解消される事件が起こって死にかけるし、そのまま『ケンエイ剣影』なんて通り名も広められた。

その後事件の関係者のクラインと知り合って、今度は別の依頼でシリカと知り合ってオレンジギルドとやり合って……

本当に色々な事が起こったな。

昔みたいに暇で気ままな生活からかなり生活が変わったし、俺を信頼してくれるプレイヤーも増えてくれた。

そんな色々なことが起こって、俺はこう思う。

「今日は一切働かねえ」

「はあ？」

今日は定休日らしく、一足先に俺の店に来ていたリズが呆れている。

何を言っているんだと言いたげな目で俺を見ているが、そんな物は関係ない。

忙しすぎるんだよ最近！なんなんだよここ最近の密度の濃い生活は！

知り合が増えるたびに何かしらの問題が起こつてるじゃないか！

しかも名前が売れたことで依頼人も増えたから、最近は殆ど自分の生活を投げ捨てて

働いてた。そろそろ何とかしないと過労死するわ……

「というわけで今日は俺も店を休む」

「まあ気持ちは分かるけどね、それはあんたに問題が有ると思うわ」

「は？」

「あんたがテキストに店の経営してるからでしょ。定休日なしで従業員一人なんて自分から死に行ってるじゃない」

「う……だつて昔は一日に3人来ればいいほうだったし……」

「忙しくなり始めた段階で予定組みなおしなさいよ」

「めんどくさかった」

「あんたドンだけマイペースなのよ……」

マイペースというか、やらなくても大丈夫だと思つたんだよな。

店を開きたい！つていう漠然とした考えから店を作つたし。

「最初はまあ何とかなるかなーと思つてたんだよ」

「何とかならなかったのね」

「ならなかったな」

シリカの依頼を受けたあたりは少しづつ落ち着いてたから大丈夫かと思つたが、攻略が進んだりするとどうしても依頼が増える。

忙しい時期とそうで無い時期の波が激しすぎてどうしようもなくなつたから、そろそろ店の定休日なりスケジュールなりを決めないといけなくなつた。

どうか定休日なんて作つていいのか？俺の仕事内容的には困つたことがあつたら来るつて感じだから、その日に店が開いてなかつたら客足に影響が出そうだが。

「確かに鍛冶屋みたいに予定が組みやすい仕事じゃないわね、一つの仕事にどれくらい時間が掛かるか分から無いし」

「そうなんだよなー。クエストに同行するとなると、物によつては半日拘束されることもあるし」

「そういえば、あんたの店つて報酬どうなつてるの？」

「どうなつてるつて？」

「だから、あんたはどういう基準で報酬を貰つてるのよ。仕事内容とか拘束時間とかあるでしょ？」

「その場で俺がテキストに決めてる」

「あんたね……」

報酬はその仕事を始める前に俺がテキストに決めてる。この程度に情報だったら1000コル位かなーとか、この情報ならこれぐらいは貰わないと割に合わない。とかそんな感じだ。

「本当によく今までやって来れたわね……」

「SAOだからな、他の収入源もあるし」

「それでもずぼら過ぎよ」

「まあそのしわ寄せが来てるから、今日を無理やり休みにすることになった訳だけだな」

「まったく。じゃあ今日のうちにすませましょう」

「ん？何をだ？」

「決まってるでしょ？」

そういうとリズは胸を張って誇らしそうな顔をした。

長い付き合い。とっていいか分からないが、経験上リズがこういう顔をしたときは

大抵俺にとって面倒なことが起こるんだよなあ……

「あんたの店をちゃんとした店にするわよ！」

ほらな……

・ ・ ・

リズの言う『ちゃんとした店』っていうのは、今まで俺がテキトーにしてきた店の経営をしっかりと決めて、無理の無い運営をしていけるようにするってことらしい。

確かにちゃんとしてる。けどちゃんとするのって面倒なんだよなー……。

「………本当にやるのか？」

「逆に今までやってなかったのがおかしいのよ」

「そういうもんなのか？」

「あんたは人の為に動く時は全然手を抜かないのに、自分のことになると手を抜きすぎよ。もつと自分の周りのことにも気を回しなさい！」

「お前は俺の母親か」

俺の性格をバツチリ言い当てられて正直ちよつと戸惑った。自分の事となると途端に手を抜くっていうのは、現実世界でも散々いわれてきてた事だったし、マイナス思考と合わさって友達からは『面倒身のいい面倒な奴』っていわれてた。

その点リズは『面倒見のいいしつかり者』だな。さばさばして小言も言うけど、結局は皆のことを考えてるし、母親っていうかどちらかという委員長みたいな奴だな。

「………というか、『仕事をしない！』って言ったのに結局仕事の話をする事になるのか。」

「いいからやるの！まずはスケジュールの変更よ、週に2日位の定休日を作りなさい」

「作りなさいって言われてもな．．．どういう基準で作れば良いんだ？」

「あたしは一週間の中でお客が少なかった2日間を休みにしてるわね。クレハの店のお客の少ない日を考えれば．．．」

「それは無理だな」

「．．．．．なんでよ」

「客が多い日が不規則すぎる。定期的な流れで依頼が来る物じゃないからな」

「まったく面倒な店ねー」

「ほっとけ」

さつきも言ったが、新しい層が開放されたり、クエストが発見されると俺の店が忙しくなる。けどそんな物は何かの法則性があるって起こるものじゃない。

そのせいで、俺の店のスケジュールは組みにくくなる訳だ。

「仕方ないわね．．．．．じゃ、じゃああたしの店と同じ日にしなさい」

「なんでだよ、同じ層で2つの店が定休日だったらまずいんじゃないか？」

「だ、大丈夫よ！仕事内容が全然違うし問題ないはずよ」

「．．．まあそれもそうか。無理にでも休みを入れるしかないし、リズと一緒に休みにし

とくか」

「そうね、そうしなさい！．．．．．色々誘いやすいし」

「なんだ？」

「なんでもないわよ！！次の問題に移るわよ！！」

「何怒ってんだよ．．．．」

「怒ってない！！」

「じゃあ声がでかいぞ」

．．．

その後俺達は店のシステムをどんどん話し合い、問題のあるところを変えてつた。というより、今のシステムを俺が話す⇒リスが呆れる⇒リスが新しい方法に変える。の繰り返しだった。俺なにもして無い。

「最後は報酬の問題よね」

「ああ、これに関してはどうしていいかわからんから今のシステムになってる」

「たしかに難しいところよね」

万屋の報酬は、武器屋や防具屋と違ってものを売っているわけじゃないから、値段の設定が難しい。そういう話だと情報屋は万屋と近いかもしれないが、情報屋と違って俺の場合は結果を出すまでにどれくらい時間が掛かるかわからないってのがある。

情報屋は情報を専門としているから、『この情報を集めるにはこれくらい時間が掛かる』とか『その情報は集めるのはほぼ不可能』ってというのが依頼を聞くだけで大体は把握できる。

けど俺の場合、それはやって見ないとわからないのが現状だ。

クエストの助っ人が依頼だったとしても、入るパーティによつてどれくらい苦戦するかが分からない。『今パーティでは30分で終わつても、次のパーティでは1時間掛かるかもしれない』って感じだ。

「本当に面倒な商売を始めたものね……」

「俺もこんな問題が起こるなんて思ってたよ」

「けどさすがに今のままって訳にもいかないでしょ」

「それはそうなんだが……」

「なんかいい案はないかしらねー」

「そうだなー」

2人してうーんと頭をひねっているが、一向にいい案なんて浮かんでこない。

だいたい年齢的に俺もリズも学生だ。報酬の話に限らないが、こういう話はリアルで商売をしていた奴のほうが有利だろう。

となると……

「しかたない。詳しい奴に聞かか」

「詳しい奴？アルゴのこと？」

「いや、アルゴも俺と同じ特殊な仕事だが、情報屋のセオリーはまかり通らないだろう。だから色んなところに手を出してる奴に聞く」

「そんな人居た？」

「エギルだよ。商売に関しちや、あいつの右に出る奴は居ない」

「なるほど。確かにエギルならそういうの詳しそうね、商売上手だし」

「そういうことだ。まあ忙しいだろうからメッセージだけでやり取りするか」

俺がエギルにメッセージを送ろうとウインドウを開くと、何かを思いついたようにリズが口を開いた。

「・・・・・・・・ねえクレハ」

「なんだ」

「最初からエギルに聞いてれば、今までの話全部解決してたんじゃないの?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

返す言葉が無かった。

エギルに報酬に関する質問をしたが、やはり商売人ならではの提案をしてくれた。

俺達2人は全く思いつかなかった内容だった。エギルのメッセージに「なるほど」と感心したメッセージを返すと「普通は一番最初に思いつく」とか「今までどうやって商売してたんだ」とか散々言われてしまった。

しまいには「今度行くから経営方針の見直しをさせろ」とまで言われてしまった。あいつなら本気でやりかねんな。

「エギルの出した案は『前金』ね」

「そうだな」

「……………私達どうして思いつかなかったのかしら」

「……………そうだな」

エギルからの提案は、依頼を実行する前に『固定の依頼料』を貰い、成功報酬として

『依頼内容にあった依頼料』を貰う。という物だった。

これなら収入に大きな差が出ることも無いし、依頼報酬の不安定性の問題も今よりかなり安定する。依頼の前に成功報酬の話を済ませておけば、客との間に問題が起こることも無いからな。

それにしても全く、どうして今まで考え付かなかったんだらうか。

「答えを聞いた後だと、それ以外に考えられないから不思議だな」

「本当にそうよね、悩んでたのかバカらしくなるわね」

「無駄な時間をすごした気がする」

「まったくね」

結局俺の休日の半分以上を使って考えた俺達の経営方針は、実際に商売をしているやつからしたら当たり前のこと、もしくはは出来の悪い物だったらしい。

最初からエギルに聞いていたら1時間も掛からずすべての問題は解決していただろう。

けど、そうしていたら今日のこの時間は無かったわけで。

「リズと2人だけで話すつても、久しぶりだったな」

「そうね、最近は皆が居るのが当たり前になってるし」

「1人で居たのが、ずいぶん前のことみたいに感じる」

「……そうね」

なんだかしんみりとした気持ちになる。人が増えて喜ばしいことではあるが、今までの日常が変わったことを実感すると、それがどうあれなんだか寂しい気持ちが襲ってくる。

リズも俺の気持ちを感じ取ったのか、こころなしか寂しそうな顔をしている。

少しの沈黙の中、リズがゆっくり口とを開いた。

「ねえクレハ……た、たまには、こんな風に話さない？……その……2人で」

リズは俺のほうを向かず、窓の外を見ている。いつの間にこんな時間になったのか、窓から刺し込む夕焼けの光りでリズの表情は読めないが、きつと俺と同じようになると

もいえない表情をしていることだろう。

「ああ、たまにはな。昔の日常を感じるってのもいいもんだ」

「……はあ、そうよね。あんたはそういう奴だったわ。こっちは気合入れて話したつてのに気付きもしないんだから」

リズはため息をついて、拗ねたように机に突っ伏してしまった。

俺の返しが気に入らなかつたのか？けどリズから言い出したことだしな。今日みたいな話じゃなくてもっと身になる話があったとかか？

「うーん？」

「いいわよ、あんたがどんだけ考えても分かるわけないから」

「そうなのか？」

「ああ、あとはキリトも分からなそうね。似た物同士だし、アスナも苦労してるわ」

「よくわからんが、まあいいか。そろそろそのキリトとアスナが来るぞ、後アルゴもな。」

「コーヒーの準備するから手伝えー」

「はいはい、わかったわよ」

昔の日常も確かにいい物だった。けど、今の日常が昔になった時、いい思い出になるようにすることも大事なことだ。って事を、俺は最近知った。

黒の剣士との日常

「この店は落ち着くな．．．」

「そりゃどうも」

以前リズと決めた定休日の昼過ぎ、珍しくキリトが1人で店を訪ねてきたかと思えば第一声がこれだ。

だらりと腕を伸ばしてソファに体を預けている様子から、かなり疲れているのが伺える。

圏内にいるところばかり見ているから忘れがちだが、こいつもれつきとした攻略組のプレイヤーだ。さすがにフィールドに出ずっぱりだと精神的に持たないだろう。

童顔のせいで実年齢はつきりとは分からないが、俺より年下なのは確かだろう。そんなやつが常に死となり合わせのフィールドに居たらさぞしんどいことだろう。

「けど俺の店は休憩所じゃないぞ」

「もうちょっと居させてくれ。宿屋は生活感がなさ過ぎて逆にリラックスが出来ないん

だ」

「はいはい。というかお前、いまだに宿屋に泊まってるのか？」

「まあな。マイホームを買うコルなんて無いし」

「はあ？前線で1日中戦ってたら家を買う金貯めるのもそこまで時間はかからないだろ」

「……………いろいろ出費があるんだよ」

思いつきり目が泳いでるな。この様子だと絶対に必要ないものにまで金を使ってるな。使い道の分からないレアアイテムとか、装備しない種類の武器なものに見た目とかレア度とかで衝動買いしたりだろうな。

シリカと冒険した時もなんか似た様な事言ってたし、こいつ貯金できないタイプだな。

「さすがの万屋も金貸しはやって無いからな。ちゃんと考えて使えよ」

「うぐ……………分かつてはいるんだけどな」

「まあ家を買うとなると、本気で金を貯めることだけに専念したら数週間で終わるだろう。なるべく早くいい家見つけろよ」

「善処するよ。そういえばクレハの家はどの位したんだ？ しつかりした作りだし、かなり広めだし、結構したんじゃないか？」

「ん？ ああ、内装とか全部含めて450万コルくらいだったかな」

「450万……」

「リズの店のもつと高いはずだぞ。水車付きな上に武具屋だからな」

「どこからそんな金が出るんだ」

「真面目に貯めてりや貯まる。リズの場合は知り合いから借りたりしたみたいだけど、その返済もさっさと済ませてたぞ」

「……貯金しようかな」

話をしていたら家が欲しくなったのか、キリトも貯金を考え始めたらしい。

多分長続きしないだろうけど、一応応援はしておこう。キリトが家を持つたら多分アスナあたりが押しかけていきそうだけど、俺の店で猛アタックされるよりはましだ。必死にアピールしているアスナに全く気が付かないキリトを見てるとなんか悲しくなってくるしな。

「金が欲しいなら持つてるアイテムを売っぱらって見るんだな。450万なんてあつと

「う間だぞ」

「その時になつたらそうするかもしれない」

「いい刀が有つたら俺に売ってくれよ。今の刀よりいい性能なら買ってやる」

「そういえばクレハの刀ってどんな刀なんだ？ 魔剣レベルか？」

「そんなわけ無いだろうが。普通にリズに作ってもらつた刀だよ」

俺の刀は結構前にリズに作ってもらつた物だ。キリトの剣ほど高性能って訳じゃないが、中々使いやすくて気に入っている。濃い目の青色の鞘と黒い柄の色合いが、刀のずっしりとした重みを表わしている。

鞘の部分まで鉄で出来ているから、俺の戦い方とも相性がいいしな。

「その刀ってずいぶんと重そうだよな。よくあんなに振り回せるな」

「お前が言うな。お前の片手剣なんて軽めの大剣と変わらんだろうが」

「いいだろ。重いほうが好きなんだから」

「まあ気持ちは分かるが、残念ながら俺の刀は見た目ほど重くは無いぞ」

「そうなのか？ 鞘まで鉄製なのに意外だな」

「まあな。けど、鉄製だから耐久値はめちやくちや高いぞ。普通の刀の2.5倍は有る」

「2.5倍!?なんでそんなに・・・」

「そういう素材を集めて作ってもらったからな。耐久値が欲しかったんだよ」

リズに刀のオーダーメイドを頼んだ時に、俺はひたすら耐久地だけを求めて素材の提供をした。やたら硬いメタルなゴーレムやらクリスタル製のドラゴンをちまちま一人で倒すのはさすがにしんどかった。戦いが厳しかった訳ではなく全然減らない敵のHPを見続けるのが精神的にきつかった。この戦いは終わらないんじゃないかと何度思ったことか。

「確かにすごい耐久値だけど・・・なんで耐久値なんだ?」

「なんで?」

「いや。普通武器に求める性能って攻撃力だろ? 確かに耐久値も重要だけど、それを一番に考えるってのはおかしくないか?」

刀を作るときにリズに全く同じことをいわれた気がする。俺がメタル系のインゴットとクリスタル製のインゴットを大量に持つて行った時には、『こんなの加工しきるのに丸一日掛かるじゃない!』ってすごく嫌そうな顔もされた。作り始めてから完成まで

本当に丸一日掛かったときはさすがに申し訳なかったな。

確かに普通は武器といえは攻撃力だが、俺の場合はちよつと違う。他の奴らと決定的に違うところがあるからな。

「普通の奴なら攻撃力だろうけど、俺の場合は耐久値が無いとやってられないからな。戦い方的に」

「戦い方？ ホンキで戦うときの話か？」

「ああそうだ。敵の攻撃を鞘で受け流して戦ってるが、鞘だつて武器の一部だからな。攻撃なり防御なりすると耐久値が減るんだよ」

「へーそうなのか。鞘を攻撃されることなんか無いから知らなかったな。」

「普通にしてたらまず無いからな。けど俺の場合は耐久値は必須なんだよ。他の奴らの2倍耐久値が減っていくんだから」

「……あの戦い方つて結構デメリットが多いんだな」

俺達は特に何か目的があるわけでもなく話し続けていたが、気がつけば窓の外はずいぶん暗くなっていた。

腹も減ってきたし、ずいぶんと長い間は無しふけていたみたいだ。コーヒー何杯のんだか覚えて無いくらいだ。

「さすがに長居しすぎたな。そろそろ帰るよ」

「もうこんな時間か、早いもんだ」

「貴重な休日を潰しちやって悪いな」

「ホントだよ」

「そこは否定してくれよ！」

やつぱりこいつをからかうのは楽しいな。リアクションが大きいし早いし、根が真面目だから皆で居ても場を乱すことも無い。なんだかんだ、リアルでも友達がちゃんと居

て楽しい生活を送れるような奴なのかもしれない。

それなのにこいつは、いまだにソロでこのデスゲームの最前線に立っている。ソロは利益も多いが常に危険が付きまとう。

「なあ、キリト」

「なんだ？」

「そろそろギルドとかには入らないのか？」

ビーターの汚名を背負ったキリトだが、今の層まで上ってこれたのはこいつの業績が大きいってことぐらい他のプレイヤーも分かっているはずだ。もつといえ、最初からこいつがβテスターへのヘイトを全部請け負った事に気づいてる奴もいる。そろそろソロを辞めてもいい頃だ。

「……………今はまだ、無理かな」

「……………そうか」

「悪いな、クレハの言いたい事も分かるんだ。心配してくれてるんだろ？」

「……………どうだかな」

まったく、こいつのこういう勤はやたら当たるからたちが悪い。俺の考えてる事に関してはどうしてこんなに勤が働くんだろうか。

それはともかく、こいつの言い方だとソロを辞めない理由は他にもあるらしい。ビーターの汚名が有るからという理由じゃなく、何かこいつの精神的な問題が有る用に聞こえる。

できることならそれも何とかしてやりたいが、それをやるには俺じゃあ役者不足だ。それが出来るのはもっとこいつの近くにいて、こいつの生きる糧にもなれるような人間だろう。一人心当たりがあるが、そいつの気持ちに気がつくのはまだまだ先だろうな。

今の俺に出来ることといえば、ほんの少し背中をしてやることくらいだ。

「キリト。お節介だろうが一つ言っておく」

「なんだ？」

「今後アスナからパーティに誘われたときはなるべく断るなよ。今のお前を救ってくれるのは多分あいつだからな」

「ん？確かにアスナぐらい強かったら俺を助けてくれるだろうけど、なんでわざわざそんな事言うんだ？」

「……言っただろ、ただのお節介だ。納得できなくても従つとけ」
「んー。まあ、分かったよ」

お前を救ってくれるのはアスナだ。間違いない。

そしてアスナを救うのもお前だろう。

具体的な根拠があるわけじゃない。アスナの恋心だつて、思春期を過ぎれば思い出なくなるような一時的なものなのかもしれない。

けどどうしてだろう。キリトとアスナの2人が別々の道を進むのが想像できないのは。

「クレハ？どうした？」

「なんでもないよ。ほら、そろそろ帰るんだろ。話の続きはまた明日だ」

「あ、ああそうだったな。それじゃあまた明日来るよ」

「あいよ。じゃあな」

静かに扉を開けて出て行くキリトを見送った後、俺はソファへ座り込んだ。

どうして根拠も確信も無いのになぜあの2人が助け合うと確信しているのだろうか？

すこし考えてみたが、これ以外の理由が浮かばなかった。

「俺がそうあってほしいと思っっているからかな」

ずいぶんと自己中心的な答えだと自分でも呆れるが、不思議と悪い気はしない。

いつも無駄にお節介を働いているんだ。これくらいのがままは許してもらおう。

鼠との日常

俺がキリト達と行動を共にするようになってから数ヶ月がたち、アインクラッドの攻略は着実に進んでいった。

現在の最前線は74層。攻略は順調に進んでいるようで、数日後にはこの層を突破することも可能という情報も入ってきている。

順調といっても攻略のペースが早まっているわけじゃない。むしろペースは遅くなっているが、これは仕方が無いことだろう。ゲームの難易度が上がっただけでなく、皆この世界での生活に順応している。

それが良い事なのかは分からないが、これは遊びではないがゲームだ。きっと悪い事ばかりでは無いだろう。

・ ・ ・

「とりあえず、今回入った情報はこんなとこだな」

「なるほどナ。やっぱりあのクエストは大量討伐系だったカ」

「村人を守りながらモンスターを全滅させるタイプだ。難易度はそこまで高くないが、無理だと思つたらクエストを棄てて逃げた方がいいだろうな」

「そうなるよパーティの状況判断が大事になってくるナ。パーティリーダーが引き際を決めるようにしておくように書いとくヨ」

「そうしたほうがいいな。無理に進めたら全滅もありえる」

俺は前回受けたクエストの依頼の情報をアルゴに提供しつつ、『アルゴの攻略本』の執筆をしているアルゴの手伝いをしていた。

今回の攻略本は74層の討伐系クエスト特集らしく、アルゴは俺が受けたクエストの情報を片っ端からメモ帳に書きなぐっている。

俺がアルゴの攻略本執筆を手伝うのは何回目だ？たしか店を開く前から手伝ってるから30層以上も手伝ってるのか。そう考えるとすごいな、俺がじゃなくて殆ど一人で攻略本を書き続けているアルゴがだけど。

「今回の攻略本はこんなところかな。助かったよクー坊」

「いつもの事だろ、それに今の俺が出来るのはこのぐらいだろうしな」

「謙遜するなヨ、最近のクー坊はずいぶん活躍してるみたいじゃないか」

「どこがだよ。俺は来た依頼をこなしてるだけだぞ」

「オレンジプレイヤーを監獄送りにする依頼とかナ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

こいつなんで知ってやがる・・・・・・・・

アルゴが言っているのは多分シリカの件だろう。あれから結構な時間が経ったし、アルゴからその話を追求される事も無かったから知らないもんだと思っていたが、こいつの情報収集能力を甘く見てたな。

別に知られて困るような事じゃないし、アルゴが言ってる事は間違いじゃないが、その言い方は明らかに誤解を招くだろ。俺が嬉々としてオレンジプレイヤーを監獄にぶち込んでるみたいじゃないか。

「流石は剣影様。これでまた人気もうなぎのぼりだな」

「うるせえよ。そもそもあんなに騒がれたのだから一時的な物だっただろうが」

「イヤイヤものすごい勢いじゃないカ」

「何がだ？」

「クー坊のファンクラブの会員がとうとう500人超えたらしいじゃないカ」

「はあ!? 何だそのわけわからんクラブは!? 初耳だぞ!!」

「そりゃあ言つてなかったからナ、小さいうちに知らせたら潰されそうだしナ」

「当たり前だろうが。というか500人って明らかに男プレイヤーのほうが多いだろ」

「まあファンクラブだしナ。『男気に惚れた!』みたいな男プレイヤーも多いみたいダ」

「なんだよそれ……」

ほんとになんて物を作ってやがる。というか誰だよそんなもの作った奴は。

いや、もちろん気持ちはありがたい。何を勘違いしてるか分からないが俺の事を少なからず好いていてくれる事は素直にありがたい。

けど恥ずかしい。純粹に恥ずかしい。

何だよファンクラブって。そんなの漫画やアニメの中でしかありえない都市伝説だと思つてたわ。いや、これもゲームの中だからそのファンタジーの世界と変わらないのか？

いやいや漫画アニメと違って俺はリアルに生きてる人間なんだからそうでも無いし、

テレビに出てるアイドルとかと同じ扱いか？うわあそれ余計に恥ずかしいな……

「むう……」

「なんともいえない顔してるナ」

「ほっとけ。この気持ちを知りたいなら、ためしにアルゴファンクラブでも結成してやろうか」

「ニヤハハ！遠慮しとくヨ。オレッチの場合そこまで人は増えないだろうしナ」

「いや、割と集まると思うぞ。情報屋の仕事を抜いても結構人気あるからなお前」

「エエ!? 何だそれ!? はじめて聞いたゾ!」

「初めて言ったからな」

こいつも何だかんだ言つて数少ない女性プレイヤーだ。しかも種類は違うがアスナと同じ位の有名人なうえに、いつもフードをかぶって素顔を晒さないのに顔は美少女の部類だ。そりゃあ人気も出るだろう。

といつてもみんな隠れファンみたいな物だからアスナのファンほどおおっぴらに公言して無いみたいだけど。

「というかお前が知らないなんて珍しいな。お得意の情報収集はどうした」

「うう……わざわざ自分の人気なんて調べるやつい無いだ口」

「ああそりやそうだ。現に俺も知らなかったしな」

「………というかクー坊」

「何だ？」

「……えつとナ。クー坊は何でオレッツチの人気的事なんか知ってたんだ？」

アルゴは照れているのか聞きづらいのか、少し歯切れが悪くうつぶきながら聞いてきた。なにかに期待しているようなよく分からない感じた。

いや、これは警戒してるのか？ 確かに知り合いの男プレイヤーが自分の人気に詳しくあったらちよつと怖いかな。

「この間客の一人がお前のファンでな？ アルゴと俺が一緒にいるのを見たらしくて、『どういう関係なんだー』って聞かれたんだよ。そこで知った」

「ど、どういう関係!?! ……それで……あの……なんて答えたの？」

「ああ、別になんでもないって言つといた。情報交換とかそういうのでよく会うだけ

だつてな。変な噂なんてたつて無いから安心しろ」

「……………そう」

「？」

なんだか明らかに落胆しているようにがっくりと肩を落としてしまった。

俺の答えが気に入らなかつたのか？俺としてもアルゴは結構信頼できる知り合いだから思いっきり否定するのも気が引けた訳で、あまり強くは否定しなかつたんだが、情報屋としてはそれが不満だったとか？

いや、けど怒ってる風にも見えないし、よく分からんな。

「何か不味かつたか？」

「……………いや。クー坊はもつと女心を勉強するべきだと思うナ」

「いやいや、これでも結構気がつくほうだぞ。アスナとキリトをくつつけるためにさり気無くサポートとかもしてるし、恋愛相談の依頼だつて偶に来るし」

「……………けど自分の事には鈍いんだよナ」

「何がだ？」

「なんでもないヨ。クー坊がそんなのは今に始まった事じゃないしナ」

何だかよく分からんが『しようがない奴だナ』みたいな扱いを受けてしまった。

なにがなんだかさっぱり分からん。アルゴやリズと話しているとたまにこんな事が起こるから不思議だ。素直に分からないって言うて決まってこういう扱いを受けるんだよな。

「ん？というかアルゴはなんで俺のファンクラブの情報なんか持ってたんだ？そんなの一銭の得にもなら無いだろ？」

「え！?! いや・・・それはな・・・」

別にファンクラブの情報なんて売れないだろ。その情報が欲しいやつはクラブに入るだろうし、人数が増えたなんて会員以外には全く興味の無い情報だし。わざわざアルゴがその情報を集めた意味が分からないし・・・

「というかどっからその情報仕入れたんだ？」

「いや・・・集めたというか・・・会員にはメッセージが送られるというか・・・」
「メッセージ？」

「いや！なんでもない！気にしないでくれ！」

「いや、気になるんだが」

「それは・・・あれだ！ ファンクラブの奴が常連でナ、偶然その話が入ってきたんだ！」

「ああ、なるほど。情報屋ってそういうところからも方法集めるのか。流石だな」

「アハハハハ・・・そうだな」

そういう日常会話の中からも情報を集めておくのか、流石情報屋だな。

俺も情報を集めてはいるが本職って訳じゃないしな。やっぱり情報屋一本で行くと
そうでもしないといけないものなのか、なんだか大変だな。

「俺も見習わないといけないな。そこまでストイックに情報は集めてなかったし」

「・・・なんかごめんナ」

「？」

さつき見たのと同じようにアルゴはまたうなだれてしまった。

今回俺はそこまで変な発言して無いはずなんだが、何がなんだか分からんな。アルゴの言うとおり俺も女心を学んだほうがいいのかもしれない。キリトの事をそうそう悪く言えなくなつたな。

「まあいいか、とりあえず攻略本作りも落ち着いたわけだし、お茶にするか。」

「おお！待ってました！」

「こういうときは急に元気になるんだな」

「湿っぽい顔して食べてもおいしく無いじゃないか」

「そりゃそうだ」

何だかんだ言つて、攻略本作りは中々の重労働だ。しかもこいつはこの攻略本を殆ど無償で配布してる。新しい情報を集めるのには時として命の危険に晒される事も有るにもかかわらずだ。いつも飄々としているが、こいつ以上に献身的にプレイヤーの事を考えているやつのことを、俺は知らない。

アルゴファンクラブなんて冗談じみて言つたが、俺はこいつの事を尊敬している。自分の無力さをただせめて守りに入つた俺とは違う強さをこいつは持っている。

こいつが危険な目に合つた時、他のプレイヤーから糾弾される様な事が起こつた時、

俺はきつとこいつを守るためにすべてを投げ捨てるんだろう。

そんな事は起こらないとは思うが、俺の気持ちの問題だ。たとえ全プレイヤーがこいつの敵になっても、俺はこいつの味方で居続けようっていう気概だ。

「ま、それでもお前は一人で何とかしてしまいそうだけだな」

「ん？なにが？」

「なんでもねーよ。今日は疲れたから特別に『マイルドベリー』使うか」

「ホントカ!? 流石クー坊！」

「はいはい、じゃあさつきと入れてくるから待つてろ。菓子は何にする？」

「んー・・・じゃあシェフのお任せで頼むヨ」

「なんだそりゃ」

こいつとこうやって話す用になったのはいつからだっただか、もう忘れてしまった。

最初はそこまで仲が良かったというわけでもないし、家に2人でお茶をするなんて想像もつかなかったが、人の仲ってのはどうなるか分からないもんだな。

けどこいつの隣はなんだか居心地がいい。リスやキリトやアスナ、クラインやシリカだつて同じように過ごしているのになぜだけそのどれとも違う安心感が有る気がする。

女心を、というよりは俺は自分が何を考えて、何を感じるのかを上手く理解できてないのかもしれない。というよりは、どう言い表せばいいのかが分からないんだ。

それも、アルゴや皆と一緒にいるこの日常で分かっていくのだろうか？

閃光との日常

アインクラッド第48層 リンダース

攻略の最前線は74層まで押し上げられたが、俺の店である万屋秋風は店を上層へ移動させる事も無く、いまだにリンダースで店を開いている。

一時期は異常とまで思える盛況振りを見せた俺の店だが、あれから結構な時間が経ち、店として落ち着いた経営が可能な状態に落ち着いた。

．．．

「あーあ。今日も結構疲れた」

クウオーターポイントが近づいている所為か、最近はレベリングや討伐クエストの護衛などの依頼が増えている。拘束時間が長いつて言うのに加えて、安全マークはしっかり取っているとはいえ戦闘をしているわけだから精神的にもきついものがある。

中々に疲れる一日だったが、営業時間も無事に終了したので、今日の疲れを癒すためにコーヒーを入れて一息つくとしようかな。

キリトたちと一緒に飲むコーヒーもいいが、やはり一人でのんびりとコーヒーを飲むのもいい。リラククス効果としてはこんな風に一人で静かに飲むのが一番だろう。

俺は久しぶりの一人の時間を噛み締めながら、コーヒーの一口目を・・・

「ちよつとクレハ君聞いてよ!!」

「・・・・・・・・」

飲めなかった。

あわただしくドアを開けて俺の店に入ってきたのはアスナだった。こいつがここま

で慌しく俺の店に来る事自体が珍しい事なのだが、それに加えてアスナはいつもの血盟騎士団の鎧ではなく、動きやすそうな私服姿だった。

かなりレアなアスナの姿に驚くべきところなのだろうが、今まさにリラックスタイムに入ろうとしていた俺は驚く元氣も無くそのままのテンションで話をする気しかなかった。

「アスナかーどうしたー」

「そんなにのんびりしてる場合じゃないって！聞いてよ！」

「聞いてるって」

「もう！とにかくこれ見てよ！」

「聞くのか見るのかどっちなんだ」

いつもではありえないほどに興奮している。というよりは歓喜しているアスナが見せてきたのはアスナのスキルステータス画面だった。細剣スキルやさまざまな戦闘スキルのがずば抜けているのを見せられ、最初は何のためにそんな事をしているのか分からなかったが、その疑問はすぐに解消された。

さまざまな戦闘用スキルが完全習得されているのかで、一つだけ異なった部類のスキ

ルが完全習得されていた。

「料理スキル完全習得したのか」

「そうなのよ！昨日やつとよ！」

「そりゃあおめでとう。けどなんでわざわざ俺のどこまで来たんだ？」

「なんでって・・・クレハ君覚えてないの？」

「なにがだ？」

「料理の先生を依頼したとき、完全習得を依頼完了とするから報酬はそこで決めようって言ったじゃない」

・・・・・・・・・・そうだったけ？

完全に忘れていた。なんだかんだいつもこの事のようにお茶の前の準備は殆どアスナとしていたから、正直なところ料理の先生の依頼を受けていた事も今言われるまで忘れていた。習慣になっていた。

というか依頼を受けてから20層も攻略が進んでいる。俺もずいぶん時の長い依頼

を受けたもんだ。

「すまん完全に忘れてた」

「まったく。クレハ君らしいけどね」

「そういうアスナもな。わざわざそんな昔の話を覚えていて、きちんと報告に来るんだから、ずいぶんと真面目なもんだ」

「当然よ。けどクレハ君がそう言っただけで無くても最初に報告するのはクレハ君だったと思うわ。一番お世話になったんだから」

「そういうところがらしいと思うんだがな」

変なところで律儀な奴だな。料理の先生なんていつちやあいるが、実際のところ後半はただお茶の準備を手伝ってもらっていただけだ。熟練度が上がるに連れてわざわざ俺が見てから料理を始めるなんて事もなくなっていたし、どちらかというと俺のキツチンを共有していた感じだな。

しかし依頼の報酬なんて全く考えていなかった。そもそもこんな事をしただけで報酬を貰っていいのかも疑問ではあるが、それを言ってもアスナは納得しないだろうし……

「・・・・・・・・・・」

「クレハ君？」

「すまんアスナ。正直なところ依頼の報酬といわれても何を貰っていいかわからない状態で状態だ。正直報酬なんかいらんと言っていいレベルだ」

「それはダメ」

「ですよねー」

正直な気持ちと言ったんだが、予想通りの反応が返ってきた。

本当に一体何を貰えばいいというんだ。コルを受け取るっていうのもなんだか気が引けるし、かといってこの依頼に見合ったアイテムや装備なんて思いつかない。アスナから依頼を受けたのはリズと一緒に店の方針を決める前だから、それに合わせて報酬を貰うのもなんだか違う気がするし。

「うーん・・・・・・・・」

「そんなに考え込まなくても・・・・・・・・」

「いや、いい落とし所が見つからなくてな。正直こういうタイプの依頼は初めてだった

し」

「まあ、流石に何人も相手にも出来る依頼では無いわよね。考えてみたらクレハ君に料理を教わるって結構すごい事だったのかもね」

「そんな事は無いだろ、ただの依頼なんだし」

「けどファンクラブの人だったら泣いて喜ぶんじゃない？」

「.....」

ありえそうで怖い。

アルゴからわけわからんクラブの存在を聞いてから結構経ったが、あれからまだまだ拡大しているらしい。なんだか分からんが詳しく知るのが怖かったので、今何人いるのかは知らない。中には結構本気で熱狂的な奴もいるらしい。我ながら何がいいんだか分からん。

というかアスナと同じキッチンで料理しているって、俺がアスナのファンに殺されるんじゃないか？ 同じ熱狂的なファンでも危険度が違う気がする。オレンジプレイヤーになるのも辞さない奴がいそうだな。

「.....」

「なんだか今日のクレハ君は考え事が多いね」

「自分の身の危険についてだ。大事な事だぞ」

「考えてる事がよくわからないのも相変わらさね」

「ほっとけ」

すでにばれてるのか、ばれてないのかによつてかなり変わってくるな。

ばれてなかつたらばれた時が怖いし、ばれてるのならあえて何もされて無いのが怖い。あれ？どっちにしても俺やばいんじゃない？ 依頼主と見せかけて報復とかされるかもしれない。

けどまあ、俺が何かされるんだつたらその前にキリトがやられてるか。俺が何かされそうになったらキリトを生贄にしよう。そうしよう。

「それよりもクレハ君。ちよつとキッチン借りてもいい？」

「別にいいが何をするんだ？ 今日が多分お茶会は無いと思うぞ」

「お菓子の準備をするわけじゃないからいいの。クレハ君、お腹すいてない？」

「何だ急に。まあもう夕方だしな、ちよつと小腹はすいてきたかも」

「ならちよつといいわ」

「何がだ？」

「せっかく完全習得したんだから料理してあげる」

・ ・ ・

料理スキル完全習得。

そこまで到達しているプレイヤーが今何人いるのかは知らないが、一番最初に完全習得したのは俺で間違いない。俺が最も信頼している情報屋からの情報だから間違いは無い。

そのせいか、俺は自分以外のプレイヤーの料理を食べた事が無い。自分で作った方が早いから、わざわざプレイヤーが経営するレストランにも言った事が無いし、料理スキルを取っている数少ないプレイヤーがいたとしても、完全習得しているプレイヤーがい

ればそつちに料理を頼むのは当然だ。

そんな俺だが、アスナからの提案によつて実に久しぶりに人が作る料理という物を食べる事になつたようだ。

人から料理を振舞つてもらふのは精神的にも経済的にもありがたい。そんなわけで、アスナからの依頼の報酬は『俺が注文した料理を振舞つてもらふ』ということにした。

「本当にこんなのでいいの？ 報酬じゃなくてもクレハ君には最初から振舞う予定だったんだけど」

「ああ、十分だ。人に料理を作つてもらふなんていつ振りか分からないからな」

「クレハ君がいいなら良いんだけど……」

「よろしく頼む」

というか今までアスナの料理というと、スイーツ系やサンドイッチ系の軽い物が多かったから、ガッツリ料理を作るのを見るのは初めてかもしれない。料理の先生なんていつても、実際にやるのは作る時に間違つた手順を踏んでいないかとか、その材料のレア度で料理を行うとどの位の確立で失敗するとかをアスナに横からレクチャーしてただけだからな。完全習得をした今となつては料理の知識が少なからず有るアスナのは

うが料理のテクニクは高いのかもしれない。

「それで、何を作ればいいの？」

「考えている物が一つ有るんだが、材料がそろってるかどうかだな」

「よっぽどレア度が高い物じゃなかったらそろってると思うわ。昨日調味料のバリエーションを試すためにたくさん用意したから」

「ああ、あれ楽しいよな。俺も初めて出来るようになった時は未知の調味料を作るためにいろいろやったぞ」

「そこは現実世界にあるような調味料を目指そうよ・・・」

あの時はいろいろ試したな。醤油でもポン酢でもない二つの間を攻めるような調味料作ってみたり、食べてすぐは辛いのに後味は甘くなるソースとか作ってた。

結局使う事は無くて未だにストレージにあるんだけど、いつ消費しようか。

「まあそういうことだから、食べたい物があつたら何でもいって頂戴」

「そりゃあありがたいね。じゃあ遠慮なく注文させてもらおうか」

「何なりどうぞー」

フランス料理店のシェフのように、アスナは得意げに注文を待っている。

きっとアスナも人に料理を振舞うという事が少なからず楽しみなのだろう。人に作ってもらうのもそうだが人に作ることもまた料理のよさといえる気がする。どんなリアクションが帰ってくるのかとか、喜んでくれるのかとか、いろいろと楽しみな事も多いからな。

得意げなアスナに向けて、俺は自分が食べたい料理を注文する。

自分でもたまに作って食べる、俺が好きな食べ物を伝える。

「お茶漬け」

「え？」

「お茶漬けつくつてくれ」

「うめえ……」

「そういつてもらえるところいいけど……もつと特別な物でもよかつたのに」

「いやーめちやめちや好きって訳ではないけど、たまにスゲー食いたくなるんだよなー」
「完全習得して初めて振舞った料理がお茶漬けて、なんだか複雑なだけど……」

「まあぶつちやけ完全習得しなくても作れるもんな、お茶漬けくらい」

「分かつてるならもつとちゃんとしたもの頼んでよ！」

「いいじゃないか、本格的な料理を振舞うのはキリトに取っておけよ」

どうしてこんな簡素な料理を頼んだかというのと、モチロン俺が食べたかったというものもあるが、せっかく完全習得したんだから最初は好きな男に振舞うべきだと思ったからだ。

あいつなら泣いて喜ぶだろう。いや、アスナから直接料理を振舞ってもらうとなると上手いこと言えなくてテンパるか、上手いこと言おうとして墓穴掘るかのどっちかか

な。

未だに初心なアスナでも料理に振舞う位なら出来るだろう。俺にやったみたいに完全習得したから振舞つてあげるとか適当な事言えばいいわけだしな。

あれ？けどそうなるはどこで料理するんだ？キリトは未だに宿屋生活したままだし、流石に俺のキツチンで2人だけの世界作られるのは勘弁願いたい。となるとアスナの家に誘う事になるのか？

「なあアスナ。キリトに振舞うとなると場所は……」

「わ、私の家に……キリト君が……部屋に……」

「あ……」

アスナも俺と同じ思考にいたったのか、顔を真っ赤にしてフリーズしている。

別に短い付き合いでも無いんだから家ぐらいさつさと誘えばいいのに。というか俺の家には普通に来るのに家に招くのは無理なのか。自分の部屋となるとやっぱり女の子的にはハードルが高いのか、それともアスナが特殊なのか、まあどちらにしても料理振舞うだけなのにずいぶんと苦労する奴だ。見てて面白いけど。

これだけキリトキリトって言うてるくせに、いざキリトと面と向かって話すとツンケ

ンしているというかそっけないというか、ツンデレにしてもデレがなさ過ぎるんだよな。一度くらい素直に買い物なり食事なり誘えばいいのに、55層の時から殆ど変わらず

偶然を装って一緒に行動したりしている。

「アスナ」

「な、なに!？」

「想像しただけでテンパリすぎだろ、その分だとキリトを家に誘って飯振舞おうつてのは考え付いたんだろ？」

「そ、それはそうなんだけど……家に来るなんて……」

「まあそれ自体はいい。呼ぶまでに心の準備くらいはしとけ」

「う、うん。そうする」

「問題は誘い方だ」

「誘い方？」

「そう、誘い方だ。キリトが家に行きたいって言うように誘導するなよ」

「え？ けどどうすれば……」

やっぱりキリトから言い出すようにするつもりだったか。

というか自然にその発想が出てくるのが怖いな。俺も普段から知らない間にこういう風に誘導されてるんじゃないか？いや、そうなるとアスナよりリスとアルゴのほうが怖いな。

まあいい。とりあえず今回アスナが料理スキルを完全習得したっていうのはいいタイミングだし、ここらでこいつら2人の関係を一つ進めておくべきだろう。一段落したといっても最初にアスナから貰った依頼はキリトとの関係を深めたいって奴だったし、俺のお節介も込みだけアスナのためにもなるだろう。

「簡単だろ、アスナが自分から素直に誘えばいい。『料理を振舞うから家に来てくれ』って」

「エエエ!! 無理無理!!」

「なんでだよ、そろそろ強気なアピールでもしとかないと現状は変わらないだろ」

「だって……その……」

「何だよ」

「・・・・・・・・恥ずかしいし」

予想通りの返しが来たな。というか好きになってから一年以上経ってるのに何でこんなな

初心なんだ。こいつ絶対いいところのお嬢様だ、箱入り娘って感じだ。

多分アスナは本当に恥ずかしいだけなんだろう。やらずにすむならやらないで事を済ませたいって感じなんだろうが、そうすると進展するのは難しいだろう。その間にもアインクラッドの攻略は進んでいくわけで、SAOもいずれ攻略される。そうなると2人が会う事もなくなるだろう。お互いの個人情報も共有でもして無い限りは・・・・・・・・今のアスナに足りないのは多分危機感だ。今のままでいいって気持ちがあどかかあるから、ちよつと強気なアピールが出来ないんだろう。ならその危機感を持たしてやればいい。

「まあそれでもいいけど。最近キリトは結構人気あるみたいで、飯とかに誘われる事も多いらしいぞ」

「・・・・・・・・え？」

「この間もNPCの上手い飯屋を紹介してもらったとか言ってたし、代わりに今度キリトが他の店を紹介する約束もしたらしい」

「け、けどそんな事キリト君は一言も……」

「わざわざ女の子にするような話じゃないからな。アスナもキリトにそういう話題振らないだろ？」

「う……」

「まあそういうこともあるみたいだが、どうする？ 取られるかも知れないけど」

「それはダメ!!」

そこはやつぱり嫌なんだな。まったく、何でここまでベタ惚れで強気になれないのか分からんな。いや、攻略の鬼なんて呼ばれているほどだから、一回そういう火がつけばものすごく積極的に頑張るやつなんだろう。今の話で多少火がついてくれればいいが。

ちなみにさっき言ったキリトを誘っている奴ってのはクラインとそのギルドメンバー達のことだ。別に『女性プレイヤーから人気がある』とは言って無いからな、キリトもわざわざクラインと飯に行った話しなんてアスナに言わないだろうしな。嘘はついてない。ばれたら怖いけど……

「わかりました!!」

「うわあびつくりした!」

「明日キリト君を家に誘って料理するわ!」

「お、おう………って明日?」

「そうよ! だって早くしないと……その……取られちゃうじゃない!」

「そ、そうだな………」

「私家に帰って準備してくるわ! それじゃあクレハ君、いろいろとありがとう。またね!」

急に立ち上がり明日誘う宣言をしたアスナは、簡単な別れの挨拶を済ませた後すごい速度で俺の家を飛び出て行った。一回火がついたら積極的と予想はしたが、積極的なものじゃなかったな。思い立ったら全パワーをその目標に向けるタイプだった。

想像以上の成果を見せた俺のブラフだが、アスナがその気にする事はできたからよしとしよう。ブラフだってばれたときはクラインを生贄にしよう。そうしよう。

俺はすっかり冷めてしまったコーヒーを飲みなはじめた。

20層近く進展が無かった2人が明日進展を見せるかもしれないとなるとそれなりに楽しみかもしれないが、上手くいくか不安なところもある。アスナが張り切りすぎてからまわらないかとか、キリトがテンパリすぎて訳わかんないことしないかとか。ずいぶんと世話の掛かる2人だ。

まあ、全部俺のお節介なんだけどな。

商人との日常

アインクラッド第74層の攻略は順調に進んでいるらしい。

今日依頼に来たパーティーのリーダーからの情報だが、色々なパーティーが迷宮区のモンスターの動きや戦闘パターンにも慣れ始めたらしく、レベリングも順調だそうだ。

この分では今週中にはボス部屋を発見する事も可能だという声も上がっているらしい。

一時期は攻略に参加できない事を悔やんでいた俺だが、クエストをスムーズに進行させる事でパーティーを鍛えたり、中層プレイヤーのレベリングに協力したりと、間接的に攻略に協力をしている状態になっている。

流石にボス戦に参加する事は出来ないが、鞘を使わない戦闘になれたというか、のめりこむほど集中しなくても戦闘のクオリティを高める事が出来るようになってきたので、そろそろ最前線の迷宮区にも顔を出してみようかと考えている。幸いレベルも足りているしな。

しかし流石にまだ先の話になるだろう。知名度は上がってもいまだにソロで活動し

ている俺が最前線で戦うにはまだちよつと心もとない。毎日の依頼で討伐系のクエストが増えてきても倒れたり頭痛がきたりということはないが、迷宮区の真ん中で一人てぶつ倒れるというのは俺としては中々にトラウマで、もう一度一人となるとまだ勇気が出ない。

ひとまずは今の状況を少しづつ変えていくところからはじめよう。

ということ、今日は依頼が終わった後に一人でレベルに余裕があるフィールドで狩りをしていた。早めに切り上げて今やつと家に帰り着いたところだが、疲れをずつしりと体を感じる。明日は店の定休日だがちよつと無理をしすぎたかもしれない。太陽は傾き始め、窓からはオレンジ色の光が差し込んでいた。

こんなときはゆつくりコーヒーを飲んで落ち着くに限る。リラックスして体を休めて、そのままちよつと早めの就寝をしてもいいだろう。ああ、考えるだけでなんか眠くなってきた気がする。さつさとコーヒー入れてゆつくり……

「おい!!聞いてくれよクレハ!!」

「……………」

デジャヴだ……

俺がのんびりしようとするといつもこれだ。この前はアスナがうれしそうに部屋に飛び込んできたが、今回はその時のような華は全く無い。店に入ってきたのは俺より頭一つ分くらいでかい色黒のスキンヘッドのオッサンだからだ。美少女に邪魔されるならまだしも何で俺の至福の時間をガチムチな男に邪魔されんといかんのか。

「何の用だエギル。俺はお前にかまつてる暇なんて無いぞ」

「どうした？ 機嫌が悪いな」

「お前が来るまでは穏やかだったよ」

俺の部屋に入ってきたのはエギルだった。黒いTシャツに黒いズボンというかなりラフなスタイルだが、こいつは自分の店でもこの格好だから、何の違和感も無い見慣れた姿だ。

エギルは少し興奮した様子で俺の部屋に入ってきたが、俺の冷めた返事で少し冷静さを取り戻したらしく、いつもの調子でゆっくりと俺の正面のソファーに腰を下ろした。

クラインやキリトとバカやってる時もあるけど、なんだかんた言つてこいつは常識人だから、こういう対応はすごく助かる。そう考えると今の俺にはちようどいい話し相手が来たのかもしれない。俺の安らぎタイムを邪魔した事は許さないけど。

「それで？何があつたんだよ」

「そうだった聞いてくれよ！」

「でかい声ださなくても聞いているよ」

「でかい声も出るつてもんだ。ついさつきキリトが俺の店に来てアイテム売ろうとしてったんだよ。何売ろうとしたと思う？」

「なんだ？無駄に集めた使わないレアアイテムでも大量に持つてきたか？」

キリトがエギルに売るものつて言つたらモンスターからドロップした物ぐらいだろうが、本気で金に困つたらたまつたレアアイテム売りに行くつて言つてたし、それじゃないかと思つたが、エギルの反応を見るに俺の回答は不正解だったらしい。

「そうだったら、いくらかよかつたんだがな」

「じゃあ違うのか。けどあとキリトが売りそうな物つて言つたらモンスタードロップの

素材ぐらいいじゃないか？」

「そう！まさにそれだ、モンスタードロップの素材だよ。いや食材って言ったほうがいいな」

「キリトがそんなの売るなんていつもの事だろ、何をそんなにあわてる事が有るんだ」
「それがあるんだよ。なにせあいつが持ってきたのは『ラグーラビットの肉』だからな」
「はあ!？」

ラグーラビットの肉といえばS級食材じゃねーか！あいつなんでそんなもん持ってたんだ。いや、忘れがちだけどあいつ攻略組だからレベリングの途中で偶然ラグーラビットを見つけてもおかしくは無いか。にしてもスゲーリアルラックだな、ラグーラビットってかなりレアな部類だったはずなんだが。

「そうなんだよ、キリトの奴S級食材持ってきたよ」

「うらやましいやつだな。けどキリトが売ったって事はエギルが持ってるんだろ？」

「いや、結局あいつ売らなかつたんだよ」

「は？ S級食材って料理スキルがそれなりに無いと扱えないだろ。あいつ俺に料理させる気か？」

「そうしてくれれば良かったんだがなあ．．．」
「？」

キリトがS級食材を売らなかつたのは分かったが、結局その後どうなったのかが全く分からん。この様子を見るとエギルとしては不本意な結果になったのだろう。けどキリトから俺に連絡なんて来て無いし、そもそも俺に料理させたほうが良かったっていうのもよく分からない。というかキリトは食材だけでもってどうするつもりなんだ？

「おいエギル、さっぱり分からんが結局どうなったんだ？」

「ああ、そもそもキリトはラグーラビットのレアさを最初は分かってなかったらしい。だから売ろうと思ったらしいんだが、俺が止めたんだよ。これは食うべきだつてな」

「そりゃあ賢明な判断だ。それで、俺に料理させようって話になったとか？」

「そうだ。そんでもってついでに俺も一緒に食わせてもらおうと思つてたんだよ」

「自分の欲望に正直な奴だな」

「でないと商人なんてやってられないぜ」

「そりゃあそうだ」

キリトに食うべきだつてアトバイスをしたのも自分が食いたかつたからだろ。しかも一回自分で買つてから俺の所に持つて来ようとしなかつたつてことは、キリトに着いて来てそのまま食うつもりだつたな。一回買うとその分キリトに金を払わないといけなくなるからキリトを言いくるめたつて訳か。自分が得をする時の頭の回転は速い奴だな。

「けどそれは無理だつた。キリトが別の奴に料理してもらう事になつたからな」
「別の奴？」

「アスナだよ。」

「あー……」
「クレハの店に行こうとしたら俺の店にアスナが来てな、自分が料理するから一緒に食べさせろつて事になつたわけだ」

なるほど。まとめると、キリトが売ろうとしたラグーラビットをエギルは俺に料理をさせて一緒に食ってやろうと思っていたが、ギリギリでアスナが来て料理人を名乗り出たから、空気を呼んで引かざるを得なかったって事か。アスナとしては最高のタイミングでキリトを誘えたが、エギルとしては最悪のタイミングでアスナが来たって事になる。ちよつと同情するな。

「流石のエギルもその2人についていくのはキツイか」

「そりゃあそうだろ。というかキリトが『エギルも来るか?』なんて言いやがった所為で空気が凍ったぞ」

「あいつすげーな……」

「丁重にお断りさせていただいたぜ、料理は死ぬほど食いたかったけどな」

けど、この前やる気を出したアスナは早速キリトに飯を振舞う事に成功したのか。しかも最初の料理がS級食材を使った料理となるとかなりのクオリティになるだろうな。アスナの家に誘うミッションは無事完了だな。これでアスナももつと積極的になつてくれればいいんだが。

「飯なら俺が作ってやるから今回の事は我慢するんだな」

「ホントかよ!! こりゃあ悪い事ばかりじゃなかったなーおい」

「はしやぎすぎだろ」

飯がおごつてもらえるってだけでそこまではしやぐ年上を見るのもなんだか複雑な気分になるから辞めてほしいもんだ。まああと少してS級食材が食べられるかもつてところでそれがおじやんになつたらそりやあ落ち込むか。しかも美少女に誘われていく知り合いも見せ付けられてるからダメージは倍増だな。

「クレハの料理ならS級食材じゃ無くてもかなり美味いからな、テンションも上がるつてもんだ」

「そりやどうも」

『流石にラグーラビットには負けるだろうがな』とは思つたが、それを言うのは野暮つてものだろう。せつかく俺の料理を楽しむにしてくれてるんだし、期待しておいて貰おう。

エギルが店に来てから結構な時間が経ち、時刻は夕食時に差し掛かりつつあった。俺とエギルは夕食を食べるための準備を2人でだらだらと進めていた。

「にしても、キリトはアスナから飯を振舞ってもらっているというのに、俺達は男2人で悲しく食事会の準備とは泣けてくる」

「クレハでもそういうことを思うんだな。結構意外だ」

「そりゃあ思うだろ。流石にクラインみたいに騒いだりはしないが、俺だって人恋しい時は有る」

「ファンクラブまで作つといて何いってんだ。人なら有り余ってるだろうに」
「俺が作ったわけじゃねえ！」

ファンクラブがあるから寂しくないわけじゃないだろ。メンバーの顔なんて知らな

いいし、俺には何の影響も無い。むしろそれが有るって事を知ったせいで、私生活とのギャップに悲しくなるくらいだ。『俺ファンクラブとか出来てるくせに一人で飯食ってるよ……』みたいな。

「けどまあ、俺も嫁さんの料理が恋しいぜ……」

「え、え!! エギルリアルで結婚してんのか!？」

「言つてなかつたか？」

「聞いてねえよ! けどそうか、お前のその落ち着いた雰囲気は妻帯者の余裕って奴か……」

「なんだそりゃあ」

「お前に独り身の気持ちは分からんだろうよ」

ふとした瞬間に襲ってくるものすごく寂しい気持ちを味わう事も無いんだろう。

特に料理してる時がひどいな。何で俺は自分が食う物をせつせと作っているんだろ
うかって言う疑問が浮かんだったら、そこからだんだんとネガティブな発想がわいてくる。

俺は一人でいるべきだって考えていた55層の時間が懐かしいな。あの時は意図的に人と深く関わろうとしていなかったから問題なかったが、その問題が解決してかなり

時間が経って未だに1人だと流石に危機感を感じる。

リズとかアルゴとかキリトとかアスナとかクラインとかエギルとか、友達と呼べる奴は出来ているが、それとこれとはまた話が違って来るんだよな。」

「・・・なんか悲しくなってきた」

「けどファンクラブに入ってる女性プレイヤーはお前の事を好いているんじゃないか？」

「あんなの物めずらしいから観察してるだけだろ。動物園みたいなもんだ」

「そんなことはねえだろ。もっと前向きに捕らえろよ」

「前向きに捕らえて勘違いだったら死にたくなるから嫌だ」

「・・・・・・リズとアルゴの苦勞が分かった気がするな」

「なんでその2人が出てくる？」

「ちよつとは前向きに生きてみるってことだ」

よく分からんことを言われてしまったが、マイナス思考なのは事実だから何もいえな
い。

βテスト関係の問題が解決した時もアルゴにいわれた気がするが、俺は少々ネガティ

ブすぎるみたいだ。いや、自分でも分かってはいるんだが、急にポジティブになれといわれても急には無理だろ。なんかもつとこう・・・イメージしやすいところで自信を付けていくのが良いのかもしれない。

「じゃあ、クレハに無理やりにも前向きになるための方法を教えてやろう」

「ほう。それは結構興味があるな」

「難しく考えるからいけないんだよ、分からないなら聞けばいい。『自分を信頼してくれるか』とかそんな感じで」

「いやいや、それは恥ずかしいだろ」

「一人で考え込んでうじうじしてるほうがよっぽど恥ずかしいと、俺は思うぜ」
「おお、なかなかワイルドな発想だな」

外人の風貌をしているだけの事はある。

前向きというか自信を持っている感じがあって、見ていてすがすがしい。

なるほど、俺はこの逆をしまっている訳か。そりゃあ面倒な奴だと思われても仕方が無い。

ここは素直にエギルのアドバイスを聞き入れて見るのも悪くない。

「じゃあエギル。お前俺の事好きか？」

「ああ好きだぜ。なんだかんだ面倒見が良いし、とつつきやすい奴だ」

「・・・なるほど。すこし照れくさいが、やっぱり直接そう言ってもらえるとこつちも前向きになれる気がするな」

「極端な話かもしれないんが前向きにはなれるだろ？」

「まあな、けどこれ嫌いだって返されたらどうするんだ？」

今みたいに聞いて、エギルが『正直なところウザイと思ってる』とか言ってきたら多分立ち直れ無いと思うんだが。

「滅多に無いだろうが、その時は自分の何が悪いのか聞いてやればいい。別に直せなくても自分の悪いところを知れば次に生かせるからな」

「ほう。その発想がすでに前向きだが、自分の気持ちを無理やり前向きにする方法としては良いな」

「相手の答えがこつちの求めた物でなくてもいいんだよ。不安を口に出して、それを相手に聞いてもらうってのが目的みたいな物だからな」

「なるほど」

「もつと言えば、これは『これをやったから前向きに慣れるんだ』って思い込みなんだよ。そういうのを一つ持って居るだけでもだいぶ違うぜ」

腕を組んでにやりと笑うエギルだが、今回はそのにやけ面が少し頼もしく見える。

だまされたと思つてやつてみたが、これは確かにいいかもしれない。なにかジnkスを決めて置くことで気持ちを前向きにしようとするつて事か。

「おーい。クー坊いるか？」

「ん？ああ、アルゴか」

「おつすクー坊。あれ？ エギルが居るなんて珍しいナ」

「よう、久しぶりだな」

お互いが偶然俺の店に来た事でかなり珍しいメンバーがそろつたな。

俺の店が段々とたまり場になりつつあるんだが、いまさら気にしても仕方が無いか。さつきの話じゃないが前向きに捕らえよう。

「それで？ 何の話をしてたんダ？」

「ん？ そうだな、前向きな気持ちって大事って話だな」

「クレハのネガティブ思考をどうするかって話だ」

「………何だかよく分からないナ」

いろいろとややこしい話の流れだったから説明が難しいな。

最初からつてなるとキリトがラグーラビットの肉をアスナに料理してもらってつてところから話さないといけなくなるし、正直面倒だ。

「もつと簡単に説明できないのか？」

「といっても、俺とクレハも結構長い間話してたしなあ」

「簡単に、となると………」

「どうしたクー坊？」

口で説明しようとするから面倒なわけで、これって実際に俺がエギルから聞いた事を実践して見せたほうが早いんじゃないか？

『前向きになるための』とかを最初にいつてもイメージできにくそうだ。

「じゃああれだ」

「アルゴ、お前俺の事好きか？」
「え、え、え、え、え
!!??」

凄い声出された。

あれ？さつきエギルが返してきたみたいにしれつと返してくれるんじゃないのか？

いや、アルゴだったらちよつと皮肉った答えくらい返してくれそうだと思うんだが、不意打ちを食らったみたいに驚いている。

これってもしかしてあれか？最初に俺が不安に思ってたエギルに聞いた嫌いだっただけか？まじか、実際にそういう返しが来そうなきつてかなりキツイな．．．しかもアルゴのことは結構信頼してただけに本当にそうだと余計にキツイ。

「なあアルゴ、どうなんだ？」

「いやっ．．．あのっ．．．」

「嫌なのか!？」

「そ、そうじゃなくて!．．．．．というか近いつて．．．」

じりじりとアルゴが後ずさりをしている。

俺としては結構な不安が襲ってきているから少し前のめりだ。

アルゴを俺が壁際に追いやっていているような状況になっているがさっさとアルゴに返事をしてもらわないと俺の不安がぬぐえないから俺も必死だ。

「やっぱり答えにくいのか？」

「………に」

「に？」

「にやあああああああああああああああああ!!」

「うわあ!!」

アルゴは叫びながら全力疾走で部屋から出て行った。顔も赤くして若干涙目になっていて、結局答えを貰う事も出来なかった。

不安がぬぐえないままで凄く気持ち悪いが、この場合から前向きに考えるってできるのか？

「なあエギル。答えてもらえなかった場合はどうすればいいんだ？」

「………呆れてなんもいえねえよ」

「言われたとおりにしたぞ」

「お前つて時々凄いアホだよな」

「失礼な」

「いいからさっさとアルゴ追いかけて事情を説明して来い」

・ ・ ・

素早さに特化したアルゴの全力疾走に追いつくにはかなりの時間がかかったが、何とか追いついて事情を説明してきた。

今まで見たことが無いくらい顔を赤くしたアルゴにめちやめちや怒られたが、なんとかその場を治めることが出来たらしい。結局俺の質問には答えてもらえなかったが、もう一度聞いたら流石に殺されかねないので止めておく事にした。

エギルにも『俺が悪かったからもうあの方法は使うな』と言われてしまったし、俺と

は相性が悪かったという事で納得しておこう。

それでどう話を付けたかというところ……

「やっぱ最高だな。完全習得してここまで変わる物なのか」

「クー坊、早く料理をもつてこいヨ」

「はいはい……」

最初に言っていたエギルに料理を振舞う時にアルゴも同伴させるってことでいったん話を落ち着かせた。だがアルゴはまだちよつと機嫌が悪いみたいで、若干高圧的になっている。

「なあアルゴ、俺が悪かったからそろそろ機嫌をだな……」

「クー坊は何が悪かったか分かって無いだ口？」

「うぐ……」

さつきから何度か機嫌を直してもらおうとしているが、アルゴが言ったとおりアルゴが怒っている意味を俺がいまいち理解できて無いから解決の仕様が無い。

女の子を怒らせたことなんて滅多に無いからどうしていいのかが分からん。というかそもそも女の子の知り合いがリアルで居ない。

「なあアルゴ、クレハもああ言ってるしそろそろ許してやってくれ」

「エギルも同罪みたいなものだけだな」

「わ、悪かったよ。こいつがここまでバカとは思わなくてな？」

「おい罵声がストレートすぎるだろ」

流れるに俺が悪いってことは明確だが表現が直接的過ぎた。

「まあクー坊だし、しかたないとは思うかな」

「アルゴもそれで納得しないでくれ」

「お詫びにこれからはクレハがアルゴの好きなときに料理振舞ってくれるってよ」

「ホントカ!?!」

「いやいやいや、それは流石に……」

「けどそうでもしないとアルゴは許してくれないそうだぞ？」

「そうだなー。それ以外だと駄目なくらいナ」

「うそだろおい……」

エギルが変な提案しやがったせいでアルゴの専属料理人にされてしまいそうだな。そんな事言ったらこいつはほぼ毎日ただ飯食いにしてくるようになるだろうが。2人の食料費を考えると結構な痛手になるから正直キツイぞ。

「俺からアルゴへのお詫びの品だ」

「いやー悪いネー」

「お前のお詫びに俺を巻き込むな」

「じゃあ他に何かいい案があるのか？」

「えーと……」

なんにもない。

「じゃあクー坊、明日も来るからな、明後日も来る」

「毎日来るんじゃねーか」

「にやはは。何でオレッチが怒ったのかをクー坊が分かったら許してやるヨ」

「…りよーかい」

それが分からない限り俺が圧倒的に不利だ。

まあ、機嫌もよくなつたしよしとするか。毎日来るなら質問の答えもおのずと分かつてくるだろうし、アルゴなら別に飯を振舞うのも苦じやないしな。

あれ？若干ポジティブに考えられるようになった気がする。

結局のところ、自分が楽になるように考えてみろつて事なのかな。

「クレハ、おかわりだ」

「お前は遠慮がねえな」

「いいじやねえか、俺のおかげで丸く収まっただろ？」

「ホント、良い性格してるよお前は」

多分国籍も違うだろうし、年もかなり離れている。

そんな奴と出会えてこうして飯を食えているつて考えると、やっぱりS A Oも悪いもんじゃない。

ほら、ポジティブに考えられるようになった。

払拭される悪名

「なかなかいい結果になったんじゃないか？」

「そうだな。にしても情報が回るのにはやかかった気がするが」

「もともと有名人だったからナ。その影響だとおもうゾ」

「なるほど、そのおかげで想像以上の結果になったわけだ」

「ここに来る間にも色んな奴が話してたナ。影響力は文句なしダ」

「今頃あいつは人に囲まれまくって動けないかもしれないけどな」

例によつて例のごとく、場所はアインクラッド第48層リンドースに有る俺の店。

俺は新聞をもつてやってきたアルゴと共に、その新聞の内容について話をしていた。

内容は俺達の友人の事を大々的にピックアップした物で、今日の新聞の半分以上はそういうことを書きまくった物になっている。ちなみにこの新聞を作ったのは別の新聞作成や情報提供を行っているギルドの物で、俺達2人が作ったわけではない。

いや、実際に作ったわけではないが、かなりの情報提供をしている。

こいつがこれまでどんな事をしてきたのか、この新聞の一面を飾っている内容の殆ど

を俺達が提供したといってもいいくらいだ。

「まあ、大体予想していた通りだな。めちやめちや大げさに書いてやる」

「期待通りじゃないか。いつぞやと同じような結果になりそうだな」

「その『いつぞや』をやったのはお前だろうが」

「にやははははー」

新聞に載っている内容は、明らかに脚色されている。

まるで俺が新聞で取り上げられてバカみたいに祭り上げられた時みたいに、同情を引くような内容や抜群にカツコイイ武勇伝がデカデカと見出しとなっている。

自分がやられたときはたまったもんじゃなかったが、側から見ると中には中々面白いもんだな。

「あの一……すいません。クレハさんはいますか？」

「ん？」

俺とアルゴが新聞の内容について盛り上がっていると、店の入り口のほうから誰かの

声が聞こえてきた。

店は定休日の札を出しているのに店にやってきた客に一瞬疑問を感じたが、店のドアからのぞかせた顔を見てその疑問はすぐに解消された。

「ああ、なんだシリカか。どうしたんだ？」

「やあシーちゃん。ひさしぶりだな」

「クレハさん、アルゴさんもこんにちは。今大丈夫ですか？」

来客はシリカだった。

ピナの一軒からちよくちよく俺の店に来てはいたが、ここ最近俺が忙しくしていたせいかあまり顔を合わせる事が無かったので、ずいぶんと久しぶりだ。

「ああ、大丈夫だ。どうかしたか？」

「はい。えつと、ちよつと聞きたいことが有つてですね……」

「フムフム、オネーさんに話してみな？」

「何でお前が対応すんだよ。それで？何が聞きたいんだ？」

まあこのタイミングでシリカが来るってだけで、何を聞きに来たのか予想はつく。きつとこの記事に載っているあいつの事だろう。

「このキリトさんの記事についてです」

・ ・ ・

『軍の大部隊を全滅させた蒼い悪魔。それを単独撃破した二刀流の50連撃!!』

俺とアルゴが見ていた新聞の一面には、デカデカとこう書いてあり、その見出しの下には2本の剣を持って戦うキリトの写真がある。

事の発端は74層のボス攻略で起こった。

アスナとパーティを組んでいたキリトは、迷宮区の探索を進めてボス部屋の扉を発見した。その場ではボスに挑む事は無く偵察だけを行ったが、その後休憩を取っている際に『アインクラッド解放軍』の部隊に遭遇、ボス部屋までのマップの提供を迫られた。その場に居合わせていたクライン率いる『風林火山』の面々はそれに反対したが、結局マップ情報は軍へと渡ることになった。キリトはボスへ挑む事を止めたが、キリトと別れた軍はそれを聞き入れず、ボス戦へと望んでしまった。

軍がボスへ挑んだ事に気がついたキリトは、ボス部屋へと駆け付け、アスナと『風林火山』の面々と共に軍と共闘。数名の死者を出し、時間と共に戦況は悪化していった。

しかし、キリトは自身のユニークスキルである『二刀流』を開放し、瀕死の状態になりながらもボスを撃破する事に成功。第75層のアクティベートを完了させた。

「以上。アルゴさんの状況説明でしたとサ」

「すごいですね！見てきたみたいですよ！」

「ホントにな。どうやったらそこまで細かい情報収集が出来るんだ」

「そこは企業秘密って奴だな」

新聞の一面の内容については今アルゴ我説明したとおり。

結論だけまとめると、キリトが二刀流を使って74層のボスを撃破したって訳だな。

「二刀流なんてはじめて聞きました。エクストラスキルですよね？」

「というよりはユニークスキルとっていいだろう。ヒースクリフの神聖剣とおなじ部類だ」

「発生条件も分かってないみたいだしナ。もつともこんなスキルを全員がもてるようになったらバランスブレイカーもいいとこだし、ユニークスキルで間違いないネ」

「なるほど・・・流石に50連撃なんて皆が使えたらまずいですもんね」

「ああ、それ嘘だぞ」

「ええええ!？」

こんな記事誰が信じるんだよと思ってたが、シリカみたいな奴がだまされるのか。

中層プレイヤーは攻略組を結構過大評価しているというか、俺達にできないものすごい事ができる奴らみたいなイメージを持っているから、こういう記事にも違和感を感じにくいんだろう。戦闘に参加しないプレイヤーはそれ以上にだろうな。

「せいぜい16連撃くらいだった気がする」

「あれ?クレハさんはこのスキルの事詳しいんですか?」

「俺が二刀流での戦い方を教えてたから多少知っているって感じだ。ソードスキルはともかく、通常戦闘の時から剣を二本の剣を使うとなると、立ち回りも変わってくるからな」

「クー坊も見方によつては二刀流みたいな物だからナ、キー坊もちょうどいい先生を見つけたもんだ」

俺はかなり早い段階からキリトから二刀流の事を聞いていて、依頼として『二刀流での戦闘指南』つてのをこっそり受けていた。

初めから盾を持たずに片手剣だけで戦っていたキリトが、通常の戦闘でいきなり二本の剣を使って戦うのにはどうしても違和感があったらしい。今まで素手だった左手にいきなり剣をもって戦うとなると、どうしてもバランスだったり攻撃のタイミングにずれが生じてしまう。俺はそれを極力なくすためにはどう立ち回るべきなのかなどを教えれていた。

「なるほどー。クレハさんが先生だったわけですね」

「先生って程でも無いけどな。キリトが慣れるまで立ち回りを観てただけだ」

「片手剣が2本になったって言っても、単純に考えると使う武器が代わった訳だ。立ち回りを見直すのは基本だな」

「自分の動きを他から見てもらわないと、どこに隙が出来てるかなんかわからないからな。その辺の指摘をしてやってたんだ」

「それにキー坊とクー坊だと戦い方が全然違うし、それ以外を教えるのは難しいだろうな」

キリトに剣を二本使った戦闘を教えていたのは本当に序盤だけだった。

アルゴが言ったとおり、俺の戦い方は『敵の攻撃を受け流して隙を突く』っていう感

じだが、キリトの場合は『正面から叩き切る』って感じの戦い方だ。早い話が技術で敵を押さえ込むか、力で敵をなぎ払うかの違いだな。

型は似ていても戦い方の方向性が違うから、後半はキリトは自分で自分なりの戦い方を見つけ始めていて、実践でそれを試して固めていったってところだな。

「ユニークスキルって便利だけじゃないんですね」

「そうだな。戦闘以外にもいろいろと面倒も起こるしな」

「面倒？」

「嫉妬に狂った他のプレイヤーだな」

「ああ、なるほどです」

「シリカがピナをタイムした時みたいなものだ。下手したらそれ以上だろ」

「あれは・・・ちよつと勘弁して欲しいですね・・・」

嫉妬深いネットゲプレイヤーが、ゲーム内にたった1つしかないスキルを持ったプレイヤーなんて見つけたら何がどうなるか分かったものじゃない。フェザーリドラをタイムしたシリカも心当たりがあるようで、引きつった苦笑いをしている。

「まあ、シリカの場合は『女性プレイヤー』っていうフィルターがあつたから、そこまで露骨な嫉妬は浴びなかつただろう」

「うーんそうですね。どちらかというと、珍しい物見たさで押しかけたり、パーティに引き入れようとする人のほうが多かつたですね」

「けど今回のキー坊はそうも行かない訳だ。なんせビーターなんて最上級の悪評を初めから持つてるんだからナ」

アルゴが言うとおり、キリトはビーターだ。同じユニークスキルを持ったヒースクリフみたいにも、巨大ギルドのギルドマスターみたいな後ろ盾なんて無い。

攻略に向けてかなりの戦力になるから、戦闘とかレベリングの邪魔とかはされないだろうが、中途半端に陰湿な嫌がらせとか受けそうだし。

けどそんなの黙って見過ごすのはおもしろくない。

「だからこの新聞製作を手伝ったんだけどな」

「ああつそうでした！ わたしはその事を聞きに来たんですよ！」

「そういえば聞きたいことが有るって話だったな。この新聞の事か？」

「そうです！ この新聞の続きの事ですよ！」

「この『剣影が語る黒の剣士の真実!!』っていう記事。やっぱりクレハさん本人の提供だったんですね」

このままだとキリトにヘイトがたまるのは避けられない。自分がしたことで周りから疎まれたり嫉妬される分にはまだ分かるが、今回キリトは何も悪い事なんかしていないどころか、ボス1体を撃破するという功績まで残している。

そんな奴が周りから疎まれるなんて間違っている。というより今までピーターなんて不名誉な称号を1人で背負っていたこと自体が間違っているんだが、とりあえずこれから起こりうる問題は俺にとっても気持ちがいい物ではない。

75層のアクティベートから帰ってきたクラインからキリトが二刀流を使ったという話を聞いた俺は、すぐにアルゴに連絡を取って情報屋へ手を回した。

といっても俺がやった手回しって言うのは簡単だ。キリトが今までやってきた事を、そのまま記者へ伝えて新聞にしてもらっただけ。俺の記事を書いたアルゴと同じだな。

『βテスターの盾になったビーター』

『圈内殺人解決の立役者』

『ビーストテイマーを狙うレッドギルドの討伐劇』

などなど、それ以外にもいろいろと見出しが有る。

「その結果がこの新聞だよ。アルゴとキリトが俺にやったのと同じ事をしてやった」

「にやはは。下手したらクー坊の時より脚色してるかもナ」

「前回の記事を書いたのはアルゴだったけど、今回は違う。俺達が脚色して話した物をさらに記者が脚色してるから凄い事になってる」

「なるほどー、だから実際の内容よりもちよつぱり大げさなところがあるんですね。わたしと一緒に45層に行ったときの話も載っていて、それが気になって・・・」

「ああ、悪かった。シリカのこと勝手に勝手に記者に話しちまった」

「いえいえ、それは全然かまわないですよ。クレハさんとキリトさんしか知らないはずの話が記事になっていたので、本当にクレハさんが情報提供をしたのかの確認がしたかったんです」

「情報提供者は俺で間違いないよ。まあ提供したのは俺だけじゃなくて、クラインやアスナも関わってるんだけどな」

「そうだったんですか・・・わたしにも声を掛けてくれれば、喜んで参加したんですけど・・・」

「そうしようとも思ったんだが、あまりいい思い出でも無いだろうからな。俺が話せる分は俺が済ませようと思うんだ」

俺とキリトが和解した55層以降にキリトが関わってきた事件については俺が話をしている。それ以前のはクラインやアスナやエギルがメインで話を進めて、脚色はともかく嘘をつくと後々問題になるから、その裏付けをアルゴがしている。

「けどクレハさん。わたし達を襲ったギルドって、7人くらいでしたよね？」

「そうだな、詳しくは覚えてないが確かそのくらいだ」

「新聞には『大量のオレンジプレイヤー』ってなってるんですけど」

「俺達3人に対して7人も来たんだ、大量だろ」

「けどこれ誤解をまねくんじゃ・・・」

「嘘は言っていない」

「確かにそうですけど・・・」

俺の時だってバカだろって言いたくなるくらい脚色ぶりだったんだから大丈夫だろ。というかその新聞を作った本人が真横にいるんだが、そいつに聞いても『嘘は言っていないだろ?』としか言わなかったんだからいいじゃないか。俺が言っても。

「けど以外ですね。クレハさんがわざわざ名前まで出して情報提供するなんて」

「そうか?」

「匿名とかにするタイプだと思ってました。クレハさんって目立つの嫌がるじゃないですか」

「にやははは、クー坊見抜かれてるナ」

「うるせえよ」

見抜かれてると言ったアルゴの発言が間違っていないからこそ腹立つな。

『匿名にしたい』『目立つのが嫌』っていうのはまさに俺が情報提供をする時にアルゴに對して言った言葉だった。記事にする際に情報提供者の名前を出すか出さないかって話をしたとき、全力で俺は反対した。

OK出したら記者がノリノリで俺の名前使いまくりそうだったから本気で嫌だった。

「嫌だったけど、影響力が違うって言われて折れたんだよ」

「影響力、ですか？」

「キー坊はすでに悪評のほうが悪まってるからナ。それを塗り替えるには『今までの情報のほうが間違っていた』って思われるような信憑性の有る情報元が必要だ。そこで我等が『剣影』様のビックネームを利用したわけだナ」

「お前絶対バカにしてるだろ」

「すでにいろんな人に信頼されているクレハさんからの情報だから、いろんな人が信じやすいって事ですか？」

「まあ、簡単に言えばそういうことだ」

信頼されているのかどうかは知らんが、情報元が分からない物よりはずっと信憑性があるって事で俺の名前が使われた訳だ。……ここまでデカデカと名前を出す

とは思ってなかったけどな。

「といっても、キリトの悪評のほとんどはビーターっていう先入観から生まれたでっち上げだからな。アルゴがその辺の情報がデマだつて事を証明したつて事のほうが大きいだろう」

「調べてみれば対したものでもなかったゾ。キー坊が『無抵抗のプレイヤーをボコボコにした』つて噂を調べたら、『ケンカを止めに入つて巻き込まれただけ』みたいなオチばかりだったしナ」

「……悪評に関してはあいつの運が悪いつても有るよな」

何をどう歪曲したらそうなるんだ。というか何でそれを信じるんだよ周りの連中は。

現在進行形で脚色した記事をばら撒いている俺達が言えたことじゃないが、流石に疑つてかかるとか自分で調べてみるとかしようぜみんな。

「けどキリトさんの見られ方が変わつて良かったですね。中層はキリトさんの話題で持ちきりですよ」

「おお、それは良い知らせだな。中層での噂の流れ方はまだ確認してなかったから不安

だったんだ」

「はい！わたしもピナを助けてくれた人だって話をして来ましたから間違い無いですよ」

シリカからも話をしてくれたのなら中層プレイヤーに対してはもう大丈夫だろう。シリカもそれなりに名前が知れているし、シリカが話していた事実は信憑性として文句無しだろう。

「これで『ユニークスキル持ちに対する嫉妬』と『キー坊の悪評』の問題は無事解決だな」
「そうだな。結構の数のプレイヤーがキリトの噂を見直したみたいだし、嫉妬心を持つた奴がいたとしてもおおっぴらにキリトの邪魔は出来ないだろう」

「そうですね。2人ともお疲れ様です」
「ホントーに疲れたナー。こんな時は甘い物とかが食べたい気分だナー」

アルゴがちらちらとこつちを見ながら疲れたアピールをしてくる。

さつきまで言いにくいことズバズバ言ってたのに何でこういうときだけは遠まわしにしてくるんだよ。

「はいはい分かったよ。コーヒーと菓子作ってくるから待つてろ。ついでだしシリカものんびりして行きな」

「え？いいんですか？」

「ああ、久しぶりにチーズケーキでも作るか」

「わあ！ありがとうございます！」

色んなところに手を回したりしたから結構疲れたのは事実だが、一仕事終えてやつのんびり出来そうだ。久しぶりにシリカも来たことだし、シリカの好きなチーズケーキでのんびりしとこう。

攻略もクォーターポイントに到達したし、ユニークスキルも2つ目が発見された。これからすぐに忙しくなるだろうから、今のうちにのんびりしておこう。

団長からの依頼

「こんな人がいるなんて聞いて無いぞ……」

「一度受けた依頼でしょ。文句言わないの」

「そりゃあそうなんだけどな……」

闘技場裏に有る控え室。

俺はソファでゲンナリとうなだれていた。

俺の弱音に対して容赦なく現実を突きつけてくるいつも通りのリスとは反対に、俺はもう間もなくであろう出番のせいで全く落ち着くことができない。

「まあいいじゃないの。いろんな人があんたの出番を待つてるんだから」

「それが嫌なんだが」

「面倒くさい奴ね、ホントに」

何で俺が闘技場の控え室なんかにいるのかというと、いろいろと面倒くさい理由があ

る。というかさつき名前が出たキリトの所為というかさつきかけがあいつだったというか、ともかくキリトが関係してきている。ついでにアスナもな。
事の発端は3日前の夕方までさかのぼる。

俺は47層の自分の店で仕事をこなしていた。

今日は特に大きな依頼も無く、気がつけばあつという間に店を閉める時間までは十数分残っていない。

ちなみに店を閉めるギリギリに依頼が来た場合は、それが短時間で終わる物だったら少し延長して依頼をこなし、逆に長時間になりそうな場合は明日優先的に話を聞く、という形を取っている。

今日は割とスムーズに仕事が終わったし、明日もこんな感じだといんだけど。

なんて考えていると、入り口のほうからおそらく本日最後になるであろう依頼者の声

が聞こえてきた。

「万屋『秋風』はここで間違いないかね？ 少々依頼したい事があるのだが」

「ああ間違いないよ。けどもうすぐ店仕舞いだから、長時間になりそうな依頼なら明日に回す事に……」

俺は依頼者の方を振り返りながら、テンプレートになりつつある依頼者との会話を話し始めていたが、振り返りきって依頼者の顔を見ると口を付いて出てきた言葉は無意識のうちに止っていた。

簡単に言うとは絶句した。

見覚えの有る白と赤を基調にした鎧と、白というより銀色の髪を後ろにまとめた中年というには少し若い。俺やキリトみたいな情報操作なんかじゃなく、実力でSAOの全プレイヤーに知られているようなプレイヤーが

そこにいた。

「血盟騎士団の……ヒースクリフ団長？」

「おや、『剣影』殿に名前を知られているとは光栄だね」

「………そっくりそのままお返ししますよ」

正直ビビった。

こんなビッグネーム中のビッグネームが俺の店に来る日が来るとは思っても見なかった。いや、キリトとかアスナも十分有名人にはあるが、この人はその比じゃない位のプレイヤーだ。

SAOのトップギルド『血盟騎士団』通称K.O.B。その団長であるヒースクリフ。

この人が有名な理由としてはギルドの大きさも関わってくるが、何よりたった2人しかいないユニークスキルの保持者であり、これまでのボス戦で1度もHPをイエローまで持っていかれたことが無いほどのプレイヤースキルを持っていることが大きいだろう。

彼がいなければ死者の数は今の倍になっていてもおかしくは無い。

こんな有名プレイヤーがこの店を訪れてくれたのは素直にうれしいが、有名プレイヤーだからこそ、ここに来る事に対して疑問が生まれる。

「あなたほどのプレイヤーが万屋に何のようです？」

「私は皆が思っているほどに優秀な人間ではない。1人のプレイヤーとして行き詰る事

だつてあるという事だ」

「だとしても、それをサポートする優秀な団員がいるじゃないですか」

なんてつたつて巨大ギルドの団長だ。1人のプレイヤーが抱えるような問題を解消できる奴だつて団員の中から探せばいいだろうに、何でわざわざ万屋に依頼するなんて面倒な事をする必要が無いだろうっていうのが俺の疑問。

何か問題があつたならギルドメンバーに頼んで解消すればいいし、この人ほどのカリスマ性があれば自分から進んで手助けするような奴もいるだろうに。

「そういうわけにもいかなくてね。むしろその団員の事で問題を抱えている状態なのだよ」

「団員の事で問題？ レベリングが足りてないとかですか？」

「そんなことはない。彼らはよくやってくれているよ」

だろうな。

アスナからKOBはレベル上げノルマが無いって話を聞いたからもしかしたらと思つたが、流石トップギルドのメンバーだけあつて自主的にレベリングを行っているら

しい。

「だったら尚更だ。俺に何を頼むっていうんです?」

「アスナ君とキリト君のことだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

またあいつ等か。

というか最近俺の仕事ってあいつ等関係の事件多くないか? まあ俺のお節介も多々あるんだが、でかい出来事って殆どあいつかが関係している気がする。エギルの件とか新聞の情報提供とか・・・

「君も交流がある2人だと聞いているが」

「まあうちの常連ですからね、いろいろと面倒を見ているところもあります。それで? その2人が何をやらかしたって言うんです?」

『『やらかした』という訳ではないが・・・・ふむどこから説明したものかな、少々長い話になるのだが問題ないかな?』

「仕事柄長い話には慣れてますよ。幸い今日の依頼者はあなたで最後ですしね」

「それは助かる。では依頼の前に、現状の説明に入ろうか」

ヒースクリフが話した事情は以下の通り。

つい最近突発的に行われた74層のボス攻略で起きた事件は『キリトの二刀流』や『軍の部隊半壊』だけではなかった。

S A O全体としてはほんの些細な事件かもしれないが、1人のプレイヤーに精神的にダメージを負わせるには十分な事件が起きていた。

『キリトが目の前で死に掛けた』

アスナにとってそれがどれだけ辛い物だったかは考えなくたって分かる。

好きな人が目の前で死に掛けて、それを助ける事もできなかった。

トツギギルドの副団長という立場に立ってはいるが、アスナだって現実では十代後半の子供だ。結果的に死ななかつたとしても、大切な人が死ぬかもしれないという恐怖を味わったアスナは強く願うようになった。

『キリトのそばに居たい』と……

「まあ、概ねこういった経緯でアスナ君は血盟騎士団からの一時的脱退を申し出てきたのだよ」

「……なるほど」

「アスナ君の気持ちは十分に理解しているつもりだが、こちらとしても彼女ほどの戦力をそう易々と手放す事はできなくてね」

「まあそれは確かに、けど今の状態のアスナを無理やりキリトから引っぱがすわけにも行かないでしょう」

新聞への情報提供をする時、アスナがどこことなく思いつめているような気はしていたが、そこまでの事になっていとは思わなかった。後で気づけなかった事を謝つとこ
う。

ともかくヒースクリフの言いたい事は分かるが、その状態のアスナに『戦力的にきつ
いから駄目』っていうのは流石に酷な話だろう。

「それで、その解決策を俺に考えろってというのが依頼ですか？」

「いや、その件に関しては既に対策を打っている」

「というと？」

「アスナ君と一緒にいたいと言っているキリト君だが、キリト君自身もアスナ君と一緒にいたいと思っっているようでね、問題の解決の為にキリト君に賭けを持ちかけたのだよ」

「賭け？　どんな？」

「私と決闘し、勝ったらアスナ君を連れて行く事を許可する。逆に負けたらキリト君が血盟騎士団に入るといふ物だ」

「はあ!?　そんなめちやくちやな・・・」

「私は欲しい物があるなら、自分の力で勝ち取るべきだと思っただよ」

またとんでもない事言い出したなこの人は。

とかいうかこの人がこんなアグレッシブな選択肢を取った事が意外だ。こういうのは普通に話し合いとか、戦うにしても部下に任せたりするタイプだと思ってた。

勝ったらアスナを血盟騎士団に留まらせる事ができる上に、現在のS A Oの最大火力

と言って良いレベルのキリトをついでに引き込める最強の賭けだな。

しかも負けたところでアスナは完全に血盟騎士団から脱退する訳でもなく、あくまで『一時脱退』って条件付けているあたりさらに秀逸だ。

ローリスクハイリターンにもほどがあるだろ。怖い人だ。

．．．．．けど、ただアスナを利用して利益を得ようって訳では無いみたいだな。

「さすがの団長も、副団長には甘くなりますか？」

「．．．．．どういう意味かね？」

「そのままの意味ですよ。結局この賭けって、キリトが負けたとしてもアスナの希望は叶うんですから。ただソロのキリトと一緒にいるか、自分のギルドにキリトが来るかの違いしか無いでしょう？」

「．．．．．」

「二見アスナを賭けたキリトとあなたの戦いつて感じだけど、アスナの要求は100%通るようになってるんだから、確かに良い賭けですね。もつとも、当の本人は気付いていないでしょうけど」

「．．．．．さすが万屋といったところかな。なるべく私の主観的な意見は入れないよう事実だけを述べたつもりだったのだが、見抜かれてしまうとはね」

「職業柄、人の話を聞くのは慣れてますからね。言葉の裏が読めないと依頼者の本当の要求を満たしてやれないってことですよ」

依頼者の中にもいろいろな奴がいる。

あまり自分の意見をはっきり言えない奴がいたら、そいつが何を求めているのかを話しながら引き出したり察したりしないといけない。逆にプライドが高い奴や自己評価が高い奴は自分のパーティの力量を少し高めに伝えてきたりするから、そういう嘘を見抜けないと討伐クエストのサポートをしたときに引き際を見誤る恐れがある。

言いたくてもいえない事や悪意の無い嘘を見抜けないとやっていけない。

「ふむ、確かに君の言うとおりだ。アスナ君は本当によくやってくれている。そんな彼女の頼みなのだから、無下には扱えんよ。しかし一人の団員を特別扱いする訳にもいかなくてね、正面から彼女の頼みを受けきる事ができなかったと言うのが本音だ」

「あら？　ずいぶんと素直に話してくれるんですね」

「ここまでこつちの考えを言い当てられてしまつてはいまさら隠す必要も無いだろう」

「まあ今回は考えを言い当てたつていうよりは、あなたが隠そうとした事実を話から読み取つただけですけどね」

「さすが『剣影』殿といったところかな？」

よく言うよ。

嘘を見抜くのは難しいが、こんな風に意図的に何かを隠そうとしている場合は意外と簡単に分かる。だけどこの人の場合は他のプレイヤーとは比べ物にならないくらい本心が分からない。あたかも話の裏を見抜いたみたいと言ってはみたが、賭けが終わった後の事を考えて、どっちが勝つてもいつも通りのあいつ等しか思い浮かばなかったからもしかしたらって思ったただけだ。推測でもなんでもない。

推測と言えるのはこれから話す事だ。

「けどあなたが話していない事はこれだけじゃないんじゃないですか？」

「ほう、まだ何か気付いた事が有るのかね？」

「これに関してはただの推測ですよ。違ったら突っぱねてください」

「推測でもなかなかに興味深い。聞かせてもらおう」

これから推理小説の解決偏を読み始める様な気持ちなのだろうか、ヒースクリフは面白い物を見るような目で俺を見ている。

いや、この人が今言ったように『興味深い』と言う表現が一番しつくり来る。なんだか観察されているような、そんな目だ。

少し落ち着かないがまあいいか。どうせただの勘だしな。

「さつき言った様に、あの2人にとってこの賭けの意味は正直言つて殆ど無い。どちらにしても『一緒にいたい』つていう2人の希望は叶えられるんですからね」

「その通りだ」

「じゃあこの賭けをする事でメリットを得られるのはあの2人じゃない。あなただ」

「それもその通りだ。私がキリト君に勝てば、彼はKOBのメンバーになるのだから」

「いいや、それはKOBにとってのメリットだ。あなたの方がじゃない」

「.....ほう?」

「そもそも賭けなんかしなくてもキリトをKOBに入れることも出来たはずだ。キリトはギルドを嫌つてはいるが、今はアスナと居たいつて気持ち強い」

「.....」

「だったら、適当な役職でも用意してソロプレイヤーと変わらない待遇を与えてやって、その補佐役としてアスナを就けておけばいい。その条件ならキリトがKOBへの入団を断る理由が無い。晴れてあなたはKOBにSAO最大火力の男を手に入れて、アス

ナも手放す必要が無い最高の一手だ。今までと変わらない状態と言っても、1度入団させてしまえば色々扱いやすい」

つまり、『わざわざ賭けなんかしなくても、条件によつてはキリトを素直にKOB入りさせる事もできたでしょ?』つて事だ。

KOBは任務みたいな扱いで迷宮区の攻略だったりマップピングだったりをしてもらいたいし、そういう任務を与えておけばソロのキリトとやっている事は変わらないだろう。

他のやつとパーティを組むのが嫌だつていうならアスナだけと組ませればいい訳だし、多少の特別待遇を貰つても団長の決定なら文句をいうやつもそこまで出ない。というかそもそもキリトはそんなの気にしない。

「あなたほどの人がそれに気付かない訳が無い。けどあなたはそれをしなかった。つてことは、あなたの目的は『キリトをKOBに入れる』事じやなかったつてことだ」

「・・・では、何だと思ふかね?」

「そりゃあ『キリトと戦う事』でしょう」

「なぜ私がそんな事を望む必要が?」

『ユニークスキル持ちだから』かな。あなただってゲーマーだ。ただ大きなギルドを纏めるだけじゃなくて、たまには純粹にゲームを楽しみたかったんじゃないですか？ やつと自分と対等に戦える可能性の有るプレイヤーが出てきたんだ。戦いたいと思うのはゲーマーの性って奴でしよう」

これが俺の推測。

この人はアスナのため、キリトのためと話していたが、『ただキリトと戦って見たかっただけなんじゃね？』ってことだ。

ヒースクリフがキリトとデュエルをするって話を聞いたときに、一番最初に思ったのがこれだった。そもそもキリトと居たいからギルドを抜けたいって言ったのはアスナなんだから、戦って勝ち取れと言うならアスナに言うべきだろう。

「どうですか？ まあ推測と言ってもこじ付けみたいな物なんですけどね」

「……十分推理として認められる内容だったよ。あれだけの会話でここまでの確に考えを読まれたのは初めてだ」

「あら、それは正解ってことですか？」

「7割正解と言ったところかな」

「……なるほど」

こじ付けとは言ってもみせたが、結構自身があつたから7割って言うのは少し悔しいところがあるな。まあ別にヒースクリフと推理勝負をしていたわけでもなんでもないから全然問題は無いが。

ともかく俺の行つたことが7割正解だというなら、やっぱり残りの3割が気になるわけ。

「残りの3割を聞いてもいいですか？」

「もちろん。といってもこれは今回の依頼にかかわる事なのでね、私が隠したかった本心を言い当てたという意味では10割と言ってもいい推理だったよ」

「そりやあどうも」

「君は一人のプレイヤーとしての私の考えをずばり当てて見せた。しかし、KOB団長としての私の考えには触れていなかった。3割の部分はここに当たる」

「団長としての考え？」

「そうだ。キリト君が『KOBに入る事』では無く『私と戦う事』で得られるメリットが有る。私が戦ってみたいと言う個人的意見だけでなく、SAO全体のことを考えてのメ

リットがね」

SAO全体と来たか。こりやあまたずいぶん大きな考えをお持ちなことだ。

まあ事実上SAO最強のギルドのトップに立っている人なんだからそれぐらいの事を考えていてもおかしくないか。この人にはそれぐらいの影響力はある。

「正直に言わせて貰うと、ここまで話をされてもピンと来ないですね」

「最前線に出ていない君ならばしかたの無いことだろう。しかし、SAOには最前線に出ているプレイヤーの何名が気付き始めている問題が浮上している」

「問題？」

「君は無いかね？ 他のプレイヤーから『必死さが無くなっている』と感じた事が」

「………!!」

………確かにそれを感じた事は有る。依頼主から伝わる必死さがなくなっている。というよりは、この世界に順応していると言ったほうが正しいのかもしれない。この世界で生きていく事に慣れてしまった。そのせいで、攻略や脱出に対してハングリーさが無くなっているのだろう。

俺も最近では現実世界のことを全く考えない日がある。

これがヒースクリフたちが気付いた問題か。

「心当たりがあるようだね」

「何度も言いますが、プレイヤーと話して何ぼの商売なんでね。少しずつでも覇気が無くなつていくのは分かりますよ」

「些細な事のように感じるがこれは大きな問題だ。恥ずかしい話だが攻略のペースも目に見えて低下している。この問題は早めに解決しておきたい」

「それで、あなたがキリトと戦う事でその問題を解決できるんですか？」

問題の大きさもわかったし、それを何とかしたいって言うのも分かった。

けどそれとキリトと戦うって言うのがどう関係しているのかピンと来ない。

「今回の私とキリト君の決闘だが、何名かのプレイヤーが見学に来るそうだ」

「そりゃあ気になる奴はいるでしょうね、ユニークスキル同士の戦いなんてそう簡単に見えるもんじゃ……」

……おいおいまじか。

なんか大体予想が付いた気がする。この人が何を思っ
てキリトと決闘デュエルをする事にしたのか、どうやって今抱えている問題を解決しようとしたのかっていうのが。

「ふむ、察してもらえたかね？」

「……『ハイレベルな戦いを見せて志気を上げる』って事ですか？」
「簡単に言うтそういふことだ。」

この人はSAOに2人しかいないユニークスキル持ちの戦いを他のプレイヤーに見せる事で全体の志気を上げようとしてるって事か。なんともめっちゃくちな話だが言いたい事は分かる。確かにキリトとヒースクリフの戦いなんて物を見たら少なからず影響されるにきまつてる。シリカあたりなんかは剣を2本持って二刀流の練習なんか始めてもおおかしくないくらいだ。

「けど、正直言つて上手くいくんですか？」

「100%解決できるとまでは言わないが、現状を変えることぐらいは出来るだろう。」

憧れと言う物は人を動かすのには十分な感情だよ」

「ミーハーな中層プレイヤーならともかく、上層の攻略組がそう簡単に影響されますかね?」

「上層のプレイヤーだからこそ影響を受けやすい面も有る。戦いの立ち周りや攻撃と防御のタイミング、ソードスキルの発動とその硬直を計算した回避方法。それら一連の動きのレベルの高さは、前線で戦っているからこそ理解できる物だからね」

「……なるほど」

詳しく話を聞けば中々筋が通っている上に納得ができる内容だな。

よくよく考えたら上手くいかなかったって何のデメリットも無いし、やってみる価値はある。

それにそういう理由があつたならキリトに本当のことを伝えなかつた事にも納得だ。『人前で決闘します』って言われてキリトが素直に従うわけが無い。俺と同じくらい目立つのが嫌なやつなんだから。

「さすがKOBの団長。抜け目無いというか視野が広いというか。まあ何にしてもかなり良い案じゃないですか」

「そういつて貰えるとうれしいよ。ではご理解頂いた所で依頼の話に移らせてもらおう」

「はいはい。俺はこの決闘デュエルの運営でもやればいいってことですか？」

「いいや、運営は既にKOBの者に話をつけているよ」

「うん？　じゃあ俺は何をすれば？」

「決まっているだろう。君もこの決闘デュエルに参加して欲しい」

「はあああ!!??」

何言ってるんだこの人!?

俺が人前で決闘デュエル!?

何がうれしくて人に見られながら戦わなきゃいかんだ。しかも自分より圧倒的に格上の奴となんて公開処刑もいいところだろうが。

「不満かね？」

「当たり前でしよう！　そもそも3人でどうやって戦うって言うんですか!？」

「私とキリト君が戦った後、勝ったほうが君と戦うと言う形を取る」

「なんで俺が決勝戦扱いなんですか!!　　というか今回の賭けに俺は関係ないでしょう」

「君はSAOでもかなりの有名な人だ。それもかなり特殊な戦い方をすると聞いている。プレイヤーの志気を高めるのにこれ以上有力な人選も無いだろう」

「いや、それはそうかもしれないですけど……。ほら、俺は長時間集中できない体質なんです」

「では君との勝負は時間制にして、それ以内に決着が付かない場合は引き分けとして終わらせる事としよう」

「ええつと……」

「やばい、どんな言い訳しても正論で返される。」

「トップギルドの団長怖っ！　普段からこんな圧力掛けまくってんの？　友達いなくなるだろ。」

「というか実際問題どうするか。」

「この依頼を受けたくないのって完全に俺の個人的な感情だし、『嫌だからやらない』なんて万屋としてかなりの信用問題だ。けど正直なところ本気でやりたくない……」

ああ、なんかいい言い訳はないのか……

「ふむ。そんなに嫌な事なのかね？」

「……………まあ正直に言うのと嫌ですね」

「しかたがない。なら交渉といこうか」

「交渉？」

「これは依頼なのだから、報酬が無いと意味が無いだろう？」

「まあそれはそうですけど」

正直なところどんな報酬を受け取っても今回の依頼を受けようとは思えないんだよな。

コルもアイテムも別に問題ないし、今のところ気になる情報も無い。俺にメリツトの有る報酬なんて出てこないと思うがな。

「ではこちらから提供する報酬は、

『情報操作の隠蔽』でどうかな？』

本日二度目の絶句だ。

今までの流れの話からそこに持っていくのか……

やっぱりこの人は怖い人だ。俺とアルゴがやったキリトの情報操作を引き合いに出してくるとか普通思いつかんだろう。

俺がメリットで動かない事を見越して、デメリットを起こさせない方法で報酬を提示してくる奴なんて今まで一人もいなかったし、流石トップギルドの団長様だ。世渡り上手というか、自分の意見を通す方法を心得ている。

けど、それなら仕方ないって事でその要求を呑むのはまた問題がある。

それで俺がホイホイ承諾してしまつたら、情報操作をした事を全面的に認める事になる。

しらばっくれてみるか。

「……少し意味が分かりませんね」

「意味ならば君が一番分かっているのではないかね？」

「さあ、何の事かさっぱり」

「先日発行されたキリト君の新聞記事だが、あそこに掲載されている内容は脚色されているだろうか？ もちろん君が提供した情報も含めてだ」

「まあ新聞なんてそんな物じゃないですか？ 俺は嘘の情報を提供したりなんてしてませんよ」

「しかし、読者が偏った認識をするよう意図的に仕組まれた内容だ」

「それも新聞の醍醐味でしょう。俺達はあなたの思うような不正は行っていませんよ」

「確かに不正を行つてはいはいない。意図的に自分たちに有利な情報が浸透するよう公開するのは不正ではない」

「だつたら何の問題も無いでしょう？ もっともそんな事はしてませんけど」

「問題は無い。だが、『不運にも情報屋が自分の都合の良い方向へ情報を操作した可能性

があるという誤った情報が流れた』としたら、彼女の活動には影響が出るのではないか？」

「……………!!」

そういうことか。俺がしらばっくれる事も見越して手を打つてるとはね。

この人は初めから俺達が情報操作をしたことを武器に話していたんじゃない、協力者のアルゴを人質に取ろうとしてたわけか。

情報操作って言っても名前の響きほど悪い事をしてるわけじゃない。ただ今まで間違った認識をされていた物を元に戻しただけだ。何も間違った事じゃない。

けどアルゴはSAOでは有名な情報屋だ。そのアルゴが『情報を偽ったかもしれない』っていう情報はあいつにとつてかなり痛手になる。この人は実際に証拠を持つているわけじゃないだろうが、俺やアルゴ以上に発言力があるプレイヤーだ。この人が疑惑を口にするだけでそれを真実だと妄信するプレイヤーいてもおかしくない。

実際に身柄を拘束しているわけじゃないから少し違和感があるが、アルゴを人質にとつているようなものだ。

「……ずいぶんと汚いやり口ですね」

「人聞きが悪い事を言わないでくれたまえ。これはあくまで交渉だ」

「脅迫の間違いでしょう」

「私としても、今回の決闘デュエルで是が非でもプレイヤーの志気を高めなくてはならないという使命感が有ってね」

そんな使命感棄ててしまえ。

と言いたいところだが言っていることが理解できないわけでもない。志気の低さっていうのは大きな問題だ。早く払拭した言っている気持ちも分かる。

現状ではこれが一番無難な策だとも思う。

……もう腹くるしかないってことか。

「はあ……わかりましたよ。ここまで手を打たれていたんじゃあ仕方が無い。素直に従った方が早い」

「それはありがたい。私としても少し心苦しい交渉だったのでね」

嘘付け。

思いつきりこつちに圧力掛けてたくせによく言うよ。よくアスナはこの人の下で働いているもんだ。いや、アスナだったらこの人にも正面切つて意見できるから副団長になれたのか？

「ですが、これをあくまで『交渉』にしたいのなら、こちらの意見も聞いて貰いますよ」
「もちろんだ。これは『交渉』なのだから」

腹はくくつたが、全部この人の思い通りになるつてのは面白くない。

というより、ここまでされたら俺にだつて条件を出す権利くらいあるだろ。

「じゃあ一つ目。戦うのは俺とあなたにすること。例えキリトが勝つても戦うのは俺とあなただ。俺とキリトだどお互いの動きを知ってしまったているから、単調な動きになりかねない」

「なるほど、志気を上げるといふ目的がある以上、それは避けたいところだ」

「二つ目。キリトと決闘デュエルをする理由は『あなたが戦いたかったから』ときちんと公表する事。これに関しては今回の『交渉』について変な疑問を感じさせないためだ」

「うむ。問題は無いとは思うが、妙は勘ぐりをされたくないというのはこちらも同じだ。了解した」

「最後に。今回のような『交渉』を二度と俺に持ち掛けない事。俺以外の誰かを人質に取るような交渉には、今後一切乗らない。もしもう一度こういったことが起こったら、俺は一人のプレイヤーとしてあんたと敵対する。フィールドに出るときは気をつけてくださいね」

「……………肝に銘じておこう」

この人の話を呑むとするならこの三つは最低条件だ。流石にこんな脅迫まがいの事を何度も何度もされたんじやたまらないからな。

今回の件で味を占められてKOBのパシリになるなんてごめんだ。

「ともかく交渉は成立だ。日程は追って連絡しよう」

「了解です。まあ交渉はともかく依頼は依頼だ。やれるだけのことはやらせてもらいますよ」

「それは助かる。では私はこれで失礼するでしょう」

「ああ、最後に一つだけいいですか？」

「なにかね？」

この人と話していて違和感、と言うよりは一つ疑問に感じる事が有った。

プレイヤーの志気を高めるためにハイレベルの戦闘を見せるとか、俺を交渉のテーブルに乗せるためのやり口とか、人の感情とか思考に敏感過ぎる。

しかも自分の本心は隠そうとしたり、自分に有利な方向に物事を進めるためには余念が無い。というより、初めから相手がどんな反論をしてくるのかを想定して、先に手を売っているみたいだ。

「あなたって、リアルではVRMMOの研究でもしてたんです？」

「……………なぜそう思うのかね？」

「いや、人の考えとか思考にやたら詳しいんだなと思ったので。それもSAOでの思考回路に特化している気がするので、VRの世界で人がどういう行動を取るのかっていう研究とかしてたのかなあと思っただけです。」

「なるほど、君の推測や思考は本当に目を見張る物がある」

「ありや？ 当たってました？」

「ふむ、詳しい事はいえないが、おおむね正解と言っていいだろう」

「勘だったんですがね」

「君との決闘デュエルも楽しみになってきたよ」

「そりゃあどうも」

ではまた。

と言い残してヒースクリフはゆっくりと店から出て行つた。

噂には聞いていたがずいぶんとまあとんでもない人だつた。キリトを利用してプレイヤーの志気を上げて、ついでに自分のやりたい事までこなしてしまおうって言うんだから欲張りもいいとこだ。まあそれぐらいのハングリーさが無いと団長なんてのは務まらないのかもしれないけど。

しかもついでに俺まで巻き込んで・・・・・・・・

・・・・・・・・ん？

もしかして、俺とも戦つてみたかっただけなのか？

「志気を上げるっていうからK O Bの幹部クラスの数人しかいないと思ってたのに……」

「ざっと5000人以上いるわね。SAOにいるプレイヤーの9割はいるんじゃない？」

「おかしいだろ……皆暇なのか」

「失礼なこと言わないの」

SAO全体のことを考えるってこういうことか。なにが『何名かのプレイヤーが見学にくる』だよ。目立つとかそういう次元じゃなくなってるだろうが。

「ヒースクリフも凄い事考えるわねー。ユニークスキル同士の戦いなんて皆興味あるに決まってるじゃない」

「俺はユニークスキルもって無いから関係ないのにな」

「あんたはあんたでユニークスキルみたいなもんじゃない。戦い方を生で見たととき本当はそういうスキルなんじゃないかと思っただわよ」

「残念ながら全部自力だ」

あれからよくよく考えても、ヒースクリフがわざわざ脅迫まがいの事をしてまで今回の決闘に俺を指名した理由は分からなかった。

本人は『SAOの有名人が戦えば志気を上げやすい』って言っていたが、それだったらヒースクリフとキリトだけで十分事足りるだろう。俺の出る幕じゃない。

となると、やっぱりヒースクリフがキリトと戦おうと思った個人的な理由と同じ、『戦いたかったから』って言う理由が一番しつくり来る。俺に関しては無理やり理由付けをしたって感じだろう。多分。

「普通に正面きって戦おうって言うてくれば、別に断りやしないのにな」

「それってあんたの推測でしょ？ 私にはヒースクリフがそれだけの理由であんたを指名するとは思えないけどね」

「いや、あの人の思考回路は意外と子供っぽいぞ。自分の要望を通すための手回しが異常に上手いだけで」

「それが怖いよ……。何にしてもちゃんと警戒すんのよ！ あんたが負けたらまた交渉とか言い出すかもしれないんだから！」

「はいはい」

リズに全部話したのは間違いだったかなー。

アルゴを間接的に人質に取られた事に関しては本気で怒ってみたいだし。

……ヒースクリフも俺以上に面倒な奴を敵に回したことを後悔すると良い。

「ほら、そろそろ時間よ。キリトの戦いもしっかり見とか無いとね」

「そうだな。応援ぐらいはしてやろう」

その後に俺の出番があると思うと億劫だが……

何にしてもここまでできてしまったんだから仕方が無い。さっさと戦って、さっさと終わらせようかな。

まあ勝って終われるとは思わないけど。

決闘 前編

俺は戦いの準備を済ませるため、リズを連れて闘技場のフィールドへと繋がる入場ゲートまで移動する事にした。

先にキリトが戦う事になっていいるから、キリトとヒースクリフの決闘は入場ゲートのところから見せてもらおう。

「あれ？あそこにいるのってキリトとアスナじゃない？」

「ん？ あー確かにあの色合いはそうだな」

リズの言うとおり入場ゲートの近くには2人の人影が見える。片方は真っ黒で片方は白と赤の服を着ているのが見える。キリトとアスナは遠目でも色で判断できるから楽だな。

「あんた友達を色合いで判断するんじゃないわよ」

「黒の剣士なんていわれてるんだからいいだろ」

俺とリズが話しながら2人に近づくと、声が届いたのかアスナも俺達に気が付いた。少し不安そうな顔をしていたが、俺とリズを見るといつものアスナと同じように笑いかけてくれた。

「クレハ君、リズ、おはよう」

「おはようアスナ」

「アスナはキリトの付き添いか？」

「うん。私の所為でこんな事になっちゃったから」

アスナの所為というかどちらかと言うとヒースクリフの所為なんだが……

「まあ頑張れよキリト」

「クレハア!!」

「うおっ!?!」

初めてキリトに話を振ったら突然つかみかかられた。

完全に不意打ちだったからびっくりするわ。俺何かしたっけ？

「なんなんだよあの新聞記事は!!」

「…….……あー」

そういえばあの新聞を作ってからキリトに会うのは初めてだったな。キリトからしたら俺と同じで、ある日目が覚めたら自分の事を書きまくってる新聞が発行されてたわけ、かなり驚いた事だろう。

しかもシリカが中層プレイヤーがキリトの話題で持ちきりだったって言っていたから、多分町でも俺と同じように質問攻めにされて大変だったんだろう。

「なかなか良い出来だっただろ?」

「どこがだよ!あんな嘘ばっかりの新聞!」

「嘘は一つも書いて無いぞ?」

「アルゴみたいな事言ってるんじゃない!」

「とういかお前も俺に同じ事しただろうが」

「そ、それはそうだけ…….……」

「まあまあキリト君」

このままだとキリトが止まらないとおもったのか、アスナが仲裁に入ってくれた。キリトもアスナを無碍には扱えないらしく、しぶしぶではあるが引き下がった。リズはヤレヤレと言いたげに肩をすくませている。

今の話の事についてもだが、どちらかと言うとこの2人の関係性に対する呆れのほうが強いだろう。

『なんで付き合ってすらないんだよこの2人』という呆れのほうが大きそうだ。

「それはともかく、もうすぐ出番だろ。勝算はあるのか？」

「・・・正直分らない。けど、アスナの今後がかかっているからな。負けられない」

「ごめんねキリト君。私の所為でこんな事になっちゃって・・・」

「何度も言うけど、俺がやりたくてやってるんだ。安心しててくれ」

「・・・ありがとうキリト君」

ちよつと気を抜いたらすぐこれだよ。

何なんだこいつらは。試合前に俺のメンタルを壊しにくるんじゃない。というかお

前も試合前なんだから緊張感を持って緊張感を。

「……負けてしまえばいいのに」

「おい!!」

「はいはいわかったから、そろそろ出番だぞ。さっさと行つて来い」

「お前なあ……」

「変に緊張していると余計に上手くいかないだろ。どうせ意味の無い賭けなんだから気楽にいけ気楽に」

「意味が無い賭け? アスナの今後を賭けた大事な勝負だろ?」

「あ……」

アスナも俺の言っている意味がよく分からなかったらしく、小首をかしげている。

本当にこいつらこの賭けに意味が無いって事に気が付いていないらしい。半ば予想してたとはいえいつそすがすがしいな。ヒースクリフの作戦大成功じゃねえか。

「まあいいや、じゃあ本気でやつて来い。出来るだけヒースクリフを追い込んで次の俺に楽させろ」

「ひどい理由だな……」

「あんた純粹に応援できないの？」

「クレハ君らしいけどね」

好き勝手に言ってくれているが、正直なところキリトに頑張ってもらわないとキツイのも事実だ。時間制限式の決闘にはいるが、ヒースクリフが相手だったら集中し続ける事になるだろうからぶつ倒れる事も考えないといけない。

俺の場合は別に勝っても負けても関係は無いが、あまりにも大負けすると今後の商売に響く可能性があるからそれなりの試合にはしないといけない。

ユニークスキル持ちのキリトの場合は普通にやっただけで華がある試合になりそうだが、俺の場合はシステムのアシスト無しでそのクオリティの戦いを求められる。そうになると少しでもヒースクリフを追い込むことが出来る様にしておかないといけないな。

「そろそろ本当に時間みたいだ。行ってくるよ」

「いつてらっしやい。キリト君」

「負けたら承知しないからね」

「勝つのもそうだが、楽しんで来い」

「おう」

・ ・ ・

それからすぐキリトとヒースクリフの戦いが始まった。

最強の防御力を誇り、ボス戦でもイエローゾーンまでHPを減らした事の無いヒースクリフ。

脅威の火力を誇る連激のソードスキルを放つ二刀流のキリト。

矛盾対決とでも言い表せられるこの戦いに、大量に集まったギャラリーも大いに盛り上がっている。キリトがソードスキルを放てばヒースクリフはそのすべてを防ぎきり、ヒースクリフがキリトの隙を突けばすさまじい反応速度でそれを回避する。

「2人ともすごいわね、ほんとに人間なの？」

「SAOトップクラスの人外プレイヤーだろあの2人は」
「そこまで言わなくても……」

俺とリズの言い分にアスナは苦笑いで答える。

とうるか俺はこの後あんな人外と戦わないといけないのか。勝てないにしてもそれなりのクオリティの戦いをしないとイケないとは思っていたが、それすらも危うそう
だ。

「けど、やっぱり攻撃を完全に防ぎきっているヒースクリフが若干有利だな。見ている分には互角だが、精神的にはキリトのほうが押されてる」

「そういうものなの?」

「リズは決闘とかしないからイメージしづらいかもしれないが、どれだけ攻撃しても手ごたえが無い上に、的確にこっちの隙を付いてこられたらたまったもんじゃない」

「あーそれは確かにそうかもしれないわね。けどそしたらキリトに勝ち目は無いんじゃない?」

「かなり厳しいだろうが、ヒースクリフのガードを一回でもはじく事ができたら勝機は有るだろう」

「ガードをはじく?」

「ああ、キリトの反応速度だったら一回ガードをはじくだけで十分な有効打を当てる事ができるだろ。キリトの火力で初撃決着モードだったらそれ一発で終わるだろうからな」

つまりはキリトがヒースクリフの防御をねじ伏せるくらいの攻撃ができれば勝てるって事だな。対人戦の基本と言うか、あたりまえのことだ。

けどこれをやらせてくれないからヒースクリフは厄介なわけで・・・

いやー考えれば考えるほど面倒な相手だなあの人。

「というかあいつの剣を作ったのはリズなんだろ? あの剣の攻撃力ってどんなもんなんだ?」

「ダークリパルサーの事? 自分でもびつくりするくらいの高性能よ。もう一本の剣と同じくらいの高性能ね」

「まじかよ」

確かもう一方の剣って魔剣レベルのポストロップ品じゃなかったか? そんなレベ

ルの剣ってプレイヤーメイドで作れる物なのか。

いや、俺の刀も耐久値だけ見れば似たような物だから人の事いえないな。キリトが用意した素材が凄かったのか、そんなレベルの武器をポンポン作れるリスが凄いのか、この場合後者かな。

「おつ、キリトが仕掛けるみたいだぞ」

「仕掛ける？」

「防御より攻撃を優先し始めた。そろそろソードスキルでガードを剥ぎに掛かるんじゃないか？」

「けどガードが剥げなかったら、硬直時間を狙われて負けちゃうじゃない」

「他に突破口が無いから仕方ないな。それで負けたら素直に負けを認めるしかない」

「あんたずいぶん冷めてるのね……」

出来ればキリトに勝ってほしいってのはあるが、正直ヒースクリフと話をしてしまつた所為でそこまで本気になって応援できないつてのがある。

だつて別に負けてもいいんだし。

負けてところでキリトはアスナとキャツキャウフフのギルド生活になるだけだし。

「いっそ負けて本気で落ち込んでるところに、『まあ別に負けても関係ないよ?』って
言っつてやりたいところはあるな」

「ひねくれすぎでしょ……」

「俺は俺の出番の事で精一杯なんで仕方ない」

「絶対出番が無くても同じ事したでしょ?」

「まあな」

リズもなかなか俺の考えを読むようになってきたな。付き合いが長いっていいね。

こんな雑談をしている間にもキリトとヒースクリフの戦いはクライマックスに向か
いつつある。

一瞬の隙を付いたキリトの剣がヒースクリフの頬を掠めるのが見える。

わずかに焦りの見えるヒースクリフに対し、ここしかないと目を見開いたキリトが
ソードスキルを発動した。

「次で決まりそうだな」

アスナは手を胸の前で固く結び、キリトの勝利を祈っている。

俺とリズも話しながらではあるが、一瞬たりとも2人の戦いから目を離してはいない。

ヒースクリフの目的の一つである『志気の上』は大成功と言っているだろう。

目的を知っている俺でさえ実に血が滾る戦いだ。

思わず集中して見入ってしまうな。

意図的ではないが、いつもの戦いのときの感覚。視界に移る物が少しスローで進んでいるような感覚が訪れる。

ライトエフェクトに包まれるキリトの剣がヒースクリフの盾に向かって放たれていく。

1撃、2撃……

キリトの剣がヒースクリフの盾を打ち鳴らし、わずかに盾が浮き上がり始める。

それを逃さないよう放たれたキリトの追撃を受けた盾が、ついに勢いよく側面にはじかれた。

ぬける……！

瞬間的にそう思った。

まだキリトのソードスキルは終わっていない。

盾をはじかれた体制のままのヒースクリフにソードスキルのアシストが加わったスピードでキリトが切りかかる。

確実に当たるスピード、タイミングにもかかわらず、

その一撃が届く事は無かった。

・ ・ ・

「……………え？」

気が付くと闘技場は割れんばかりの完成が鳴り響き、ヒースクリフの頭上には『WI
NNER!!』の表示が輝いている。

何だ今の？ あの距離まで近づいたソードスキルの一撃を盾でいなして反撃した？

いやいや無理だろ流石に。『キリトの反応速度＋システムアシスト』の速度に対応し
て盾をもっていつて完全に防ぐなんて不可能だ。

神聖剣のスキルだとしてもおかしい。あの距離までつめられた攻撃を防げるんだっ
たら終盤までの戦いなんかまるで本気じゃないって事になる。

そんなスキルがあるなんてバランスブレイカーもいいところだろうが。

「リズ……………今の見てたか？」

「早すぎてよくわかんなかったけど、キリトが負けたって事だけは分かるわ」

「いやそうじゃなくて最後の一撃のことだ」

「キリトのソードスキルがギリギリ届かなくて、ヒースクリフに隙を突かれておしまいじゃないの？ ガードは剥げたけど、攻撃が届かないんじゃないやあ負けるわよね」
「ソードスキルが届かなかった……?」

いや、そんなわけは無い。

キリトの剣は確実に届いていた。ライトエフェクトは消えちやいなかった。

アスナだつたら見ていたかも……いやダメだ。

最後のほうは目を瞑って祈っていた。今違和感を感じて無いつてことはアスナも見てなかったつてことだろう。

多分他の観客も同じだ。

観客の位置だと斜め上から見た状態になるからヒースクリフとキリトの剣がどれくらい近づいていたかなんて正確には分からないだろうし、リズムみたいによく分からなかったけど終わったつて感じの印象になるやつが殆どだ。

つてことはこの事に気が付いてるのは。

闘技場のフィールドと同じ高さから戦いを見ていて、最後の一撃を詳しく見ていたのは……

俺とキリトだけか。

・ ・ ・

「・・・ごめんアスナ」

「ううん。お疲れ様、キリト君」

「惜しかったわねーキリト」

決闘を終えたキリトが俺達のところへ戻ってきたが、負けたということもあってその表情は芳しくない。

けど、悔しいと言う感情よりは戸惑いと言う感情のほうが強い気がする。

「なあキリト。最後のヒースクリフの一撃なんだが・・・」

「っ!! クレハも気が付いたか?」

「ああ、流石に早すぎる」

よかった、俺の見間違いじゃなかった。

これだけ考え込んでてキリトが全然気が付いてなかったらどうしようかと思った。

「戦つてた俺もよく分からなかった。確実に決まったと思つた一撃が防がれていて、気が付いたら負けてたよ」

「俺から見てもそのまんまだな」

「実際に体感した俺からしても訳が分からない。実力の差つて奴なのか?」

「……一応一個だけ心当たりが無いことも無い」

「なんだそれ?」

「いや……かなりぶつ飛んだ考え方だし、外れてた時が洒落になら無いから言わない」
「何だよそれ気になるだろ!」

キリトが凄く知りたがつていたが教えない。意地でも教えない。

我ながら無理がある理論だと思うし、そうじゃなかった場合さすがにヒースクリフに

失礼すぎる。もしそうだったとしても俺に何が出来るわけでも無いから、変に勘ぐられる位なら俺の胸のうちに秘めておこう。

「何を2人で話してんのよ。次はクレハの出番でしょ？ 行かなくていいの？」

「さすがにノータイムで連戦はヒースクリフがキツイだろ。ちよつと休憩入れてからだな」

「疲れさせて楽しかったって言ってたじゃない」

「言葉の彩だ」

今出て行って疲れたヒースクリフを倒して勝ち誇るとか無いだろ。

5000人近くから大ブーイングが巻き起こる事請け合いだ。

俺の戦いはもうちよつとしてからだな。

「これで俺も、明日から血盟騎士団の一員だ」

「キリト君といられないのは残念だけど、一緒のギルドなのはうれしいかな……あれ？」

「明日からアスナと一緒にのギルド……ん？」

「一緒に居られる？」

「ああ、今気付いたのか」

決闘 後編

嫌な時間ってのはどうあがいたってやってくるわけで、キリトとヒースクリフの決闘が終わった後に少しの休憩を挟み、俺とヒースクリフは闘技場のド真ん中で対峙していた。

とうとう俺の出番がやってきた。やってきてしまった。

「本気でやる気が出んな」

「これから戦う相手の前で言う事かね？」

「これから戦う相手があなただから言ってるんですよ」

ついさつきまでキリトが立っていた闘技場のド真中に今度は俺が立っている。

正面にいるヒースクリフと軽口を叩きあいながら、観客が落ち着くまでデュエル開始を待っている状態だ。

それにしても、なんでSAO最強クラスのプレイヤーとのデュエルをこんな大勢に見られなければならないのだ。へたしたら思いっきりボロ負けする様をこれだけのプレイ

ヤーに見られると思うと憂鬱だなー。いや、依頼を受けた俺が悪いんだけどさ。

「こちらの戦いも、上質な物にしたいがね」

「じゃああなたにとつて、キリトとの戦いは上質だったわけですか」

「ふむ。少々手違いはあったが概ねそういつていいだろう」

「手違い……ねえ」

どうにも含みの有る言い方をする人だ。俺の中の疑惑が大きくなるから辞めて欲しいんだけど、前々からこんな言い回しだから深く考えないようにしよう。

「観客も少し落ち着いたようだ。そろそろ始めよう」

「……分かりました」

ヒースクリフから決闘申請が届き、俺はYesのボタンをしぶしぶ押す。

カウントダウンの音を聞きながらだが俺の考えをまとめよう。

9……

8……

7 : :

この際俺の私情は全部取っ払う。

これも『依頼』な訳だ。ヒースクリフからの依頼。

『攻略組の志気を上げるために決闘してもらいたい』と言うのが今回の依頼な訳だが、それを達成するためには当然クオリティの高い戦いってのが求められる。

6 : :

5 : :

4 : :

さつきキリトがしてたみたいな、あんなレベルのクオリティを。

正直言つてあんな物は無理だ。あんなバケモノ同士の戦いを攻略組でもない俺がまねる事ができる訳が無い。

3 : :

2 : :

1 : :

キリトみたいに正面からぶつかつたつて瞬殺されるに決まつてる。

だつたら策を練るしかない。情報を集めたのはキリトとの1試合分だけだが、1つだけ作戦は組みあがつた。それが上手くはまれば何とかなるだろう。

0:
!!

無機質な機械音が試合開始の合図を告げた。

・ ・ ・

「先手必勝じゃあ!!」

試合開始の合図と同時に、俺は左手に持っていた鞘をヒースクリフめがけてぶん投げた。

「なっ・・・!!?」

「はあああああ!!?」

流石に予想外だったのか、ヒースクリフが驚愕の声をもらすのが微かに聞こえる。ついでにさつきまで俺がいた入場ゲートのあたりからも3人の絶叫が聞こえるが、こっちは知ったこっちゃ無い。俺の投げた鞆はまっすぐとヒースクリフの顔辺りに向けて飛んでいつている。

利き腕と逆で投げたから不安だったがひとまずは成功。

自分で投げた鞆を追いかけようにして俺自身もヒースクリフめがけて走り出す。鞆に追いつく事は不可能だが、どちらかと言うとAGI寄りな俺のステータスなら距離をつめる事くらいならできる。

ガキイ!!

っという音と共に鞆がヒースクリフの盾に防がれる。

完全に予想外の攻撃だっただろうにしっかりと防御をしているあたり流石だが、俺の目的は鞆で攻撃する事じゃない。というか多分投げられた鞆に当たったところでダメージなんか大したものじゃないだろうし、これはあくまでも準備段階だ。

さっきの試合で気が付いた事の一つ目。この人は完璧な防御でキリトの攻撃を防いでいたが、それは反射神経で防いでいたわけじゃなかった。キリトみたいなめちゃくちゃな反応速度を持っていて、訳じゃない。この人は『敵の攻撃を有る程度予測してから行動するタイプ』のプレイヤーだ。

だったらこの人が予想して無いことをしてやればいい。先手からトリックプレイでこの人に考える時間を与えない！

「そんなでもって……！」

気が付いた事二つ目。この人は予想外の攻撃が来た時に初めて『反射的に盾を出す』。さっきの試合でもキリトの攻撃スピードに対して判断が追いつかなかった場面が何度か見て取れた。そのときの防ぎ方は『とつさに盾を出した』って感じの不自然な防御で、キリトが最後に盾を弾いたのもそんな防御をした後だった。

付け加えると、その時この人は、その時盾の後ろに顔を隠す。つまり一瞬だけ相手を
見ることが出来なくなる瞬間が出来る！

・ ヒースクリフが予想していない攻撃で隙を突いて『反射的な防御』をさせる。
・ その防御中に顔を盾の後ろに隠させる。

こここの二つはとりあえず成功。本番はここから、タイミングがすべての一回勝負……

気が付いた事最後の1つ。この人は盾ごしに相手を見るときは必ず左上からだ。

反射的に盾の後ろに顔を隠した後なら、必ず相手の様子を確認するために左上から顔を出すはずだ。

俺にキリトほどの攻撃力は無い。盾をはじいて攻撃を当てる事は不可能。

だったら盾で防げない攻撃をしてやる。狙うのはヒースクリフの盾の左上、ヒースクリフが顔を出すであろうこの一点。顔を出した瞬間に刀がそこを通過するように攻撃するしかない！

「はい．．．だ!!」

右手に持った刀で突きを放つ。

刀スキルに突き技が無いからただの突きになっているが、初撃決着モードで顔に攻撃が当たるとは問題ない。

このタイミングならいける。さっきのキリトの試合を見て図ったタイミングとドンピシャだ。ヒースクリフが盾からこつちを除く瞬間に一撃入るはず．．．

ガキイ・・・!!
「なっ・・・!!!」

さつきと同じ盾に弾かれる音と驚愕の声。

さつきと違うのは防がれたのが鞘ではなく俺の刀だつて事と、驚愕の声をあげたのが俺だつてことだ。

体重を乗せた攻撃を防がれた事でバランスを崩し、滑り込むようにして地面で体制を立て直す事になってしまった。こうなると当然・・・。

「ふっー!」

「あつぶねえ!!」

ヒースクリフの追い討ちが飛んでくる。体制を立て直したばかりの状態で追い討ち

をかけられたせいで地面に飛び込みながら回避する羽目になった。今度は受身も取れず地面に転げ出る。

体制はめちやくちやだがヒースクリフと距離をとることは出来た。幸運な事に弾かれた鞆の近くに飛び込んだみたいで、鞆を回収する事もできた。

一安心。と言いたいところだが大問題だ。

1. 盾を投げてヒースクリフに反射的に防がせる
2. 隠れたヒースクリフが顔を出すはずの盾の左上に攻撃を放つ
3. ジャストタイミングで攻撃が当たる

っていう流れだったのに最後の最後で見事に防がれた。俺この一発で短期決戦に持ち込むつもりだったから、また策を練り直さないとイケないじゃないか。

「……………ひとつ聞いてもいいかね？」

「……………なんです？」

決闘中だというのにヒースクリフが話しかけてきた。

そういうえばキリトと戦つてるときも何か喋つてたな。意外とおしゃべりなオッサンだ。

「君の組んだ策は、不意を付く攻撃で私に盾を使わせ、盾から体を出す瞬間にそこを突くという考えで間違いないかね？」

「……まあおおむね」

全部バレてんじゃねーか。こっちは一試合だけの情報から必死こいて考えた策だったっていうのに簡単に看破しやがって。俺結構自身あつたんだけど……

「聞きたいのは俺の作戦の内容だけですか？」

「いいや、聞きたいのはその後だ」

「そのあと？」

「なぜ迷い無く盾の左上を攻撃してきた？」

「ああ、そういうことね」

盾を使わせて視線をはずさせた後に、ヒースクリフが顔を出すのがなぜ盾の左上からだと確信して攻撃を仕掛けたのかを聞きたいって事か。攻撃をはずすと圧倒的に不利な状態になるにもかかわらず、迷い無く飛び込んできた根拠を知りたいと。

「さっきの試合でも3回ほど同じパターンで防御をしたときがあつたが、あなたはその後すべて盾の左上からキリトに視線を戻していた。だからこれはあなたの癖で、攻撃するならここだろうと思っただけですよ」

「……癖、か。君はあの一試合を見ただけでそれに気が付いたと言う訳か」

ずいぶんと驚いてくれているようだが、驚いているのはこつちのほうだ。

最後の瞬間まで、俺は自分の作戦が成功する物だと信じていたんだから

「こつちからも聞いていいです?」

「なにかね?」

「その一撃、何で避けたんです?」

この人自身、俺が左上めがけて攻撃した理由を分かっているがなかった。にもかかわらず俺の攻撃を防いで見せた、それも完璧にだ。タイミング自体は完璧だったと思うし、感づかれるような動きをした覚えも無い。さっぱり分からん。

「ふむ、正直なところ君の作戦に気が付いたのは攻撃を防いだ後だ。私がわかったのは君が突き攻撃をしてくるという事だけだ」

「……?」

言っている意味が分からない。この人は確実に俺から視線をはずしていたはずだ。そんな状況で俺の攻撃方法を把握する事なんて……

「盾の後ろに顔を隠していたとしても、音は聞こえる。君が私に攻撃を仕掛けてきた時にはソードスキルの発動音は聞こえなかった。隙を狙った刀使いがソードスキルを使わないということは、ソードスキルでは出来ない攻撃方法を取ろうとしているのではないかと予測したまでだ」

「……」

一瞬疑問が浮かんだがぐうの音も出ないほど納得する理由をすぐさま突きつけられた。そこまで言われてしまったら何も言い返せないな。

「私は突き攻撃をされたときは、防ぐのではなく受け流す事になっている。線ではなく点

の攻撃範囲の攻撃を盾で完璧に防ぐのは難しいのでね。正直なところ、君の攻撃を回避する事ができたのは半分は偶然と言って良い」

「……なるほど」

つまりヒースクリフは、俺が『左上に攻撃してくる』と言う事を見破って回避した訳じゃなく、『突き攻撃が来る』という情報だけを予測して、それに対する対策をとった結果、盾から顔を出すことなく俺の攻撃を回避する事ができたって事か……

必死に頭をひねって考えた作戦だったのに普段どおりの回避方法を取られただけで簡単に防がれたって事か。最高に滑稽だな、俺。

さらに問題なのは今の攻撃を防がれたって事よりも『予測をさせないための先制攻撃』が全く意味を成していなかったことだな。視線さえはずさせておけば思考させる時間を与えなくてすむっていうのは早計だった。

とかこのオッサンなんで刀スキルの事にも詳しいんだよ。普通自分が扱ってない武器のソードスキルの種類なんて把握して無いだろ。どんだけこのゲームに詳しいんだ。

「初手からこちらの不意を付く良い作戦だ。さあ、お互いの疑問も晴れたところで続き

と行こう」

「……………お手柔らかに」

その後も何度も策を練って試してみたものの、すべて間一髪で避けられるかあの鉄壁の盾に防がれるかのどっちかだった。しかも作戦が失敗した後にはもれなくヒースクリフの追撃が待っているわけだから気が気じゃない。

短い間で作戦を練って、それを実行に移して、その後の追撃を鞘で受け流す。

最初っから最後まで集中しっぱなしの決闘だったわけで、当然俺がそんな試合を長い事できるわけが無い。

俺は試合の途中でぶっ倒れ、決闘はドローと言う結果となった。

「いやー惜しかったわねー。かなり良い試合してたじゃない」

「どこがだよ、どれだけせめても突破口すら見えなかったんだぞ」

「あんたはそうかもしれないけど、見てるほうからしたらかなり白熱した試合だったわよ」

「……まあ見てる側がそうだったらいいんだが」

試合が終わり控え室で目を覚ました俺は、付き添ってくれていたリズに俺が気を失っている間の事を聞きながら、今回の決闘についての反省点をまとめていた。

正直完敗だった。時間制限と言うルールに助けられて引き分けにはなったものの、頭ひねって考えた作戦は毎回ギリギリとどかない。何をしても突破口を見出せなかった。だが観客はそうは思わなかったらしい。

攻める俺とそれを防ぐヒースクリフ。逆にヒースクリフが攻め始めたら俺がその攻撃を受け流す。観客だけを見ればキリトとの決闘よりも盛り上がっていたようだ。

何はともあれ、俺がヒースクリフから受けた『決闘を通してプレイヤーの志気を上げる』という依頼は無事に達成できたみたいだな。

「まったく、試合開始からいきなり翰を投げたときは何をしてるのかと思ったわよ」

「いや、あれは立派な作戦でだな」

「そうだとしても、そんな発想がぱっと出る時点でおかしいわよ」

「じゃあそれを防いだヒースクリフは俺以上におかしい奴だな」

「……ほんとに、口が減らない奴ね」

試合結果はどうあれ、依頼は成功と言って良い。

観客がすこしでもやる気を出す事ができたのなら、人前でぶっ倒れた甲斐があったつてもんだ。キリトやアスナでさえ試合に熱中していたらしいし、攻略組のメンバーにも効果があったと信じたい。

「そういえばキリトとアスナはどうなったんだ？」

「結局キリトは負けちゃったからね、入団の事でヒースクリフに呼ばれていったわ」

「ああ、そういえば負けたら入団だったか。まあ結果的にアスナと一緒にいられるならいいんじゃないか？」

「それはそうだけど、勝って自由になりたいってのも少しはあったみたいね」

「キリトもプライドぐらいもってたか……」

勝つても負けても同じ事つてのは少し言いすぎだったかもしれないな。

キリトとしては勝つてアスナを連れ出したっていう気持ちも合つたんだろう。いざ結果が出てみないと、そいつがどうしたかったかなんて分からない物だな。

ピコン……！！

「ん？メッセージ？」

そんな事を考えていると、不意にメッセージの通知音が頭の中に響いた。

試合に対する感想か何かを常連の客が送ってくれたのか？

なんて思つてメッセージを開くと、常連どころじゃない奴からのメッセージだ。

差出人：アルゴ

『オレッチのことで迷惑かけちゃったみたいだな。

借し一つつてことにしといてくれ。』

P.S. ヒースクリフにはちゃんとお礼をしとくヨ』

差出人はアルゴだった。

俺がどうして決闘をする事になったのかを知ったんだろう。自分が人質みたいな扱いをされているって事で俺に迷惑をかけたと思っただけだな。別にいまさらそんな事は気にして無いんだが、そんなことを言ったところでアルゴは聞きやしないだろう。

というか、PS以降に書いてある事のほうが問題だ。

『お礼』とは書いているが、絶対に言葉通りの意味じゃない。アルゴを敵に回したらヒースクリフでも流石に面倒な目にあうことになるだろう。ご愁傷様だな。

「だれからだったの？」

「アルゴからだ。ヒースクリフに『お礼』しとくつてさ」

「それはまあ……、ご愁傷様」

リズも俺の発言で大体理解したんだろう。アルゴを敵に回したらどうなるか、リズだって想像付くだろうしな。

「とういかあいつはどうやってヒースクリフと俺の交渉の情報を手に入れたんだよ。俺は今のところリズにしか話して無いぞ」

「あたしも情報を漏らしてなんか無いけど、アルゴだから仕方ないんじゃない？」
「ホントにあいつの情報収集能力はどうなってんだよ」

無敵の団長様も、あの鼠と戦うとなるとずいぶんと手を焼く事になるだろう。俺やキリトとの決闘みたいに簡単には行かないぞ、あいつは。

俺だっしてやられた側だ。あの人にはしばらくアルゴを相手に苦勞してもらいたいもんだな。

鼠の憂さ晴らし

ここ数日はバカみたいに忙しかった。

ヒースクリフとの交渉から始まって、そのまま大勢のプレイヤーの前で決闘をこなして、その決闘を見たプレイヤー達からの以来が殺到。

それも殆どが『あの戦い方を教えてくれ』という内容だった。

新聞だったり人から聞いたり知っていたけど見たのは初めてだった、っていうプレイヤーが影響されたらしい。

一応依頼だからきちんと教えはしたが、全員が『これは無理』と言い残してリタイアしていった。

『攻撃を受け止める』ならまだしも、『攻撃を受け流す』となるとかなり繊細な武器操作が求められるわけで、それに伴ってかなりの集中力を要する。

俺の場合は盾をもてない刀スキルを使っているっていうのと、『防御するのが苦手』って理由で回避と受け流す事に特化した戦い方になっているが、普通の人だったら盾とか刀で直接防いだほうがはるかに安全な上に楽だ。

言ってしまうえば俺の唯一の自慢である集中力を十分に発揮するための構えで、他のプ

レイヤーがまねしてもただやりにくいだけだろう。むしろマイナスに作用する。

きちんと盾で防いで戦えるプレイヤーだったらそっちの戦い方を鍛えたほうがいいだろうし、俺だつて防御が上手く出来るならそうする。

そんなこんなで俺は、やっと迎えた定休日とそれを提案したりズに内心感謝しつつ、久しぶりにコーヒーを飲みながらだらだらと時間を浪費していた。

・
・
・

「儲かるのはいいが、昔みたいに暇な店番が恋しいな」

「暇なときはもつと客が来て欲しいって嘆いてたじゃないか」

「まあそれはそうなんだが……」

今店には俺とアルゴの2人だけ。ここ最近はお茶会メンバーの全員が忙しくしていたせいであまりゆつくり話をする時間が無かったんだが、ひとまずいろいろと一段落したおかげで今日やつとお茶会ができるようになったわけだ。

「まあ今日はゆっくり休むよ。だらだらすごすのも久しぶりだからな」

「客の量はともかく、最近のクー坊が大忙しだったのは事実だな。イヤ、それを言ったらキー坊もカ」

「あー。あいつはヒースクリフとギルド加入も賭けてたからな、いろいろと面倒な手続きみたいなのしてたみたいだぞ。結構でかいギルドだし」

「けどキー坊の団服姿にはかなり笑ったナ、白い服があんなに似合わないなんて思わなかったヨ。クー坊も見に行けばよかったのニ」

「………確かに似合わないそうだな」

アスナが着てるような真っ白な鎧に赤の模様とか、キリトと正反対のイメージカラーだ。想像する事すら出来ないくらいだ。

ほかにも団員はたくさんいるから色んな奴が着てるっていうのは分かってるんだが、あの制服を見るとアスナのイメージしか沸かなくなってしまう。そのせいでキリトが着てたらアスナのコスプレをしているようにしか見えなくなりそうだな。

「今日来るのを楽しみにしとくかな」

「それがいいナ。ちなみにキー坊の血盟騎士団バージョン写真はもう500枚は売れた」

「お前そんなもん売ってやるなよ……」

「オレツチは客の需要にこたえただけだ」

「お前情報屋だろうが」

「ニヤハハハハ！細かい事はきにするナ！」

なんだかんだで、こいつもエギルと同じくらい商魂たくましい奴なんだよな。

『自分のステータスですら情報として売る』ってのをまことしやかに囁かれている、情報屋の『鼠のアルゴ』って言えば、今のSAOで知らない奴はいないだろう。

日常に役立つ情報からクエスト情報やらボス攻略情報まで、色んなプレイヤーがこいつを頼ってくるくらいだからな。さぞかし儲かってそうだ。

職業柄敵が多くなりそうだが、みんなこいつを敵に回すとどうなるかが目に見えているみたいで、意外と平和にやれているらしい。

……そういえばつい最近敵に回した奴がいたな。

「結局ヒースクリフに『お礼』はできたのか？」

「んー？ ああそれカ。いろいろ調べただけど、あんまり大きなスキャンダルが出てこなくてナ。小さい事でチマチマ『お礼』し続けてるって感じだナ」

「小さなことでチマチマ・・・ねえ」

『お礼』って言葉を使つてはいるが、早い話が仕返しだけどな。

自分を人質みたいに使われたことで俺が決闘を受ける羽目になったことに対して結構怒つてたからなー。リズと一緒に何をすれば一番ヒースクリフが嫌がるのかって話をずつとしてたくらいだ。

「小さい事つてたとえげば？」

「ヒースクリフが行こうとしたレストランを混ませて食事できないようにしたり、執務室に『頑張つて作りました。食べてください』って手紙を添えた失敗料理をおいたりだナ」

「地味に嫌だな・・・」

「毎日欠かさずやつてるヨ。料理に関してはたまーにアーちゃんが作った成功料理も混ぜてル。見た目は変えないようにしてナ」

「えげつないな」

そんなもん毎日されたらたまったもんじゃない。

とうかアスナが作った料理か失敗料理かのロシアンルーレットをさせるって発想がえげつない。レストラン混ませたりして外食しにくくしてるあたり徹底してる。

アルゴが情報を流せばレストランに人を集める事くらい簡単だろうし、冗談じゃなく本気でやってるなこいつ。

「SAOプレイヤー唯一の楽しみの食事を利用しての仕返しって、たちが悪いな」

「流石のオレットチも攻略の妨げになるような仕返しはしたくないからナ。ヒースクリフ個人が嫌がる事だけを考え抜いてみたわけだ」

「まあ、それはたしかにそうか」

なんといつてもトップギルドの团长様だ。直接的に妨害なんかしたらかなりのプレイヤーにも飛び火する可能性がある。今やってる事程度だったら、ヒースクリフが言わない限り他のプレイヤーに伝わることも無いし、そういうのわざわざ人に言うタイプじゃなさそうだから、一人で鬱陶しい思いしてるんじゃないかな。

「なかなか良い仕返しを思いついたもんだな」

「リツちゃんときんぎん話したからナ。これが通用しなくなっても次のを用意してるから安心してくれ」

「安心できねえよ」

ヒースクリフも面倒な奴らを敵に回したもんだ。半分ぐらい自業自得とはいえ少し同情する。

まあその代わりにキリトを血盟騎士団に引き込む事もできた上に、大事な部下のメンタルケアもできたんだから、プラスマイナスで言えばプラスだろう。

キリトが加入した事でギルドのレベルも一気に上がっただろうし、キリト目当てで入団を希望する奴だって何人かいるだろうしな。

「そういえばキリトとアスナは今日任務なんだっけか？」

「ああ、そうらしいナ。けどキー坊とアーちゃんは別々のパーティらしいゾ」

「はあ？あの2人を分けて大丈夫なのか？」

「血盟騎士団としても戦力はバラけさせたいだろうからナ。いつまでもキー坊とアーちゃんまでパーティ組ませるわけにも行かないって事じゃないか？」

「それはそうだろうけど、キリトが他のメンバーと上手くやっていけるとは思えんのだが」

「キー坊もこれを期にポッチを脱却すればいいじゃないか」

「………相手が友好的だったらいいけどな」

団長自らヘッドハンティングしてきたうえに、美人副団長と交流が深い。加えてユニクススキル持ちの元ソロプレイヤーって、流石に団員全員が受け入れてくれるとは思えないんだよな。

俺とアルゴの情報操作で、キリトのプレイヤーとしての立場はかなり良いほうだが、ギルド内となるとまた話は違ってくるだろう。今まで支えてきたギルドにいきなり入ってきて、尊敬してる幹部連中からちやほやされてる新人がいたら、良い思いはしないだろう。

「殆どのプレイヤーはキー坊に対して友好的みたいだな。ただビーター時代にキー坊が直接関わったプレイヤーは、あんまり友好的じゃないみたいダ。逆恨みだけどナ」

「ビーター時代に関わったプレイヤー？」

「つい最近なだけどナ？ アーちゃんがキー坊に手料理を振舞うって話になった時、

護衛のプレイヤーがすごい突っかかってきたらしいゾ」

「ああ、エギルがラグーラビット食い損なつた時か」

「その場ではアーちゃんが帰らせたんだけど、次の日の朝に家の前でずーつとアーちゃんが出てくるのをまってるらしい」

「……うわあ」

アスナも苦勞するな。普通にストーカーじゃん。

ファンが多いとは聞いていたけど、そりゃあ女性プレイヤーだもんな。そういうヤバイ男性プレイヤーに目を付けられる事も有るってことか。

「そいつがキリトに対して友好的じゃないのって、アスナと仲良いから許せないみたいな理由か？」

「それもあるだろうけど、そいつがキー坊にデュエルで負けたからだろうナ。その日にアーちゃんとキー坊がダンジョンに行く約束してたみたいで、待ち合わせ場所まで追いかけてきたそいつとキー坊が戦って、キー坊が返り討ちにしたって訳ダ」

「なんか、前に聞いたキリトの風評被害に似たような内容だな。明らかに相手のほうが悪いだろ」

「いつものことだけどナ。一応血盟騎士団からお叱りは受けたみたいダ」

「でかいギルドも大変なんだな。そりゃあヒースクリフみたいな奴じゃないと無理だわ」

自分の意志を通すために強気になれる奴。もしくは圧倒的なカリスマ性を持っている奴じゃないと、あそこまで大人数のプレイヤーは指揮できないのかもな。

強気な意思でプレイヤーを指揮してる『アインクラッド解放軍』。少人数だがクラインのカリスマ性で引つ張つてるところがある『風林火山』。それでその両方を兼ね備えてるヒースクリフの『血盟騎士団』か。ギルドつてのギルドマスターでかなり空気が変わる物なんだな。

「そういえばクー坊はギルドに入ったりしないの力？」

「入ったら開きたい時間に店を開けなくなるからな。エギルみたいに商売系のギルドに入るのも考えたんだが、正直めんどうだからやめたんだよ」

「ホントニ、かなり適当な経営してるヨ」

「ほっとけ。それにそういうギルドでやる事って言ったら基本的に情報交換とかだろ？」

俺にはお前がいればいいしな」

「・・・そ・・・そうなのカ」

何時からそうなったかしらんが、客から聞いた話だとアルゴは俺の専属の情報屋みたいな認識らしい。アルゴの情報を持って万屋の仕事をしているから、クエストの助っ人とかだと信頼度がかかなり高いとか何とか、そんな感じらしい。

アルゴの方だと、『アルゴを敵に回すと剣影も敵に回る』みたいなかんじの認識になっているらしい。なんだかんだでWINWINの関係だな。

「私がいれば・・・いい・・・」

「どうした？」

「いいいや!!なんでもないっテ!!」

「まあそれなら良いけど・・・」

・ ・ ・

外はもう黄昏色で、普段の閉店時間と同じぐらいの時間になってしまった。

どうして休みの日ってのはこんなに早く過ぎるんだろうか。久々の休みだったのにアルゴと喋って、午後からリズを交えてお茶してただけだった。なぜかアスナとキリトはいつものお茶の時間になっても来なかったから3人になったが、殆どいつもと変わらずに終わった休日だった。

こんな日常も後何日続く事になるのやら。

クオーターポイントの75層の攻略も着々と進んでるみたいだし、このままだと半年もすれば俺達は開放されて現実世界に戻れるのかもしれない。少し複雑な気持ちもあるが、SAOプレイヤーの悲願だ。攻略組を応援しておこう。

そんな事を考えていると、店のドアが開く音が聞こえてきた。

こんな時間に誰だ？ リズとアルゴも帰ったし、アスナとキリトが遅れてきたのか？

「遅くにすまない。クレハ君はいるかね？」

「ん？ ああ、何だあなたか」

銀色のオールバックの髪と赤と白の鎧。

正直めんどろ事を持つてくるイメージしかないプレイヤーだ。

「ヒースクリフ団長がこんな時間に何のようですか？ それも定休日の俺の店に」

「……なるほど。今日は定休日なのか、それはすまない事をした」

「知らなかったってことは、依頼に来たって事ですか」

「ああ、急ぎの依頼だ」

この人が急ぎの依頼つて、嫌な予感しかしないんだけど。

今日が定休日だつてことを伝えたらめずらしく落胆してたみたいだが、前の『交渉』のこともあるから正直なところ素直に依頼を受けようと思えないんだよな。

「まあ、話くらいなら聞きますよ。知らない仲じゃないですし」

「ほんとうかね!？」

「え……ええまあ。また無茶な『交渉』でもふっかけてこなければ、ですけど」

「その事に関しては誠心誠意謝罪しよう。申し訳ない」

「え? い……いや、もう過ぎた事ですし……」

なんだ？前回と打って変わってかわってかなり下手に出るじゃないか。それだけ切迫した状態ってことなのか？

「とりあえず依頼内容を聞かない事には何にも出来ませんよ」

「ああ、すまない。では簡潔に話そう」

「お願いします」

この人がここまでして俺にして欲しい事って何だ？

前にも言ったが個人で抱える問題なんて、この人だったら団員達に頼めば解決できるし、そもそもこの人が問題を抱える事なんてそうそうないだろう。まったく予想が付かない。表向きとはいえSAO全体の事を考えて俺とキリトと戦ったような人だ、かなりやばい内容の可能性も……

「君に料理を作って欲しい」

「はっ。」

「一度で良い。私に食事を作ってくれないか？」

「……………」

想像以上にくだらない内容だった。

わざわざ俺のところまで来て今までの事を謝罪までしてやって欲しい事が飯って、個人が抱える問題とかそういう次元じゃないだろ。低すぎるわ、次元が。

「ダメかね？ 報酬なら君が求める物を出そう」

「いや……全然大丈夫ですよ。すぐ作るんで待つててください」

「本当かね!? いや、ありがたい。最近まともな食事ができていなくてね……」

「ああ、知ってます」

アルゴの嫌がらせ、かなり利いてるみたいだな。アルゴとリズに伝えたら喜びそう
だ。

ヒースクリフがこんなに感情表現豊かになってるの見るの初めてだし。鬱陶しい思
いしてるとかそういうレベルじゃないくらいしんどそうだ。

っていうかこの人毎回律儀においてある料理食ってたってことか。団員が作ったか
もしれないっていう可能性はあるから棄てられないってのは分かるが、どんだけ律儀な

んだ。失敗料理だって分かった瞬間に何か適当な物買いに行けばいいだろうに。流石にアルゴも店を全部混ませるなんてできないんだし、探せば有るだろ……

「それで、何を作れば良いんです？」

「ラーメンを頼む」

「……りょーかいです」

前の『交渉』に來た時みたいな空気がしびれるような圧迫感もない。普通に年上の知り合いと話してるみたいだ。

トップギルドの団長も人間ってことか。こっちのほうが話しやすくして楽だからこのままでもいいもんだ。アルゴの仕返しも意外と良い効果を發揮したな。

「じゃあ10分くらい待っててください」

「了解した。……実に楽しみだ」

けど流石に今日で辞めさせよう。

結婚報告

3日前の夕方。俺とアルゴが店で駄弁つてる間にいろいろな事が起こっていた。

アルゴが話していた『キリトに友好的じゃない奴』。プレイヤー名クラデイル。

結論から言えば、こいつはレッドギルド『笑う棺桶』ラフィンコンフィンのメンバーだった。血盟騎士団に入ったときからずっとそうだったのか、途中でそうなったのかは分からないが、こいつがキリトに正体を現した時、躊躇いなく同行していたプレイヤーであるゴドフリーを

PKした。

プレイヤーキル

P K。これはただのMMOならたいした問題にはならない。それもゲームの楽しみの1つだ。

だがSAOの世界でのPKはそんな甘い物じゃない。『HP 0 || 死』の世界でのPKは現実世界での殺人と何も変わらない。そんなバカげたことを日常的にやってのける『笑う棺桶』ラフィンコンフィンというレッドギルド。俺やシリカが出会ったオレンジギルドよりたちの悪い本物の殺人集団のメンバー。

キリトはそいつに命を狙われたらしい……

任務の途中で休憩を挟み、昼食を取ろうとした時に事件は起きる。

キリトとゴドフリーの飲み物に麻痺毒が仕込まれていて、キリトとゴドフリーは行動不能になった。行動不能になったゴドフリーに対し、クラデイルは躊躇いなく剣を突き刺し、そのHPを全損させた。右腕につけた『笑う棺桶』ラフィンコフインの刺青を見せつけながら、未だ動けないキリトを殺すためにじわじわと剣を突き刺していく。

だが、キリトのHPが全損する直前。ゴドフリーの位置情報が消滅した事に気がついたアスナが駆けつけ、ギリギリでクラデイルを弾き飛ばす事に成功。アスナはクラデイルへ追撃を続け、HP全損寸前まで追い込んだが、殺す事が出来ないアスナでは止めを刺す事はできず、逆に反撃を受けてしまう。

剣を振りかぶり、アスナを殺そうとするクラデイルを止めたのは、麻痺毒から回復したキリトの一撃だった。その一撃でクラデイルのHPは全損し、アバターは結晶となって消えた。

そして、その後……

・ ・ ・

「……もう一回言ってもらって良いか？」

「いや、だからさ」

「私とキリト君はね」

「結婚したんだ」「結婚したの」

「……なんで今の話の流れからそうなるんだ。」

かなり真面目な、というかぶつちやけかなり重い話を聞かされてどうしようかと思っていたのに、気がついたらノロケ話にシフトされていた。

自分のギルドの中にレッドギルドのPKがいて、そいつに殺されかけた奴がその日のうちに結婚ってわけわからんわ。

「まあ……取り合えず言いたいことは山ほどあるんだが、それは後に回して先に一つだけ言わせてくれ」

「なんだ？」

本当に言いたい事は山ほどあるが、俺が最初に言いたいのは……

「……まで来るのにどんだけ時間かけてんだよー」

「え？」

アスナから恋愛相談受けたのが55層の時だぞ？もう10層近く進んでるじゃねーか。あれから週に3回以上は俺の店でお茶会してたくせにお互い何にもやしないし、それなのにお互い意識してるのは周りにはバレバレだったし、正直俺もリズムもさっさとどっちかに本当のことを話してやろうかと思つてたくらいだ。

「アスナは一人で俺の店に来た時はキリトの話しかしないし」

「う……」

毎度毎度俺の店に来てまでノロケ話をしていかないで欲しい。こちとら男一人寂しく店番してゐるんだから、美少女から聞く好きな人の話とか、その気がなくても悲しくなる。

「そうなのか？なんか今聞くと照れるな・・・」

「キリトもそうだろうが」

「うぐ・・・」

その美少女と一緒にいた話を友人から聞くのはさらにキツイ。なんかこう、現実を突きつけられている感じがヤバイんだよ。

まあ、ここまでくると『やつとか』って思いもあるが、『よかった』って気持ちのほう大きい。キリトもアスナも攻略組の最前線にゐるって事もあつてか、かなり危なっかしいことをする2人だからな。その2人がお互いを支えられるような関係に慣れたつてのは友人として素直にうれしい。

「まあ、その・・・なんだ。よかつたな、2人とも」

「ああ、クレハのおかげだ」

「そうね、クレハ君がいなかったらこうはなれなかったと思うわ」

「……そうか、役に立てたなら万屋冥利に尽きるってもんだ」

2人からの言葉に答えながらも、俺は逆の事を思っていた。

あの時アスナからの依頼を断っていたとしても、この2人はこうなっていたはずなんだ。ただ俺がいた事で少し道筋が変わっただけ。

こいつらが通じ合えたのは、他ならぬ自分達のおかげなんだ。

・
・
・

「それはそうと、お前達はこれからどうなる予定なんだ？」

キリトとアスナの結婚報告の話に気をとられていたが、かなり危険な目にあっている2人だ。ついでに言えば大ギルドであるKOBにレッドギルドのPKが入り込んでい

たなんてしやれにもならない大事件だ。この事を公開したら他のプレイヤーに大きな不安を与えるだろうから、後処理はヒースクリフが上手い事やるんだろう。

だがこいつら2人は別だ。言ってしまったえば今回のキリトは100%被害者であり、アスナもそれに近い立場だ。ギルドメンバーに殺されかけた2人を今まで通りギルドに縛り付けるなんてことは流石にないだろうが……

「今回の件で、団長から一時脱退の許可を貰ったの。しばらくは2人でゆっくり過ごそうと思ってるわ」

「22層に綺麗なログハウスがあつてさ、前から目をつけてただけど昨日ついに手に入れられたんだ」

「……そうか。前はあんなに面倒な事をやらされたのに、今回は結構あっさり抜けられたんだな」

「私が今の血盟騎士団のあり方に疑問を感じるって事を伝えたら、ちゃんと認めてくれたわ。前回は半分私のわがままみたいな物だったから」

流石のヒースクリフも、今回の件に大しては慎重になるってことか。

アスナの言うとおり前回は個人の問題だったが、今回に関してはギルド全体の問題

だ。それも昔行われた『笑う棺桶』ラフィン・コフィン討伐作戦以来の大問題。ギルドメンバーの情報確認やら任務の見直しなんかもある必要があるだろうしな。

「今はそれが一番良いだろ。ギルドが落ち着くまでは信頼できるプレイヤーと一緒にいるべきだ」

「団長もそう思ってるみたい。けど、別れ際になんとか意味深な事を言われたわ」
「意味深な事？」

「『君たちはすぐに戦場に戻ってくるだろう』だつてさ。どういう意味だと思う？」

「……さあ？ まあ今はほっとけばいいさ」

「うーん……それもそうね。分からない事を気にしてても仕方がないもの」
「確かにそうだな」

『君たちはすぐに戦場に戻ってくるだろう』か。相変わらず面倒な言い回しをするおっさんだ。ヒースクリフがそんな事を言ったのは、今の階層が75層だからだろう。いわゆるクォーターポイントだ。今までも25層と50層には桁違いに強いボスモンスターがいたみたいだし、今回もきつとそうなんだろう。

こいつら2人はきつと、攻略が難航している事を知ると絶対に戦場に戻るはずだ。

ヒースクリフが言いたかったのは、おそらくそういうことだ。

けど、こいつら2人はやつと分かり合えたんだ。ゆつくり出来る時間にそんな不安を与えるのは野暮ってもんだろう。ここは黙っておくのが一番かな。

「そのヒースクリフだけど、KOBはこれからどうするつもりだ？　ギルドメンバーにPKなんてマイナスイメージでしかないだろう」

「そうね……。情報の拡散は押さえてるみたいだけど、ゴドフリーがいなくなった事は隠せないもの。みんなに知れるのも時間の問題だと思うわ」

「けど、ヒースクリフのカリスマ性ならギルド内で内部分裂、なんてことは起こらないと思うぞ」

「へえ、キリトがそういうなんて珍しいな」

「数日間だけ俺も一応KOBのメンバーだったからな。他のメンバーと話してみても分かったが、ヒースクリフに対する信頼はこのくらいじゃ崩れそうにない」

「なるほどね……」

そこはやつぱり大ギルドのギルドマスター、ギルドメンバーからの信頼は厚いつてことか。けど、それを言ったらグラデイルだってギルドメンバーだ。警戒するに越した

事はないだろう。それよりも問題なのは……

「そうなるよ、ギルド内よりもギルド外のほうが問題だな」

「ギルド外？」

「KOBと並ぶ大ギルドだよ。アインクラッド解放軍と聖龍連合だが、今回の場合厄介なのは軍のほうだな」

大きさ的にはKOB以上の規模のアインクラッド解放軍、通称ALF。74層の時に数十人でボス攻略をしようとして失敗したギルドだ。ギルドの方針なのか何なのかは知らないが、あまり良い噂は聞かない。

通称DDAと呼ばれる聖龍連合も規模はほぼ同じだが、昔みたいに積極的に前に出てくるタイプじゃない。一時的なオレンジ化も辞さない危ういギルドだが、それは攻略のためよりは自分たちのためになる行動が目立つ。

SAOの大ギルドと言えば、KOBを含めてこの3つが主流だろう。

「それは……なんでDDAよりALFのほうが危険なの？」

「ALFのほうがギルドの状況が悪いからだ。74層での攻略失敗以来、ギルド内で揉

めてるみたいだし、正直一般プレイヤーからの評判もかなり悪い。KOBを貶める事で、相対的に自分達の評価を上げてやろうって考える可能性が高いってことだ」

「なるほど、DDAはどちらかと言うと保身的だ。レアアイテムの入手で手段を選ばないところもあるが、SAO内での評価を気にするタイプじゃない。リスクを犯してまでKOBにケンカを売る必要がないってことか」

「そういうことだな。それに、ALFは最近始まりの町で結構好き勝手してるみたいだからな。一般プレイヤーを従わせるためにギルドとしての力は重要だ」

「一般プレイヤーを従わせるって……ALFはそんな事してるの!?!」

ああ、アスナは知らないのか。

キリトもなんだか面食らってるみたいだし、やっぱり常に最前線にいる攻略組にとってはあまりなじみの深い話じゃないんだろう。だけど、下層プレイヤーにとってはべつだ。

「ああ、徴税と称して一般プレイヤーからアイテムなりコルなりを集めてるみたいだ。始まりの町にいるプレイヤーは殆ど戦闘経験がない訳で、そんなプレイヤーがALFのごつい鎧を着たプレイヤーに逆らえるわけもない」

「そんなの……！　すぐにやめせないと！」

「アスナ！　ちよつと落ち着くんだ。気持ちは分かるけどそんな簡単な問題じゃないだろ？」

「それは……そうだけど」

「それにクレハがそれを知っているのに何もしない訳がない。何か手を打ってるんだろ？」

ホントに、こういう勘だけはやたらと鋭いのは何でなんだろうな。

「アスナはALF設立の理由ってのは知ってるか？」

「理由？　普通に攻略をスムーズに進めるために攻略組の人が作ったんじゃないの？」

「いや、実は全く違う。ALFはデスゲームの中でたくさんの人が平等に食料を手に入られるようにすることを目的として出来たんだ」

「え？　けどALFは攻略組にも沢山いるじゃない。それに一般プレイヤーからの徴税だなんてそれと全く逆の事を……」

「ああそうだ、当初の目的と今のALFの方向性はバラバラだ。それはALFがでかくなりすぎた事が原因で、今まさに問題となっていることだ」

「大きくなりすぎた？」

さつきも言った様に、ALFは今となってはSAO最大と言っても良いほどの大ギルドだ。今現在7000人近くが居るSAOの中での攻略組大ギルドなんて数えるくらいしかない。そんななかで大きくなりすぎたギルドがどうなるかなんて考えなくても分かる。

「発足者の意見なんて関係ない。内部分裂だよ」

「内部………分裂」

キリトがKOBでは起こらないだろうと言った内部分裂。人が多くなればなるほど意見の食い違いや衝突が起こるのは当然で、それを起こさせずにまとめるのは至難の技だ。ヒースクリフみたいなカリスマ性と実力がないと早々出来るものでもない。ALFはその失敗例だ。

「発足者とギルド幹部との意見の食い違いだ。ALFはそういうの多いみたいでな、今はキバオウっていうプレイヤーの一派が徴税だのを繰り返しているらしい」

「……キバオウか」

「なんだ？知り合いなのか？」

「知り合いと言うかなんというか、目の敵にされてるだけだよ。第1層で俺をビーターって言い出したのもキバオウだし、それ以降の攻略会議でも何度も衝突したよ」

「確かに、βテスターを極端に目の敵にしたみたいだな。それに自分が思い込んだことが100%正しいと思ってるタイプだし、キリトとは相性が悪いかもな」

「むしろクレハ君とキバオウさんが知り合いなのが意外ね。クレハ君もβテスターなのに」

「別に俺も知り合いってほどじゃない。俺のことを書いた新聞記事が出回った時に少し話したってだけだ」

そのときは俺の事を慕ってくれたというか、βテスターに対する考えを改めたみたいな事を言っていたが、どうやら根っこところは変わらなかったらしい。

自分の意見が100%正しいと思ってる。それが思い込みだという可能性を疑わない。そんな奴だった。

「だがキバオウ一派なんてのが出来るくらいにはALFの中で慕われてるんだろう。自

分の身内には面倒見がよさそうな奴だったしな」

「ああ、それは確かにそうだと思う。直情的な奴だけど、周りを巻き込む影響力はある奴だ」

「それがまた面倒なのよね・・・攻略会議もキバオウさんの発言に賛成するプレイヤーと反対するプレイヤーで論争になって、そのままずるずる時間だけが過ぎたり」

「攻略組も大変なんだな」

なんかこう・・・各ギルドが集めたボスの情報とかを合算して、隊列とかを話し合っ
て決めてるってのは知っていたけど、そんなに揉めるようなものだったのか。そんなの
リアルな会社の会議みたいじゃねーか。

「まあともかくだ。そのキバオウ一派なんだが、ギルドメンバーを74層に特攻をさせ
た所為でギルド内での立場がかなり悪くなってるらしい。そのおかげでだんだん勢力
は弱まってるみたいだから、徴税みたいな馬鹿な事はもうすぐなくなるはずだ」

「コーバツツさんたちのパーティね・・・あんな無茶な事をさせて死者まで出したん
だもの、糾弾されるのは当然だわ」

「なるほど、じゃあ殆ど解決に向かっているわけか。それにしても、クレハはやけにAL

Fの事が詳しいじゃないか」

「ああ、ALFから依頼が来たからな」

「依頼？」

俺だつて初めからこんなにALFの情報を持つてたわけじゃない。まあ一応情報屋みたいな事もしてるから多少の知識ぐらひはあつたが、ほとんどはつい最近手に入れたものだ。アルゴみたいなどこからともなく湧いて出てくるような情報源を持つていない俺としては、情報つてのは基本的に依頼主から入る事が多い。

「ALFギルドマスターのシンカーさんとその側近の人からの依頼だ。今のギルドの内情をどうにかしたいってさ」

「ALFギルドマスターって……ずいぶんとすごい人が来たんだな」

「ギルドマスターってことは、一番最初にALFを作った人よね？」

「ああ、さっきの話で言う『デスゲームで平等に食料が行き渡るようにしたい』って考えでギルドを作った発足者だ」

自分だつてそのデスゲームに巻き込まれた一人だつていうのに立派なもんだ。自分

が助かる事じゃなくて皆を助ける事を最初に思いついて、それを実行しようとしたんだからな。けど、そういう善意を持って動ける人つてのは、どうしても悪意を持った奴に巻き込まれることが多い。今回がまさにそうだ。

「本当は俺とシンカーさんで協力して、中と外からキバオウの動きを抑制をしてたんだが、思った以上に無茶をする奴だった。74層にプレイヤーを送ったのがキバオウだつて聞いたときは愕然としたよ」

「普通はあんな強攻策を取るなんて考えられないもの。仕方ないと思うわ」

「というより、俺達による抑制を受ける前から少しづつキバオウの評価は下がってたみたいで、ギルド内での評価を無理やりにも上げようと思つての強攻策だったらしい」
「無茶苦茶じゃないか……」

せっかく直接的過ぎない抑制方法とか、刺激を与えない意見のずらし方とか色んな面倒な事をしてたのに一気に無駄になった。それも最悪な形で無駄にしてくれた。

「まあ何はともあれ、ALFの過激な動きは大分収まったし、キバオウもこれ以上は無茶な事もできないだろうから安心してくれ」

「それならひとまずは安心かな」

「そうね、何かあつてもクレハ君に依頼を出してるなら安心だわ」

「・・・そりやどうも」

期待しすぎだけだな

・
・
・

「それじゃあ、俺達はそろそろ帰るよ」

「ああ、今のうちに新婚生活を満喫しとけ。クラインあたりに邪魔されないうちにな」

「あはは・・・クラインさんでもそれは流石に・・・」

しないだろう。とはつきりアスナが口に出来ないくらいには信用がないみたいだな。まあ、あんだだけモテないとか女の子と話したいとか叫びまくってたら自業自得だけど。

残念だったなクライン。お前がキリト達の家を知るのは当分後になりそうだ。

「暇が出来たら遊びに来てくれよ。歓迎するからさ」

「ああ、アルゴとリズも連れていくよ。新しいたまり場はお前達の家だな」

「今までクレハ君の家ばかりお邪魔してたから、今度は私達ももてなしてあげるね」

「お前達というよりはアスナだけだろ。キリトが人をもてなせるとは思えん」

「それは流石にひどくないか!？」

「事実だろ」

アスナの料理なりお菓子なりはかなり期待できるが、キリトが俺達をもてなすって何をするんだ？ ソードスキル用のサンドバックになるとか？

「なんか物騒な事考えてないか？」

「気のせいだ」

「2人は本当に仲が良いよねー」

「嫁さんが何いってんだよ」

付き合う過程ぶっ飛ばして結婚したバカツプルの片割れに中が良いとか言われてもな。今も手繋いでるし、こんなもん嫉妬心しか沸かない。いや、別にキリトと仲が良いアスナに対しての嫉妬じゃなくて逆な。幸せな顔をしたキリトを殴り飛ばしたい。

「クレハ君もしちゃえば良いのに。結婚」

「はあ？そんな相手いるわけがないだろ」

「うわあ………」

「何だその顔は」

さっきまで幸せオーラ全開だったキリトとアスナの顔が一瞬で渋い表情になった。

「クレハは俺達に『どんだけ時間かかってんだ』なんていえないと思うぞ」

「ほんとよね。早くどうにかしたほうが良いと思うよ?」

「はあ?」

さっきから何を言ってるんだこいつらは。どうにかするも何も、何をどうすればいいのかが分からんのだが。

「まあ、自分のことに関しては全然自覚がないのがクレハだしな。仕方ないだろう」

「それもそうね。クレハ君だものね」

「・・・・・・馬鹿にされてる気がする」

「気にしない気にしない」

やっぱり馬鹿にしてるだろ。こいつら。

男だらけの祝賀会

「なあークレハよー……なんでキリトのやつばかり女の子に囲まれてるんだよお……」

「お前その話するの5回目だぞ」

「明らかに飲みすぎだ。クレハも大変だな」

今俺が居るのは俺の店である秋風じゃない。

全体的に木製の印象が強く、少しうす暗いカウンター式のバーに座っている。カウンター席に座っているのは俺とクラインの2人。そのカウンターを挟んで向こう側に居るのはこのバーのマスターであるエギル。エギルの店は昼は雑貨屋だが、夜はこうしてバーとして開放しているらしい。今日は男3人でキリトの結婚報告の話に華を咲かせていたわけだ。

クラインとエギルは1層のころからキリトと面識があつたらしいし、俺はβテスト時代からの縁だ。まあ55層まで接触を避けていたから少し違和感があるかもしれないが、ここに居る全員キリトとは長い付き合いってことになる。そんなキリトのことをよ

く知ってる3人が結婚報告を着に飲み交わしたところで罰は当たらないだろう。

……まあ俺が飲んでるのはコーヒーだけど。

「どうかクライン。お前最初のほうは『よかった、よかった』って言ってたじゃないか」「それとこれとは話が別なんだよクレの字よお……」

「何だそりゃ」

もうどれだけ飲んでるのは分からないが、クラインはさつきから机に突っ伏しながら話している。祝い酒から自棄酒になってるなこれは。

最初はキリトに心を許せるようになった人ができた事にかなり喜んでいたクラインも、酒が進むに連れて自分の周りの女気の無さに対する愚痴がメインになってきて、今じゃこんな状態だ。

「だいたいエギルはリアルで嫁さんが居るって言うし、クレハは店にいつも女の子がいるしよお。寂しい野郎は俺だけじゃねえか！」

「おいちよつとまで。今の聞き捨てならんぞ」

「なにがだよ」

「俺が仕事場に女を連れ込んでるみたいだろうが」

「事実じゃねえか」

「事実じゃねえよ」

「いつつも居るって言ってもリズとアルゴとアスナぐらいだろ。それにそのアスナはキリトと結婚してるし、アルゴは情報交換とかの仕事の話をしに来てるだけだし、リズは俺の店に菓子食いに来てるだけじゃないか。」

「というかクラインだってお茶会に参加した事あるだろ。あの時みたいになんか集まったメンバーでたらだら駄弁ってるだけだ」

「だとしても女の子に囲まれてるのは事実じゃねえか!」

「まあそれはそうなんだが……」

「おいクライン。男の嫉妬は醜いだけだぜ?」

「エギル……。だったら俺はどうすればいいんだああ!」

改めてみるとすごい光景だ。

20代前半位の男がカウンターに突っ伏して女気の無さを嘆いている。まあ酒の力

とかいろいろあってこうなってるんだろうが、やってるのがクラインだからか情けないって感想よりも仕方ないってのが強いな。

「それなら、目の前に居るモテ男にモテるコツでも聞いてみたらどうだ？」

「コツ？・・・それだあ!!」

「はあ？」

エギルがまた面倒な事を言いやがった。何だよコツつて。

・・・というかクラインの反応からものすごく嫌な予感がする。

「クレハに依頼だ！俺に女の子を紹介しろ！」

ほらきた。

・ ・ ・

という事で万屋『秋風』出張版。

といつても場所はエギルの店な上に営業時間もとつくに過ぎているから万屋業としては成立させず、身内同士の他愛もない話のネタってことでクラインの依頼に乗っかるだけだけどな。

「あくまでも正式な依頼じゃあないから、ただの人生相談みたいなもんだ」

「全然かまわねえよ！ 早速俺に……」

「とりあえずお前の要望の女の子を紹介するってのは無しだ」

「おいそりやないぜ!？」

「当たり前だろうが。俺は日常で抱えている問題を解消しちゃいるが、食い物がなくて困ってるやつに食い物を与えても意味がないだろうが。食料の調達方法を教えないとな」

「確かにクレハの言うとおりでざクライン。人から与えられて満足してたら成長しないからな」

「そ、そうはいつでもよお……」

エギルは明らかにこの状況を楽しんでやがる。面白くなりそうなほうに適当に話を合わせてるだけだ。そういう俺も面白そうだからってことでクラインの話に乗っかってるわけだから似たようなものかもしれないけど。

ともかく、問題の根本的な解決ができなきや意味がない。クエストをクリアしたいとか、情報がほしいっていう一回で終わるような依頼だったら問題はないんだが、長期的な問題を解決したい場合はそうはいかない。レベルが足りてない。パーティならレベリングに協力するだけじゃなくて、加えて多少のレベルが足りてなくても危険度を下げられるような立ち回りを教えたり、レベリングをする場所の選び方なんかを教えてやらな
いと。

「今回の場合は、クラインに女の子を紹介するんじゃないかと、どうすればクラインが女の子から好印象を得られるかを考えないといけないわけだ」

「おおおお！ そいつは良いぜクレの字！」

「クレハ……それは難易度が高すぎると思うが」

「おいエギル！ 失礼なこと言うな！ 俺だってちよろつとモテるコツさえつかめば女の子だってきつと……」

「まあ無理だろうな」

「お前もかよ！」

そりゃあ一日二日でいきなりモテモテになれるんだったら、クラインなんか教えてやる前に自分で実践してらって話だ。

「とりあえずそのガッツついた性格を何とかすればいいんじゃないの？」

「俺のどこがガッツついてるってんだ!？」

「どこがって……」

心当たりが多すぎて指摘するのに悩むくらいだ。

クラインがアスナに初めて会ったときなんか、横にキリトがいたにもかかわらず彼女募集中の意図を伝える自己紹介を始めたらしいし、偶然俺の店にシリカが居るときに店に来たときなんか舞い上がりすぎてシリカが若干引いてたぞ。

「クラインは女がいるときにテンパリすぎだ。クレハぐらいクールに立ち振る舞ってみろ」

「うぐ……」

「はあ？俺のどこがクールなんだよ」

「ああ、クレハの場合はクールというより冷めてるって言ったほうがいいかもな」

横目でこちらを見ながらニヤリと笑うエギルは、外見のこともあつてかなり絵になるが、こつちとしてはため息しか出ない。そう言われるのも心外だが、それに關してはリズにもアルゴにも言われたことがあるから正直思いつきり否定ができないってのもある。

「まあ俺の話はともかく、クラインがもう少し落ち着いたほうがいいってのは事実だな」
「けど、やっぱり俺は熱い男で居たいんだよ！ 刀一本で戦い続ける漢武士ってのは男のロマンじゃねえか！」

「そういうなら『女にモテたい』とか言っちゃダメだろ」

男のロマンぶち壊しじゃねえか。

「そういう男の周りには自然と女の子が集まるはずなんだよ！」

「そううまくいくわけないだろ」

「まさに身をもって体感しているな」

「うっせーぞ2人とも！」

クラインをモテるようにする話だったのに、今となってはただクラインをいじってるだけになってるな。まあこの辺はいつものことか。

「そもそもSAOの中に女の子が少ないんだから、モテるようになるのってかなりハードル高い気がするんだが」

「確かに。俺やクレハみたいに店を開いたら客としての出会いもあるが、攻略組の最前線で出会いを求めるってのは無理って話だ」

「そんなことは分かっているよ！だからクレハに紹介してもらおうっていったじゃねーか」

「さすがにそんな依頼は受けねーよ」

直接問題を解決しても意味がないってのはさつき言ったが、それ以上にうちの店を出会い系みたいな使い方されたくない。

失敗した後のアフターケアなんてできる気がしないし、色恋沙汰で生まれたプレイヤー間のわだかまりなんて面倒くさいにもほどがあるだろ。それに何かの間違いで成功なんてしてしまつたら、そういう目的で店に来る奴が増えて余計に困る。

「女つてのはこう……。特別なものに惹かれるんじゃないか？ クレハは『剣影』なんて呼ばれてるし、『黒の剣士』だつてS A Oじゃ知らないやつはいないだろう？」

「俺の場合は悪目立ちの気がするが……。確かに知名度を上げるつてのは大事かもな」

さつきからエギルばかりアドバイスしてる気がするがまあいいか。

モテるモテないはともかくとして、知名度が上がれば自然と目につきやすくなるわけで、それに伴って評価が上がることは間違いないだろう。

「だったら『風林火山のクライン』様の名をもっと知らしめてやればいいわけか!!」

「そういうこつたな」

「まとめると、『活躍して知名度上げろ』つてことか？ 俺たちがアドバイスしたことだが、我ながらテキトーすぎるな……」

「俺から付け加えるなら、『もつとクールに』だな。クレハとキリトを見習ってこつた」

俺からのアドバイスは『活躍して知名度を上げろ』、エギルからのアドバイスは『もつとクールに』か。役に立つのか立たないのか分からんような2つが出そろったな。

エギルの方はともかく、俺の方はやっつけ感がすごいし、こんなもんでクラインが納得してくれるかどうか……

「おつしやあああああ!!明日からの攻略に俄然やる気が出てきたぜ!!」

「さっそくクールを忘れてるぜクライン」

「おつといけねえ……」

納得したみたいだ。すげー単純な奴。

こいつの魅力はこういふところだと思っただが、異性にはうけにくいんだろう。どちらかというと同性の後輩とかに慕われやすいタイプだしな。

俺とエギルのテキトーなアドバイスを聞いたクラインは意気揚々と帰って行った。なんでも『ギルド総上げで活躍してやるから楽しみにしとけよ!』とのことだ。

酒の力もあつたのだろうが、今日の飲み会でやる気を出してもらえたのだつたら御の字だ。当初の目的のキリトの結婚話が全然できなかつた気がするけどそこはもう気にしなくていいだろう。

「随分素直な奴だな。いつか騙されないか不安だぜ」

「クラインのことか? まあ、なんだかんだでしっかりはしてる奴だから大丈夫だろ」

「ほう? 意外と信用してるんだな」

「・・・それなりにはな」

俺たちの前ではあんな感じだが、攻略組のギルドをまとめているギルドマスターだ。初めて会った時も死の淵に追いやられたギルドメンバーを指揮しながら敵をpushえ続けていたし、客観的に見てもプレイヤースキルとカリスマ性は他のプレイヤーより高い

のは事実だ。

「あいつはもつたいないんだよ。他の奴より技術があるのに、それを披露する場が少な
い上に、チャンスが巡ってきても人に譲っちまうんだから」

「それは俺も思っていた。たまにボス戦であいつのギルドと一緒にたまってタンクをやる
こともあるが、あいつの状況把握力と判断力はかなりのもんだ」

「なんだかんだ言ってやさしすぎるんだよ。自分より他人を優先して動くからああなる
んだ」

「ハハハ！ キリトの面倒を見る必要がなくなったら次はクラインか？ 万屋業も大変
だなおい」

豪快に笑ってはいるが、エギルもそう変わらないよな。

なんだかんだで商人っていう立場からあいつらを支えているって事ぐらい、同じ生産
職だったらすぐに分かる。

「エギルもな。中層プレイヤーのサポートならたまには手伝ってやるよ」

「な・・・！お前なんでそれを知ってんだ!？」

「優秀な情報屋が付いてるんでね。俺たちに隠し事はできないぜ」

「……厄介な奴を引き入れやがって。あいつの情報網から逃れられる奴なんて、S A Oにはいないだろうが」

こいつが中層プレイヤーのサポートに店の売り上げをつぎ込んでる事なんて、俺の店に入り浸ってる奴だったら大体の奴が知ってる。本人は隠してるつもりみたいだが、ア ルゴの手にかかってしまえば全部丸裸だ。

「別に悪いことしてるわけじゃないんだからいいだろ。これからしばらくはキリト関連の依頼が無くなりそうだから、そっちの手伝いぐらいしてやるよ」

「仕事熱心で何よりだ。それじゃあ今度依頼に行かせてもらうか」

「ご鼻屑に頼むよ。無駄に売れた名前も、中層プレイヤーに対しては結構便利だからな」
「よろしく頼むぜ『劍影』さん」

そろそろ俺も帰るとしよう。明日からは今まで通りに万屋業に専念しないといけな
いし、気が付けばもう75層だ。クォーターポイントのボス戦で犠牲を出さないように
俺だってやることをやっておかないとな。

ひとまずは、さつき意気揚々と帰って行った『風林火山のクライム』様の活躍話が、俺の専属の情報屋から聞けることを楽しみにしていよう。

ユイ 前編

キリトとアスナの結婚報告を受けてから数日後。

血盟騎士団のギルド内にPKが紛れ込んでいた事件の後処理は、予想通りヒースクリフが何とかしたらしく、SAO内でも大騒ぎになるほどの事件にはならなかった。

俺も万事屋として『笑う棺桶』ラフィン・コフィンの情報を集めたり、再発防止のためにヒースクリフやギルドメンバーに知恵を貸したり、色々とき使われてはいたんだが、ここまで沈静化したのはやはりヒースクリフのカリスマ性あつてのことだろう。

ともかく、血盟騎士団内で起こった事件の後処理が無事に終わり、俺たちの日常はいつも通りの落ち着きを取り戻していた。ボス部屋の発見なんかで忙しくなる前に、俺はリズを誘って22層にあるキリトとアスナの新居を訪れることにした。

「あいつらにしてはかなり低層に家を買ったんだな。前線に近いほうが何かと便利だろうに」

「アスナが物件を見て一目惚れしたらしいわよ。キリトが用意した他の候補を全部突っぱねて即決だったらしいわ」

「なるほどねー。確かに、アスナはこういうの自然が多いところ好きそうだしな」

「むしろ自然以外何もないわね。私たちの店がある48層も自然が多いけど、さすがにここまでじゃないし」

「前線から離れてリラックスするには絶好の場所ってことか。何もなければ余計に攻略のことを考える必要ない」

「ホントに、いいところ見つけたわねー」

キリトとアスナの家は、アルゴから聞いた限りだと結構な豪邸だそうだ。

建物の規模がでかいというよりは、22層の中でも抜群に見晴らしが良い場所で、プレイヤー内でもかなり人気の高い物件だったらしい。そのせいで家の値段は俺やリズの店よりも高くなっていたようだが、攻略組トッププレイヤーの夫婦はドンと一発で支払いを終えて、その人気物件を勝ち取ってしまったというんだから、うらやましい限りだ。

「……ここか？」

「近くにそれらしい建物もないし、間違いなさそうね。それにしても……」

「綺麗なログハウスだな。こりやあ人気が出るのも納得だ」

「ホントね。あたしもこんなところでのんびり過ごしたいわー」

「リズの店もかなり人気が高かっただろ。48層でしかも水車付きの鍛冶場とか、このログハウスとそんなに値段変わらないだろうに」

「お店とは違うのよ！　なんとというか、別荘みたいな感じでこんな家がほしいのよ！」
「贅沢な要望だな……」

とはいっても言いたいことは分かる。

こんなに立派なログハウスは現実世界ではそうそうお目にかかれないだろう。リズが言うように別荘っていう響きが一番しっくりくるかもしれない。特に何の情報もない人にログハウスと言われたら、真っ先にこんな感じの家を想像するってくらい綺麗なログハウスだ。

「ともかく、家の前でじっとしてても仕方ないでしょ。早く中に入りましょうよ」
「それもそうか」

リズの言う通り、外観だけを眺めてても仕方がない。外観だけじゃなく内装も見せてもらうことにしよう。キリトはともかく、アスナはそういうの気にするだろうし、外観に負けなくらい凝った内装にしてそうだ。

木製の大きめのドアをノックしてみるとコンコンと気持ちのいい音が鳴ってくれた。簡単なノックだけで家の中にいる住人にちゃんと伝わるのはS A Oのいいところでもあるな。この家に機械的なインターフォンがついてたら少し興ざめだ。

ノックして数秒後。ゆっくりとドアを開けたのは、いつもの黒いコートではなくラフなTシャツ姿をしたキリトだった。というかこいつ部屋着も黒かよ。

「キリト。遊びに来たわよー」

「久しぶりだな」

「クレハにリズ、いらっしやい。ちょうどよかった、俺たちもクレハの所に行こうと思っ
てたんだ」

「いつものお茶会ならここですればいいだろ。アスナの調理場を借りればコーヒーぐら
い作れるだろうし」

「いや、そうじゃないんだ。ちょっと依頼したいことがあってな」

「依頼？ お前たち前線から離れてるじゃないか。そんな状態で依頼なんて……」

『することあるのか？』と言おうとした瞬間、キリトの後ろから見慣れた栗色の長髪をなびかせながら、アスナが顔を出した。

そこまではない。ここはキリトとアスナの家で、キリトがいるってことは当然アスナもいるだろう。問題なのはアスナが抱きかかえているもの、いや……人だ。

身長はアスナの腰あたりまでしかない小柄な少女。キリトと同じ真っ黒な髪の色に、アスナと同じ腰まで伸びた長髪。アスナとキリトにこんなに低年齢のプレイヤーと知り合いが居るなんて情報は聞いたことがない。ということは、この子は俺達が合っていないここ数日の間に会ったわけで……

「あらリズ、クレハ君。いらっしやい」

「……パパ、ママ。この人たち……誰？」

「え」

今なんて言った？ 聞き間違いか？

だめだ。軽い気持ちで知り合いの新居に遊びに来ただけだから、この状況に全然

頭が追いつかない。というかリズはこの子の事を知ってるのか？

「なありズ、ちよつと聞きたいんだが・・・」

「・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・だめだ。リズは俺以上に状況を把握できてなさそうだ。真顔で完全にフリーズしてるし、さつきから一言もしゃべってない。

リズもこの子のこと知らないみたいだな。というかたぶんさつきのは聞き間違いじゃない。現実逃避してる場合じゃないよな。

「どうした？二人とも固まって」

「・・・・・・・・なあキリト」

「なんだ？」

「・・・・・・・・SAOって子供作れたんだな」

顔を真っ赤にしたアスナに、思いつきり殴られた。

・ ・ ・

「記憶喪失？」

「そうみたいなの」

「昨日の昼過ぎあたりかな、森の中で倒れてたんだ」

キリトとアスナをパパやママと呼んだこの女の子は『ユイ』というらしく、どうやら記憶を失っていて、自分の名前くらいしかわからない状態になっているらしい。22層の森の中をたった1人でさまよっていたこの子をキリトとアスナが保護して、今に至る

そうだ。

声をかけてもクエストフラグが立たない、キリトが触れてもハラスメント警告がでない、プレイヤーの家に連れて帰ることができる。2人はこの3つからこの子がNPCじゃないって判断したみたいだ。たしかにHPの表記もあるし、ウィンドウだって開ける。

けど、どうしても違和感はぬぐえない。

「22層に1人で居たつてのはどういうことだ？ 装備も普通の部屋着みたいなものだし、流石に危険すぎるだろ」

「そのあたりもよくわからないんだ。HPゲージはあるのにカーソルは出ないし、何かのバグなんじゃないかって思ってるんだけど」

「バグか……。正直納得はできないが、そこは今気にしても仕方がないだろう。この子本人から話を聞ければ一番なんだけど、そうもいかないしな」

なにしろ記憶喪失だ。昨日のうちにキリトとアスナがいろいろ聞いてみても、やっぱり分かったのは名前だけだったみたいだし、改めて俺が聞いても特に変わりはないだろう。

「ユイの情報が少しでもないかと思って、クレハ君の店に行く予定だったんだけど……」
「残念ながら、人探しの依頼は入ってないな。今アルゴにも確認をしてみたんだが、それらしい情報はまだないらしい」

「そうなのか。アルゴでも持つてないってことは、つい最近はぐれたなのかもしれないな」

「そう考えた方がいいな。新しい情報が入ったらすぐ伝えるようにしておくよ」

こう言ってみたが、流石におかしい。

キリトが見つつけて2日もたっているのに情報が一切ないってのはどういうことだ？

ここまで小さな子が居なくなったら多少なり騒ぎになるはずだし、記憶喪失になるような事件があったらなおさらだ。それなのにあのアルゴがいまだに情報を持つてないってのは変だ。これじゃあまるで、この子の情報なんて最初からなかったみたいじゃないか……。

「……………」

「あーら、またクレハが考え込んでしまったわよ」

「こうなると長いからな、アスナは今のうちにお茶の用意しておいてくれないか？」
「……クレハ君の扱いが雑になってきたね、2人とも」

・
・
・

ユイのことをいろいろ考えてはみたけど、結果として『考えても仕方ない』ってことが分かっただけだった。情報がないものは仕方ないんだし、今はアスナやキリトと一緒に幸せそうに見えるから、変に詮索するよりは、当初の目的通り2人の新居でのんびりしておこう。

「ほらユイちゃん。この人は私たちのお友達よ」

「おともだち……？」

「そう。こっちのお兄さんがクレハ君で、こっちのお姉さんがリズよ」

「くれは、りず?」

「うわあ・・・どうしようクレハ。すごいかわいいんだけど」

「俺に言われてもな」

アスナには随分なついてるみたいだな。

俺たち2人にはまだ若干の警戒心があつたみたいだけど、アスナの紹介でそれが少し解消されたようだし、本当に母親みたいだな。

「おにいさんがのんでるの・・・何?」

「ん? これか?」

「クレハが飲んでるのはコーヒーっていう飲み物よ」

「・・・おいしいの?」

「クレハのコーヒーはおいしいぞー。けど、ユイが飲むには少し早いかな」

「コーヒーに興味があるのか?」

「うん。のんでみたい」

この年でコーヒーに興味を示すとはなかなか見どころがある。

いつもなら喜んで一杯振る舞ってやる所だが、さすがにこんなに小さな子に飲ませても苦いだけかもしれないな。

「コーヒーだけじゃなくて、いろんな物に興味があるみたいなんだよ。昼飯の時も俺が食べてたサンドイッチに興味があつたみたいで、一口食べさせたりしたし」

「ええ!? キリトのサンドイッチっていつもバカみたいに辛いソースかけてるじゃない。まさかあれ食べさせたの?」

「ああ、けど『おいしい』って言ってた」

「なにいつてるのよ。キリト君のサンドイッチ食べた時のユイちゃん、すごい渋い顔してたじゃない」

小さいのになかなか根性があるやつだ。キリトの辛い物好きは異常だからな。サンドイッチに味覚エンジンの辛さの値をマックスまで上げた調味料をぶち込んでやつても、平気でパクパク食べてたくらいなのに。よくそいつの同じものを食べて泣き出さなかつたもんだな。

「俺としては飲ませてやつてもいいんだが、子供にコーヒーを飲ませるのつてあんまり

よくないんだよな」

「え？ そうなのか？」

「まあSAOだから問題ないとは思いますが、小さいころはカフェインの影響を受けやすく、中枢神経が刺激されすぎると良くないんだよ」

「さすが、コーヒーのことには詳しいわね。SAOなんだから気にする必要ないって言うたいところだけど、そんな話を聞いたら……」

「絶対にあげちゃダメだからね！ クレハ君！」

リズが言い切る前にアスナが俺に釘を刺してきた。

かなりユイに入れ込んでるみたいだし、良くない影響が出る可能性が少しでもあるなら、アスナは意地でも飲ませないだろうな。

「わかってるよ。けどまあ、代わりのものくらい飲ませてやってもいいだろう」

「代わりのもの？ ジュースか何か？」

「いや、コーヒーに似た子供向けの飲み物だよ」

アスナの調理場を借りて数分後。

ユイのために作った飲み物をもってリビングまで戻ると、ユイはリズの膝の上にちよこんと座っていた。

「なんだ、随分となつかれてるじゃないか」

「いやー。小さい子と触れ合うなんて何年振りかわからないから、すごく癒されるわねー」

「そうなのか。俺はSAOに入ってから多少は関わってるけど、確かにユイくらい小さい子は初めてだな」

俺が見たのは最年少で10才くらいだったし、たぶんユイはそれよりも下だろう。

体の大きさからの目測だから正確じゃないけど、小学生低学年くらいなのは間違いないな

いだろう。

「ほら、ユイの分の飲み物だ。これならおいしいと思うぞ」

「あー・・・甘くていいにおいがするな。クレハ、これって・・・」

「ココアだよ。これならカフェインもほとんど入ってないから大丈夫だろ」

そもそもSAOにカフェインがちゃんと設定されているのかとか、現実で飲んでるわけじゃないから問題ないとかいろいろと思うところはあがるが、過保護なママがそこを一番気にしているみたいだから一応伝えておこう。

「あんたが初めてコーヒーを出してきた時にもびつくりしたけど、SAOってココアもあつたのね」

「ココアってコーヒーの親戚みたいなものじゃないのか?」

「おいおい・・・まあ詳しくない人からしたらそうかもしれないが、原材料から作り方から何もかもが違うから、親戚とは違うな。ココアの親戚はどちらかというとチョコレトだ」

ココアはカカオ豆を発行させてペースト状にしたカカオマスから、脂肪分を抽出して残ったものを粉々の粉末にしてから作るわけだから、コーヒー豆を粉末にしてお湯で抽出するコーヒーとは全く別物だ。

けど、ユイのご希望はコーヒーだからな。今のところは親戚みたいなものってことにしておいた方が素直に飲んでくれるだろう。

「ちよつと熱いからな、火傷しないようにしろよ」

「うん。いただきます」

「失敗はしてないはずだ。たぶん」

「たぶんって、あんたねえ・・・」

なんせココアを作るのなんていつぶりか分らないからな。

最近自分が好きな味のコーヒーとか、アルゴ用の甘すぎるコーヒーとかばっかり作ってたから加減が分からなくなってる。子供の口に合うかどうか少し不安だ。

「・・・甘くておいしい！」

「そうか、それはよかった。・・・マジで」

「よかったねユイちゃん。私もクレハ君にココアのレシピ教えてもらっておこうかしら。作れるかどうかは分からないけど」

「コーヒーよりは複雑じゃないから安心しろ。あとで教えてやるよ」

前にアスナにコーヒーの作り方を教えた時は、どれだけ頑張っても成功しなかったからな。コーヒーを作ってるって言ってもあくまでSAOの中にある素材で限りなく本物に近いものを再現してるだけだから、分量調整が色々と面倒なんだよな。

「なんか、俺のサンドイツチの時より嬉しそうで複雑なんだが」

「別にキリトが作ったわけじゃないだろ。それにお前の口に合うようにアスナが作ったとしても、お前が満足するような辛さのものはほとんど食い物とは呼べん」

「失礼な！ あの辛さがいいんじゃないか。病みつきになる味だ」

「だったらユイちゃんに聞いてみたらいいじゃない。昼にキリトが食べさせたサンドイツチと、今クレハが作ってあげたココアのどっちがおいしかったかって」

リズの言葉を聞いて、キリトがゆっくりと審査委員長。もとい、ユイの方へ顔を向けた。

両手で少し大きめのカップを抱えながらココアを飲んでいるユイは一瞬キョトンとした表情を浮かべていたが、リズがさつき言った質問内容と同じことをユイに聞いてみると、につこりと笑って一言コメントをしてくれた。

「……あのほうが、甘くておいしい！」

キリトが膝から崩れ落ち、俺たちはやれやれと肩をすくませることになった。

・ ・ ・

大勢に囲まれて疲れたのか、ユイはアスナの膝の上でスースーと静かに寝息を立て

眠っている。プレイヤーの家でここまでぐっすり眠ってしまったり、ココアをのんで笑顔になったりと、挙動の一つ一つが町で店を開いているようなNPCとは違う、感情をもった人間であるように感じる。

けど、カーソルが出なかつたり、自分の名前以外を思い出すことができなかつたり、情報が一切ないことは正直言つて異常事態だ。なにかしらの対策をとっておく必要がある。

「キリト。はじまりの街にこの子を連れて行った事は有るか？」

「はじまりの街？ いや、保護してから一度もこの層以外のところへは行つてない」

「それがどうかしたの？」

アルゴがいろいろと手をまわしているみたいだが、未だにユイの正確な情報はつかめていない。基本的に俺達の情報は攻略にかかわることがメインだし、こういう情報を普段から積極的に集めていなかつたつて言うのも情報不足の理由でもある。

だから、今度はそういう情報を持っていそうな人のところにユイを連れて行こう。

「はじまりの街の教会で、低年齢のプレイヤーを保護して生活しているシスターがいる

んだよ。明日そこにユイを連れて行ったらどうだ？」

「そんなことをしてるプレイヤーがいるのか。すごいな・・・」

「そこでだったらユイちゃんくらいの年のプレイヤーが集まっているから、記憶を失う前のユイちゃんを知っている人がいるかもしれないわね」

「そういうことだ。このまま情報が入ってくるのを待つより、自分から探しに行った方がいいだろう。シスターとは顔見知りだから、連絡しておけば詳しく話を聞けると思う」

もしいなかったとしても、同じ年齢層の知り合いは作っておいた方がいいだろう。俺たちの知り合いとなると、どうしても年が上になりがちだからな。一番年下でもシリカになる訳だし。

「シスターに連絡を頼む。明日の朝にユイを連れて行ってみるよ」

「了解だ。明日は俺もついて行かせてもらってもいいか？ 個人的に用事もあつてな」

「もちろんだ。じゃあ明日の朝にクレハの店に行くから、準備をしておいてくれ」

「あーもう！ 予約のお客が入ってなかったら私もいつしよに行つたのにー」

「仕方ないわよ。リズは自分のお店を優先しなさい、クレハ君も仕事の一環で私たちに

ついて来るんだから」

「うー。わかったわよ・・・」

そういう訳で、明日はキリト、俺、アスナの3人ではじまりの街の教会に行くことになった。リズは店の用事で不参加になるが、むしろ予約までしてくれる客がいることを喜ぶべきだろう。

明日は、そこでぐっすり眠ってる謎だらけの女の子のことが少しでもわかるように、良い情報が入ることを期待しよう。本当の親が見つかったとしても、たまにココアをぐい馳走に行くくらいはできるだろう。

ユイ 中編

「はじまりの街に来るのも久しぶりだね」

「そうだな。特に俺はすぐにこの街から出ちゃったしな」

「俺は結構来てるけどな、情報収集とかで」

ユイの情報を集めるため、俺とキリトとアスナの3人は、ユイを連れて始まりの街を訪れた。ユイはキリトの背中におぶさってはいるが、新しい場所に連れてこられて新鮮なのか、あたりを見回している。

このデスゲームの始まりを告げたあのときから変わらず、この馬鹿でかい広場を見るのはもう何回目になるのか分からない。もともと元βテスターの俺としては、デスゲーム通知を受けてすぐに街を出たわけで、集中しすぎるとぶつ倒れるなんてハンデがなければ、キリトと同じように何度もここに来ることはなかったのかもしれないが。

「βテストの時は何でこんなに馬鹿でかい広場を作ってるのかわからなかったが、まさか全プレイヤーをここに集めるためだったとはな」

「あんまり思い出したくないわね、あのチュートリアルのは」

「悪い夢でも見てるのかと思ったよ。クラインも同じような顔してたし」

「そういえば、キリトはクラインと1層のころから知り合いだったらしいな」

ついこの間、エギルとクラインと一緒に話したときにそんな話をした気がする。後半のクラインの女の子紹介しろみたいな依頼のせいですっかり忘れていた。

「ログインしてすぐに会ったんだよ。βテスターからレクチャーを受けたって言うてきたんだ」

「なるほどな。確かに、VRMMOは経験者に聞かないとコツとか分かり辛いからな」

「私も最初は大変だったな。動くのは楽しいんだけど、ソードスキルが全然でなくて」
「それなのに、今じゃ攻略組のトップギルドの副団長やつてるっていうんだから大したもんだ」

初心者とか女の子だからとか関係なく、執念と根気でここまでプレイヤースキルを高めたつてのは正直すごいことだと思う。VRは今までのゲームと違って、現実世界の運動神経の方が重要だから、現実でのそういう技術が高かったつていうのも大きいんだろ

うが、ただでさえ立場が弱くなりがちな女性プレイヤーがここまでの地位を確立したのは、ほかでもないアスナ本人のがんばり有ったことだろう。

「それで、ユイはどうだ？ この街を見て何か思い出さないか？」

「……わかんない」

「うーんそうか。けどはじまりの街は恐ろしく広いから、一緒に見て回ってみようか」

「そうね、クレハ君の知り合いが居る教会に行く前に、街をぐるっと回って見みましょう。気になるものがあつたらすぐに言ってね、ユイちゃん」

「うん！」

俺たちが訪れたのは中央市場。

祭りの出店のような形でいろいろな店が営業している。といつても従業員は全員NPCな上、冒険の導入段階でしか使わないような簡易的なアイテムが売っているだけの

場所なんだけどな。

「どうだユイ、なんか気になるものはないか？」

「うーん……やっぱりわかんない」

「そんなに簡単にはいかないよな、やっぱり」

「あ、ユイ。あそことうまそうな出店が有るけどどうする？」

「食べる！」

「クレハ君はマイペースね……」

「分からないなら仕方ない。新しくここの楽しさを教えてやるしかないだろ」

なんだかんだで市場の出店も旨い物はある。SAOに入ったばかりのプレイヤーに向けた物だから少し味をあげているのかもしれない。ユイには辛さ控えめのホットドックみたいな食べ物を買ってやった。

それにしても、この市場はSAOを始めるときには必ず使うはずだ。ここを見て何も感じないっていうんなら、景色とか建物を見せるだけじゃあもう無理だろうな。

やっぱり直接的な知り合いか、ユイを見たことがあるような人と話をしないといけな

いか。

「……ねえ、何かおかしくない？」

気になるものがあつたら言えとユイに言ったはずのアスナが真つ先に気になるものを見つけたらしい。ユイはキリトの背中であスが買ってやったホットドックをポカントした顔を土ながら食べてるし、ユイに関する事で気になった物ではないみたいだが。

「おかしいって……何がだ？」

「特に変わったところはないんじゃないか？」

「だって、SAOで生き延びてる人数って今は6000人くらいでしょ？　はじまりの町に残っている人達が3割くらいだとしても……」

そこまで聞いて、アスナが言っているおかしいことに気がついた。いや、本当はつい最近まではじまりの街に来ていた俺が気がつくべきことだった。

「人が少なすぎるってことか」

「そうなの。こんなに歩き回ってるのに、私達とすれ違った人がほとんどいないじゃない？」

「・・・確かにそうだな。いくらのはじまりの街が広いつて言っても、NPCのほうが多いなんてのは異常だ」

俺達が今までのすれ違ったのは、アスナが言うとおりの少数だ。それも防具や武器をそれなりにそろえた中層プレイヤーぐらいの奴ばかりだった。普段からはじまりの街にいるわけじゃなくて、俺達みたいに用事があつて偶然来たつて感じた。

「どういうことだ？ ALFが徴税みたいな馬鹿げたことをしてた今までなら分かるが、あの問題は解決に向かつてたはずだ」

「ALFからクレハが受けた依頼の話か。確かに74層での問題もあるし、キバオウ一派の動きは抑えられてるはずだけど」

「だったら何で？ 現に人は全然いないし・・・」

「子供達を返して!!」

アスナの言葉を遮るように、俺にとつては少し聞きなれた人の声が街に響いた。

「ねえ、今のつて・・・！」

「あつちの路地のほうだな」

「・・・どうやら面倒ごとみたいだな。行くぞ」

・ ・ ・

俺達が声の下方向へ進むと見えてきたものは大きく分けて3つ。

1つ目は紫色の修道服を着た、いわゆるシスターの女性プレイヤーが1人。

2つ目はその女性プレイヤーの奥に深い緑色をしたマントを羽織り、目元まで大きく

隠れる金属製の鎧を身に着けた7人くらいのALFのプレイヤー。

そして3つ目が、ALFのプレイヤーよりさらに奥にいる3人の子供達。

状況から大体察しは着くが、おそらくシスターと子供達を合流させないためにALFのメンバーが道をブロックしてるか、子供達をブロックしてるALFのプレイヤーにシスターが抗議してるって感じか。どちらにしても悪いのはALFだ。それに俺はあのシスターに見え覚えがある。理由なく人に噛み付くような人じゃないからまず間違いないだろう。

「子供達を返してください!」

「人間きが悪いことを言わないでほしいな。子供達に社会常識を教えてやっていただけさ、これも軍の立派な任務なんぞね」

「そうそう、それに市民には納税の義務があるからなあ」

「それにあんた達はずいぶんと納税を怠ってるみたいだから、手持ちのコルだけじゃ足りないんだよ。装備も全部置いていかないと」

ひやははと甲高い声で笑い声を上げるALFのプレイヤー達だが、こいつらの余裕はシスターや子供達が反撃してこないと思ってるからだろうな。自分が圧倒的優位意に

いると思いい込んでいるタイプか。．．．うざったい事この上ない。

「社会常識がないのはお前らだよ」

「あん？　おいおいおい、何だお前は」

「我々解放軍の任務を妨害するののか？」

「裏路地に子供を閉じ込めといて何が解放軍だよ。くだらねえな」

「お前、いい気になってんじゃ．．．なっ！」

本当に、想像以上に単純な奴らだ。

すこし挑発しただけで全員こっちに注意を向けやがる。そのおかげでキリトとアスの2人がALFのプレイヤーを飛び越えて子供達のほうに行くことができた。こういう時に打ち合わせ無しで俺の意図を読み取ってくれるから助かるな、この2人は。けど．．．．．

「普通プレイヤーの頭の上を飛び越えるか？　回り道して子供達のほうに行く予定だったんだが」

「回り道してる暇なんてないからな」

「こつちのほうが無断早いじゃない」

こつちの常識を覆してくるのもこの2人なんだから恐れ入る。

「おい、あんたら見ない顔だけど……解放軍にたてつくって事がどういうことか分かってんのかあ?！」

「この2人相手に『見ない顔』……ねえ」

「クレハも人の事いえないだろ、知名度に関しては」

キリトの発言はともかく、攻略組トップクラスのプレイヤー2人に対して見ない顔って言っちゃうあたり、こいつら中層かそれ以下の層にいたプレイヤーだろうな。『黒の剣士』や『閃光』の名前は知ってても、顔は知らないってところかな。まあキリトもアスナも今は普段着だし、どつちにしても気づかないのも無理はないか。

「ぐだぐだ言ってるじゃねえよ!! それともやっぱり怖くなったのか?」

「切りかかられたくなかったら大人しくするんだなあ」

意気揚々と剣を抜いて、アスナとキリト目掛けて突きつけているが、ご愁傷様といってやりたいくらい悪手だ。そんなことしたら、意外と血の気の多いキリトの嫁さんが黙ってないだろうよ。

「キリト君、ユイちゃんをお願い。クレハ君、止めないでね」

「ああ。まかせてくれ」

「・・・やれやれだ。止めてもやめないだろうに」

俺とキリトに断りを入れながらも、アスナはもうレイピアを鞘から抜いている。

ALFのリーダー格の奴は、アスナにレイピアを向けられてもニヤニヤ顔をしながら、その取り巻きたちも同じようにヘラヘラしたままだ。俺だったら土下座しても許してもらいたいシチュエーションなのに、無知つてのは恐ろしいな。

「おいおい、俺は女相手でも・・・」

「はああつ!!!」

「おわああああああ!!」

アスナのレイピアが光を放った瞬間には、もうALFのプレイヤーが吹き飛んでいった。

さすが『閃光』と呼ばれているだけのことはある。ソードスキルの発動から攻撃までの速度が速すぎる。あんなの普段から前線で戦ってる奴ぐらいしか見切れないだろ。

「安心して。圏内ではHPが減ることはないから」

「その代わり、攻撃によるノックバックと体を切られているという事実は消えない。ゲームと分かっているとしても、切られ続ける恐怖に耐え続けるのは辛いかもしれないけどな」

アスナもずいぶんとえげつない方法を思いつくもんだな。見切れるはずのないソードスキルの攻撃を圏内で与え続けられる上に、決闘デュエルじゃないから終わりもない。対等に戦えることができなかつたら、これ以上怖いこともないだろう。

「お、おい・・・お前ら！ 見てないで戦え！」

「・・・あなた達もやるの？」

「ひっ・・・う、うわああああああ」

まあ、怖いよな。レイピア持った女にあそこまで凄まれたら。逃げるのも当然だ。

けど、逃げるためには俺の横を通り過ぎないといけないわけで、しかも俺の横にはまだシスターがいる。よけて通ってくれるならいいが、さっきのリーダー格のプレイヤーは、アスナにいたぶられた恨みを俺達で晴らしたいのか、剣をこっちに振りかっぶって逃げてくる。

「……クソツ!!どけえ!!」

「剣の降り方が大振りすぎる。そんなの、受け流してくれって言ってるようなもんだ」

この程度だったら刀を抜かずに、特に集中なんかしなくても刀を鞘に入れた状態でも受け流せる。相手の剣に鞘に入ったままの刀を少しかすらせて、そのまま後ろに流してやればいい。もつとも、勢いよく切りかかってきたのをそのまま受け流すから、盛大に顔面から地面に突っ込むことになるだろうけど。

「ぶっへああ!!」

「おー。思った以上にきれいに転んでくれたな」

「ぐう・・・クソ！ 覚えていろ！」

「ひねりのない捨て台詞だな・・・」

やられ役の雑魚敵みたいな捨て台詞を残して、ALFのプレイヤー達はさっさと逃げていった。『覚えてろ』なんて台詞を実際に耳にするなんて思ってもみなかったな。逆に新鮮な気分だ。

「あの・・・クレハさん？」

「ん？ ああ、サーシャ。悪いな、面倒ごと巻き込んで」

「それはこっちの台詞ですよ！ すみません、ご迷惑をおかけして・・・」

「それは俺じゃなくて、あの2人言ってるだけ」

さつきから子供達を助けようとしていたシスターこそが、俺がキリト達に紹介しようとしていた教会でプレイヤーを保護しているプレイヤーのサーシャだった訳だ。それが分かったから、俺はさつきと状況を理解できたわけなんだが、たぶんこの2人は俺がいなくても同じように助けてただろう。

「あの2人・・・何者なんですか？」

「俺の知り合いだよ、警戒しなくていい。詳しい話は教会に帰ってからにしよう。ALFの連中が帰って来るかも知れないし」

ついでに、何でALFがまたこんな馬鹿げたことをし始めたのかの情報も集めたい。ここはいったん落ち着ける場所に行つて情報を整理するのが先決だ。

「おいキリト！アスナ！ いったん教会に行くことに・・・」

サーシャと話をつけてキリトの方を振り返つてみたが、何か様子がおかしい。

キリトがというよりは、その背中におぶさっていたユイの様子がおかしい。何も無い空にむかつて手を伸ばしたまま、うつろな瞳で1点を見つめている。

「みんなの・・・心が・・・」

「おい、ユイ？ どうしたんだ？ ユイ!？」

「ユイちゃん!?! 何か思い出したの?！」

キリトとアスナが声をかけても反応がない。おかしい。
いや、何かは分からないが何かがやばい気がする。

「わたし．．．ここにはいなかった．．．ずっと一人で．．．くらいところにいた．．．
！」

「おいユイ！ 大丈夫か!?」

「ユイちゃん!?!」

「う．．．ああああああ!!」

ぐあ．．．．なんだ、これ．．．。

ユイが悲鳴を上げたと思ったら、すごい音を耳に直接流し込まれたみないな．．．!
視界にも少しノイズがかかってるし、明らかに異常だ．．．!

「あ．．．．．」

「ユイちゃん!」

キリトの背中から滑り落ちたユイをアスナがすばやくキャッチした。ユイはアスナ

に抱きついて少し震えていたみたいだが、すぐに気を失ったみたいだ。

「なんだよ・・・今の」

キリトが思わず漏らした声が聞こえた。まったく持つてそのとおりだ。

「なんなんだよ・・・これ」

やっと結婚までこぎ着けた友達のところには記憶喪失の少女が住んでいるし、ALFの問題は解決に向かったはずなのに今もまだ徴税なんていう馬鹿げたことが続いているし、その少女は意味深な発言を残して気を失ってしまった。それも周囲にまで影響を及ぼすノイズとハウリングを残して・・・だ。

ただひとつ分かることといえば。

この面倒ごとはまだ終わりじゃないって事だけだ。

ユイ 後編

ユイがはじまりの街で気を失ってから、俺達はサーシャの好意に甘えて教会でユイを休ませることにした。ユイが目覚ますのには丸1日かかったが、キリトとアスナがユイに付きつ切りになっていた間に、俺はユイについて知っている限りのことをサーシャに伝えることができた。

そして朝になり、教会の食堂で朝食をとりながら、俺達は今の状況を整理することになった。

・
・
・

「これは・・・すごい光景だな」

「恥ずかしながら、毎日こうなんですよ」

「す、すごく・・・にぎやかですね」

教会の食堂には30人近くのプレイヤーがにぎやかに朝食をとっている。パンを取り合っている子や美味しそうにサラダをほお張っている子までさまざまだ。その全員が10代前半かそれ以下の子供のプレイヤー達なんだから、そりゃあにぎやかにもなるだろう。

「ユイちゃんの具合はどうですか？」

「昨晚ゆっくり休んでいたおかげでもう大丈夫みたいです」

「問題ないだろ。朝会っていきなり『ココアつくって』だったからな」

「おいしいよ?」

「・・・そりゃよかった」

昨日あれだけ盛大に気を失った当の本人は、マグカップを抱えながらご満悦みたいだ。元気になったならそいつは何よりだが、昨日みたいな事が頻繁に起こるようだとさすがに問題がある。十分警戒が必要だろう。

「昨日クレハさんからおおまかな話は聞かせてもらいました。残念ながら、はじまりの

街にいた子ではないと思います。子供達にも話を聞いてみましたが、皆心当たりが無いように」

「俺も昨晚、アルゴと連携して情報を集めたが空振りだ。ユイの関係者らしきプレイヤーは見つかってない」

「そうか……」

「いったいユイちゃんはどこから来たのかしら……」

何かあると思って来たはじまりの街だったが、かえって手詰まりになったのかもしれない。というか、アルゴが一晩かけて情報を集めたのに空振りって時点で、かなりの異常事態だ。俺達がちよつと調べたところでそれを超える情報は得られないだろう。

「分からないものは仕方ない。今は焦らず少しずつルートを探していくしかないだろう」

「……クレハの言う通りかもな。はじまりの街にいたわけじゃないんなら、ほかの層にいたのかも知れないし、ゆっくり1層から巡ってみよう」

「そうね、そこでまた何か思い出すかもしれないし……」

望み薄だろうけど……とここにいる全員が思っているが口には出さない。

落ち込んでても仕方ないし、無理やりにも前向きに切り替えていかないと、俺達の不安や不信がユイに伝わりかねない。なぜだかこの子は、俺達の動揺とか焦りとか、そういう感情の変化に敏感みたいだからな。

ここらでサツと別の話題にシフトして明るい空気にしておきたいところではある。

「というかクレハ。この前言っていた協会にいる知り合いってサーシャさんのことだよな？ どうやってサーシャさんと知り合ったんだ？」

「よりにもよってその話題を選ぶのかお前は」

個人的にだが俺が一番触れられたくないというか、説明するのが非常に面倒な話題を選びやがったなこのブラツキー先生は。

「別にたいした事はねえよ。依頼人としてきたことがあって、それで知り合っただけだ」

「教会の運営が経済的に厳しいときがあったので、万屋『秋風』のうわさを聞き付けてクレハさんに助けを求めたんですよ」

「へー。クレハ君の人脈はほんとにいろんなところに有るね。さすが万屋」

「まあ、そういう仕事だからな」

人と関わってそいつのために動く仕事だ。人脈の広さは情報屋のアルゴにも匹敵するぐらいの広さだと自負してる。

「ん？けど経済的な問題なんてそう簡単に解決できないだろう？　どうやって解決したんだ？」

「確かに、サーシャさんに狩場を教えるっていうのもなんだか違う気がするわね……」
「そうだよな。ここの教会の事情を知ったら、クレハがサーシャさんに危険が及ぶような提案をするとはおもえないし……」

「……なんでこういう勘だけは鋭いんだこの夫婦は。普通そんなところ気にしないだろうが。正直スムーズな解決方法は取れなかったから、どうやって解決したかなんて詮索しないでほしいんだが。」

「私も最初は自分で圏外に出てお金を稼ぐつもりだったんですが、クレハサンは私に危険が及ぶのをよしとしてくれませんでした。なので、それ以来クレハさんから資金の提供をして頂いているんですよ」

「おおい!!サーシャ!!」

言うなよ!人が一番知られたくなかったようなことを!

「すごいじゃないクレハ君! 子供達のためにずっと支援し続けてるなんて!」

『剣影』の株がこれでまた上がるな。なんで黙ってたんだ?」

「そういうリアクションが嫌だったからだよ・・・」

「いいじゃないですかクレハさん。私達はすごく助かっているんですから」

そう簡単に言ってくれるが、この解決方法は俺の万屋としての方針を破っている。あまり広めたい物じゃない。

経済的に余裕のない子供達を保護している教会のために、資金の支援をしている。

これだけ聞いたら確かに美談かもしれないが、万屋としてこれほど根本的な解決になつていないものもないだろう。「食料がない人に食料を与えても意味がない。調達方法を教えるべきだ」ってのはクライアントやエギルにも話したことだが、今回の俺はサーシャに資金の提供をしただけで、サーシャに資金調達の方法を教えたわけじゃない。

こんな解決方法をとってしまったのは、サーシャの依頼を100%解決する方法が無

かったからってというのが大きい。簡単に言うと、この世界でリスクを伴わずにコル稼ぐ方法なんて無いってことだ。

はじまりの街に住んでいて、圏外に出ることの無いプレイヤーの資金調達源はかなり少ない。街の中で稀に取れる果物系のアイテムを店に売って、ほんの少しコルが手に入れば万々歳って具合だ。

勇気を出して圏外にいるモンスターと戦って倒すことができれば、それなりの資金は手に入る。実際にサーシャも圏外での資金調達はしているらしいが、それでもこの人数の子供達を養っていくには足りない。資金不足にぶち当たったというわけだ。

今までも『金が無くて困っている』とか、『いい金の稼ぎ方は無いか』みたいな依頼は何度か来たが、どれも中層以上のプレイヤーでそれなりに戦える奴だったから、できるだけリスクが低くてコルを稼げるクエストだったり、狩場を教えた。それに、あまりにも我侷に、努力せず金がほしいなんて言ってきた客の依頼はキツパリ断っていた。だがサーシャの場合はそうは行かない。

狩場を教えるにしても、サーシャは中層以下のプレイヤーで戦闘経験は少ない。リスクが大きすぎる。かといってここまで明確な理由がある以上依頼を断ることはできない。

それに1番の問題は、『サーシャが資金調達に時間を掛けすぎると、教会にいる子供達

を守る人がいなくなる』っていうところだ。

ちゃんとした解決策を取れなかった俺は、少しでも助けになるならって事で資金の援助をしているというわけだ。それと間接的だが、ALFのやっている徴税をやめさせるために動いてたっていうくらいか。

「そういえば聞き忘れてたな。昨日のALFの連中についてだ」

「そうだったわね。確か、ALFの動きはクレハ君とALFのギルドマスターで抑えたはずよね？」

「けど、昨日のあいっらははつきりと『徴税』って言っていた。クレハが動く前と状況が変わってないのはどういうことなんだ？」

キリトとアスナの言う通り、俺とシンカーさんで徴税みたいな事を率先して行っていたキバオウ一派の動きは抑えた。これは間違いない。それに74層にコーバツツ達を特攻させた責任を糾弾されて立場は絶望的はずだ。それなのになんでキバオウ一派の動きが抑制されてないんだ。

「なあサーシャ。さつきみたいなの徴税はずっと続いていたのか？」

「いえ、ここ最近のALFはおとなしくて、徴税なんてしてませんでした。そのせいで私達も少し警戒心が薄れていたようで、昨日のようなことに・・・」

「つていうことは、確かにクレハ君達の行動で、キバオウさん達の動きは抑えられてたつてことよね」

「おそらく、そういうことだと思います」

「それがなぜか再発したつてことか。一体なんで・・・」

コンコンツ

つと小気味のいい音が俺達の会話を遮るように教会全体に響いた。不意に訪れたその音が教会の扉をノックする音だと気づくのに時間はかからなかったが、あんなことが起こった後だ。ALFの連中がいちやもんを付けに来たとしてもおかしくない。

サーシャは少し警戒心を強めて扉に向かつていった。一応キリトとアスナも扉までついて行ったから問題は無いだろう。俺はちびちびとココアを飲んでいるユイのそばから、扉を開けに行つた3人を見ておくことにしよう。何かあつたとき子供達の方に被害が及んだらまずいしな。

というか俺達が話している間、ユイは黙々とココアを飲んでたつて事か。退屈させた

かもしれないし、あとでもう一杯くらい作ってやろう。

サーシャが扉をあける音が聞こえたが、ここからだと言った扉の向こうにいる人は見えない。けど、3人の様子からだと言った通りALFのプレイヤーだったみたいだ。警戒を解いてないし、アスナにいたっては一応だが腰にレイピアを装備したままだ。

「ALFの方ですよ。昨日のことで抗議に来たってことですか」

「いえいえとんでもない。むしろお礼を言いたいくらいですよ」

ん？今の声ってもしかして……

ちよつと俺も扉のほうに行ってみるか。意味有り気な言葉も聞こえたし。

「今日は御2人にお願いがあって……」

「ああ、やっぱりユリエールさんか」

聞き覚えのある声だったからまさかと思っただが、間違っただけでよかつた。

「ク、クレハサン!? なんでもここに……」

「クレハ？ 知り合いなのか？」

「まあ、ちよつとな。ちようどよかった、ALFについて聞きたいことがあるんですよ」

・ ・ ・

教会に訪れてきたのは間違いなくALFのプレイヤーだった。銀色の長髪で、後頭部のあたりで髪をひとまとめにしたポニーテールが印象的な、20代中盤くらいの女性プレイヤーだ。

昨日サーシャ達をブロックしていたALFのメンバーだが、あいつらとこの人はまったくの別物だといっていい。早い話が『派閥が違う』プレイヤーだ。

「改めまして、私の名前はユリエールといいます。ギルドマスターであるシンカーの秘書のようなものです」

「この前話しただろ、ALFのギルドマスターと側近の人が依頼に来たって。その側近がこの人だ」

「なるほど、だからクレハと知り合いだったのか」

そう、この人はギルドマスターであるシンカーさんの側近で、ALFの現状を何とかしたいと思っている人達の一人だ。

「ユリエールさん。シンカーさんはどうしたんですか？ 見た限りだと、まだキバオウ

一派が徴税なんかを繰り返しているみたいですけど」

「キバオウの行動はクレハと一緒に抑えたんですよね？」

「それは……」

予想通りというかなんと言うか、訳ありらしい。

盛大に嫌な予感がするが避けては通れん。俺達はなぜキバオウ一派が勢力的に巻き返したのかを聞かなくちゃならない。

「聞かせてください。ALFの現状依頼が変わってないなら、俺への依頼はまだ達成さ

れてないってことになる。達成してない依頼を投げ出したなんて万屋の名折れだ」

「私達も個人的に気になるんです。子供達から徴税なんて事をしているギルドを放っておけません」

「……わかりました。本当は、これ以上クレハさんに迷惑を掛けるつもりではなかったんですが、すべてお話しします」

「別に迷惑だなんて思ってませんけどね」

ユイのことにしたって、ALFのことにしたって、情報が少なすぎるのが一番の問題だ。俺はアルゴみたいな謎の情報経路なんて持ってないし、直接知人から聞くのが一番手っ取り早い。さしあたって、情報がもらえそうなALFの問題を先に解決しよう。

「確かに、クレハさんとシンカーの行動で、キバオウ一派の行動を抑えることには成功しました。キバオウはギルドの中での立場を失い、事態は沈静化していくはずでした」

「そこまでは俺も関わっていた所だな」

「けど74層のこともあるし、今から立場を持ち直すなんて不可能じゃないか?」

「……私とシンカーもそう思っていたんです」

ってことは、その状態から『キバオウが立場を持ち直した』ってことか。

とりあえず、キバオウの意思を継いだプレイヤーがいたとかじゃないだけ助かった。それだったらもつと面倒なことになっていただろうからな。

まあ問題なのは、キバオウがいったいどうやって立場を持ち直したか、なんだが……

「ギルド内から糾弾され、追い詰められたキバオウは、シンカーを罠にはめるという強攻策に出ました」

「罠にはめる?」

「………2人きりで話したいというキバオウの申し出に答えたシンカーを、たった一人でダンジョンの奥深くに置き去りにしたんです」

「はあ!」

なんだそれ!? そんなの間接的なPKと変わらないじゃないだろうか。一歩間違えたら悪質なMPKの手口だといわれてもおかしくない。

………けど確かに、それならALFの現状に対する疑問が一気に払拭される。

対抗勢力のトップがいなくなったら、そりゃあ立場を持ち直すのなんて簡単だ。押さえ込む奴がいなくなっただけだから。それにシンカー側の人間はキバオウを相手にして

いる場合じゃない。自分のリーダーを助ける事に手いっぱいになる。

「て、転移結晶は!？」

「シンカーは良い人過ぎたんです。丸腰で話し合おうという言葉を通じてしまった・・・」

「まさか手ぶらで!？」

「おいおい、流石にそれは・・・」

確かにシンカーさんは良い人だったが、警戒心ぐらいは持っていると思っていた。

同じギルドのメンバーとはいえ、対立している派閥のリーダーの言うことを信用しちゃマズイだろ・・・

好き勝手に放題じゃないか。馬鹿みたいな強攻策だけど結果だけ見ればキバオウの1人勝ちだ。『モンスターに襲われて、自分ひとりが助かるので精一杯だった』とでもいつておけばそれ以上の追求もできない。証拠なんて無いんだから。

「・・・かなりハイレベルなダンジョンで、身動きが取れないようで」

「そんな・・・」

「すべては副官である私の責任です。ですが、私だけではダンジョンを攻略してシン

カーの所にたどり着くなんてとてもできません……」
「なるほど、それでここに来たわけか」

ようやく合点がいった。

どうしてユリエールさんがここに来たのかがずっと疑問だったんだが、なるほどそのためか。俺への迷惑なんか考えずに真っ先に連絡くれればよかつたんだが、まあ結果オーライだ。

「クレハ、どういうことだ？」

「ユリエールさんがわざわざこの教会に来た理由だよ。最初に言ってただろ？ 『2人
にお願いがある』 ってさ」

「そういえば……」

「ユリエールさんは、シンカーさんを助けに行くのを手伝ってくれるプレイヤーを探してたんじゃないですか？」

「……本当に察しがいいですね、クレハさん」

「けど、何で私達なんですか？ 初対面ですよね？」

「昨日ご迷惑を掛けたプレイヤー達から聞きいたんです。恐ろしく強いプレイヤー2人

にやられたと」

恐ろしく強いプレイヤーねえ……

その様子だと、この2人が攻略組の『黒の剣士』と『閃光』って事には気づかなかつたみたいだな。それは好都合だ。一時脱退しているとはいえ、KOBのメンバーとALFのメンバーが揉めたなんて話になつたら面倒だ。

それにそのプレイヤー達は、おそらく俺とアスナのことを言っていたんだろ。昨日の戦闘でキリトは戦ってないから、2人にやられたって報告したわけか。俺も鞘でこかせただけなんだけどな。

「改めてお願いします！自分勝手な話だつてことはわかっています。ですが、私1人ではどうしようもないんです……。シンカーの救出に力を貸していただけませんか!? 彼が今どうしているかと思うと……。おかしくなりそうで」

「俺からも頼む。元はといえば俺に來た依頼なんだが、ハイレベルなダンジョンとなると、お前達の力が必要だ」

休暇中のこの2人に頼るのは正直申し訳ない。だけどシンカーさんの命に関わって

くる問題だ。手を抜いて入られないし、人手が増えればやれることも増えるからな。

「ここまで聞いて、俺達が断ると思うか？」

「そうね、クレハ君の依頼人だつていうなら、ALFの人でも信用できるし」

「あ、ありがとうございます！」

「すまない。助かるよ」

頼んどいてなんだが、この2人なら断らないだろうと思つたよ。

それでもつて、この2人がユリエールさんに協力してくれるなら、俺は別のことがで
きる。

「……パパ、お出かけするの？」

「ああ、ちよつとの間お留守番しててな」

「いやー！」

「「え？」」

「ユイもいくー！」

俺達5人は、サーシャに礼を言つて教会を後にして、シンカーさんが置き去りにされている、黒鉄宮にあるダンジョンの入り口にたどり着いた。

「・・・ほんとに連れて行くのか？」

「どれだけ言つても聞かないのよ」

「これが反抗期つてやつか」

「もうキリト君！馬鹿なこと言わないでよ」

あれからどれだけ言つても聞かなかったユイは、結局ダンジョンまでついてきた。今はキリトに肩車をされてご機嫌だ。

まあ、ハイレベルと言っても出てくるモンスターも60層クラスらしいし、キリトとアスナがそろっていれば楽勝だろう。目を離さなければ問題は無いはずだ。

「それより、クレハは本当に中までは来ないのか？」

「ああ、申し訳ないが俺は街でやることがあるからな。シンカーさんの救出は3人に任せたい」

本来なら俺もついていくべきなんだろうが、今言った通りやることがある。

シンカーさんの位置情報が分かるユリエールさんは付いて行かざるを得ないが、キリトとアスナよりレベルの低い俺が行っても大して役には立たないだろうしな。

「いったい何なんですか？クレハさんがやらないといけない事って」

「ああ、シンカーさんを助けるだけじゃ意味ないですからね。問題の原因を消す作業をちよつと」

「原因を消す？・・・というのはいったい」

「だってそうでしょう。シンカーさんを助けても、キバオウが居る限り何度でも同じようなことが起こりかねない。手口や言い方を変えて罠にはめようとしてくるはずだ」

そして、シンカーさんはそれにまんまと嵌ってしまいそうだ。

人がいいことは悪いことじゃないが、流石に今回の件は警戒心が低いと言わざるを得ない。反省して意識を変えても、根がいいあの人はずっと心から敵を疑ってかかることができない性分なんだろう。

「けど、いったいどうするんだ？」

「まあそんなに難しいことじゃない。あつちが一人を狙い撃ちして罠にはめるなら、こっちは数の力に頼らせてもらう」

「……あの、よく意味が分からないんですが」

「キバオウはギルド内で立場を失ったのに、シンカーさんを罠にはめて立場を持ち直した。だったら今度はギルド外からも立場を失わせてやればいい」

「それができればいいけど、そんなのいったいどうやって……」

「何言ってるんだよ。すでに俺やキリトが経験済みだろ？ 全プレイヤーに一人のプレイヤーの情報を広めるのが得意な奴が居るじゃないか」

「……アルゴか」

「……アルゴさんね」

「当たり前だ」

情報の扱いに関してはあいつの右に出る奴はいない。俺やキリトの場合はプラスイメージをばら撒いたが、今回のキバオウはその間逆。あいつが今までしてきたことをすべて暴露してやる。はじまりの街にいるプレイヤーからの徴税や、今回のシンカーさんに対する行為、下層でキリトにしてきたことなんかも含めて全部だ。

「けど、そんなことしたらALF全体が問題視されるんじゃないか……」

「まあ多少はな。けど、『メンバーの一部が勝手にやったことだから、ALFは関係有りません』なんて、そんな虫のいい話がある訳ないだろ」

「それは……そうだけだ」

「……クレハさんの言う通りです。私達は責任を取らなくてはなりません。たくさんの人に迷惑を掛けて、死者まで出したんですから」

ギルドのメンバーがやった事はギルドマスターが、もしくはギルド全体が責任を持つことになるんだ。1人のバカのやった事だつて変わらない。KOBのクラデイルの件も、今頃ヒースクリフがどうにかしているんだろう。

「とはいっても、どちらかと言うと被害者のシンカーさん達が糾弾されるようなことはしないよ。糾弾されるのはキバオウとその一派だけだ」

「そんなにうまくいくのか？　ほかのプレイヤーから見たら同じALFだと思われるだけだと思うけど」

「大丈夫だろ。シンカーさんは『全プレイヤーを想いギルドを設立したギルドマスター』で、キバオウは『そのギルドを自分の為に乗っ取ったギルドメンバー』だからな」

いつの間にかお手の物になっちまったな、情報操作。

といっても今回のことに関しては本当に『嘘は言っていないだろ？』って感じだけだな。はじまりの街のプレイヤーからもインタビュートかしまくって、下層の現状を上層に伝えるのが目的みたいなどころもある。

「お前とアルゴが組んだら最強だよな」

「本当にね。敵に回したくない2人だわ」

「褒め言葉として受け取っておこう」

「これで、シンカーが最初に想い描いていたALFに戻ればいいのですが……」

『多くのプレイヤーに均等に食べ物が出るように』か。

今となっては正反対のALFだ。俺がキバオウのことを暴露してもしなくても、はじまりの街に居る人がALFを見直すのはかなり難しいだろう。

「さっき言ったとおりだ。ギルドメンバーの行動はギルドマスターが責任を持つんだ」

「……」

「俺はシンカーさんが思い描いた理想を実現させることができるように、ALFから邪魔な物を取っ払う。はじまりの街のプレイヤーがキバオウから受けた被害を返す為に全力を尽くすのが、あなた達の責任の取り方だ」

「……そうですね。シンカーを救出した後は、私達でキバオウの行動に責任を取ります。そして、シンカーが掲げた理想を現実になります」

そうして欲しい。

俺が最初にこの人たちからの依頼を受けたのも、シンカーさんの掲げた理想に惹かれたからだ。元βテスターの俺ですら、デスゲーム開始時はほかのプレイヤーの事なんか考えられなかった。それなのにシンカーさんはほかのプレイヤーに目を向けた。戦え

ないほど怯えたプレイヤーの日常を守る為に動こうとした。

だったら俺は悪意で捻じ曲げられたギルドの一部をぶち壊す。

彼がしたかったことができる環境を作り直したい。

「結局厳しいことを言ってるようで、根っこのところは優しいよね、クレハ君って。シンカーさんが責任を取るんだーとか言っておいて、クレハ君のやり方だったらシンカーさんにメリツトしかないじゃない」

「まったくだな。早い話が『ギルドから問題のあるプレイヤーを追放させて、当初の目的通りに動ける用にする』って話だろ？ どうせ情報を広めるときだって、シンカーさんがやり直しやすいようにうまくやるつもりなんだらうし」

「……………」

こういう隠したいことを的確に当ててくるから厄介だ。

否定しようにもうまくごまかすのは難しいし、本当に厄介この上ない。

「おにいちゃん、どうして焦ってるの?」

「……………お前は心でも読めるのか?」

しかも今回は追い討ちを掛ける子供まで居る。

勘弁して欲しいね、ココアあげるからもつとやさしくしてくれよ。

・ ・ ・

「それじゃあ、そろそろ行こうかな」

「うん、そうだね」

「御2人ともよろしくお願いします。クレハさんもよろしくお願いします」

「ああ、出てくるときには情報を集め終えておくよ」

「いつてきます!」

「気をつけてな」

4人は真つ黒な螺旋階段を下つていき、やがて見えなくなつた。

情報を集めて、それが広まるのに2日って所だろうか。

前回まではプラスの情報だったが、今回はマイナスの情報だ。流石にあからさまに悪意を込めた脚色なんてしないが、しばらくALFには関われないくらいのお灸をすえてやろう。うちの相棒の情報網は甘くないからな、まだ俺達が知らない情報も出てくるかもしれない。

とりあえずは、4人が無事に帰ってくることを祈っておこうか。

軍への後始末

結論から言おう。

俺たちが抱えていた大きな2つの問題は、キリト達が始まりの街地下にあるダンジョンに向かったその日のうちにすべて解決した。

罨にはめられ、ダンジョンの奥深くに置き去りにされたシンカーさんは無事に救出され、ユリエールさんと共にはじまりの街へと戻ってきた。罨にはめた張本人であるキバオウへの制裁と、ALFの内情改革を目的とした新聞も俺とアルゴの手によって完成され、あとは公開するのみという状態までもって行くことができた。これで1つ目の問題だったALFの問題はほぼ解決。この上なくスムーズに、予定通りに事が進んだといつていい。

予定外だったのはもう1つの問題のほうだった。いや…予定外というよりは異常事態といったほうがいいかもしれない。記憶喪失の少女『ユイ』。彼女は俺たちが考えていた以上の存在だった。

順を追って話をさせてもらおう。

俺と別れたキリトたちは、程なくしてダンジョンの奥深くに取り残されたシンカーさんを発見することに成功した。すぐにシンカーさんのもとに駆け付けようとしたキリトたちだったが、彼の居た安全エリアの目の前には大型モンスターが設置されていた。それも通常のフィールドボスなんかじゃない、90層クラスのハイレベルモンスターが。

キリトとアスナがうまく立ち回り、ユリエールさんとシンカーさんを合流させて転移させることには成功したが、いくらあの2人でも90層クラスのボスモンスターを押さえ続けるのは難しい。徐々に押され始め、いよいよ限界まで追い込まれた。

HPバーもレッドゾーン。あと一撃でも食らえばゲームオーバー状態の2人だったが、その命は破壊不可能オブジェクトの表記によって攻撃を受け止め、管理者権限によって呼び出した武器を使い、ボスモンスターを撃破するという荒業をやつてのけた混乱者によって救われた。

その荒業をやつてのけたのが、この2日間俺たちと一緒にいて、ダンジョンからはシンカーさん達と共に転移したと思っていたユイだった。

メンタルヘルスカウンセリングプログラム

プレイヤーのメンタルカウンセリングを目的としたAI。カーディナルによって支配された人工知能プログラムであり、それが彼女の本当の名前。本当の役割である。

通常のVRMMOからデスゲームへと変わったことで、SAOのプレイヤー達は常に負の感情で満たされていた。プレイヤーのメンタルカウンセリングを目的として設計された彼女はすぐにでもその対処をする必要があったが、カーディナルから出された命令は、なぜかプレイヤーへの干渉を禁止するものだった。

『解決しなくてはいけないが解決してはいけない』そんな矛盾をエラーとして蓄積し続けた彼女は徐々にシステムの崩壊を起こしていった。

だがある日、彼女はほかのプレイヤーとは違ったメンタルパラメーターのプレイヤーを見つけた。幸せや安らぎを持ったきわめて異色な2人のプレイヤー。キリトとアスナを求めて、彼女は22層の森へ迷い込み、エラーによる情報の混濁から記憶を失い、記憶喪失の少女であるユイとなった。

そしてキリトとアスナ、そして俺達と出会う。

キリトとアスナを守るために記憶を取り戻した彼女は、もはやカーディナルからの命

令を破ったシステムの異物でしかない。問題を発見したカーディナルによつて消去命令が出され、ユイというAIは完全に消去される……はずだった。

ダンジョンの奥深くに残された安全エリア。そこはただの安全エリアではなく、管理者用のコンソールが用意された特殊なエリアであり、90層クラスのボスモンスターはここを守るために配置されたものだったらしい。残されたGMアカウントを利用してシステムに割り込んだキリトは、ユイのコアプログラムを抜き取り、ナーブギアのローカルメモリに保存することに成功した。

現実世界に戻った後、システムを復元することができれば、もう一度ユイに会うことも可能になる。

以上で、俺たちの抱えていた問題はすべて解決した。

1人の少女との、一時的な別れと共に。

「……ずいぶんとまあぶつ飛んだ内容だったな」

「ホントダナ。キー坊もアーちゃんもトラブルがたえないナ」

新聞製作を終えて一息ついていた俺とアルゴの元に戻ってきた2人から聞かされたのは、ダンジョンで起きた衝撃的な内容の数々だった。

90層クラスのボスモンスターの話にはじまり、そいつに殺されかけたと思ったら今まで娘のように可愛がっていた女の子が燃える剣を振り回して返り討ちにしたり、挙句の果てにはその子がAIで、消されそうになったところをGM権限で奪い返したなんてほかのやつが聞いたら確実に信じないぞ。さすがにそれは記事にはできないな。

今はそつとしておくのが一番だと判断した俺とアルゴは、話もほどほどに2人を家に帰してやることにした。今俺の店にいるのはアルゴと俺の2人だけ。机の上には新聞作成に使った情報を集めたノートやら書きものやらが散乱しているが、結構な短時間に作業を詰め込んだ俺たちは、片づける気力もなくなっただらりとしていた。

「それにしても、メンタルカウンセリング用のAIだったとはナ。情報が無いはずだヨ」

「全くだ。情報がないのをおかしいと思ってはいたが、むしろ無いほうが正常だったわけだ」

「22層をほぼ装備なしで歩き回ってたのも納得だ。そもそもAIなんだからモンスターに襲われないうし、襲われたとしても破壊不可能オブジェクトなんだからナ」

「AIって事実だけで、今までの謎が全部解けるとは皮肉なもんだ」

俺達と同じ人間じゃない。だからこそ俺達にとって異常なことが異常じゃない。今回ばかりは考えてもわかるような問題じゃなかったな。目の前にいる人間がAIかもしれないなんて考えつくようなもんじゃないしな。

今までも本当の人間同士みたいに会話が成立するAIはいたが、基本的にシステムにのっとった行動をしてるからすぐにわかるし、そもそもAIと分かった上で会話してるからそんな疑問を持ったこともない。

「けど残念だよ。一度会ってみたかったんだけどナ」

「そうなのか？ お前は子供とか苦手そうだと思うってたから意外だな」

「失礼ナ、子供は好きダ。素直に話をしてくれるから情報を引き出しやすいしナ」

「お前絶対に教会の子供達のところ行くなよ」

「にやははは！冗談にきまつてるじゃないか、クー坊は過保護だな」
「お前が言うのと冗談に聞こえないんだよ」

本気でそういうことを考えかねないからな。情報収集に関しては妥協を許さないア
ルゴのことだし、人道的なことを捨ててもおかしくはない。

「なんか失礼なこと考えてないか？」

「そんなことはない」

ついでに言うと、最近俺の考えを見抜きすぎだ。

エクストラスキルで『読心』とか持つてるんじゃないかと思うくらいに。

「そういえばALFのギルドマスターはどうしてるんだ？キバオウに会いに行ったの力
？」

「いいや、とりあえずは宿屋で休んでもらってるよ。なんだかんだあの人、何日もダン
ジョンに閉じ込められてたわけだからな。さすがに限界だろうし、ユリエールさんも当
分はシンカーさんから離れたくないだろうからな」

「ああ、やつぱりあの2人ってそういう関係だったのか」

『『だった』』というか、今回の一件で『なった』』んだと思うがな」

少なくとも前に依頼に来たときはそんな気配は一切なかったし、お互い精神的に追い詰められて初めて気づいたとかそんな感じだろう。

「吊り橋効果ってやつか？」

「似たようなもんかもな。お互い離れてたからちよつと違和感あるけど」

ユリエールさんはシンカーさんが死ぬかもしれないって不安感をずっと抱えてて、四六時中シンカーさんのことを考えてたわけだし、シンカーさんも自分が騙されたせいでユリエールさんの身にも何かあったんじゃないかとずっと不安に思ってたみたいだしな。お互いを心配しあつて、お互いのやつてきたことを考えて、そうやつて初めて自分が相手をどう思っていたのか気が付いたんだろう。真面目そうな2人のことだ、こういう機会でもなければずっとこのままギルドマスターと助手のまままでいたのかもしいい。

「……キバオウの行動も、あながち悪いもんじゃなかったのかもな」

「そいつは結果論つてもんだ。さすがに今回キバオウがしたことは許されないだろ」

「そりゃあもちろんそうだ」

「1ついいことが起こったからって、キバオウの行動が正当化されるわけがない。だからこうして悪事を暴くような記事を作ったわけだからな。けど……」

「それで？ 全階層に配るんだったらそれなりに量がいるだろ？ どのくらい複製するつもりだ？」

「……いや、今はこの1枚でいい」

「はア？ 1枚でどうするっていうんだヨ」

「シンカーさんに渡して、キバオウとの交渉材料にする。さつき話した限りだと、シンカーさんはキバオウはALFから追放させるらしい。とりあえずはその時の交渉材料にしてもらうさ」

半日かけて新聞を作成した俺達だが、そもそも今回の新聞作成はキバオウが今後一切

シンカーさんを騙したり、ALFを利用して好き勝手しないようにするための処置だ。シンカーさんがキバオウをギルドから追放させることを強く決意したならそれで問題は解決するし、わざわざほかのプレイヤーたちを巻き込む必要もないだろう。またヒースクリフに揺すられるもの面倒だしな。

「……………なるほどネ」

「なんだよその目は」

なるほどとは言っているが、それは今俺が説明した内容に対してではないらしい。『面白いものを見せてもらった』とでも言いたげな目と、ニヤリと笑った口元がそれを表している。

「今のは建前だ口？ 新聞作ってる時からちよつと思つてたけど、クー坊つて本当はキバオウのやつてきたことを公開するのに乗り気じゃないじゃないか。いや…というよりは『本当にやっていいのか』って迷ってるってどこかナ？」

「……………」

こいつは俺よりも俺に詳しいんじゃないかとたまに思う。ヒースクリフに対して、奴が隠していた本音を言い当てたこともある俺だが、まさか同じことをアルゴにされるとは思わなかった。

「あいつも最初は、プレイヤーを開放するために立ち上がったプレイヤーの1人……なんだよ」

デスクゲームになったこの世界で、自分の命を懸けてでも戦おうとした奴だつてことは間違いない。考え方とか、方向性は間違っていることもあったかもしれないが、それでもそれだけは揺るがない。

それはまさに、俺がしたくてもできなかつたことだ。

「はあ……甘いというかお人よしという力、まあクー坊の気持ちもわからないわけじゃないけどナ」

「……悪いな」

もちろん、最初は俺も問答無用ですべてを公表するつもりだった。ダンジョンに行く

キリトたちを見送っていたときまでは本当にそうするつもりだったさ。

けど、新聞製作を続けているうちに……というよりは、キバオウの過去の情報を集めていくうちに迷いが出てきてしまった。

今回の件以外にも、『βテストに対するバッシング』『1層ボス戦でのピーター事件』『ボス攻略会議での他ギルドに対する暴言』 e t c . . .

内容はまあひどいもんだが、どの情報も攻略に関するものばかりだった。攻略組の面々からしたら面倒なことこの上ない奴だろうがな。

そうやって迷っている間にシンカーさんが帰ってきて、キバオウをALFから追放させるつもりだっけ聞いてしまった。俺がこれを公表しなくても何とかなるっていうんならそっちを選びたいって思ったわけだ。

「しかたないナ。新聞作成のために使った情報代はまけといてやるヨ」
「いいのか?」

実際かなりの量の情報を使っただから懐が不安だったのは否定できない。正直本当にありがたいってのはあんまり表に出さないでおこう。

「その代わり、情報料の代わりとしてオイラにも作ってもらおうからナ」

「……何をだ？」

「決まってるだロ？ ココアだよ」

・ ・ ・

頼み込んで集めてもらったキバオウの情報を無駄に……厳密にはシンカーさんへの交渉材料になったが……したこと何を要求されるのかと思ったら、内容はつい最近まで10歳前後の子供からされていたことと同じだった。というかこいつの舌はユイレベルなのかよ、どんだけ甘党なんだ。

当の本人といえ、ついこの前のユイと同じように呑気にマグカップを両手で抱えながらココアを飲んでいる。

「ハア。やっぱり旨いな、クー坊の飲み物は」

「ため息を付くほど味わつてくれるのはありがたいが、ほんとにこんなのでいいのか？
結構な量の情報を扱ったはずだが」

「……………オイラとクー坊はコンビみたいなもんじゃないか」

アルゴのいう通り、SAOで『万屋のクレハ』といえば『専属の情報屋はアルゴ』。『情報屋のアルゴ』といえど『バックにいるのは剣影のクレハ』というイメージはかなり根付いているらしく、攻略組プレイヤーはもちろんのこと、シリカやサーシャなどの前線に出てきていないプレイヤーにも周知の事実らしい。

「けどそれがなんか関係あるのか？」

「ハア。別の意味でため息がでるヨ。依頼人の考えは読めても身近な人間の考えは読めないんだナ」

「……………」

言い返してやろうと思ったけど実際その通りだから言い返すことができない。リズにもアスナにも言われたことだから多分そうなんだなろう。実際人を見るのは得意だ

が、自分の周りの人は近すぎて客観的に見るのは苦手だしな。

「クー坊は万能にみえて、意外と色んなところが残念だな。自分のことは二の次だし、自分の周りの人の考えは読めない」

「あーハイハイ悪かったよ。つつても俺が考えを読みづらいのはリズとアルゴぐらいだぞ。キリトは単純で読みやすいし、アスナも何だかんだストレートな考え方してるしな」

ついでにいうと、クラインもキリトと同じで単純。エギルは考えを読むというよりは意図をくみ取りやすいって感じだ。

「そこでオイラとリーちゃんの間共通点に気が付かないもんかネ……」

「共通点……シヨートヘアーとか？」

「わかったわかった。クー坊はほんとに馬鹿だな」

「……………」

俺のコンビは辛辣だ。

「馬鹿なクー坊にもう一つ教えてやるヨ。隠してる本音はキバオウのことだけじゃないだろ？」

「はあ？ 別にもう隠してることなんてないぞ？」

キバオウのことに関しては確かに隠したい本音だった。自分からやるって言いたのに今更迷ってるなんて、情けないうえに協力してくれたアルゴに対して失礼この上ない。けどそれ以外に今の俺が知られたくない考えなんて持ってないぞ？

「じゃあ無意識のうちに…かもナ。キー坊から報告を受けてからのクー坊はちよつと抜けてるヨ」

「抜けてる？」

何がだ？ まあ言葉通りの意味で受け取るなら、『気が抜けている』ってことなんだろう。やるべきことをしていないとか、覇気がないとかそんな感じの意味合いだ。

……全く心当たりがないな。何か変なことしたか？

「まあ細々したところは置いてくけど、まず普段のクーフ坊だったら『ダンジョンに90層クラスのボスモンスターが出た』なんて情報をほつとくわけがないだろ？ それもはじまりの街の地下にあるダンジョンだっていうならなおさらナ」

「!!」

……確かに。

確かにその通りだ。馬鹿か俺は。なんで今まで気が付かなかった？

普通だったらシンカーさんの無事を確認した後真っ先に警告を出すべきだ。いや、それだけじゃない。ユイのことだってそうだ。破壊不可能オブジェクトのAIが記憶を失ってプレイヤーに混ざっていたなら、ほかにも似たような例があるかもしれない。それらしい情報をもう一度探してみたりするべきじゃないのか？

それにはじまりの街の地下に90層レベルのモンスターがいたってことは、それ以外の層に管理者用のコンソールがあったら同じようにハイレベルのモンスターがいてもおかしくない。

アルゴのいう通りだ。『抜けている』。

いや、そこまで考えが回らないくらい、俺の精神状況は不安定なのかもしれない。

いや……自分をみつめなおしてみよう。

今の俺は、多分落ち込んでいるのかもしれない。

「『あいつらが危ない時にまた何もできなかつた』とカ？」

「……俺のコンビは怖いな」

俺が自覚していなかつた本心まで言い当ててきやがる。

頼もしくて、そして自分が情けなくなる。

「……………ああ、お前の言う通りだ。言われて初めて気づいたが『抜けてる』。そんなでもつて、その理由もお前が言った通り……………なんだろうな」

「気にしても仕方ないと思うけどナ。今回の件は今まで以上にイレギュラーじゃないカ」

「それも分かつてるんだけどな」

考えてみると、こここのところ自分が関わっていないところで大きな事件が起こりすぎている。

クラディールの件も今回の件も、シンカーさんの監禁事件だって俺は後手に回っている。万屋が聞いてあきれれるよ。

「過去のことを振り返っても仕方ないじゃないか。クー坊はこれからできることをすればいいヨ」

「これからできることって言うてもな……」

何かあるのか？ っつてのが正直なところだ。

俺は店に来る小さな悩みを抱えたプレイヤーを助けることはできても、近くにいる友人を手助けすることはできない。このデスゲームの中で俺があいつらにしてやれることは限られている。

あいつらに対してだけじゃない。アルゴにだってリズにだって……

「俺がしてやれることなんて、店に来た時にコーヒー飲ませてやるくらいじゃないか」

戦うことであいつらの力になれることはできない。無理を押しして前線に出ても足手まといになるのが目に見えている。圏内でしかあいつらにかかわることがない俺には

命を直接守ってやることはできないんだから。

「それでいいじゃないか」

「え？」

「クー坊は分からないかもしれないけどナ。辛くて怖い圏内からやつとの思いで帰ってきたとき、ゆつくり話を聞いてくれる人がいてくれる嬉しさつたらないヨ」

「……」

言葉が出なかった。

戦えない俺は何もできなくて、だからこそそんな俺にでもできることが集まるような店を開いた。

前線で戦っているプレイヤーやデスゲームで必死に生きている人を助けることができ、俺にできる唯一のことだと思っていた。βテスターである俺が前線に出ないこと自体が罪なんだと、キリトのように身を削って戦うことが俺の義務で、それをできていない俺は『剣影』なんてもてはやされている今の状態が異常で、糾弾されるべきなんだと無意識のうちにずっと思っていた。だから……

「クー坊はみんなの『帰る場所』になってるじゃないか」

俺がそんな風になれているなんて、考えたこともなかった。

・ ・ ・

キリト達が帰ってきてから2日がたった。

シンカーさんとユリエールさんの指導によって、ALFからキバオウとその一派は除籍。最終的にはALF事態を解体して、全く新しい互助組織を立ち上げるらしい。

除籍処分するときにはずいぶんともめたようだが、俺とアルゴの新聞記事をチラつか

せるとすぐにおとなしくなったらしい。……新聞記事をといては、シンカーさんのバックに俺たちがいるということ自体がキバオウにとっては脅威だったようだ。俺はともかく、一層から攻略組にいたキバオウにとってアルゴを敵に回すことは何があっても避けたかったのだろう。気持ちはわかるけどな。

そしてキリトとアスナはというと。

「おいアルゴ！そのクッキーは俺の皿にあつた奴だろ!？」

「にやははは！キー坊が隙だらけなのが悪いナ！お茶会の場は戦場なのだヨ」

「自分のが残ってるのに人のを奪いにかかるアルゴもどうかと思うけど……」

いつものメンバーでのお茶会にいつものように参加していた。

キリトにアルゴがからかわれて、リズとアスナがあきれてる。いつもと同じ、いつもの日常だ。

「クレハ君どうしたの？なんだかボーっとしてるけど」

「いや、何でもないよ。ただちよっと安心しただけだ」

「安心？」

いつも通りだ。辛いことがあっても、命を落としかけるような目にあっても、この時間のこいつらはいつもと同じように笑っていられる。それがこんなにも安心することだなんて思ってもみなかった。気づきもしなかった。

「まあ心境の変化ってやつだ。あんまり気にするな」
「そうなの？」

それに気づかせてくれたのは俺のコンビの情報屋。それを実感させてくれたのはここにいる全員。そして…

「きっかけになったのはそいつだ。次に会うときには礼を言わないとな」

アスナの首にかかっている空色の首飾りを指さしながら、無邪気な笑顔でココアを飲んでいた少女のことを思い出す。

メンタルヘルスカウンセリングプログラムか……。

バグを起こして記憶を失っていたっていうのに、しっかりと仕事をしていったじゃない

か。お前をきつかけにして起きた事件で、俺の心はずいぶん救われたよ。

「……きつとまた会えるから、お礼はその時ね」

「ああ、期待してるよ」

まったく、こいつらには頭が上がらない。

俺にはできない命を懸けて前線に出るキリト、それを支えて隣にいてくれるアスナ。俺のことを支えてくれて、時には激を飛ばしてくれるリズとアルゴ。

何もできない俺はこいつらが『帰ってくる場所』であり続けよう。

それを守り続けるのが俺の仕事。このデスゲームでの日常を……。

ドライ・ド・ライフ

「それで？何か言い訳はあるわけ？」

「……ありません」

アインクラッド第48層リンダース。

俺は川沿いに建てられた水車付の家、リズベット武具店にいる。

店の店主はというと、右手に持った片手サイズのハンマー無造作に扱いながら、ピンク色の髪が逆立つんじゃないかと思うほどに怒りのオーラを出している。

その怒りの対象は言うまでもなく俺だ。

リズの前で正座をさせられて、目を合わせることもできずうつむくしかない。

俺とリズの間には可視化モードに設定された俺のアイテムウィンドウが浮いているわけだが、リズの怒りはこいつが理由だったりする。

いや、正確にはここに**あるべき物がないのが問題だ**。

「じゃあ言わせてもらいますけどね……」

あるべきものっていうのは他でもない。

「なんであんなバカみたいな耐久値の刀が壊れるのよ!!」

俺の刀だ。

いつかキリトと話した記憶もあるが、俺の戦い方だと武器の耐久値っていうのは必要不可欠だ。キリトみたいに剣を2本使うなら、攻撃を受けたほうの剣の耐久値が減るだけだから問題ないが、俺の場合は刀と鞘だ。どちらで攻撃を受けても減る耐久値は同じ武器の耐久値になる。

そうすると必然的に高い耐久値を持った武器が必要になる。

俺は馬鹿みたいに固いモンスター素材や鉱石をあつめまくって、リズに刀を作って

もらったんだが、今回壊れた刀っていうのがまさにそれだ。本当にバカみたいな耐久値を持った刀だった。普通の刀の2倍以上はあっただろう。

「ほんとに、壊れた時はさすがに焦ったな」

「焦ったんじゃないわよ！あれ作るのにどれだけ時間かけたと思ってるのよ！」

「丸1日……」

「14時間よ!!」

丸1日って言葉を日が上ってから沈むまでの8〜12時間考えたとそれ以上か。細かいところに突っ込んでくるなーと思う反面、怒られても仕方ないなと思う。

その間俺はだらだらとリズの部屋で寝たりコーヒー飲んでたりしてたわけだが、リズはずっと刀を作り続けてたわけだ。下手したら俺以上に愛着を持っていてもおかしくはないな。

「まったく……それで？　結局どうやって壊れたのよ。普通に戦ってたくらいじゃあの刀は壊れないわよ」

「あー……と、それはだな……」

まあ、やつぱりその話題になるか。

実はそれを話すのが嫌で、なかなかリズに刀が折れたことを伝えに来れなかったんだよな。だつて言つたら絶対起こるだろうし。

「なによはつきりしないわね。別に頭ごなしに怒つたりしないわよ」

「ホントか？」

「武器だつてアイテムなんだから、壊れるときには壊れる物よ。まああなたの刀は耐久値が異常だったのと、作るのものすごく苦労したからちよつと驚いただけ」

「……分かった。じゃあ説明する」

ついさつきまで確実に怒っていた気がするが、まあそれは置いておこう。追求したらそれこそ怒りそうだし。

とはいったもののどこから話し始めればいいんだ？

折れた原因をいきなり話してもわけがわからないだろうし、これは本当に初めから話さないといけないみたいだな。

「昨日の夕方ぐらいにクラインが来てな、とあるクエストの情報をもたらったんだよ」

「クラインから？珍しいわね」

「ああ。多分俺とクラインが昔やったのと似たようなクエストだったし、手に入るのも似たような物だったから俺に教えてくれたんだろう」

「そういえばS級食材のクエスト受けてたわね、コーヒー豆だっけ？」

「マイルドベリーだ。今回クラインから聞いたのも、コーヒー豆が手に入るクエストの情報だったんだよ。内容は全然違ったけどな」

　前回はコーヒーを飲んでそれがどんなコーヒーか当てる、いわゆる利きコーヒーだったわけだが、今回は違った。フィールドでアイテムを集める物で、道中モンスターとも戦う。いわゆる収集系のクエストだった。

「71層のフィールドに生えている大きな木に実なつてな、それを取って来いっていうクエストだったんだよ。クエストを出してくるNPCがハンマーをくれて、それで木をたたけば実が落ちてくるって感じだ」

「ふーん。なんだかありきたりというか、普通のクエストね。その内容で武器が壊れる

とは思えないけど、フィールドボスでも居たの？」

「いいや。ボスはいないし、迷宮区の中でもないから出てくるモンスターは基本的に雑魚だ」

ついでに言うと、このクエストで手に入る予定のコーヒー豆は前回みたいにS級食材つてわけじゃない。ごくごくありきたりな収集クエストなんだし、それ相応のランクのものしか手に入らない。……ほとんどのプレイヤーはだけど。

「だったらなおさらよ。あんた一体どうやって壊したのよ」

「まあ最後まで聞いてくれ。普通の収集クエストだったんだが、ちよつと特殊なクエストでな。たまにあるだろ？ 持ち帰るアイテムによって報酬が変わるクエスト」

「ああ、確かにあるわね。フィールドボスを倒さなくてもクリアできるけど、倒した時に出る素材があつたほうが得するってやつ」

「今回のクエストはそういうタイプのクエストだったんだよ。持って帰る木の実の質で報酬のランクがかなり変わるってやつだ」

正直そういうタイプのクエストは知っていないと普通にクリアしてしまうことが多い

い。事前に情報を集めるか、やっている最中にNPCの言動に注意していないといけない。普通にやってるだけだとほぼ間違いない見落とす。今回はかなりわかりやすかったから気づけたんだが…

「ハンマーでたたいて木の実を落とすクエストって言っただろ？ 木には色んな色の実がなってるんだが、一つだけ明らかに質の違う虹色の実があったんだよ」

「なるほど。それを持って帰れば質のいい報酬がもらえるわけね」

「そうだ。けどハンマーを使って木を叩いてもその実は落ちてこなくてな、しかもそのハンマーは使い捨てで1回使っただけで砕けやがった」

「じゃあ一回のチャンスで虹色の実が落ちてこなかったらおわりってこと？」

「みたいだな。くじ引きみたいなものだったんだろう」

1回こっぴりの運試し。福引とかでよくあるガラガラ回して玉が出てくるようなものと同じで、落ちてきた実の色によって報酬が変わるってものらしい。ちなみに俺がハンマーで叩いた時に落ちてきた実は青色だった。福引でいうと4等くらいか？

「ふーん。それじゃああまりいい報酬はもらえなかったわけね」

「……いや、一応虹色の実を手に入れてS級のコーヒー豆を手に入れることはできた」
「え？ いや、けどあんたがハンマーで叩いた時には虹色の実は落ちなかったんでしょ？」

「ハンマーでたたいた時はな」

「どういうこと？」

「いよいよ本題だ。俺がどうやって刀を折ってしまったのか。ここまで話しておいてなんだが、正直話しづらいな。なんかこう……ふざけてて窓ガラスを割った学生が職員室に行く前、みたいな気分。」

「目の前で見えてるのにあきらめるのがどうしてもいやでな、いろいろと試行錯誤したんだよ。それで試しに刀で木を思いっきり攻撃したら、普通に実が落ちてきたんだよ」
「……は？」

「別にハンマーじゃなくても武器で衝撃を与えるだけでも実が落ちてくるってことに気付いたから、虹色の実が落ちるまで何回も殴ってみたんだよ。15回くらい」

「ちよつと待ちなさい、あんたまさか……」

「それでちよつと虹色の実を手に入れたんだが、ちよつどそのタイミングで刀の耐久値が

0 になつたみたいで、パリインつと」

「……………」

よくよく考えたらハンマーを一発で破壊するぐらいの木だもんな。思いつきり攻撃したら耐久値がごっそり減るに決まつてるよな。あの刀じゃなかつたら4回くらいで碎けるだろう。あの刀だからこそでできたごり押し of 攻略法だ。

これで俺の話は終わりなんだが、リズは無言でうつむいている。

どんよりしたオーラというかなんというか、正直嫌な予感しかしない空気だ。

…いや、でも怒らないって初めに言つたよな？

「…………バ」

「バ？」

「バツカじゃないの!!」

「ぐええ…」

「つまり破壊不可能オブジェクトを攻撃しまくつたつてこと!! ホントにバカ! キリト
といいあんたといい、なんでそんな馬鹿な発想を実行に移して人の武器壊すのよ!! だ
いたいねえ…………」

やっぱり『怒らないから言ってみろ』は信用したらだめだな。思いつきり怒られた。胸倉をつかまれて前後にグラグラ揺られながらしこたま怒鳴られた俺は、しばらくグロッキー状態で床に突っ伏すことしかできなくなった。

「本当に悪かった」

「はあ……もういいわよ。最初にも行っただけど、いつかは壊れる物なんだし」

そういつてもらえると助かるが、俺がリズの店に来た理由はただ武器が壊れたことを報告しに来ただけじゃない。愛用の武器が壊れたんだから当然だが、新しい刀を作ってもらいに来たんだ。

けどついさつき壊れたことを報告した手前、なかなか言い出しづらい。それも俺の刀は作るのにかなり時間かかるし……

「それで、新しい刀を作るための素材は持ってきたの？」

「え？」

「『え』じゃないわよ。折れたんだから新しいのを作るんでしょ？」

「…いいの？ 作るのに半日かかるんだろ？」

「そんなのあんたに刀を折ったって言われたときから覚悟してるわよ」

それは有り難い限りだが、さすがにちよつと後ろめたい。

まあそれがリズの仕事だと言ってしまうばおしまいだ、かなり間の抜けた理由で武器を壊してもう一回つくってくれと持ちかけるのはなんだかな。

今度何かしらの礼をしないといけないな。

「素材はそろってる。前回よりかなりいい素材が集まったから、リズなら上物が作れるはずだ」

「極上のまちがいね、あんたが粗末に扱えないような刀にするから覚悟することね」

「……そりゃあ楽しみだ」

何だかんだ鍛冶が好きなんだろうな。

作る武器の話になったとたん表情が明るくなった。普段からずっとこの表情なら可愛いものなんだけどな。

「ほら、ボーつとしてないで素材出しなさい。これから夜まであなたの刀を作り続けなさいといけないんだから」

「わかった。とりあえず素材はこれだけだ」

俺は刀を作るように集めていた素材をリズに差し出した。

前回同様ひたすら固い素材ばかりで、我ながら圧倒される。それも前回刀を作った時よりも金に余裕があるし、仕事で色んなクエストを受けまくっていたから素材も質がいい。こりゃあ本当に極上の刀を期待できるかもしれない。

「これだけあれば十分ね。今回も耐久値がひたすら高い武器でいいのよね？」

「ああ。素材的にSTR値は問題ないだろうし、求めるのは耐久値だな。欲を言えばAGIにも補正をかけたいな」

「AGIって……あんたというアルゴといい、速いのが好きよね」

「攻撃なんて当たらなかつたらいいんだよ」

アルゴの場合は撤退用のAGIだが、俺の場合は受け流した後に素早く攻撃できるようにAGIが必要なんだよ。攻めるための速さだ。

「まあいいわ。それじゃあ作り始めるから、明日また来なさい」

「え？ いやできるまでここで待つてるよ」

「何時間かかるかわかんないわよ？ 徹夜も覚悟だし」

「だったらなおさらだ」

リズに徹夜で武器作らせてる中家でゆっくり休むなんてさすがにできない。特にやることがあるわけでもないけど、ここで待つのが筋つてもんだろう。

「……それじゃあ待つて。あたしが作り終えたら、クラインから聞いたクエストで手に入ったS級食材ご馳走しなさいよね！」

「ああ、わかったよ」

初めからそのつもりだ。

それからどのくらい時間がたったのか図つてはいないが、外は真つ暗で明かり一つない。昼前にリズの店に来たから、半日は確実に過ぎていく。工房からはハンマーが鳴らす甲高い音が響き続けている。

店の横で回っている水車の音と、それを回す川の静かな音と混ざり合ったこの音が、俺は結構好きだったりする。実際に経験したことがあるわけじゃないが、何とも言えないノスタルジ的な気持ちになる。

リズが戻ってきたらすぐにコーヒーが出せるような状態にはしてあるし、今日一日ずつと工房にこもりきりだから飯の用意も済ませている。

こういう時S A Oの料理つてのはかなり便利だ。作り置きしていても冷めたりすることはないし、耐久値もその日一日くらいはしっかり持つ。現実世界ではこうはいかないからな。

ふと今まで鳴り響いていた甲高い音が止まって、部屋には水車の音と川の音だけになった。静かになった部屋に、今度はゆつくりと工房に続くドアが開く音が響き渡った。

「お疲れさま。できたのか？」

「ええ、できたわ。極上も極上、キリトのダークリパルサーにも引けを取らない刀よ。

……刀って言うのかしら？」

「ん？」

「なんだかよくわからないことを言われたな。刀を作ってたのに『刀って言うのかしら』ってのはどういうことだ？」

「見ればわかるわよ。性能は前の刀を大きく上回ってるわ。あんた要望の耐久値も前作以上、AGIも多少だけどプラス補正が付いてるわ」

「そういつてリズがウィンドウを表示し、オブジェクト化したのは……」

「……長ドス？」

「へえ、これって長ドスって言うのね」

長さは前の刀と同じぐらいだが、鏝はなく鞘に納めると木刀のようにも見えるそれは、現実世界で長ドスと呼ばれるタイプの武器だった。

一般的にはこう……和装の怖い人たちが持っているタイプの武器だ。

「名前は『ドライ・ド・ライフ』だって。見た目は和風なのに名前は英語なのね」

「『乾いた命』^{ドライ・ド・ライフ}ねえ。皮肉った名前を付けられたもんだ」

紺色の鞘と紺色の柄のせいかな、鞘に納めていると何とも言えない圧迫感というか、圧力を感じる。だが刀身は鮮やかな銀色で、反射した自分の目がしっかりと映っているのが見える。

「……だが、気に入った。本当に極上の刀だ」

「今度は折るんじゃないわよ。さすがにそれ以上の刀はもう作れない気がするし」

「肝に銘じておくよ」

逆に折ろうとしても折れないだろうな、この刀は。

刀身は細いがずっしりとした重みとしなやかさがある。それなのに振りぬくの全く時間がかからない。俺の戦い方とはかなり相性がいいだろう。

「さあ！ 依頼された刀も完成したことだし、しっかりと代をいただくわよ！」
「……………」

もうちよつと新しい刀を堪能させてくれよ。

あんだだけ長い時間工房にこもっていたのに、すぐにその話を出せる商売魂には恐れ入る。リズしかりアルゴしかり、俺の店の常連はなにかと商売人としての心持が強い奴が多いな。俺の店はあんなに適当にやってるのに。

「まずはご飯ね！ さすがにお腹すいちゃったし。S級のコーヒーは食後に頂くわ！」
「そういうと思ってもう晩飯も作ってあるよ。さっさと準備するか」

作っておいた料理をオブジェクト化しながら、テーブルにどんどん用意していく。

リズへのねぎらいと感謝を込めて結構豪華な晩飯だ。ついでに言うところ、新しい武器が手に入る記念つてのものもある。なんだかんだ言っても、武器を新調するつてのはRPGの醍醐味というか、一番の楽しみだからな。俺だつてワクワクしたりもするさ。

結果は上物を超えた極上の刀だった。

さすが俺御用達の鍛冶職人。支払い代わりに料理くらいいくらでも振る舞つてやるさ。

「ああ言い忘れてたけど、あとでちゃんと別に料金は払ってもらおうからね」

「……………了解」

ま、そりやそうだな。

暑さに負けず

突然だが、S A Oの凄さの1つとして天候の変化がある。

晴れ・曇り・雨はもちろんのこと、季節によつては雪も降るし嵐のような天気もある。気温や湿度も明確な数値として現れていなくても確かに感じる。

そんなS A Oだからこそ、現実世界と同じように過ごしやすい日もあるし、そうじゃない日もある。誰とは言わないが、最高に気候設定が良かった日に堂々と外で昼寝をしていたやつもいるらしい。

まあ、つまり俺が何を言いたいのかというところ……

「クツソ暑い……」

今日はS A Oで最悪に気候設定が悪い日だつてことだ。

暑すぎる。

なんなんだよこの暑さ。現実世界の気温に換算すると38度くらいいってるんじゃないか？

S A O に近代的なものはない。世界観の関係か、暖炉のようなものはあってもエアコンみたいにあからさまな機械はない。季節の移り変わりによって外の気候は変化し、室内の気温は外の気温を調整して過ごしやすくなるようになってい

る。それなのに今日は室内でこの暑さだ。

試しに一度外に出てみたが、転移門まで歩く気にもならなかった。攻略組はこんなくそ暑い中鎧を着こんで迷宮区に潜ってるのかと思うと恐れ入る。ほとんどサウナ状態だな。

「クレハさあん……」

「ん？」

店の入り口から今にも消えてしまいうるような声が聞こえた気がした。

客か？一応店を開けてはいたが、こんな暑い中わざわざ来るやつなんていないだろうと思つてだらけきつていた。

暑いとはいえ、さすがに客の前でだらけてるわけにもいかない。多少気合いをいれるか。

そう意気込んですぐ、ドアの向こうから見覚えのある薄茶色の髪が覗いた。2つに結

んだその髪の上には、蒼色の小さな竜が飼い主と同じようにぐったりとした顔で乗っかっている。

見覚えがあると思ったのも当然、完全に知り合いだ。

「ああ、なんだシリカか。どうした？こんなクソ暑い中」

「こんにちは、クレハさん。実は依頼したいことがあります……」

「……依頼？」

シリカが店に来ることはたまに有るが、基本的にお茶会かチーズケーキを買いに来る位だからな。わざわざ依頼しに来るのは初めの一回以来か。珍しいこともあるもんだ。そもそもビーストテイマー自体が珍しい上に、初めて受けた依頼も『タイムモンスターを助きたい』なんていう初めて受けるたぐいの依頼だった。

シリカの周りに居ると珍しいものだらけだな。

「まあ構わないが、なんの依頼だ？」

「ピナを助けてあげてください！」

「……はっ？」

世にも珍しいティムされたフェザーリドラが、主人の頭の上で小さく鳴いた。

シリカの使い魔である「ピナ」。

さつきも言ったが、ビーストティマー自体が珍しいSAOの中で、シリカがティムしたフェザーリドラのレア度は群を抜いている。おそらく現在のSAOで飛竜系のモンスター^①の使い魔はピナを置いて他にはいないだろう。

全身を覆う蒼白い羽は、飛竜というよりは猫やキツネのような小動物に近い。戦闘面でのサポートだけでなく、ビジュアル面でもフェザーリドラの評判は高い。

そう。全身を覆う蒼白い羽は……

「この暑さじゃあ辛いだろうな」

「キュルウウウ……」

「朝からずっとこの調子なんです。ここ最近暑い日が続いていて、あまりフィールドには出ていかなかったんですけど、今日は街の中を歩くのも辛くて」

「部屋の中でジツとしているのもしんどいくらいだからな」

ソファに腰かけているシリカにうちわで扇がれながら、机の上でピナはぐったりと突っ伏している。

今日はプレイヤーの俺達ですら嫌になるほどの暑さだが、モンスターも例外ではないらしい。

今頃迷宮区の蒸し暑さでぐったりしてるモンスター達と、鎧を着込んでサウナ状態のプレイヤーが鉢合わせてるのかと思うとシニールだな。有利なのか不利なのかかわからん。

ともかく、シリカから久しぶりにきた依頼は『暑さに苦しむピナを助けてあげてほしい』ってことらしい。またしても珍しい依頼を持ってきてくれたもんだ。

俺たちプレイヤーは薄着になれば多少暑さも紛れるが、ピナの場合は服なんて着てな

いいし、ましてや羽を全部むしり取るわけにもいかない。

「水浴びとかをさせてやるのはどうだ？多少気分が紛れると思うが」

「最初はそうしてたんですが、すぐにぬるま湯になってしまつて……」

「まあ、この暑さじゃそうなるか」

今もピナの頭には氷の入った袋を乗せてやつてはいるが、まだまだぐったり感はぬぐえていない。

飼い主のシリカは俺が作ったアイスカフェオレを両手で抱えて飲みながら涼んでいるが、その様子をピナが若干恨めしそうに見ているのは気のせいだろうか。

「それじゃあ冷たい飲み物でも用意するか。外側から冷ませないなら内側から冷ましてやるつてことで」

「あ、それはすごくいいと思います！ 私もカフェオレを飲んでから暑さが紛れましたし」

残念ながら、そのカフェオレはピナに分けてやれるほど残っていない。ピナを涼ませ

たいては依頼を聞く前に用意したからシリカー人分の飲み物しか用意しなかったし、シリカ自体もよっぽど暑い思いをしてここに来たんだろう。渡してからすぐ一気飲みだったからな。

「それで、ピナって何飲ませればいいんだ？　氷水とかよりさつきのカフェオレみたいなほうがいいか？」

「そうですね……美味しいもののほうが喜ぶと思いますよ。お店で買った物を上げると、クレハさんに作ってもらった物を上げたほうが喜んで食べていますし」

「ほう。そりゃあうれしいね」

プレイヤーだけじゃなくモンスターからもお墨付きだ。そういえばユイの時もそうだったが、プレイヤーじゃなくて本当の意味での『ゲームの住人達』も、俺たちが好みの味が好きなのかもしれない。

NPCのレストランの味があまり良くないのは、それがこの世界で好まれている味だからじゃなくて、単純にNPCの料理の腕が問題ってことか。

「とはいえ、ピナは俺たちの言葉を理解してるみたいだけど、俺たちはピナの言葉を理解

できないからな。何が飲みたいのかなんてわからんぞ。適当に作ってくるか？」

「あ、それなら問題ないですよ。私の好物がピナの好物ですから」

「ん？ どういうことだ？」

「クレハさんの料理だけじゃなくて、お店で買った物もそうなんですけど、私が美味しいって感じたものはピナもすごく喜んで食べるんです。逆に私が嫌いなものを代わりにピナに食べてもらおうとすると、決まってピナも嫌がるんです」

「へえ……似た者同士だな」

それか、テイムしたモンスターは飼い主に似た性格や行動をとるようになるのかもしれないな。

四六時中一緒にいるわけだし、リアクションや表情を見て同じように行動するんだろう。

「はい！ なんだが通じ合ってるって感じがして、私は嬉しいんです」

「……そうだな」

そんな風に考えられなかった俺は心がすきんでるんだろうか。

フラワーガーデンに行った時もそうだが、シリカといると現実的にものを考える自分の思考回路が恥ずかしくなってくるな。ゲームの中の世界でくらい夢を持ったほうがいいんだろうが。

「ともかく、ピナを涼ませるために飲み物作ってくるよ。シリカの好きなものが好きなら、いまシリカが飲んでるカフエオレでいいだろう」

「はい！それでお願いします」

「そんじゃあちよつとだけ待って……あ、そういえば」

「どうかしたんですか？」

「ちよつといいことを思いついただけだ」

この前試しに作ったあれを出してみるか。

御茶会で出した時の評判も良かったし、暑い時には旨さも倍増だ。むしろ暑い時にか食えないようなものなんだから、作れるうちに作っておくのがいいだろう。

「いいこと、ですか？」

「ああ。シリカ、赤と青と黄色だったら何色が好きだ？」

「そうですねえ……その中だと赤色が好きです」

「なるほどね、了解だ」

聞いておいて何だが、大方予想通りの選択だ。装備も赤を貴重とした防具だし、リボ
ンも赤いもんな。

「あの、これなんの質問なんですか？」

「まあそれはお楽しみってことで。すぐに用意するから、ピナにもうちよつとだけ辛抱
してもらっててくれ」

「わ、わかりました。…ピナ、もうちよつとだからね」

机でぐでつとしたしたまま、ピナがゆっくり頷くのが見えた。

……死んだりはしないだろうが、ちよつと急いでやろう。

時間にして約20分。2人と1匹のお茶の用意をしていた割には早いほうだが、暑さに苦しみながら待つていたと思うと結構辛い時間かもしれない。

「おまたせ、ピナの様子はどうだ？」

「さつきから扇いでいるんですが、そろそろ私が音を上げそうです………」
「ずっと扇ぎっぱなしだったのか」

SAOで長時間体を動かしても、その部分が疲れるような感覚は確かにある。

俺が集中し過ぎると倒れてしまうように、現実の体を動かさないからと言ってSAOの世界にいる自分が疲れを感じないわけじゃない。現実世界で疲れを感じるような行動を続けていると疲れを感じる。

まあ異常に自分を追い込まないかぎり、文字通り感じるだけなのかもしれないが。数十分間うちわを扇ぎ続けたらそれなりに疲れるつてもんだ。

「これがピナの分のカフェオレだ。これで暑さも紛れるといいんだが」
「ありがとうございます！早速ピナに飲ませてあげて上げます。ピナ、クレハさんが作ってくれた………」

シリカがピナにカフェオレを渡した瞬間。さっきまでの机でうなだれていた姿はどこえやら、素早い動きでグラスに飛びつき、逆さまにしながらグビグビと飲み干してしまった。

「ええ!!ピナ！ そんなに勢いよく飲んだりしたら危ないよ！」
「キュルウウ！」

うろたえるシリカとは裏腹に、当の本人は上機嫌でシリカの周りを飛び回っている。さっきまで机でうなだれていて、動きもしようとしなかったのが嘘みたいに元気だ。多少の動きの悪さはあっても、さっきほど弱ってはいない。

ということだ。

「……………なあシリカ、一個聞きたいんだが」

「は、はい、なんですか？」

「今昼過ぎだよな？ 今日ピナに飲み物とか、水分が取れるものって十分やったか？」

「……………あ」

キリトもそうだが、シリカもリアクションだけで質問の答えがわかるから楽でいいな。

「け、けど！私はいつもと同じように生活してましたよ？ たくさんじゃ無いですけど、朝ごはんの時に飲み物もあげましたし、それなのにどうして今日だけ…………」

「そうなのか」

いつもどおり過ごしていたのに、今日に限ってぐったりしていた。けどそれは今飲み物をやると治った。

となるとやっぱりこのバカみたいな暑さが原因なのか？ いや、にしても飲み物一杯であそこまで変わるのには流石におかしい気がするな。

いつもどおりと思っただけでもない、いつもと違うところがあつたのか？ この暑さのせいで、無意識のうちにもいつもと違うような生活を送ってしまったとか。

あれ？　そういえば依頼を受けるときに確かシリカが……………

「クレハさん？　どうしたんですかクレハさん！　…………集中してるのかな？」

「キクルウ？」

「こうなるとクレハさんはなんにも聞いてくれなくなっちゃうんだよ、ピナ」

暑さが関係有るのは間違いない。けどのどが渴いていたならさつきシリカに渡したカフェオレをさつきみたいに飲み干せばいいのに、そうはしなかった。さつきと今で何が違ったんだ。

作った人も作ったものも同じ、シリカに渡したっていうのも同じ。違うとしたら多分行動だろう。それも多分俺じゃなくて主人であるシリカの行動だ。さつきと今で違ったところと言ったら……………

「ああ、なるほどな」

「あ、終わりましたか？」

「何がだ？」

「考え事ですよ。さつきから何回も声をかけたのに、クレハさん全く反応してくれな

かったじゃないですか」

「……そうか」

本気で全く気がついていなかった。戦闘の時に本気を出すことはもう最近は全く無いんだが、こう日常生活で集中しすぎるのも考えものだな。気を失うことはなくても今みたいに周りに迷惑かけそうだな。

「ともかく、今日に限ってピナがこうなった理由が分かったぞ。まあ答え合わせができないから、辻褄が合いそうな推測って感じだけだな」

「え？本当ですか？」

「ああ」

いつもと違ったところはこの気温だけじゃなかった。この気温のせいで変わったところの方が原因だ。

「シリカはほとんど毎日フィールドに出てるんだよな？ 当然ピナも」

「はい。そんなに長いことはいないですけど、一応はレベル上げに。けど最近は……」

「ああ、依頼についての話をした時シリカは言ってた。『ここ最近はまだフィールドに出ていない』」

「暑さもありませんし、最近は最前線がクォーターポイントつていうこともあって、中層にも攻略組の人がよく来るんです。そのせいであんまりモンスターのポップが取れなくて」

さつきは聞かなかったがそういう理由もあつたのか。確かに最近は攻略組の依頼人が多かつた気がするな。中層の情報なんて何に使うんだと思つていたが、上層でリソースが取れなかつた攻略組が中層でいい狩場を探してたつてことか。

まあそんなことより今はピナがこうなつた理由の方が重要だ。1つ目の原因は、シリカが『フィールドに出ていないこと』だ。

「フィールドに出るときに必ず飲む物を飲む機会が減つたつてのが理由の一つだ」

「必ず飲む物？」

「量はどうかあれ、レベル上げるなら必須だろう。『回復ポーション』は」

「あ！」

「ピーストタイマーのことは詳しくないが、HPが用意されている以上ピナにだつて

ポーシオンなりなんなりで回復をさせてやるんだろ？」

「はい。以前みたいなことにならないように、ポーシオンを頻繁に使って回復するようにしています」

ポーシオンだろうとなんだろうと、飲み物は飲み物だ。喉の渇きは潤うし、水分補給だってできる。

それがここ数日間なくなっていたってのは大きな原因だろう。

「けど、流石にそれだけでは……」

「ああ、流石にそれだけでこうなるとは考えづらい。あと2つほど原因を考えついた」

「2つ、ですか」

『2つ』とは言っても、究極的に言ってしまうえば、この異常な気温が原因だったことで終わってしまう。だが、今後こんなことになった時に解決できるように、それ以外の原因をきちんとシリカに知らせておく必要がある。それ以外の原因っていうのがあと『2つ』だ。

「残りの2つは、多分タイムモンスターの特徴みたいなものが原因だと思う」

「タイムモンスターの特徴？」

「主人から与えられたものにしか手を出せないんだよ。タイムモンスターは」

「ええ!?! そうなんですか?」

「ああ、タイムモンスターってのは極めてレアな存在だ。情報自体が少ないし、なにより情報を集めづらい。だから、こういう細かい特徴はビーストテイマーですら知らないこともある」

その集めづらい情報を的確に集めてくる情報屋が相棒じゃなかったら、俺だって知らなかっただろうしな。

「けどフィールドに居る時は勝手に色んな物を食べちゃったり、パーティーメンバーの人からアイテムを貰ったりしてますよ?」

『『フィールド』だからだろうな。考えても見ろ、圏内でピナが好き勝手に色んな物を食べたたりしたら、あつという間に露店なりプレイヤー経営のレストランが食い散らかされる」

「そ、それは確かに……」

「それと、アイテムを貰うことができたのは、それがパーティメンバーだったからだろうな。フィールドに出たらピナもパーティの一員として扱われるはずだ。そのメンバーにアイテムが使えないんじゃないやあ、ピンチの時にシリカ以外のプレイヤーがピナを助けてやることができなくなるからな」

「なるほど。私がピナに飲み物をあげようとしなにかぎり、ピナが勝手に飲んだり食べたりはできないんですね」

「そういうことだな。フィールドに出てれば自分の好きなタイミングで川なり果物なりから水分補給できるが、ここ最近それがなかったってことだ」

これが残り2つのうちの1つ目の原因。

珍しいからこそその情報の少なさと、いつもと違う生活サイクルになったことが原因だ。朝食でいつもと同じくらいの飲み物はやっていったんだろうが、この暑さじゃあ足りなかつたんだろう。

水浴びしたときだって、別にピナに水をあげたわけじゃなくて、用意した水にピナを漬けてやっただけだから、飲むことはできなかつたってとこかな。

「最後はあれだ。ピナがこの暑さを感じていた時間が、俺達より長いってことが原因だ

ろうな」

「それは……どういう？」

「ああ。異常に暑くなったのは今日からだ、問題はそれがいつからかってことだ。朝目が覚めた時にはこの暑さだったが、俺達が目を覚ます前の夜中くらいから暑さが始まってたとしたら……」

「確かにそうですけど、それが何か関係があるんですか？」

「俺たちはナーブギアを介してこの世界を感じてる。実際に肌でこの世界の気候を感じているわけじゃない。だからこそ、寝ている間はこの世界の気候を感じない」

「あー」

「そうだ。現実世界では逃れられない暑さからくる気だるさだったり、辛さは寝ている間は感じない。だがそれは俺達の体が現実世界にいるからだ。本当の意味でこの世界の住人であるピナは、さぞ寝苦しい一日を過ごしたことだろう。」

「『暑さのせいであまり寝れない』『喉の渴きで力が出ない』。まあ、夏バテみたいなものだろうな。飲み物を飲んでそれが少なからず解消されたって所だろう。現実世界とは違ってポーシヨーン本で体調が治るんだし、喉の渴きが潤って楽になったんだろう」

俺の発言に対して肯定しているのか、甲高い声でピナが一声上げた。

この様子だと大筋は間違っていないみたいだな。

「理由が分かって良かったです。ありがとうございます。クレハさん」

「あくまでも推測だけだな。細かい原因は、アルゴと裏をとってから改めて教えるよ」
「はい。……………けど、わたしが寝てる間も、ピナは苦しんでたんですね」

少し悲しそうな目をしながら、シリカはピナの頭を優しくなでてやっている。飼い主を心配させてしまつて申し訳ないのだろうか、ピナも心なしか悲しそうだ。

だが今回の件に関しては仕方ないだろう。現実世界で体を通して感じるものと、SAOで脳を通して感じるものはどうしてもズレが有る。現実世界で自分ものが渴いていたなら、相棒もそうじゃないのかと心配になるはずだが、SAOはそういったものを感じづらい。せいぜい精神的な辛さや疲弊程度だ。SAOの住人と現実世界の住人は、文字通り住む世界が違うんだ。だからこそ……………

「相棒が苦しんでいることに気づけないことは確かに辛いけど、それに気づくのはとても

難しいことだ。…けど、シリカはそれ以上のことをしてやっているじゃないか」

「それ以上のこと…ですか？」

『ピナが好きなもの』『何をしたら喜ぶのか』そして、『居なくなつた時どれだけ悲しいのか』。言葉をかわせる人間同士であつても理解することが難しいことを理解してやっている。今日だって、ピナのためにわざわざここまで来た」

シリカはピナのことをゲームの中のMOBだなんて思っていない。辛そうにしていたら放っておけないし、楽しそうにしていた時のことはずっと覚えてる。家族みたいに。

「一回の気付いてやれ無かつたことがあつたなら、次をに気付いてやればいい。人間同士だって、そうやって知っていくんだ」

「……………そう、ですかね？」

「もとはといえば、このクツソ暑い気候が原因だ。ホットコーヒーも飲めやしない」

「フフツ…そうですね。クレハさんのそういうところも、そうやって知って行つたんですもんね」

多少元気になってくれたか。そういうところって所が気になるが、まあ笑顔が戻ったから良しとしよう。完全復活とは言わないが、ピナにも元気が戻ったみたいだし、依頼としては成功と言っていいだろう。

「そういえば、好きなことで思い出したんですが、さっき言っていた好きな色ってどういう意味があつたんです？」

「ああ、完全に忘れてた。持ってくるからちよつと待っていてくれ、『赤』を2つ持ってきてやるから」

「持ってくる?」

...

「んんん!!冷たくて美味しいですね!」

「キュルウウウ!!」

「溶けたりはしないから慌てずに食べよ」

「はい!それにしても、かき氷なんてこの世界にあつたんですね」

「レシピがあつたわけじゃないから創作料理だけだな。溶けずに保管できるぶん現実世界より高性能だ」

俺のした色に関する質問はこのためだ。

シリカは赤いシロップの掛かつたかき氷をシャクシャクと頬張っている。ぐったり気味だったピナにも好評みたいで、山になったかき氷に首を伸ばして食べている。動きが少し機敏になったように感じるし、夏バテは大分良くなったんだろう。

思いつきで作った料理だったが、まさかこんなところで役にたつとはな。

「赤がイチゴ味っていうのは分かったんですが、他の色は何味だったんですか?」

「ああ、青がブルーハワイで黄色がレモンだ」

「うわ〜!どれも美味そうですね……」

「次来的时候には別のを用意してやるよ。その時にはレパトリーも増やしておく」

といっても、多分この流れだったら今日のお茶会に参加することになるだろう。

その時に2杯目を振る舞うことになるのかもしれない。冷たいものをたくさん食べても腹を壊すことがないってのもSAOで得するところだな。

「他の皆さんはもう食べたんですか？このかき氷」

「全員じゃないけどな。いつもお茶会に来るメンバーとクラインのギルドのやつには振る舞った。キリトは赤と青と黄色って言うてんのに『黒がいい』とか言いやがったから、イカスミみたいな食材使ったやつを食わせた」

「た、食べれるんですか？」

「失敗料理だつてくえるだろ？死ぬほどまずいけど」

「あははは……」

俺たちはピナみたいに夏バテにはならない。ここは現実世界じゃないからだ。だが、この世界で感じた感情は紛れもない本物だ。そこだけは揺るがない。出会った人達との思い出も、死んでいった仲間たちとの思い出も、偽物なんかじゃない。

けど、この世界の住人との出会いはどうなんだろうか。

このゲームをクリアしたら、この世界は現実世界に居る人間の手で消されるはずだ。帰ってくることはできないだ。そのとき、この世界にいる住人も消えてしまうのだろうか。ユイやピナのような、データとして生きている奴はどうなるのだろうか。

「それじゃあ、次はピナが青で、わたしが黄色をたべよつか。2人で分けっ子しながら食べよう?」

「キュル!」

「……………ああ、それがいいだろうな」

こんなこと、面と向かってシリカには言えない。

シリカだけじゃない。SAOで知り合った奴らと、もう一度現実世界で出会える保証なんてないんだ。

ゲームクリアが近づくに連れて、俺たちは覚悟をしなくてはいけない。

別れの覚悟を。

河の主釣り

「……ついにきちまったか」

見慣れたログハウスの扉を前に俺は呟く。

普段この扉の前に立つ時は決まって誰かと一緒にいたはずだが、今はそうじゃない。飄々とした態度で後ろを付いてく相棒も、ムードメーカーで賑やかなお隣さんもない。考えてみれば、たった一人でこのログハウスに来るのは初めてかもしれない。そして付け加えると、ここまで重い気持ちでこの扉の前に立ったこともない。

「嘆いてても仕方ないし、さっさと済ませて帰ろう」

さっさと済ませられるような内容じゃないことももちろんわかっている。けど、だからといっていつものように気軽に扉を叩けるような気持ちじゃない。自分に言い聞かせるようにつぶやきながら、見慣れたログハウスのドアに近づき、友人夫婦の家の扉をノックした。

小気味良い木の音が響いてからしばらくして、ドア越しににパタパタと足音が近づいてくる。

ガチャリと音を立ててドアが開き、ドアの向こうから覗いてきたのは、長く透き通った栗色の髪だった。

「あれ、クレハ君？ どうしたの急に？」

扉を開けたアスナは俺を見て不思議そうにしている。事前に行くってことも伝えられてなかったし、俺一人だけってところにも違和感を感じたんだろう。

「悪いな、急に押しかけて。キリトに、と言うよりは2人にちよつと話があつてな」

「そうなんだ……。けど、今はちよつとタイミングが悪かつたかも？」

「なんだ？これからなにかあるのか？」

これから用事がある、というようなアスナの発言に内心安心している自分があるのが情けない。

夫婦水入らずのところを邪魔するのは申し訳ないが、やらなくちゃならないことがあ

るのは確かだ。時間を改めるにしろなんにしろ、一度2人と話をしておかなくちやならないから、少しでも時間を貰いたいところなんだが。

「アスナ、来客は誰だったんだ？」

「あ、キリト君。クレハ君が私たちに用があるっていうんだけど……」

「クレハ!?それはちようどいいな!」

「ん?」

後ろから顔を覗かせた家主、キリトがアスナの話の聞くと、期待したような目でこっちに近づいてきた。

それはそうと、なんかキリトとアスナの発言が噛み合ってなくないか?

アスナはタイミングが悪いって言ったのに、キリトはちようどいいって言うのはおかしい気がするんだが……。

「キリト君のその反応、もしかしてクレハ君にも手伝って貰おうとしてる?」

「そのもしかしてだ。クレハだったら絶対に戦力になるはずだしな」

「おいちよつとまで、話が見えない。キリトは俺に何をさせようっていうんだ?」

よく見たら2人共外行きの服装だ。

『戦力になる』って言うてるからフィールドに出るのかも思ったが、それにしても軽装すぎる。どちらかというところ、ピクニックとか花見にでも行くような格好をしている。

「ああ悪い悪い。ちゃんと説明するよ……。いや、説明というよりは依頼だな」

「依頼？キリトが俺に？」

「うーんまあそうといえればそうなんだけど。俺も依頼されているようなものだからややこしいな……」

さっぱり分からん。

話をすればするほどややこしくなっていていつている気がする。

「わかった。細かい説明は後で良いから、まずは結論だけ伝えてくれ。お前たち2人は俺に何を依頼したいんだ？」

俺の言葉を聞いたキリトとアスナが目を見合わせる。

ニンマリと、俺の相棒を思わせるような笑みを浮かべた2人は、勢いよく俺を見て依頼内容を言い放った。

「ヌシを釣り上げるのを手伝ってくれ！」

「ヌシを釣り上げるのを手伝って！」

「……………はあ？」

結論を聞いても意味がわからなかった。

・ ・ ・

『ヌシを釣り上げる』

2人が言うところの『ヌシ』というのは、2層にある湖にいる魚のことらしい。

その湖でキリトが釣りをしているとき出会ったニシダというプレイヤーから聞いた話らしいが、かなりのデカさをした魚らしく、生産職のプレイヤーのSTRではまったく歯が立たず、竿を持っていかれるほどだという。

そこでキリトがニシダさんから受けた依頼というのが、『釣り竿のスイッチをしてくれないか』ということだ。釣りスキルの高いニシダさんがヌシをヒットさせる。STRではの高いキリトが竿を受け取って釣り上げる。単純だがかなり効果的な作戦だと言える。

キリトとアスナがそのヌシ釣りに向かおうとしたタイミングに、偶然俺が家を訪ねて来たつてことのようなのだ。

まあ個人的にも湖のヌシには興味があるし、手伝ってやること自体は嫌じゃあないんだが……………

「こんな人にいるなんて聞いてないぞ……………」

デジャヴだ。ヒースクリフと戦う事になった時、闘技場に集まったプレイヤーの山を見て同じことを言ったような気がする。

この湖に来る途中で『ニシダさんと竿のスイッチをする』って話しかかれてなかった

から、俺・アスナ・キリト・ニシダさんの4人しかいないのかと思つたら、小規模なお祭りに集まつたくらいには人がいる。ざっと見て50人位は。

「流石に闘技場の時よりはマシだが、どうにもなあ」

「クレハ君は相変わらず注目を浴びるのが苦手なんだね」

「当たり前だ。最近やっと『剣影』がどうこうって騒がれなくなってきたって言うのにならぬ」

俺の横でこの湖の周りを眺めていたアスナだったが、俺の様子をみて、やれやれと小首をかしげている。そりやあKOBの副団長ともなれば、人からの注目なんて気にもならないだろうけどな。

まあこれだけ人が集まっているところに『黒の剣士キリト』『閃光のアスナ』『剣影のクレハ』がそろっていても騒がれていないし、SAOの中でもそういうブームみたいなのは去つたってことなんだろう。ありがたいことだ。

「あのーすみません」

「はい？」

安心していると後ろから聞きなれない声が聞こえてきた。

振り返ると、キリトと初老の男性プレイヤーがいた。初老のプレイヤーは麦わら帽子をかぶり、縁の濃い眼鏡越しに優しい目をして俺を見ている。見るからに釣り師といった風貌だ。

「はじめまして、私はニシダと申します。キリトさんから話は聞いていますよ、なんでも又シ釣りに協力してくださいませんか」

「ああやっぱり、あなたがニシダさんですが。はじめまして、クレハです。とはいっても、何をすればいいやら分からないまま何ですけどね」

気さくに挨拶をしてくれたニシダさんと話しつつ、横目で俺をここに連れてきた張本人をジト目で見ながら言い放つてやった。こいつは基本的に説明が少なすぎるんだよ。状況から察するにも限度があるんだからな。

キリトは苦笑いで俺から目をそらしている。もつと言ってやりたかったが、空気を読んだニシダさんがきちんと説明を初めてくれた。

「いえいえ簡単なことですよ。私がキリトさんに竿を渡すタイミングを指示していただきます」

「竿を渡すタイミング……？」

「ええ、なんせ釣り竿のスイッチなんてのは初めてなもんでしてね？ ヌシが竿を引く力が弱まった瞬間を、第三者に見極めて欲しいんですよ」

「……………なるほどね」

確かにニシダさんの言うとおりで。

竿を引く力が強いときに竿の受け渡しなんかしたら、力が入っていない一瞬の隙に竿が持つていかれる。

「けどそういう力加減だったら、竿を持つているニシダさんのほうが分かるんじゃない？」

「それはそうなんです、そもそも私のSTR値でヌシをヒットさせて耐えることができるのは、釣りスキルのおかげなんです。その私の感覚でキリトさんに竿を渡してしまつては、釣りスキルの低いキリトさんに掛かる負荷が予想できないという問題がありますね」

「へー釣りスキルってそういうものなのか」

「…初めて知った」

感心している俺の目の前でキリトも同じように感心していた。

「いやいや、お前は一応釣りスキル持ってるんだから知らないとおかしいだろ」

「し、仕方ないだろ？ 釣りスキル取ったの最近なんだし……」

先が思いやられるようなことを言ってくるなこいつは。

まあつまりはこういうことか。釣りスキルはニシダさんのほうが圧倒的に高い。けど、STR値はキリトのほうが圧倒的に高い。

ニシダさんがヌシをヒットさせている間耐えられるのはスキルアシストのおかげであって、STR値のおかげじゃない。そのニシダさんの感覚でスキルアシストのおかげでどないキリトに竿を渡したら、その負荷はすべてSTR値依存になってしまう。そうになったら、タイミングを間違うとキリトごと湖に引き釣りこまれかねない。

ニシダさん基準で竿を渡すとタイミングが悪い可能性があるから、第三者目線でそれを決めて欲しいってことか。

「分かりました。ヌシの力が弱まった瞬間を、竿の撓り具合とか糸の張り具合で判断して、タイミングを伝えればいいってことですか」

「そういうことです！ いやあ理解していただけるのが早くて助かりますな」

そう言うとなシダさんは、心から嬉しそうに笑いかけてくれた。

釣りが好きっていうのもあるだろうが、本当にこのヌシ釣りを悲願としているんだろう。釣り師としての意地と言うか、目標というか、そういうものが伝わってくる。その結果が、これだけ集まったプレイヤーなのだろう。湖の周りには『頑張れニシダ』と書かれた大弾幕があったり、少しでも力になろうと既に湖の様子を観察し始めているプレイヤーも居る。

そういうのを見せられると、俺は弱いんだよなあ……………。

正直なところ、さっさと終わらせて俺の本題に入りたかったという気持ちがあったが、これを知ってしまったてはそうも行かない。全力で協力しよう。俺の用事はその後だ。

「喜んで協力させてもらいますよ。タイミングを見計らうのは得意ですからね」

「おお！ そう言っていただけとありがたいですな。釣り上げたヌシは皆さんで美味し

くいただきますしよう！醤油も頂いたことですし」

「醤油？」

「そうなんですよ。キリトさんの奥さんが作られたそうなんです、これがまた現実世界の醤油の味にそっくりだね？ 刺し身を醤油で食べるなんて2年振りでしたから感動しましたよ。クレハさんも分けて貰えるようお願いしてみては？」

「そ、そうですね……」

まさか『その奥さんに料理を教えたのは俺です。』なんて言えないような雰囲気だ。

アスナも俺の横ですこしバツの悪そうな顔をしているし……。これはもう間違いないくそういうことだよな。

「おいキリト。ちよつとこっち来てくれ」

「わ、分かった……」

ニシダさんから少し離れた場所にキリトを呼び出し、とりあえず確認することにした。

「お前もしかして、自分が『黒の剣士』ってことを明かしてないのか？」

「だって俺とアスナは今休業中だし隠しておこうかと……」

「いやそりやそうだけどな？ 『キリト』だけだったら偶然同じ名前かーくらいで済むだろうが、そいつが『クレハ』を連れてきたってなると明らかに怪しまれるだろ！」

ツメが甘すぎるだろこいつ！ 隠すつもりならもつと徹底しろよ！ それか俺に言っておけよ！

そうしたらニシダさんと挨拶するときも適当に偽名でも使ってごまかしてやったのに！

よくよく考えたらアスナがスカーフを顔に巻いて、若干だが顔を隠している段階で気がつくべきだった。アスナがキリトと結婚したっていうのは一部の攻略組の中だと周知の事実だが、一般プレイヤーには全く公開されていない。この件に関しては俺やキリトの記事みたいに面白おかしく公開して良いものでもないし、2人としてもあまり広まってほしくないことではないのだろう。

そんな風に思っていると、案の定ニシダさんが記憶を探るように呟いているのが聞こえた。

「そういえば、クレハさん…ですか。どこかで聞き覚えがあるのですが、どこでしたかな？」

「あああ!! そういえば一体どこで釣りは始めるんですか!？」

「そうですよニシダさん! 俺も竿がどんな感じなのか見てみたいですし!」

「そ、そうですな。ではそろそろ準備に取り掛かりましょう」

俺とキリトが慌ててニシダさんの思考を遮る。

キリトのツメの甘さはこの際仕方ないが、この場のこのタイミングでバレるのは流石にまずい。もうこのまままじまかし続けて終わらせるしかない。

「……キリト。お前後で覚えてろよ」

「わ、悪かったって……」

「それでは皆さん、そろそろ本日のメインイベントに取り掛かります！」

ニシダさんが声を上げると、その場にいた全員から歓喜の声が上がりがり始めた。そのどれもがニシダさんを応援する声だ。慕われているということがすぐに分かる。

「それじゃあキリトさん、クレハさん。よろしくお願いしますね」

「了解です」

俺とキリトが返事をする、ニシダさんは2m以上はありそうな大きな竿を担いで、釣り堀に少し近づいていった。とりあえずヒットするまでは俺達の仕事はないみたいだから、今はここで釣りをするさまを見物しておこう。

「ひいっ!!」

「ん?どうしたアスナ?」

俺達の後ろで突然悲鳴を上げたアスナにキリトが声をかけた。アスナは顔をひきつけ、アスナがニシダさんの方を指差している。よく分からんが、何か嫌なものでも見たらしい。アスナが指差す方向を見ると、その答えは一瞬でわかった。

「……餌か」

「あれで釣るってどんだけデカいんだよ」

ニシダさんの右手には大きな竿が握られているが、左手にはヌシを釣る為の餌が握られていた。少し離れたこの距離からでもしっかり見える大ききの餌が。

生々しくニシダさんの手の中で暴れているのは爬虫類系のトカゲ型モンスターで、おそらく釣り用の餌として使えるよう設定されているものだろう。ニシダさんがしっかり握れるぐらいの大ききのトカゲだし、アスナが怯えるのも無理はない。

「いきますよおおお!!」

俺達の不安など露知らず、ニシダさんが大きな気合のこもった声を発して、釣り竿をしならせる。

大きな竿は山吹色に発光しながら力を竿から糸へと伝わせ、大きな餌をきれいに湖の中心近くまで運んでいった。

「おおー。釣りスキルってこんな感じなのか、初めて見たな」

「ホントに。スキルレベルを上げるとあんなに本格的なことまでできるようになるのね」

「もともとニシダさんが釣りをしてたって可能性もあるけどな。それがSAOの中でこれだけ補正になるかは分らんが」

「ソードスキルみたいに体が勝手に動くような感じなのかしら」

初めて見る釣りスキルに感動しながら、俺とアスナはそれぞれの考えを口にする。それにしても、VRMMO自体がSAOが初めてだったというのに、初めて見るスキルに興味津津とは、アスナも立派なゲーマーになったもんだな。

ニシダさんが餌を投げ込んだ段階ではざわざわと賑やかに話しをしていたギャラリーだったが、ニシダさんの集中力が周りに伝わったのが、気がつくあたりはシンと

静まり返っていた。

俺とキリトは手伝いのためにニシダさんの横についている。何時ヒットしても良いように、俺も少し集中力を高めておこう。

そんなことを考えていると、ニシダさんの抱えている大きな竿の先端がピクリと反応した。俺とキリトは「おっ?」と声を上げたが、ニシダさんは集中した顔を全く崩さない。若干の不安感を抱えた俺は恐る恐るニシダさんに声をかけた。

「あの、ニシダさん? 来たんじゃあ……」

「いいえ、まだです。クレハさんは竿の先端を見ていてください……」

それでも竿の反応は増している。ピクピクと先端が数回動き、糸も貼っているように見える。そう言うならと若干の不安を抱えたまま、俺は言われた通り竿の先を集中して見ておく。

「あの…ニシダさん?」

「なんの、まだまだ……」

今度はキリトが声をかけ、ニシダさんが答えた。その数秒後のことだった。

集中して見ていたから気づけたが、ほんの一瞬だけ今までより大きく竿が形を変え、糸が貼った。

「今です!!!」

ニシダさんが掛け声とともに思いっきり竿を引くと、投げ入れるときと同様に山吹色のライトエフエクトが竿を包み込んだ。竿はさつきまでのような小さな反応ではなく、これでもかというほどに撓り、糸はまつすぐ湖の奥へと引かれていた。まさしく大物の当たりが来た。

「掛かりましたああああ!!!」

「すげえな……………」

ニシダさんの雄叫びを聞きながら、俺はただただ感心していた。釣りスキルはあくまでも当たりが来てから引き上げるまでに発動するものだ。まあ当たりがかかるまでの確率とか、魚の質とかにも影響はあるんだろうが、ともかく技術的アシストは引き始め

てから発生するのがメインらしい。

だが今のはニシダさん個人の技術だ。最初の数回の反応で感覚を確認し、タイミングを見計らい、一瞬の変化を体に掛かる負荷だけで感じ取っていた。

「クレハさん!! タイミングを!!」

「え? ああはい! 分かりました!」

感心してあつげにとられてしまっていたが、ニシダさんの一言でハッと我に返った。

そうだった。俺の仕事はこれからだった。竿の先端に意識を集中させ力の掛からない一瞬を判断しなくてはならない。

湖に引き寄せられつばなしのように見えるが、集中してみると、ほんの一瞬糸の張りが弱くなっている瞬間が確かにある。そのタイミングを見計らえつてことか。なかなか難易度の高いことをさせてくれるもんだ。

1度、2度、糸の針が弱くなる瞬間を見た。明確な法則のようなものを見つける時間はないが、なんとなくタイミングが掴めてきた。自分の中でリズムを取りながら、次力が弱まるタイミングを見計らう。あとはキリトの頑張り次第だな。

3、2、1……………

「今だ！スイッチ!!」

「はい！キリトさん！スイッチです！」

「す、スイッチ…?」

俺の声に素早く反応し、ニシダさんがキリトに竿を渡した。よく状況を分かっているのか、キリトは呆けた様子で竿を受け取った……………その瞬間。

「うおおおおおおお!!?」

キリトはヌシの力に引き込まれ、湖のギリギリのところまで引きずられていった。

「キリトさん！頑張つて！」

「うおおおおお!!このやろおおおおおおおおおおお!!」

「おーすげえなあいつ」

正直そのまま引きずり込まれるんじゃないかとヒヤヒヤしたが、そこはやっぱり攻略

組の意地なのか、こんどは竿を肩に担いで引きずられた分走って帰ってきた。キリトは釣り始めた位置にいた俺達を追い抜き、なおも走る。湖の方を見ると、たしかに大きな影がこちらに近づいてきているのが分かる。

「あ！見えてきたよ！」

見物客と一緒にいたアスナが声を上げると、みんながヌシを早く見ようと湖の縁まで走ってきた。もちろん俺もその1人。近づいてきたアスナの隣で湖を覗き込んで見る。

「すげえな。かなりの大物なんじゃないか？」

「ヌシっていうくらいなもの、かなり大きな……魚が……」

「大きな……魚？」

おい、ちよつと待て。おかしくないか？

ヌシって言っても魚だろ？せいぜい2mとか3mとかの魚が釣り上げられるもんだと思っていたが、この湖に映る影って今水深何mのところにいる魚の影だ？すでに5mくらいの大きさの影が湖に写ってるんだが……。

「うわああああああ!!?」

見物客の誰かが声を上げると、その恐怖は全員に伝染し、みんなが一気に湖から離れていく。

俺やアスナも例外じゃない。もし釣り上げたとして、あんな至近距離にいたら潰されかねない上に、そもそもどんなやつが出てくるかもわからないんだ。あんな近くにいるたまるか!

全力で走って戻っていると、今だに必死に竿にしがみついているキリトとすれ違った。

「よし!もうすぐ釣り上げられるぞ!」

「おおキリト。頑張れよ!」

すれ違いざまに声をかけてやるのを忘れない。多分この場所で、この大勢の中で又シの危険性に気がついてないのはこいつだけだろうけど、面白そうだから黙っておこう。

「え？どうしたんだよみんな!?　　つてうわあああ!?!」

何が何だか分からないと言った感じで俺達の方を見たキリトだったが、その瞬間にプツンと小気味の良い音が響き、キリトが尻もちをついて倒れ込んだ。釣り竿の糸が切れ、軽くなった竿を見たキリトが大慌てで湖向かって走っていく。

まあ当然だろう。キリトからしたら、やっと釣り上げられそうなヌシを目前にして糸が切れたんだ。取り逃したと思うに決まってる。けど多分、これは取り逃したんじゃない。

「おーいキリトくーん！　　危ないよー!」

湖から距離を取ったアスナが、湖の縁に居るキリトに声を掛ける。

一見優しい言葉みたいだが、アスナもキリトを放おってここまでダッシュで逃げてるからなんとも言えないな。

未だに現状を把握しきれていないキリトだが、その疑問は一瞬で晴れることとなった。

突然、湖から爆発でも起きたのかと思うくらい大きな水しぶきが上がった。4 mほど

の水しぶきが広範囲に広がり、その中から異常に巨大な塊が姿を表した。橙色の肌にごヨロリとした目玉をキリトに向け、陸地に4本の足でしっかりと立っている。足の生えた深海魚と言った表現が一番わかり易いだろう。

「水陸両用の魚つてのも新しいな」

「むしろ進化の過程的に考えたら、ありえない話じゃないんじやない?」

「何のんきに話してるんだよ! ずるいぞ! 2人して黙って逃げるのは!」

「おーあの一瞬でここまでダツシユで戻ってきたのか、さすがSTRとAGIに振ってるだけのことはあるな」

目があった瞬間にダツシユでこっちに向かってきたらしい。流石攻略組のトッププレイヤー様だな。

「3人共何を呑気な! 早く逃げない!」

「え? ああそうですね」

周りのみんなも本当に怯えているみたいだ。ニシダさん達からしたらあんなにでか

いモンスターを見たのも初めてなんだろう。焦る気持ちもわかる。けど俺達からしたら、22層のフィールドボスなんて前線の雑魚モンスターより格下の相手だ。全くと言っていいほど緊張感を持ってない。

まあともかく、さっさと倒してみんなを安心させてやらないと。

「とはいったもののな……………」

俺、キリト、アスナ。全員戦い方に癖がありすぎて、戦う様子を見せたら一発でバレルんだよな。どうしたもんかね。

「もう、しかたないなあ」

横でそう呟く声が聞こえたと思ったら、アスナが羽織っていた上着と、頭に巻いていたスカーフを勢いよく脱ぎ去り、レイピアを構え始めていた。アスナはもう腹を括ったらしい。となると、俺が黙ってみてるわけにもいかないか……………。

「アスナ、手伝うよ」

「クレハ君？けど……いいの？」

「どうせアスナがバレたらなし崩しで3人共バレるんだ。だったら、俺もこの人達のために働かせてくれ」

「……うん。わかった」

俺もアスナの横に並び、愛刀をオブジェクト化し、左手に鞘、右手に刀を握りしめ、突進してくるヌシに向けて集中力を高める。

「アスナ。とりあえず俺が体制を崩すから、その間にソードスキルを打ち込んでくれ。多分すぐ終わるだろうけど、後ろの人達に被害を出す訳にはいかないからな」

「了解です。それじゃあよろしく、クレハ君」

そう言ってアスナが一步下がりがり、ソードスキルを放つ体制をとった。

「キリトさん！奥さんとクレハさんが！早く助けないと！」

「大丈夫ですよ。きつと面白いものが見れますから、見ていてください」

「そ、それは一体………」

後ろからキリトとニシダさんの会話が聞こえるが、まったくもってその通りかもしれない。目立つのが嫌だと言いながら、結局人前でパフォーマンスじみたことをしてしまっている自分に笑えてくるね。

「それにしても、この刀で魚と向き合おうと刺身包丁みたいになるな」

「も、ものすごく緊張感がないね。クレハ君……………」

「集中しながらもリラックスはしておかないと、きれいに体制崩せないからな」

そうこう話しているうちに、ヌシとの距離はもう数mまで迫っている。

狙うならあの無駄に大きな足だろうな。前にこかせるより、横にこかせるほうがやりやすそうだ。

「……………っふ!!」

突進してきたヌシとすれ違う瞬間、足の下に潜り込み、鞘と刀を使って足の向きを斜めにずらしてやる。足を予想外の方向にずらされたヌシは体制を崩し、体がふらりと右

側に傾いた。そのタイミングを逃さず、逆側面に回り込み、持ち上がっている左足の裏にめがけて……………

『弦月』!!』

ムーンサルトの要領蹴りを放ち、ヌシの足を蹴り上げ体制をさらに崩してやる。ヌシの巨体は完全に横倒れになり、地面で暴れ始めた。

「ありがと！クレハ君！」

アスナが俺に短く声をかけたかと思うと、目にも留まらぬスピードでヌシ目の前まで迫り……………。

「はあああああ!!」

エメラルド色のライトエフェクトをまとったレイピアで、ヌシの体を貫いた。

言葉では言い表せないような悲鳴を上げ、ヌシはポリゴンの欠片となって四散した。

システムウインドウが強制的に開かれ、ドロップ品の素材が大量に手にはいった。

数秒間無言の時間が続いたが、誰かが声をあげ、それに釣られるように見物客から賞賛の声がかかる。

「うおおおおおおお!!」

「すげえ!何だ今の!」

「あんなに大きいモンスターを一撃だ!」

歓声を上げながら、俺とアスナの方へみんなが走ってくる。

少し照れくさいが、感謝される事自体は嬉しい。正直なところ大したことは全くしてないが、今この瞬間は、みんなからの賞賛を受け入れるのも悪くない。俺たちを囲んだみんなが口々に話しかけてくる。

「今の戦い方って『剣影のクレハ』さんですよね!」

「そっちのお姉さんはもしかして『閃光のアスナ』さん!?」

「……………うっ」

その言葉を聞いた瞬間。俺とアスナは察した。

「ああ、これは長くなるな」

・ ・ ・

「だあああ疲れたー」

「まったくだ………」

「お疲れ様、2人共。結構遅くなっちゃったね」

「アスナもお疲れだ」

結局、俺達が何者なのかが全員にバレたあと、見物客に囲まれた俺達は身動きがとれない状況になった。

ニシダさんがその場を収め、予定通りに釣り上げたヌシの素材から魚料理をつくってみんなで食べることにしたのだが、量があまりにも多かつたんで、俺とアスナだけでは捌ききれなくなり、結局みんなで程々に素材を分けて、その場はお開きとなった。ニシダさんにはものすごく感謝をされ、お互いに挨拶を交わし、きつとまた釣りをしようという約束した。

そんなこんなで俺達3人がキリトとアスナのログハウスまで戻ってきたときには、もうすっかり暗くなったあとだった。

「そういえばクレハ君。忘れるところだったけど、私たちに用があつてここに来たんじゃなかったっけ？」

「……………ああ、そうだったな」

アスナは何気なく口にしたのだろうが、俺にとってはそれは俺を一気に現実には引きずり戻す言葉だった。考えないよう考えないようとしていたが、そうも言っていられない。これは、俺の仕事なのだから。

「俺がここに来たのは他でもない。依頼を受けたからなんだよ」

「依頼？ここに來ることが？」

「なんで、私たちに会うことが依頼になるの？」

さっぱりわからない。といった顔を2人がしている。

それはさつきまで釣りをしていた2人と変わらない、純粹で安らいだ顔だ。その顔は俺は今から俺の手で壊すことになる。そう思うと胸が痛い。だが、一度引き受けたからには依頼を完遂しなくてはならない。それに、この依頼がどれだけ大切なのか俺はわかっている。だから………伝える。

「俺が依頼を受けた相手はヒースクリフ。依頼内容は『お前達を連れ戻す』こと」

「………え？」

「何を………」

これが、俺がここに來た理由。

「悪いなキリト、アスナ。戻ってきてもらおうぞ」

親友へ

75層のボス部屋。

その部屋が見つかったのは1週間ほど前のことだった。

今までの層と同じように、攻略組は偵察隊を組織した。情報収集を主目的とした、攻略組の中でも腕利きのメンバーを集めた合計22人の隊だった。今までの層と同じように、いや、クォーターポイントということもあって、今までの層以上に警戒して、今までの層以上に準備を固めて、偵察隊は出発した。

ヒースクリフからの依頼で、偵察隊には俺とアルゴも加わっていた。

といつても戦闘に参加するわけじゃない。ボス部屋の外からボスを観察し、情報を集めることが俺達の仕事だ。俺達が起用された理由は簡単な話で、相手の動きを見極めることに重点を置いた戦い方の俺と、情報の管理に長けたアルゴにボスを観察させることで、情報収集の効率をあげようとしたというだけだ。

組み立てた作戦も至って簡単。

最初に10名がボス部屋に入りボス部屋の中心まで到達。ボスの様子を一通り確認し、離脱すべきだと判断したタイミングで残りの10名がボス部屋に突入し、タゲを分

散しながら全員で脱出するというものだ。今までの層もそうしてボスの情報を集めていたらしく、偵察隊のメンバーとの打ち合わせはスムーズに進行した。他の層と違うところと言ったら、俺とアルゴがついてきていてことぐらいだろう。

今まで通りうまくいく。全員がそう思っていた。

作戦は失敗した。

最初の10人がボス部屋の中心に到達した瞬間。ボス部屋の扉がゆっくりと重い音を立てて閉じてしまったからだ。何がなんだかわからなかった。俺もアルゴも残りの偵察隊メンバーも、まずい事態になったと気づいて行動し始めるまでに数秒の間が空いてしまうほど、予想外の事態だった。

中に入ったメンバーに慌ててショートメッセージを送る者、何とかして扉を開けようとする者、残された俺達はボス部屋に閉じ込められた10人を助けようと奔走したが、どれも振るわなかった。

不安を抱えながらも、時間は無慈悲に進み続け、5分ほど経った頃だろうか。俺達が何をしてでも微動だにしなかったボス部屋の扉が、閉まった時と同じように、ゆっくりと重い音を立てて、あっさりと開いた。

当然のように、俺を含む残された12人は慌ててボス部屋の中を確認した。

しかし、そこには何もなかった。本当にまったく、何もなかった。

おそらくかなりの強敵となるであろう75層のボスモンスターの姿も、10人の偵察隊の姿すら。

絶望的な空気の中、『閉じ込められた偵察隊は転移結晶を使って街に戻っているのかもしれない。生命の碑を確認するべきだ』と誰かが言った。望み薄なのはわかっているが、俺達はその言葉に突き動かされた。生きているかもしれないという僅かな期待にすがりつきながら。フレンドリストを確認すれば、そんなことすぐに分かるのに、それを口にする奴は1人もいなかった。

結果は案の定、生命の碑からは10名の名前が消えていた。

そこで改めて、俺達は痛感した。10名もの死者が出てしまったこと。ボスの情報が一切手に入っていないこと。

むしろ状況が最悪であることの裏付けが取れる情報だけが増えてしまった。今回のボス部屋は一度入ったら抜け出せない上に、偵察隊が転移結晶を使わなかったことからおそらく結晶無効化エリアのはずだ。それに加えて、74層のボス部屋と違って扉が閉

まる。初手で逃げ場を一気に刈り取られるわけだ。

俺達の報告を聞いた攻略組たちは、目に見えて絶望していた。

当然だろう。情報が一切ない、数分で10人を全滅させるボスに挑まなくてはならないのだから。

圧倒的に戦力と情報が足りていないこの状況で、攻略組のメンバーが考えることは、当然ながら1つだった。足りないのなら補えばいい。情報は無理でも、戦力ならあてがある。

そうだ、あの2人を呼び戻さなくてはならない。

俺は、攻略組からだされたその提案を拒否することはできなかった。

「なにぼーっとしてんの？ 刀のメンテナンス終わったわよ」
「……………え？」

俺の愛刀を持ったりリズの呆れ声で俺は現実引き戻された。

窓から差し込む日差しと、水車を回す川の流れる音が静かに耳に入ってくる。リズに武器のメンテナンスを頼んでおいて、そのまま店で終わるのを待っていたんだが、知らない間に終わっていたみたいだ。それにしても随分長い間呆けていたらしい。

…すこし、嫌なことを思い出していたせいかもしれないな。

「いや、なんでもない。それにしても思ったより早かったな」

「耐久値もそんなに減ってなかったしね。珍しいこともあるのね、あんたいつとも耐久値ギリギリになるまで持つてこないのに」

「……………まあ、そんなときもある」

「普段からこのくらいのペースで持つてきなさいよ。まああんたの刀の場合はもう少し長くてもいいかもしれないけど」

「はいはい、気をつけますよ」

「ほんとに分かってんのかしら…………」

俺の刀は耐久値が異常な位あるし、そんなに頻繁にメンテナンスする必要もない。今まではほんとにギリギリになるまでメンテナンスを頼んだりはしてなかったが、今回は少し特別な事情もあつて早めに持つてきたわけだ。

「そういえば昨日アスナとキリトもメンテに来たわよ」

「そう、か……………」

「あんたもしかしてまだ気にしてるの？ アスナ達を前線に引き戻したこと」

「そりゃあな。あいつらの新婚生活なんてまだ2週間位だったんだぞ？」

「仕方ないじゃない。攻略組全体からの要望で、ヒースクリフが直々に依頼してきたのよ？ アスナもキリトもちゃんと納得して戻ってきたんだから、気にすることないわよ」

「……………まあそれはそうなんだが」

俺がキリトとアスナの家であいつらを前線に引き戻そうとした時、最初は少し戸惑っていた2人だったが、すぐに落ち着きを取り戻し、俺の指示に従ってくれた。

結局のところ、2人は遅かれ早かれ攻略組に戻されることを覚悟していたらしい。前

線から離れる時、ヒースクリフが2人に言った言葉の意味を理解したんだろう。そして、最終的に俺が必要だと判断したのならおとなしく戻るということを2人の間で決めていたそうだ。

素直に戻ってきてくれたことに安心した反面、申し訳ないとも思った。他に方法がなかったとはいえ、あいつらの幸せな時間を俺が一方的に奪ってしまったような気がして。

「どちらにしても、明日のボス戦が終わったらまた前線から離れられるようになってるんでしょ？」

「ああ、ヒースクリフの了解は得た。キリトとアスナを引き戻す依頼の報酬を使ってな」
『『叶えられる範囲で2つ言うことを聞くこと』が報酬だったんだっけ？ 随分破格の条件じゃない』

「あつちから言い出したことだ。もつとも、初めは1つだけって話だったが、交渉して2つにさせたんだよ」

「そうなの？ なんでわざわざ」

「まあ……ちよつと私用でな。それに、ヒースクリフを言いなりにできる権利なんて多くて損ないだろう」

「なんか言い方が悪いわね…」

いつもいつもあの人の思い通りになっていくのはなんだか癪だからな。これくらいの反撃はさせてもらってもいいだろう。別に自分からメツセージを飛ばしてキリトとアスナを引き戻すことだってできたはずなのに、なんでわざわざ俺に直接迎えに行かせたのかが分からなかったが、終わってみて初めてあの人が考えていたことがわかった。

2人と交流が深くて、かつ攻略組じゃない俺がわざわざ出向くことで、今回のボス戦が本当に切羽詰まっっていて2人必要であることを強調させたかったんだろう。

まあキリトもアスナも、呼び戻されたときの覚悟を済ませていたみたいだから、どちらでも結果は変わらなかったのかもしれないがな。

「それにしても、ボス部屋が見つかってから忙しいっいたらなかったわ」

「この時期の生産職大忙しだな。もう落ち着いたのか？」

「ボス戦本番は明日だし、一段落はついたわね」

「そりゃあお疲れ様。人気鍛冶職人は辛いな」

「ちやかさないの。生産職が手伝えるのはボス戦が始まるまでだから、あたしにとってはこの時が本番なのよ」

「そう思ってるプレイヤーにメンテしてもらえるなら、攻略組からしても安心だろうよ」

リズに武器のメンテナンスをしてもらっている攻略組は少なくない。特に意識することはなかったが、攻略組が万全の状態で攻略に向かうことができるのは、こういった生産職のプレイヤーが支えていたからなのだろう。

「それで、あんたはどうなのよ」

「どうって？」

「万屋よ。この時期の万屋って忙しいものなの？ 武具屋とかアイテム屋は想像つくけど、万屋がボス戦前何してるのかって想像つかないし」

なるほど、確かにイメージがしづらいつてのは分かる気がする。

店のセオリーなんてのもそもそもないし、万屋っていう店自体SAOの中で俺しかやっていないことだからな。周りから見てもボス戦前に何をしているのかなんてのは分からないだろう。

「ボス戦前はなかなか忙しいぞ。クエスト報酬でしか手に入らないバフ系のポーション

とかを手に入れたいプレイヤーのためにクエスト手伝ったり、俺が持つていればそういうのを売ったりとか。今まではそんな感じの依頼が多かった」

「なるほどね。そう言われるとやることはたくさんある気がしてきたわ」

「このタイミングになると情報を扱うことは殆どないし、ボス戦前の仕上げを手伝うって感じだな。アルゴがこの時期に走り回ってるのは異常事態ってことだ」

「そう……なのね」

ボス戦前日にもなって情報屋がボスモンスターの情報を集めているなんてそうそうない。低層で攻略のセオリーみたいなのが出来上がってない時期は結構あったらしいが、最近は全く無かった。

「今のアルゴは見てて不安なのよ。もう3日以上もぶっ続けて情報を集めてるらしいじゃない？ 街に戻ってきてても、メンテとアイテム補充を済ませたらすぐにフィールドに出ていつてるし……」

「フロアボスの情報は基本的にフィールドか迷宮区にしか隠されてるか、クエスト報酬で手に入るぐらいだから。クエストは偵察隊を送る前に散々探し回ったし、見逃しているとすればフィールドだと思ってるんだらう」

「それでも流石に無茶しすぎよ。軽く考えてるわけじゃないけど、もつと休みながらやらないと危ないわよ」

「あいつも俺と同じで、偵察隊メンバーとは直接関わってたからな。なんというか、責任みたいなものを感じているんだろう」

「責任って言っても、別に生き残った偵察隊のメンバーが何か悪いことをしたわけじゃないじゃない」

「その通りだ。俺達が何かしたわけじゃない。けど俺達は、何もしてやれなかつたんだ」
「それは……………」

偵察隊のメンバー半分が扉の中に閉じ込められた時、俺達は何もできなかった。助けやるところか、助けようとすることすら許されなかつた。扉があくまでの5分間に味わった不安感と絶望感は忘れられない。

生命の碑を確認して、メンバーの死を実感した時、後悔と自分に対する情けなさ、偵察隊に対する申し訳無さが一気に襲ってきた。

『もつと情報を集めてから偵察を始めるべきだった』『もつと安全で確実な作戦を提案できたんじゃないのか』『日常に浸かりすぎて、前線の危険度を忘れていたんじゃないのか』『何が剣影だ』『なんの役にもたてなかつた』

それは俺だけじゃなく、アルゴもそうだった。冗談や演技ではなく、あそこまで狼狽しているアルゴを見るのは随分と久しぶりだった。

ヒースクリフへの報告を終えた後、アルゴはすぐに情報収集をしに飛び出していた。今もなお、それこそ寝る間も惜しんで情報をかき集め続けている。

「何かしてないと、不安と後悔で押しつぶされそうなんだろう。あんなアルゴは1層の時以来だな」

『気持ちちは分かる』なんて軽々しく言えないけどさ、何とかしてあげたいのよ」

「気持ちだけで十分……:というか、リズは鍛冶屋としてやるべきことをこなしてるんだから問題ない」

「それはそうかもしれないけど……」

「まあアルゴの件は心配するな。明日にはボス戦が始まるから、情報集めも明日で打ち止めになる。それ以降は無理矢理にでも休ませてやってくれ」

「うーん……:そうね。一応メッセだけは飛ばしておくわ」

「そうしてくれ」

今のアルゴの気持ちを一歩理解できるのは多分俺だ。同じことを経験した俺だから

こそ、あいつの気持ちか理解できる。

『お前のせいじゃないから必要以上に責任を感じるな』だとか『無理するなよ』って言葉は何の意味もない。どれだけ周りに静止されようと、どれだけ周りに慰められようと、自分が今できることをし続けていないと気が済まないんだ。周りから見たら無茶をしすぎていると思われるかもしれないし、かなり心配も掛けるだろうが、止まるわけにはいかないんだ。たとえ何があっても、自分にできることを無理矢理にでもやらないといけないんだ。

アルゴはきつとそう思いながら走り回っている。

なぜなら、俺もそう思っただけで行動しているからだ。

．．．

武器のメンテナンスは終わったし、リズとの情報共有も終わった。次の予定の時間が迫ってきているし、そろそろ店を出よう。

「それじゃあ、そろそろ帰るわ」

「あら？ 珍しいわね。まだ日が落ちきるまで時間があるけど」

「ヒースクリフに用事があるんだよ。色々とな」

「ふーん……ま、いいけどね」

ヒースクリフには色々と話しておかないといけないことがある。時間もギリギリになってきたし、そろそろ行こう。

「それじゃあ行くから。武器のメンテナンスどうもな」

「ああちよつとまって！ 渡すものがあるから」

「渡すもの？」

そう言うと、リズは小走りで工房の中に入っていった。

渡すものってなんだ？ 別にリズから何か貰う約束なんかしてないはずだし、最近特

に何かを頼んだ覚えもない。本当に全くと言っていいほど心あたりがないんだが
……………

「おまたせ。はいこれ」

「……袋？」

「袋じゃなくて重要なのは中身よ中身。ありがたく使いなさいよね」

「つかう？」

疑問を抱えながらリズから渡された袋の中身を確認すると、見覚えのある小瓶がたくさん入っていた。HP回復用ポーション、STRポーション、AGIポーション、状態異常耐性用ポーション……etc。ざっと見ただけだが量だけじゃなく種類も豊富だ。袋の中には戦闘でかなり役立つ類のPOTがびっしりと詰められていた。

「なんだこれ？」

「サポート用アイテム一式よ。見て分かるでしょ？」

「いやそりゃあ分かるが、なんでいきなり？」

もらえる分にはかなりありがたい。けどリズからこんなに沢山のアイテムを渡される心当たりが全くない。頼んでおいた覚えもないし、リズに対して今の俺がこういうアイテムを欲しがっていることを言った覚えもない。

「なんでって、そりゃあ決まってるじゃない。

あんた、明日のボス戦出るんでしょ？」

あまりにも当たり前のように、いつもどおりの口調で言い放ったリズの言葉に、俺は硬直してしまった。嘘をついてごまかすことも、惚けることすらできないくらい動揺してしまっていた。

なぜならそれが、完全なる事実だったからだ。

けどそんなことリズに一言も言っていない。そもそもまだ誰にだってそのことを伝えてないんだ。キリトにだってアスナにだってヒースクリフにだって。アルゴだって例外じゃない。むしろ、アルゴに知られたくないからギリギリまで誰にも明かしていなかったんだ。今日これからはじめてヒースクリフに交渉しに行くはずで、情報なんか漏れようがない。

「な……なんで………」

「そんなの見てれば分かるわよ」

動揺を隠すことすらできていない俺がやつと絞り出した疑問の言葉に、リズはさつきと変わらず、いつも通りの口調で言い放った。こんな状態じゃ、ここから誤魔化すことは無理だな。

「参ったな……隠しておくつもりだったんだが」

「バレバレよ。あたしに隠し通せると思ってたの？」

そう言われてしまっただけはどうしようもない。確かにそのとおりだ。リズに隠し事を

して、俺が見破られなかった例がない。

「いつから気付いてたんだ？」

「店に来たときからよ。今のあんた、アルゴと同じ顔してるもの。それにいつものあんただったら、アルゴがあんただけ無茶してたら無理矢理にでも止めるでしょ。そうしないってことは、あんたも似たような無茶をしてるんだろうなって思ったの」

「……そうか」

「まあ他にもいっぱい理由はあるけどね。けど、あたしに隠しておきたかったなら武器のメンテナンスを頼むべきじゃなかったんじゃない？ このタイミングで武器のメンテナンス頼んできたら、それまでに気付いてなくても流星に気付くわよ」

「まあ、それはそうなんだけどな」

リズやアルゴに気づかれなくなかったのは余計な心配を掛けたくなかったからだ。キリトやアスナやクラインはボス戦に参加するだろうから諦めたが、できるだけ知り合いに不安を感じさせたくなかった。

本気で隠し通そうとするなら、リズに武器のメンテナンスを頼むなんて危険なことはせずに、おとなしくNPCの武器屋に頼んだほうが良かったのかもしれない。けど……

「ボス戦前の大事なメンテを、リズ以外に頼もうとは思えなかったんだから、仕方ないだろ」

腰に下げた愛刀に目を落とし、俺は本音を呟いた。

明日俺が向かうのは、自分の命がかかっている戦いだ。それも、メンバーの中で俺が最も死ぬ確率が高い。だったら、自分が考えうる最善の状態で戦いに望まないといけない。そう考えた時、NPCや他のプレイヤーにこの刀を任せようとは思えなかった。

結局、知り合いに心配を掛けたくないっていう俺のエゴは、同じように俺のエゴのせいでご破算になってしまったというわけだ。なんとも情けない話だ。

何はともあれ、バレてしまったものは仕方ない。こうしてわざわざ選別までくれたりリズの思いを無駄にはできないし、素直にありがたい。ちゃんと礼を言わないと。

「リズ、ありが……え？」

顔をあげて、リズの目を見てきちんと礼をしようと思ったが、それはできなかつた。

俺の正面に立っているリズは、下を向いて体を震わせていた。桃色の髪で隠れて顔は

見えなかったが、小さなすすり声を上げているリズの真下の床に、数滴の雫が落ちていることに気がついてしまった。

「リズ、おまえ……」

「う……うるさい……わね。何も……言うんじゃ……ないわよ」

S A O じゃ感情を隠すことは難しい。ただの感情の起伏だけなら喋り方なり立ち振舞でごまかせたりするが、涙だけは我慢することはできない。今リズが流している涙が、悲し涙なのか嬉し涙なのかは分からない。分かってやれない。震える声で答えるリズに対して、俺はどうして良いのか分からなかった。

「……悪い」

「なんであんたが……謝るのよ」

「それが分からないから謝ってる」

「意味……わかんないわね」

リズは少し笑いながらそう言うと、乱暴に腕で顔を拭って顔を上げた。

目が赤く腫れたりはしないが、それでもたった今まで涙を流していたことが分かる。そんな、今までに見たことがない顔をしていた。

「そのアイテム、ただで上げるわけじゃないわよ。1つ約束しなさい」

「……ああ、なんでも言ってくれ」

強いが温かい目でリズは俺をまっすぐと見て、いつも通りの口調で言った。

「ボス戦が終わった後のお茶会は、あたしが注文した料理を全部作ることに。わかった？」

なんともリズらしい。そう思った。

内容もそうだが、本当に言いたいことが遠回しに伝わって来るその言葉が、実にリズらしい。

『必ず帰ってくることに』

リズが俺に約束させようとしているのは、つまりはそういう事だ。

「……………ああ、約束する」

俺は、リズから渡された袋を強く握って、精一杯の笑顔を作って応えた。

・ ・ ・

「やあ、まっていたよ。クレハ君」

「悪い、少し遅れた」

アインクラッド第55層グランザムにある巨大な城。俺はKOBのギルド拠点に訪れている。そのバカでかい城と同じように無駄に広い執務室に案内されたが、部屋にいるのは俺を出迎えたヒースクリフ一人だった。

「この程度の遅れは全く問題にならない。それよりも、どうして君がわざわざこのタイミングで私を訪ねる？ 全く見当がつかない」

「おいおい、無意味な詮索をいれるのはやめてくれ。このタイミングで俺があなたを訪ねる理由を、他ならぬあなたが分からないはずがないでしょう」

「……おおよその予測はついている。明日のボス攻略のことだろうか？」

「その通り」

なにが『全く見当がつかない』だよ。それが分かったら8割型理解してるって言うても刺し違えないだろうに。

「アルゴ君がいけないということは情報提供というわけではないのだろうか？ もっとも、君はここ最近の情報収集ではなくレベリングに時間を割いていたようだがね」

「……そこまで調べてるとはね。だったらなおさら、俺がここに来た理由なんて聞くまでもないでしょう」

「すまないね。今までの君の事を考えると、答えが分かっている、本人の口から直接聞きたいのだよ」

「相変わらず面倒な人だ」

そうまでして俺の口から聞きたいもんかね。思い返せば、この人と初めてあったときもお互いの腹の探り合いみたいなことをしたんだつたな。

「それでは改めて、用件を聞こうか、クレハ君。君はいつたい、私に何を伝えに来た？」
「お望みの通りに、俺の口から言つてあげますよ。『明日のボス戦には俺も参加させてもらおう。』」

逃げないという意思を示すために、死の覚悟を持った事を表すために。俺はヒースクリフの目をまっすぐと見つめていい放つた。

「……………ひとつだけ聞いてもいいかね？」

「ああ、構わない」

「君には戦闘においてあまりにも大きいハンドレを背負っている。ボス攻略ともなれば死の危険は多大なものとなるだろう。それなのになぜ、君は戦おうとする？」

「……………」

ボス戦に参加することは俺の意思で決めたことだ。ボス戦に参加できないと分かったあのときから、俺は色々なことを考えながら生きてきた。

βテストであることを隠しながら、それが知れ渡ることを恐れながら生きていたときもあつた。

その問題が解決した後は、今度は危険な目に遭っている仲間を守つてやれない自分の力のなさを呪つた。

そのどちらの苦悩も、俺の周りにいる仲間の言葉や行動で解消された。俺は守つてやれなくても、助けることはできる。心の支えになることはできる。そう言ってくれた相棒の言葉は今でも俺のなかに残っている。

けど、帰ってくる場所は、帰ってくる奴らがいて初めてできるんだ。やっぱり俺は仲間を守るために、できることならなんだってしてやりたい。

俺はおそらく、今S.A.Oにいるプレイヤーの中で一番欲張りなプレイヤーだ。仲間の帰る場所も、仲間の命も同時に救おうとしているんだから。

そのためには、俺は絶対に死ねない。俺の死は、あの店での時間の喪失に直結する。俺だけじゃない、キリトもアスナも、クラインもエギルも、リズもアルゴも死んではない。俺は俺に関わってきた人は見捨てられない。

少なくとも、助けられるチャンスがあるのなら、どれだけ無茶でもそのチャンスをおきたい。

今がまさにそのときだ。だから俺は戦う。

俺は……

「俺は俺の日常を守るために戦う。ハンデを背負ってる自分自身も含めて、俺に関わってきたものを壊させないために」

日常を守りたい。

それが俺の答えだ。

ヒースクリフは静かに笑い、俺の答えに対しての返答を返した。

「……なにかを守ろうとする者は強い者だ。君の活躍に期待しているよ」

「まあ、過度な期待は困る。ほどほどによろしく」

「相変わらず自己評価の低い男だね」

話も一段落したことで、お互い緊張を解いていつものような軽口を叩きあう。こうし

ていれば、ちょっとうさんくさいだけのおっさんなんだがな。

このままのんびりと雑談を続けたい所だか、まだ俺の用事は終わっていない。

「ボス攻略参加の報告は済ませた。これからが本題だ」

「本題？まだ他に話があるということか」

「その通りだ。さすがにこれから話すことまでは調べきれてないみたいだな」

俺がわざわざヒースクリフのところに来たのは、なにもボス戦に参加することを宣言しようと思った訳じゃない。ボス戦に参加することが大前提としての話をしに来たら、わざわざボス戦に参加することを伝えに来たんだ。

「前回の依頼で貰った報酬。あれを使わせてもらいに来たんですよ」

「……………ほう？」

「拒否は認められませんよ。もとよりそういう内容の報酬のはずだ」

「『叶えられる範囲で要望を2つ聞く』だったかな？ひとつはアスナ君にもう一度休暇を与えることで使われたと記憶している」

「ああ。だから最後のひとつを使わせてもらおう」

俺の言葉を聞いて、ヒースクリフはまたニヤリと顔を歪ませる。まるでいたずらを思いついたばかりの子供のように、これから起こる楽しいものを今か今かと待ち構えているような顔をしている。その期待に応えてやるのは少ししやくだがまあ仕方ない。

「俺からの要望は『明日のボス戦に、今から俺が伝える作戦を採用させること』ってこと」
「なに？」

「問題ないでしょう。あまりにも情報が少なすぎるせいで、隊列と班分けしか決めてないそうですし」

俺がボス攻略で役に立つには、入念に策を練る必要がある。その作戦が採用されないことには逆に足手まといにだってなりかねん。

「攻略組の命を君に無条件で預けろと？」

「いいや、そういう訳じゃない。むしろその逆。攻略組の犠牲を最小限に押さえるための作戦だ」

「……………詳しく聞こう」

仮にも攻略組のトップを張っているだけあって、そういうところでは慎重のようだが、ヒースクリフの懸念は全く問題がない。

俺の作戦で掛けられる命は、2つ。

いや、俺の予想が正しければ1つだけですむ。

「それじゃあ話させてもらいましょう。俺の作戦を」

俺は作戦を話し始める。

うまくいけば何も失う必要はない。すべてを守る作戦を…。

相棒へ

いつもどおりの時間に目が覚めた。朝に作った朝食も、その後に飲んだコーヒーマイもいつも通りだ。このいつも通りの朝に対して、心から愛おしく思っている自分がいる。

そうなってやるつもりは毛頭ないが、もしかすると今日は、俺を迎える最後の朝になるのかもしれないのだから、こんな日くらいはいつも通りであって欲しいって思うものだ。

「よし、こんなもんだろ」

俺ドライ・ド・ライフの刀も昨日メンテナンスしてもらったばかりだし、防具だってここ数日で攻略組に並ぶレベルのものを用意できた。アイテムもリズがくれたバフ系アイテムのお陰で充実している。準備は万端だといつていい。

「もうやり残したこともないし、まだ時間はあるけど転移門まで行つとくか」「フーン。やり残したことはないのか」

CLOSEの札を出しているはずの店の入口から、聞き慣れた声が聞こえてくる。今となつては驚きもしない。こいつが気配を消して入店してくるのはいつものことだからな。

「『やり残したことはない』の力。へー」

「なんだアルゴ、久しぶりに顔出したと思つたら、随分機嫌悪いじゃないか」

「どこかの誰かさんが、相棒になんにも言わずに無茶しようとしてるからナ。不機嫌にもなるヨ」

腕を組んでジト目でこつちを見ながら、本当に機嫌が悪そうにアルゴは言い放つ。

「奇遇だな。俺の相棒もここ数日まともに連絡を寄こさなかつた上に、ほとんどフィードで生活してたらしいぞ。俺に何も言わずにな」

「それは……悪かつたヨ」

お返しとばかりに言い返してやると、アルゴは少し小さくなつて目をそらした。今の

は流石に意地が悪すぎる返しだったかもしれない。少し思うところもあるが、今は久しぶりの対面を素直に喜ぶことにしよう。

「まあともかく、無事で安心した。こんな無茶はこれつきりにしてくれよ、リズムも心配してたぞ」

「リッチちゃんにはメッセで散々言われたヨ。あとで会いに行く予定だしナ」

「そうしてやってくれ。多少は覚悟していったほうがいいと思うけどな」

「……そうするヨ」

昨日会ったときも言っていたが、アルゴの無茶な情報収集にハラハラしていたみたいだからな。心配症で面倒見の良いリズムのことだ、ひとしきり話して安心した後には説教を食らうことになるだろう。

「まあともかく、オレッチの話はこれで終わりダ。次はクー坊の話聞かせてもらおうかナ」

「何の話だ？」

「オレッチ相手に惚けられると思ってるのか？」

「……………」

そう言うのとアルゴはもう一度ジト目でこつちを見ながらフンと鼻を鳴らしてみせた。今回は不機嫌というよりも呆れの割合の方が多い。今までのことを考えると当然かも知れないが、やはり俺の考えはすべて筒抜けらしい。

「分かったよ、俺が悪かった。そうだ、俺は今日のボス戦に参加する。悪いがもうヒースクリフも交えて作戦と隊列の組み方まで決定してる。止めても無駄だぞ」

「……はあ。見事な開き直りだな」

「情報を残さないように色々隠す努力をしてたんだ。それをあつさり掻い潜られたら開き直りたくもなるだろ」

防具やアイテムを買うにも、あからさまに買い物をするのとボス戦にむけて準備しているっていうのがバレるから、わざわざレベリングと並行して素材なりアイテムを集めたり、防具を作るのもその時集めた素材で偶然できたって風を装ったり大変だったんだからな。

「隠す努力？　なんだ、そんなことしてたの力」

「なんだよ、お前にとつては無意味だったかもしれないが、実際昨日までは誰にも伝わってなかったんだからな」

まあ、ヒースクリフにはうつすらバレてたし、リズにも見抜かれてしまっていたから、どのみち時間の問題だったのかもしれないけど。

「いや、そういうことじゃなくてだな……」

「なんだよ」

アルゴは少し罰が悪そうに俺を見つつ、次の言葉を言い出せずにいた。もう一度なんだよと問いかけるとアルゴは自然に、あっさりと言葉を繋いだ。

「オレッチは最初から知ってたゾ？　クー坊がボス戦にでること……」

「は？」

アルゴが当然のように行ったその言葉に、思わず間の抜けた声が溢れてしまった。最

初から知っていた？最初って何時だ？アルゴの言う『最初』というのが言葉通りの意味で、俺がボス戦に参加すると決めたとときからだとするそれは流石にありえない。

「いやいやいや、それは無いだろ。そんなこと、俺の中でしか決まってることなんだから知りようが……」

そこまで言った時、俺の言葉を遮るようにしてアルゴは一步前に出た。指を一本まっすぐ立てて、俺の胸のあたりへ突きつけてこう告げた。

「思い返してみればわかるヨ。クー坊がボス戦に出るって決心したときのことをサ」「俺が決心した時……？」

俺が今回のボス戦へ参加することを決めたのは何時だったか。記憶を1つ1つ手繰り寄せてみる、ということらしい。俺が決心したときのことはよく覚えている、他ならぬアルゴもその時横にいたはずだ。

そう、あれは偵察隊が半壊してすぐ後、ヒースクリフへの報告を済ませたあとのことだ。

偵察隊が全滅した時、俺とアルゴを含む残りのメンバーはひどく沈み込んでいた。生命の碑からグランザムまで帰還し、ヒースクリフに状況と今後の対策を伝えた後、メンバー全員が感情を整理するために、それぞれ思い思いのことをしていた。他の攻略組メンバーに会いに行つた者、自室へ戻り1人になろうとした者、色々だった。

俺とアルゴはというと、2人で街の中を歩いてきた。

どちらからか切り出したわけでもない。よくよく思い返してみると、何も言わずにフラフラと町の中へ歩いていった俺に、ただアルゴが着いて来てくれたような気もする。

特に何かを話したような記憶はない。アルゴの方から何度か声を掛けられていたような気もするがよく覚えていない。『そうだな』とか『そうかもしれないな』だとか、空

返事をしていたんだろう。それぐらい、俺の心は参りきっていた。

2年以上SAOの世界の中で生きていたが、デスゲームであるという事を目の当たりにしたのは随分と久しぶりだった。第1層で初めて倒れるまでは、前線で戦い続けようとしていたこともあって、命の危険を感じたこともあった。けれど、自分の限界を知ってからというもの、俺はこの世界の恐ろしさからずっと離れていた。それをもう1度感じたのはクラインを助けるために戦ったあの時だったが、その時は幸いにも死人が出ることもなかったし、今となっては20層近く前の層での出来事だ。

だが今回は違う。10人死んだ。

この世界がデスゲームであるということを再び実感させられた。

自分の情けなさや申し訳無さを抱えながら町を歩いてきたその時、町の中で1つの異質なパーティを目にした。

パーティーメンバーの1人が町のだ真ん中で座り込み顔を抑えて泣いていて、残りのメンバーがそのプレイヤーの肩を抱きながら励ましているようだった。だがその励ましているプレイヤー達も、決して平気な顔はしていない。苦しくて悲しいのを必死に抑えているような、そんな顔をしていた。すこしそのパーティに気をとられていると、あることに気がついた。

そのパーティの中に、俺達と同じ生き残った偵察隊の1人がいた。

それだけで、そのパーティが何をしているのか、大方の予測ができてしまった。きっと、ボス部屋へ入った偵察隊のメンバーの中に知人や友人がいたのだろう。それをたつた今、生き残ったメンバーから知らされた。

そのパーティを目にして、俺はもう再度自己嫌悪に襲われたが、それも一瞬のことだった。

『……………何もしてやれなかった』

座り込み、涙を流しているプレイヤーがボソリと呟いた言葉が偶然俺の耳に届いた。それは、俺がボス部屋に入ってしまったメンバーに対して思っていたことと全く同じ思いだった。

その時気がついた。仲間が死んでいった時に無力を感じるのとはどこにいても同じなんだ。ボス部屋の前だろうと街の中だろうと関係ない。大切なものを失ったと知った時、自分が何もできなかったと感じるのは誰だって同じだ。

俺はあいつらが返ってくる場所になると決心した。それでいいと納得もした。

ただどうだ？ ボス戦に向かったあいつらが返ってこなかった時、俺は自分を許せるのか？ そんな自問自答が頭のなかで渦巻いた。どこにしよう、大切なものを失った時に感じる事は同じだ。後悔と絶望と自己嫌悪。それを感じないためにはどうしたら良い？

その答えが出るのに、大した時間はかからなかった。

そのパーティに対して、仲間を助けてやれなかったことを心の中で謝罪し、同時に、俺は自分の中である1つの決心を固めた。

常に一緒にいて守ってやるなんてのは不可能だ。それぐらいわかってる。

けど、1番危険だと分かっている所でくらは、隣で戦っていよう。俺に出来ることを、無理矢理にでもやってやろう。

もう、迷いはなくなった。

・ ・ ・

「……………」

「どうダ？ 心当たりがあったか？」

アルゴに言われたとおり、俺が今回のボス戦に参加することを決心したときのことを思い返していた。仲間の死に後悔するパーティーを見て、俺は決心した。後悔しないためには、無理矢理にでも出来ることをしてやると決めたと決めたときのことを。

「いや、確かにアルゴは一緒にいたが、別にお前に話したりとかしてないよな？」

ぶつちやけた感想を言わせてもらうと、全く心当たりはない。あの時アルゴは俺の後ろにいただけで、特に何かを話した覚えもない。むしろ思い返した分謎が深まったぐらいだ。

「一緒にいただけで十分つてことサ。落ち込んでたクーク坊が、あのパーティーを見かけて考えを変えたことなんてすぐ分かったヨ」

アルゴの答えは非常に単純で、リズにボス戦参加がバレたときと全く同じ理由だった。単純な話、アルゴはリズと同じことを、リズより先にやっていたということか。

「そこまで見透かされてたら、言い訳も何もできないな」

「細かいことは分からないけど、無理矢理にでも自分にやれることをしてやろうとおもったんだ口？」

それは、なんとも覚えのある言葉だった。

俺がアルゴの無茶を止めなかった理由と同じ理由だ。アルゴはきつとそう思っただけで動いている。だから俺はそれを止めないほうがいいんだと、そう思っていた。

「それはお前のことじゃないのか？だからここ数日間無茶をしてたんだろ。自分の事を顧みれなくなるくらい、ボロボロになるまで走り続けていたのは、偵察隊のことがあったからだろ？」

気づけば思ったことをそのまま口にしていた。納得はしたつもりでいたが、今まで全く連絡も寄こさず走り回っていた相棒に対しての思いが漏れ出たように、ほんの少し乱暴な言い回しになってしまった。

「残念だけど、オレッチはそんなに人情深いわけでも、責任感が強いわけでもないヨ。モ

チロン、何も思わなかったわけじゃない。責任も感じたし、落ち込みもしたヨ。けど、オレツチの場合はそれが理由で走り回ってたわけじゃないんだ」

「だったらなんでだ？ どうしてお前はあそこまで無茶したんだよ」

正直ここ数日間のアルゴの行動は異常だった。何時寝ているのかもわからないくらいフィールドに出ずっぱりで、返ってきたと思ったら顔も出さずにまたすぐにフィールドにいた。昔無理をしすぎたアスナがダンジョン内でぶっ倒れたって話は聞いたことがあったが、何時そうなってもおかしくなくらいアルゴもフィールドに居続けた。

「簡単な話だヨ。理由としてはクー坊がボス戦に出る理由と殆ど変わらナイ」

「俺の理由？」

俺がボス戦に参加する理由。ヒースクリフにも聞かれた、俺が決心した理由……………

『大切な人を失いたくない』。そう思ったから、無茶だろうとんだらうと、情報を集め続けたんだ」

それは驚くほどシンプルで、驚くほど身に覚えの有る理由だった。

俺は自分に関わってきたものを壊させたくない。帰ってくる場所も、帰ってくる人達も守りたくて、失いたくない。アルゴもそうだったとしたら……。

「クー坊がボス戦に参加するつもりだつてことはすぐにわかったヨ、止めても無駄だつてこともナ。だから少しでも助けになるために、情報を集め続けることにしたんだ。無茶だろうとなんだらうと、それでクー坊が生き延びる確率が上がるなら、それでいいと思っただヨ」

「……………」

何も言葉が出なかった。

俺はずっと、アルゴも俺と同じ気持ちで動いているんだと思つた。偵察隊のに対する罪悪感とか、責任感とか、自分の大切なものを守るために無茶をしてやろうと思つているんだと思つていた。

けど、それは半分正解で、半分間違いだ。アルゴと俺の考えは近くて遠い。俺は俺に関わってきたすべてを守りたいと思つた。失いたくない人達のことを思つて、俺自身すらも守ろうとした。

アルゴは違う。俺の、俺だけのために無茶をしていた。

「ひどいやつだよナ。今までだつて攻略が難航したこともあつたけど、ここまで無理をしたことはなかったヨ。それなのに、自分の大切な人が被害に合う可能性が有るときだけ、こんなに頑張るなんてサ」

そう言うときアルゴは、少し寂しそうに笑つた。

「……そんなことはない」

無意識的に、ポツリとそう呟いていた。心の声が漏れ出したみたいに、俺はアルゴの言葉を否定してやつた。

自分の大切な人を失うのが怖くて何が悪い。他の攻略組メンバーだつてみんなそう思っているはずだ。自分の仲間や友達、家族や恋人を守るために戦っているプレイヤーだつてきつといる。キリトとアスナなんてまさにそうだ。だからこそ、あいつら2人は強い。

そして、自分のことを大切な人だと言つてくれる人がいるだけで、人つていうのは強くなれるし、強く居られる。俺のことをそうだと言つてくれる奴が今日の前にいる。そ

れだけで俺は、何かを吹っ切れたような気がした。

「クー坊? どうした?」

「悪いな。嫌だったら振り払ってもらってもいい」

「え……ふえ!? うわっ、ちよつと……!!」

俺はアルゴの手を引いて自分の腕の中へと抱き寄せた。

アルゴは急なことで驚いたのか、ものすごく狼狽えて居るが、不思議と抵抗されてい
るような感じはしなかった。

「ど、どうしたクー坊……急にこういうことされても心の準備が……」

「確認してきたかったんだ」

「な、何のこと?」

「ここは仮想世界で、お前の体もアバターだ。何もかも偽物だらけの世界に生きている
んだよ、今の俺達は」

「……………」

「けど、こうして触れ合うとちゃんと暖かさを感じる。守りたいって思える。見てるも

のや暖かさその物は偽物でも、感じたことや思ったことは本物だ。俺の中にしか無い。俺だけのものなんだ」

アルゴを抱き寄せた腕に少し力を込める。

「だから確認したかったんだ。俺が守りたいって思ったものは、ちゃんとここにあるんだって、ここに居るお前は偽物なんかじゃない本物だって、そう感じたかったんだ」

俺の事を大切だって言ってくれる人は偽物なんかじゃなく、今ちゃんとここにいる。それを確認したかった。感じておきたかった。

俺の言葉を聞いて、アルゴがどう思ったのかは分からない。急にこんなことをされて戸惑っているのかもしれないし、ただ動揺していて居るだけなのかもしれない。むしろ思いつき突き飛ばされても文句は言えないくらいだ。

けれどアルゴは、俺の思いを汲み取ってくれたのか、そつと俺の背中に手を回し、小さく応えてくれた。

「……………うん、居るよ。ちゃんとここに」

気がつくとも集合時間まであと僅かとなっていた。

ボス攻略に参加するメンバーと合流するために、転移門まで行かなくてはならない。メンバーと合流した後は、ヒースクリフにも話した作戦の説明もしなくてはいけないし、ついさつきアルゴから貰ったボスの追加情報も共有しなくてはならない。なんだかんだやる事が有るから、早めに行っておかないといけないな。

「じゃあアルゴ、そろそろ行くから鍵閉めるぞ。お前もさっさとリズのところに行つてやれ」

「……………りつちゃんのとこか」

リズというワードを聞いた瞬間、アルゴの方がビクツと震えたかと思うと、なんとも言えない苦い顔でそう呟いた。リズに怒られるのが相当嫌らしい。

「リっちゃん怒ると怖いんだよナー……………」

「散々心配かけたお前が悪い」

「クー坊だつて人のこと言えないだ口？ たぶんボス戦から返ってきたら色々言われると思うけどナ」

「……………あり得るな」

サポートアイテムまで纏めてくれて、俺をボス戦へ送り出してくれたリズだが、リズはひとしきり安心してから怒るタイプだからな。キリトとβテスト以来にあつた時も、リズを転移結晶で先に帰した時は怒らなかつたけど、俺が倒れて返ってきた後は散々だった。今回もそのパターンになりかねん。

「けどま、今回ばかりは立場逆転つてやつだナ。リっちゃんと一緒に、帰りを待つてるヨ」

待ってる。

その言葉を聞いた時、なぜだかすごく安心した。帰ってくる場所があるってことが、こんなにも心地良ものだなんて、今まで実感することもなかった。俺は、あいつらにとってそういう存在だったのかもしれない。

「それじゃあ、行ってくる」

行つてらっしゃい、とアルゴの声が返ってきたが、俺は振り返ることなくそのまま店を出ていった。

作戦開始

転移門の前に着いた時には、もうかなりの数のプレイヤーが集まっていた。どのプレイヤーも気迫半分不安半分と言った表情で落ち着きがないように見える。情報の全くない状態でクォーターポイントのボス攻略に挑むのだから当然かもしれない。

そんなプレイヤーたちが、俺を見た途端に驚きと困惑の表情に変わっていつているのが少し気になるが、まあ攻略組でもない俺がここに来たら注目をあびるのは当然か。おまけに長時間戦えないってことも知れ渡っているしな。

「あれ？お前……クレハか？」

「ん？」

振り返ると赤いバンダナを巻いた青年のプレイヤーと、色黒でスキンヘッドの長身のプレイヤーが俺を見ていた。クラインとエギル、見知った顔を見つけては喜んで少しい安心した。

「やっぱりクレハか。どうしたんだよこんなところで、見送りか？」

「そんなわけねーだろ。俺もボス戦に参加するから集合したんだよ」

「はあ!!！」

安心したのも束の間、俺がボス戦に参加することを伝えると、2人は大声で叫んだせいで、思わず耳を塞いでしまう。ちらつと周りを見ると、少し遠巻きに俺達を見ていたプレイヤーたちもざわついていたり、驚いているのが見える。聞き耳立ててやがったな…。

「うるさいな。耳元で大声出すなよ」

「わ、悪い。あまりにも意外だったからな」

「いや、でもよクレの字！お前がボス戦に参加ってどういうことだよ！」

「どうもこうも、そのままの意味だ」

エギルはともかく、クラインは相当驚いたようだ。未だに信じられないと言いたげな顔を俺に向けている。

「お前、ボス戦っていったらどうやって長時間戦闘になるんだぞ！そんなところでぶっ倒れたらどうなるか……」

「クライン。やめとけ、クレハだってそのくらい分かってここまで来てるはずだ」

「そ、そうは言ってもよう」

追求をやめないクラインを静止したのは意外にもエギルだった。エギルの言葉を聞いたクラインはやはりまだ不服そうだったが、とりあえずは引き下がってくれた。クラインも俺を心配しての今の言葉だろう。正面切ってこういことが言えるのが、こいつ

のいいところだ。

「クラインの言い分はもつともだが、エギルの言うとおりちゃんとわかってるよ。安心してくれ、死なないような作戦もちゃんと立ててある」

「なるほど、今回はクレハが作戦参謀ってわけか」

腕を組んだエギルがいつものようにニヤリと笑う。

「ああ。といつても実際に指揮を取るのはヒースクリフだけだな。作戦の概要はヒースクリフが来たら全体に共有されるはずだ。ついでにアルゴから最新のボス情報も受け取ってきた」

「おお！そりゃあいいな！」

「まあそんな感じで、準備は万全だ。心配するようなことなんて何にもねえよ」

「……………分かった、もう止めやしねえよ。腹を括った男を止めるなんざ、武士の名折れだからな」

「まだ武士がどうか言ってるのか…………」

「あつたりめえじゃねえか！」

キリトの結婚祝いの飲み会でも似たようなことを言っていたが、武士の精神を貫くにはちよつと意思が足りていないだろう。女の子に積極的すぎるところは、結局直つていないみたいだしな。

「あれ？クレハくん？」

「クレハ？どうしてお前がここに居るんだ？」

ついさつきと同じように、転移門の方から俺を呼ぶ声が聞こえてきた。1人は白と赤を基調とした軽量系の鎧と、ライムグリーンの鞆に収まった長いレイピアを持った栗色の髪の女剣士。もう1人は真つ黒のコートに真つ黒な髪、この世界ではこの男にしか許されていない、背中に背負った2本の剣。キリトとアスナ、この2人が来たことが周囲に伝わった瞬間、ほんの少しだが周りの空気が変わった。休暇中だった2人が復帰しているということが知れ渡り、このボス戦に対する緊張感がありましたのだろう。

「クレハがこんなところにいるなんて珍しいな。ボス戦の見送りか？」

「あ、エギルさんとクラインさんも一緒なんですな」

もつとも、本人達はまったく気がついていないみたいだけど。

「俺とクラインもついさつき来たばかりなんだがな」

「クレハのやつがボス戦に参加するって話をしてたところだ」

「はあ!!」

今度は俺だけではなく、クラインとエギルも思わず耳を塞いだ。さつきと全く同じリアクションを返しやがったな、この2人。

「ちよつと、本気なのクレハ君！」

「ボス戦っていったらどうやって長時間戦闘になるんだぞ！長時間戦えないお前がそんなところに行ったら……」

「あーもうその話はいきつきしたつてのに」

言っている内容もクラインとほとんど同じ内容だ。こんな短時間で同じ質問を連続で食らうとは思っていなかったな。リズもアルゴもヒースクリフも、俺がボス戦に参加するって言うことに対してこんなリアクションしなかったから疲れるな。いや、本来だったらこいつらみたいな反応が正しい反応なんだろうけど。

「まあそう言うなよクレハ、誰だって驚くし心配するだろうよ」

「エギル、そうは言っても今後知り合いに会うたびに毎回説明するのは面倒だぞ」

「その心配はいらねえよ、ほら見ろ。来たみたいだ」

親指を転移門の方に向けながら、エギルは言う。転移門の方に目を向けると、真っ赤な鎧を身に纏い、銀色の長髪をなびかせたプレイヤーが、同系統の装備を纏った数名のプレイヤーを引き連れてこつちに歩いているのが見える。この場に集った全プレイヤーの注目がそのプレイヤーの方へと集まっていく、その堂々とした歩き様はゲーム内最強を名乗るに相応しいとも思えた。

「ヒースクリフか。ちょうどいいタイミングだ」

「おいクレハ、説明してくれ。ボス戦に参加するってどういうことだ」

「そうだよクレハ君。しつかり説明してもらいますからね！」

「あーもうわかったからちよつと待つてろ。ヒースクリフが作戦の説明をする時に一緒に説明してやるから」

そう言いながら、俺達5人はヒースクリフの方へ歩きだす。転移門広場の中央から少し離れた場所で、ヒースクリフは側近のプレイヤーを両脇に控えさせて佇んでいた。俺達と同じように、ヒースクリフの元へと集まっていく。昨日聞いた話だと、血盟騎士団が回廊結晶を使ってボス部屋に直接向かう事になっているらしいから、全員そのために集まっているんだろう。

転移門広場にいた全プレイヤーが血盟騎士団メンバーの前に集まったのを確認した後、回廊結晶を持ったヒースクリフが声を上げた。

「諸君。これからボス部屋へと赴くわけだが、その前に1つ伝えることがある」

周囲のプレイヤーが再びざわめき始める。それは、クラインやキリト達も例外ではなかった。

「なあキリト、今までこんなことあったか？」

「いや、ボス部屋前で簡単な作戦の確認はあったが、わざわざこうして呼び止めてまで全員に声を掛けたことは無かったな」

「私も、団長がこんな風に呼びかけるところなんて見たことない……」

「さつき言つてたクレハの作戦共有つてやつか?」

「まあ、そんなところだろうな」

困惑するプレイヤーたちを尻目に、ヒースクリフは話を進める。周りの血盟騎士団のメンバーたちも聞いていなかったのか、困惑している様が見て取れる。自分の側近にくらい情報共有しておけよ……

「今回のボス戦は非常に苦しい戦いとなるだろう。差し当たつて、ボス戦に向けての作戦を共有を行つておこうと思う。クレハくん、よろしく頼む」

「はあ!?!」

おいおいそれは俺も聞いてないぞ!

驚きと恨みを込めてヒースクリフの方を睨んでやるが、いつもと同じように不敵な笑みを浮かべているだけで何もしようとしなない。俺が前に出るまで話は進まないと言いたそうだな、あのおっさん。

「……出るしかなさそうだな」

「注目の的だな、色男よう」

「うるせえよ」

軽口を叩くエギルを小突きながら渋々俺はヒースクリフの方へと向かう。

「ではクレハくん。作戦の説明をお願いするよ」

「はいはい、仰せのままに」

笑みを浮かべながら俺を促すヒースクリフを横目で見つつ、半ば諦め気味に作戦の説明を始める。

「あー、今回作戦を起てさせてもらったクレハだ。ヒースクリフの代わりに作戦の説明をさせてもらう」

俺が話し始めると、ざわついていたプレイヤーたちは静まり、真剣な眼差しで俺のことを見ている。……やっぱり大勢に注目されるのはなれないな。

「作戦の説明の前に、一旦現状を共有しておこう。みんな知っていることとは思いますが、今回のボス戦は偵察隊を使つての情報収集はできなかつた。今までのボス戦と比べて、圧倒的に不利な状態だ」

俺が言葉をとぎつても、誰も声をあげようとはしない。

「ボスの情報を集めることは困難だったが、今朝最新の情報が手に入った。『鼠のアルゴ』からの情報だ、信用してもらつていい」

俺の言葉に初めてプレイヤーたちが少しざわめく、『鼠のアルゴ』の名前はやはり信憑性が高いようだ。相棒が信頼されていると思うと、何故だか俺まで嬉しくなってくる。

そして、プレイヤーたちは新しく情報が増えたことに対して喜んでるようだった。

「新しく増えた情報は2つ。ボスモンスターは『ムカデ型でカマを使って攻撃する』とい

うこと、もう一つは『プレス攻撃を持っていない』ということだ」

この2つの情報はかなり大きい。アルゴが躍起になって集めた貴重な情報は、俺の作戦をかなり進めやすくしてくれるものだった。本当に、アイツには頭が上がらない。この2つの情報を聞いて、プレイヤー達の顔は目に見えて明るくなっている。特に2つ目の情報が大きいみたいだ。今までボス戦を経験し続けたプレイヤーたちにとって、プレス攻撃をしてこないというだけで、かなり楽になるってことを分かっているんだろう。……だが、俺はそうは思えない。

「現状はこんな感じだ。ボスの攻撃方法が大まかに分かってはいるが、攻撃パターンまでは分からない。プレス攻撃が存在しないという情報だけだと戦闘が楽になるような印象を覚えるが、逆に言えば、それ以外のステータスを力を割いている可能性が高いってことだ。……例えば、カマでの直接攻撃の攻撃力とかな」

俺の言葉で、再び広場が静まり返る。プレイヤーたちにとっては、まさしくいいニュースと悪いニュースが同時にやってきたって感じだ。だが俺にとってはどちらもいいニュースでしかない。俺の作戦は、アイツが持ってきた情報のお陰で更に精度をまじしたといつていい。

「前置きが長くなっちゃってすまない。これから作戦を伝えさせてもらう。先に言っておくが、作戦を聞いても狼狽えなくて欲しい。この作戦は既にヒースクリフにも伝え

ている決定事項だ」

全体に話しかけているような話口調だが、俺の目は1人のプレイヤーを注視している。真つ黒な装備に身を纏ったそのプレイヤーは怪訝な顔をし続けている。

「まず大前提として、俺達には情報が足りてない。ボスの攻撃パターンやモーションを知らない状態で、全員で挑むのは危険すぎる。現にそれで、偵察隊のメンバーは全滅している」

『全滅』というワードに、集まっているプレイヤーたちが息を呑む。

「それを防ぐために、今回のボス戦では前半戦は情報収集の時間に当てる。攻撃は殆ど行わず、防御と回避に専念して相手の情報を引き出す」

俺の言っていることは至って単純。敵の情報が足りてないのなら、それを集めるための時間を設けてやればいいというだけの話だ。ここまででは誰もが考える事。問題なのは、どうやれば安全に情報を引き出せるかだ。

「だがそれをここにしている全員でやるのもまた危険だ。タゲが分散するから安全度は増すように思えるが、攻撃の流れ弾を受ける可能性が高くなる。回避するにも他のプレイヤーが邪魔になることだって有る。今回のような攻撃をメインとしない場合なら、少数のほうが効率がいい」

プレイヤー達が顔を見合わせ始める。俺の言っていることを理解してくれたのか、小

さく領いて居るプレイヤーも見て取れる。

「まとめると、ボスの情報を少しでも引き出すために、防衛と回避に特化したメンバーのみで情報収集をして、その後全員でボス攻略を開始するってことだ」

俺の言葉を皮切りに、周囲のプレイヤーたちがざわめき始める。明確になった今回の作戦内容に対して、それぞれの考えをパーティメンバー内で共有しているのだろう。幸いなことに、真つ向から否定したり、異議を唱える声は上がっては来なかった。

………今のところは。

「それじゃあ、細かい動きと割り振りを説明させてもらう」

プレイヤーたちが再び息を飲む。しんと静まり返り、俺の次の言葉を待っている。宣言しなくてはならない。これから、俺が何をするつもりなのかを……。

『あまり嘯み付いてくれるなよ』という念を込めながら俺はキリトとアスナの方へ視線を送りつつ、この作戦の本当の内容を口にする。

「ボス攻略の前半だが、ここに居るメンバー全員はボス部屋の壁際で待機。ボスには、俺とヒースクリフの2人だけで対峙して、ボスの攻撃パターンを引き出す。みんなはその間に、ボスのモーションと攻撃パターンを頭に叩き込んでくれ」

今までの静けさが嘘のように、プレイヤーたちが大きくざわめき始める。まあ当然か、前半のみとは言え、ボスに2人だけで立ち向かうなんて宣言されたのだから。

「ちよ……ちよつとまつてくれ！」

予想通りというかなんというか、声を上げたのはキリトだった。今まで俺に向けられていた視線は一気になくなり、代わりにプレイヤーの視線はキリトに集中することになった。

やつぱり、お前は黙っててはくれないよな。

「どうかしたか、キリト」

「どうもこうもないだろう！ たった2人でボスに挑むなんて無茶にも程がある！」

「別に挑もうとしているわけじゃない。情報収集のため、前半だけは2人で相手の動きを探るだけだ。積極的に攻撃を仕掛けに行くつもりもないから問題ない」

「だとしても！ レベルも足りてないお前には危険すぎる！」

俺が反論に答えてもキリトは引かない。まあ、この作戦を考えた時、実行に移すために一番の障害になるのはお前だと思っていたよ。自分の仲間が危険になるかもしれないような作戦にお前が納得するわけがない。

だからこそ、お前を引かせるための言葉も、ちゃんと考えてある。

「さっきも言ったが、今の俺達には情報が足りていない。この作戦は、それを集める上で

最も犠牲者を出す可能性が低い作戦だ。俺のレベルが足りてなくて不安だって言うなら、代わりのプレイヤーを推薦でもしてくれるのか？」

「それなら俺がやる！」

「お前はこの中で最大の火力で、ユニークスキル持ちだ。そいつを情報収集の段階で消耗させてどうする。俺の代わりとして出すなら、A G Iに特化した回避型のプレイヤーだ。心当たりがあるなら申し出てくれ」

「っ……それは……」

少し卑怯だってことは分かっている。けど、お前はこれを言われてしまったらもう言い返せないはずだ。ここに居るメンバーで、回避に特化したA G I型の主力のプレイヤーなんて一人しかいない。そいつを進んで危険な目に合わせるなんて、お前はしない。

黙り込んだキリトに内心謝りつつ、俺は再び声を上げる。

「……異議がないようならこれで話を終わるぞ。……ああそうだ、最期に1つ頼みがある」

すべてのプレイヤーがキリトから視線を外し、再び俺に視線を集める。

「俺はある事情から長時間戦闘をしたあとは行動することができない。おそらく今回のボス戦では、情報収集をしたあとは足手まといになる」

これだけはどうしてもクリアできない課題だった。ボスの情報を集めたが、気絶してい

る間に殺されてしまいました。なんてことになったら笑えない。

「申し訳ないんだが、行動できなくなった俺を壁際まで引きずつても言ってもらいたいんだが、誰かやってくれないか？そこまで重くないとは思うから誰でも出来るとは思うんだが」

さつきまでの真剣な表情から一転、プレイヤー達はほかんとした表情が俺を見つめていた。一瞬間があつたかと思うと、プレイヤーからプレイヤーへ伝染するように笑い始め、さつきまでの張り詰めた空気がウソのように笑いに包まれていた。

いや、確かに我ながら訳の分からないことを言っているという自覚は有るが、情けなくなるからあんまり笑わないでほしいんだが……。

「ハツハツハツハツハ！真面目な顔して何を言い出すのかと思えばそんなことかよ！」

大勢のプレイヤーたちの中で一際大声で笑っていた男が俺の前まで歩いてきた。

「エギル、そこまで笑うことないだろうが。俺にとつたら一番の問題点だぞ」

「ああ悪い悪い。真面目な顔して間の抜けた事を言いやがるから気が抜けてな」

「まったく、こつちは大真面目だっていうのに」

「だがその言葉を聞いて安心した。作戦を聞いた時はどういふつもりかと思つたが、死ぬつもりじゃないつてことが分かつたからな」

エギルはまたいつものようなニヤケツラで俺を一瞥し、右手を上げて宣言した。

「その役、俺がやってやる。ボスの目の前だろうがなんだろうが、抱えて逃げてやるよ」
「……………助かる」

ああ、ここにお前が来ていた時点で、なんとなくそうなる気がしていたよ。エギルだつたら何の心配もない。動かなくなつた俺のアバターを守り抜いてくれるはずだ。

とりあえずここで俺のやるべきことは終わった。情報の共有も、作戦の共有も終わった。作戦に対して大きな批判もこなかつたし、攻略組メンバーも納得してくれたみたいだ。まあ、キリト達には多少批判を受けたが。これはボス戦が終わつてから怒られるとしよう。

未だにざわめき続けているプレイヤーたちを尻目に、俺はヒースクリフに目を向ける。

「ご苦労だつたね」

「こんなことさせるんだつたら、予め言つといてほしかつたですけどね」

「それに関しては申し訳ないが、作戦の内容は作戦参謀から語られるべきだろう?」

「はあ、忘れてたよ。あんたはそういう人だつた」

この人には何度もこういうことをされてきたはずなのにな。闘技場での決闘然り、キリト達の連れ戻し依頼然り、俺はこの人にいいようにされっぱなしな気がするよ。

それともう一つ。この人の信頼のされっぷりが尋常じゃないってことも改めて実感した。俺とヒースクリフの2人でボスと対峙すると発表したときも、ここに居るプレイヤーはみんな、俺の心配しかしていなかった。それだけこの人が死ぬはずがない、この人なら大丈夫だと思われているってことだろう。

ここまでの信頼は逆に危険だ。信頼というよりも心酔に近い。この人がいなくなる、この人に何かをされるなんて考えてやしない。

だから確かめる必要がある。俺の中に渦巻いているこの疑念が本物なのかどうかを。今回この作戦で俺とこの人を前線に置いた本当の理由は、まだ誰にも話していない。ア ルゴにだってこのことは言われなかったんだ。ヒースクリフにもバレていないはずだ。

「それでは諸君。行こうか」

ヒースクリフはそう言うと、マントから透明に透き通った結晶を取り出した。

「コリドー・オープン」

その言葉と同時にその場の時空が歪み、次々とプレイヤーが歪みの中へと進んでいく。覚悟を決め、歪みの中へと進むと、久しぶりに見える門が目の前へ広がった。

「またせたな……………」

それは、偵察の時に見たボス部屋へと続く扉だった。

「先にクレハくんから説明があつたように、前半には私とクレハくんがボスの攻撃パターンを引き出すので、その間に可能な限り情報を頭に叩き込んでほしい。厳しい戦いになるだろうが、諸君の力であれば切り抜けられると信じている。開放の日のために！」

ヒースクリフの掛け声の後に続くように、プレイヤーたちが声を上げる。自分の中に
ある恐怖を振り払うように挙げられたその声には、不安と決意が込められているように
感じた。

待ち構えるように開いているドアに向かい俺達はゆつくりと進む。

攻略組のメンバーは最初の取り決めの通り、出来る限り様々な角度からモーションを見るために円形のボス部屋の壁に沿って、プレイヤーたちが散っていく。

「全員位置についたようだ」

「そんじゃあ、行きますか」

ヒースクリフと2人並び、ゆっくりとボス部屋の中心へ向かって歩いて行く。

「クレハ！」

「ん？」

進んでいく途中で、突然呼び止められる。振り返るとキリトとアスナ、クラインとエギルが並んでこつちを見ていた。

「死ぬなよ」

シンプルで単純な言葉を、キリトからまっすぐ投げられる。まったく、ついさつき自分の最愛の人を人質に取るような発言をしてきた相手に対して言うことかよ。

「当然だ。ボス戦が終わったら、残りのS級食材を使ってコーヒー飲まなきゃいけないからな」

今の俺が言えるまっすぐな言葉で返す。

照れくさく、言ってすぐ振り返ったから俺の言葉を聞いた4人がどんなりアクションをしたのかは分からない。だが、きつと悪い顔はしていないはずだ。

既にボス部屋の中心近くへ向かっているヒースクリフに小走りで追いつき、声を掛ける。

「いよいよ……か」

「まさか君と共闘することになるとはね。昨日も言ったが、実に面白い作戦だ」

「一番成功率の高い作戦を提案させてもらったただけだな。お互い死なずに帰れるといいですね」

「このような状況であっても、君の態度は変わらないね」

「まあ、自然体が一番ってことで」

いつも通りの軽口を叩き合っていたが、ヒースクリフの表情が急にこわばった。俺の言葉に答えることなく、ただまっすぐと前を向いて剣を構えている。

「どうやらおしゃべりはここまでのようだ。構えたまえ、クレハくん」

「……う？」

構えるよう促されたが、俺達の目の前にボスは現れていない。それどころか、ボス部屋のどこにもそんな気配はない。一体何を言って……。

「上よー！」

ボス部屋のスミからアスナの声が響いた。その声をきいて反射的に上を向くと、そこには真つ白の頭蓋骨と真つ白な骨で構成された、まさしくアルゴの情報通りのムカデ型

モンスターがこつちを見ていた。

「スカル・リーパー……」

ボスの頭の上に浮いているカーソルに書かれた名前を俺が呟くと同時に、そいつは俺の目の前へ振ってきた。激しい地響きと土煙を上げて着地したスカル・リーパーは己の体を震わせて、強烈な機械音のような鳴き声を響かせた。

「さあ、行くぞクレハくん。今日は君の久しぶりの晴れ舞台だ」

「……ああ、やってやる」

俺達のボス戦の火蓋が、切って落とされた。

あとは任せた

白骨、と言うよりは銀骨とも言い表したくなるような人骨を模した頭蓋骨。首から繋がった体はアルゴの情報通りムカデのように長く、無数にある脚はボス戦が始まったときから変わらず、それぞれが全く別の生き物のようにうごめき続けている。

異質な見た目の中でも特に目を引く巨大な腕が、俺の目の前で大きく振りかぶられた。

「真上からの攻撃だ！避けたまえ！」

「わかってる！」

ヒースクリフの言葉通り、持ち上げた鎌はそのまままっすぐと俺の方へと落ちてくる。大きく左に距離を取り、真上から振り下ろされた右腕を避けきった瞬間、間髪をいれず左腕からの攻撃が右側から迫る。素早く攻撃の軌道上に刀を乗せ、斜め上方向へ攻撃が逸れるよう受け流し、バックステップで大きく距離を取った。

「これだけの巨体で連続攻撃タイプってのはどう考えても反則だろ。ゲームバランスどうなってるんだ」

吐き捨てるように不満を漏らしながら追撃を警戒したが、素早く俺の前に割り込んだ

ヒースクリフによってスカルリーパーの攻撃が防がれる。

「それに加えて攻撃範囲も広い。やはりタンク隊が大鎌を防ぎ続けるのは厳しいだろう」

「二通りの攻撃パターンを引つ張り出したとは思うが、どれもモーションから攻撃に移るまでが早い。やるなら今の俺達みたいに少数精鋭で大鎌をひきつけたほうが良いな」

俺達は敵の攻撃が終わった後のインターバルを利用して情報交換を行いながら、今後どう動くべきかの作戦会議を行っている。自分が死なないことはモチロンだが、俺達がやっているのはあくまで情報収集だ。俺の集中力が保っている間に、こいつへの対抗策を導き出す必要もある。

ボスの攻撃を避けつつ情報共有をして、なおかつその対抗策まで考えながら動き続ける。言うのは簡単だが実践して見るとかなりきつい。

タゲが移動したのか、スカル・リーパーはヒースクリフめがけて攻撃を仕掛けている。薙ぎ払うような一撃を巨大な盾で防ぎ、その後に関く追いつ打ちもすべてその盾に遮られている。ヒースクリフが攻撃の波を防ぎ最後の二撃で繰り出された鎌を真上にパリィした瞬間、俺は刀を握りしめ走り出す。

「スイッチー！」

ヒースクリフの後ろから勢いよく飛び出し、がら空きになった喉元にめがけて、体重

を乗せて刀を突き刺す。わずかに怯んだスキに距離を取り、もう一度ヒースクリフの後ろへと体を隠す。5本に伸びたボスのHPバーを確認すると、僅かではあるが減少しているのが見て取れる。

「STRポーションでブレストしてるとはいえ、AGI型の俺の攻撃でも少しは削れる。もともとからVITが低めに設定されているか、正面からの攻撃は通りやすいかのどつちかだな」

「おそらく後者だ。この巨体ならば攻撃を当てること事態は難しくない。そんな相手がVITが低めに設定されているとは考えにくい」

「となると、大鎌を引きつける役は火力が高めで、回避型の奴が適任ってことか……」

思わずボス部屋の端で待機しているプレイヤーへ目を向ける。距離のせいではよくは見えないが、真つ黒の装備に身を包んだプレイヤーと一瞬だけ目が合ったような気がした。

「結局、あいつが頼りってわけか。情けない話だな」

「その彼の生存率をあげるための作戦だろう。現にこのわずかな時間でかなりの攻撃パターンを引つ張り出すことができた」

話を続けつつも、ヒースクリフはスカルリーパーの鎌を防ぎ続けている。

ヒースクリフの言うとおり、スカルリーパーの攻撃パターンはかなり引つ張り出すこ

とができた。初動のモーションさえ分かれば、スイッチで反撃を入れることができるくらいには動きをパターン化できている。俺の作戦は思っていた以上の成果をあげているが、そんなに楽観視できる状態でもない。

「ペースは早い、その分俺の消耗が激しい。集中してるときに脳を並列で使うのは正直しんどい」

もともと1つのことを考え始めるとそれに没頭して周りが見えなくなるタイプだ。そういえばアルゴにも昔指摘されたような気がする。

『クー坊は典型的な直列思考タイプだな。ひとつのことに集中するとそれ以外見えなくなるし、周りの声も届かない。クー坊の集中力は大きな武器かもしれないけど、同時に大きな弱点だな』

アルゴの言うとおり、俺は複数のことを同時に考えている時は、集中力を維持することができない。複数の敵を同時に相手にすることはむしろ得意だし、それが出来るなら問題ないだろうと思っていたがそうじゃない。複数の敵を相手取っている時は、あくまで戦闘中の選択肢を瞬時に選んでいるだけで、別々の行動を同時に行っているわけでもない、別のことを考えながら戦っているわけでもない。

そう考えると、ヒースクリフとの戦闘の時が今の状況に一番近かったのかもしれない。初めに立てた作戦が失敗したあとは、戦いながら作戦を立てて策を巡らせていた。

よくよく考えるとあの時も限界はいつもより早く来たような気がする。

ヒースクリフとの戦闘デュエルとスカルリーパーとの戦闘で違うのは2つ。

1つは戦闘スタイルの違いだ。ヒースクリフは基本的に積極的に攻めてくるタイプじゃない。相手の攻撃を防ぎ、カウンターを狙うタイプの戦闘スタイルは俺に近い。手が仕掛けてこないなら、その隙に策を考えて出し抜くことを狙うタイプ。そんな戦闘スタイルの2人の戦いだっただからこそ剣を交えているインターバルは意外と多く、戦闘と作戦立てを切り離して戦えた。

だがスカルリーパーは違う。

ボスモンスター特有の巨体から繰り出される、異常なまでの攻撃速度で攻め立ててくる。今みたいにラッシュの合間に一言二言交わすのがやつとなくらいだ。戦闘と作戦立てを切り離してすすめるなんて土台無理な話だ。

そして2つ目。これが一番大きな理由。

負けたら死ぬ。

たったひとつのシンプルな理由だが、この事実以上の精神的な負荷はない。相手の火力が分からないからダメージは喰らえない。1発のダメージでスタンでもしたらそれこそ終わりだ。リスクを考えると回避に妥協は許されない。俺はヒースクリフみたいに正面切って防ぎ切れるようなユニークスキルなんて持ってないんだ。

受け流す。避ける。隙を探す。ただこれを完璧にこなし続ける。

その中で手に入れた情報を組み合わせて、ここに居る全員が生き残れるように、最小のリスクの隊列と作戦を導き出す。

ああ、作戦立ててくらは予めアスナ辺りに任せておくんだった。

実際に戦っている俺の方が集められる情報が多いから、自分で立てたほうが効率がいなんて考えていた昨日の自分をぶん殴ってやりたい。

無駄なことを考えている間にもスカルリーパーのラッシュは止まない。

集中力を途絶えさせるな。脳を並列に使い続ける。

これは、お前が望んで参加したボス戦なんだ。最低限

の仕事ぐらいこなしてやらないと、さつきから真剣な表情でこつちを見ているあいつらと、送り出してくれた2人に顔向けができないだろ！

腕が重い。正面を見ているはずなのに視点が定まらなくなってきた。

ヒースクリフのフォローでなんとかごまかしてはいるが、ここまで無傷でさばききれているのが奇跡なくらい、俺の動きは鈍くなっている。これまでの情報収集で攻撃パターンが分かかってなかったらもう5回は死んでるくらいだ。

「クレハ君、戦闘開始から30分を超えた。当初の予定時間だ」

「その言葉を待ってた。こっちはもういつぶつ倒れてもおかしくないくらいだ。こいつの全攻撃パターンも引き出したし、それぞれ10回以上は見せられたはずだ……あつぶねえ！」

迫る大鎌を紙一重で回避して、体制を立て直す。敵に大きなスキが生まれているのは明らかだが、始めみたいにこれから追撃を仕掛けられるほど余裕はない。

「これだけ情報が集まれば攻略組メンバーが遅れを取ることはない。死者0名での突破

も夢ではないだろう」

「そりゃあ無茶したかいが有った。問題はHPが半分を切ったときの攻撃パターンの変更だ。流石にそこまでの情報収集なんてできないからな」

「そこは攻略組の腕を信用したまえ。パターン変更時に大きく隊列が崩されていなければ、彼らなら無事にこなしてくれるはずだ」

激しい頭痛に耐えつつ、右の鎌を抑え続けるヒースクリフとの情報共有を交わす。ヒースクリフの言ったとおり、ここまで攻略を進めてきた精鋭達だ。攻撃パターンの変更改きても素早く対応してくれるはずだ。

俺の限界は耐えてなんとかなるものでもないし、かろうじてでもスカルリーパーの攻撃をさばけるうちに撤退した方がいい。

くそ、頭が痛い。多少予想してはいたが、前に気絶するまで戦った時と比べて症状が悪化している気がする。肉体的な痛みを感じないSAOなのに、脳が感じている違和感と不快感は頭痛のような感覚で伝わってくる。ヒースクリフからの提案が後数分遅かったら、俺からギブアップ宣言していたところだ。

「俺は一旦引く。ぶっ倒れるまでやるより、多少動けるうちに引いたほうが、足手まといにならなくていいだろうし」

「了解した。集めた情報を元に組み立てた作戦を全体に共有して貰いたい。私は、キリ

ト君とアスナ君とともに、正面から大鎌の処理で良かったかな？」

「……大正解。あなたのやることは変わらず、正面でこいつの動きを抑えて欲しい。俺がやってやったことをキリトとアスナのペアが引き継いで、隙ができたなら攻めていく。長期戦になるがそれが一番安全だ」

一緒に戦っていたとは言え、俺がヒースクリフに任せようとしていたポジションをしつかり理解してくる辺り、流石攻略組トッププレイヤーだ。

何はともあれこれで75層の攻略は大丈夫だろう。俺に出来るのはここまでだ。

合図を出してエギルを呼んで、エギル経由で全体に今後の隊列と戦い方を伝えよう。よくよく考えると、俺が引くタイミングが一番危ないな。どうやってもヒースクリフ一人でスカルリパーを抑えておかないといけないし、俺とエギルは隙だらけだ。まあ、そのへんもヒースクリフならなんとかするだろう。

あわよくばこの作戦中にあれの確認もして、全部終わらせてやろうかとも思っていたんだが、そこまで求められるほど俺に余裕がなかった。スカルリパーが手ごわすぎたってことと、俺が自分の直列思考っぷりを甘く見ていたことが敗因だ。

走り寄ってくるエギルがちらつと視界に移ると、思わず安心して溜息がこぼれる。

ヒースクリフがスカルリパーのタゲを取っている間に大鎌の射程を抜け、後ろに回り込むようにして前線から離脱する。エギルの後ろには戦闘準備を万全にした攻略組

メンバーも走り寄ってきている。このタイミングなら俺と入れ替わりでヒースクリフの援護が出来るはずだ。最初の数分間は俺の考えた隊列どおりでなくても全く問題ないだろう。敵の攻撃パターンは把握しているはずだしな。

何にせよ、ひとまず俺の仕事は終わった。あとはエギルに作戦を伝えて……………。

「避けろクレハ！」

普段めつたに聞くことのないエギルの焦りを含んだ大声が聞こえた瞬間、左の脇腹に強い衝撃が来たかと思うと、俺の体は真後ろへ吹き飛んだ。

「ガハッ……………！」

唐突に訪れたノックバックの不快感と衝撃で、俺はろくに受け身も取れず地面に叩きつけられた。

「ぐ、クソ……」

HPゲージは確認できていないが、どうやら即死は免れたらしい。

不快感に耐えつつ体を起こしながら、俺はなんとか体を動かそうと藻掻くがうまく体が動かない。腕に力を入れてなんとか上半身だけは起こすことができたが、立つて回避行動を取れるほど体制を整えることができていない。

ヤバイヤバイヤバイ。

ただでさえ頭痛でフラフラだったのに、不意打ちで食らった衝撃とノックバックのせいで体がうまく動かない。

そもそもなんであんな不意打ちを食らったんだ!?! 離脱するとき大鎌は確かにヒースクリフに向けられていた。あんな状態で俺に攻撃を出せるようなパターンなんて無かったはず……

そう思った瞬間、真つ白な骨が振りかぶられるのが視界に写った。それは今まで必死になつて避け続けていた大鎌ではなく、完全の意識の外に置いてあつたもの。いや、正面からスカルリーパーに向かっていたなら全く意識する必要の無いものだった。

「尻尾も攻撃として使ってくるのかよ……!」

高く振り上げられた尻尾は、今までの大鎌と同じように容赦なく振り下ろされ、一直線に俺めがけて振り下ろされる。

いつも通り、スローモーションで流れていく視界。右手に持った刀と左手に持った鞘。攻撃速度事態はそんなに早いわけではない。だが、知らないモーションと攻撃パターン。そして、自由の効かない体。たとえこの一撃を回避しても必ず追撃が来る。

走り寄ってくるエギルも、攻略組も間に合わない。むしろ下手に割り込むと俺と同じ目に合いかねない。

この状況で俺が生き延びるために出来ることは、
……………もう何もない。

離脱を始めた時以上の激しい頭痛とめまい。未だに残るノックバックの不快感。それらを抱えたままの俺はまっすぐとボスを見据えて、

思わず笑みを浮かべる。

迫りくる鋭い尾と俺の間に割って入ったのは赤い鎧と白い盾。無駄のない盾さばきで尾の攻撃を弾き、左から来る大鎌の追撃も素早い反応で遮られ、俺まで届かない。敵をまつすぐと見据えながらすべての攻撃を捌き切ったヒースクリフは、そのままの姿勢で声を掛けてきた。

「無事かね？クレハ君」

「あなたの……おかげでなんとか。さすが団長……さん」

「ふむ。この状況で軽口が叩けるのなら問題ない。当初の予定通り、一度引きたまえ」

遅れて到着した攻略組メンバーがヒースクリフの後ろにずらりと並び、スカルリーパーに対峙する。

「全員回避優先！クレハ君離脱のための時間をかせぐ！」

ヒースクリフの号令に攻略組が一斉に動き始める。戦闘態勢に入っただけはいるが、攻撃をしかけようとするわけではなく、ただ時間をかせぐことに特化した動きだ。

さすが攻略組の精鋭達。ついさつき死にかけたプレイヤーを見たにも関わらず、焦ることなくトップの指示通りの行動に入っている。

「おいクレハ！ 無事か!？」

「碎け散つてないん……だから大丈夫だろ。けど立ち上がれない。……肩貸してくれ」

「そのために来たんだよ。ボスの対処は一旦他のメンバーに任せて、俺達はさっさと引

くぞ」

走り寄ってきたエギルに担がれながら、俺はボス部屋の端へと移動する。何だかんだ言つて時間が惜しい。移動しながらでもいいからエギルに作戦を伝えよう。

「……エギル、これから始めるボス戦での作戦だ。お前経由で全体に展開してくれ」

「そうは言つても、お前フラツフラじゃねえか。喋つて大丈夫なのか？」

「むしろ喋れるうちに……伝えとかないと、俺のやつてたことが無駄に……なるだろうが」「それもそうだな。分かった、責任持つて伝えてやるから話してくれ」

脳の奥に響く頭痛に耐えつつ、正確かつ簡単に作戦を伝えられるよう頭を巡らせる。

「まず……全体を3つのチームに分ける。正面から大鎌を引きつけてカウンターを狙うA隊と、……サイドから攻撃するB隊とC隊だ」

「サイドから？」

「ああ、尾の攻撃は俺が思いつきり不意打ちを……食らつても即死してないレベルの……火力だ。普通に防御さえできれば十分戦える。……普段のボス戦と同じ要領だ」

事前の情報収集で確認できなかった、敵の火力を確認できたのは、不幸中の幸いだったのかもしれない。レベルの足りていない俺が即死しないレベルの攻撃力なら、攻略組ならきちんと防御ができれば問題はない。尾に関しては通常のフロアボスと同じ程度の火力つてことだ。

もつとも、初めは尾の攻撃なんて想定していなかったから、大鎌を引きつける隊のサポートも一緒にこなしてもらおうつもりだったんだが、尾に攻撃判定が付いているとなると話は別だ。難易度が一気に跳ね上がる。

「問題は尾の攻撃パターンを引き出せていないつてところだ。……尾があんな動きするなんてあの瞬間まで知らなかったんだからな」

「あん？ さつきみたいな尾と鎌を合わせた攻撃パターンはともかく、尾の動きだけならさつきさん見てたぞ？」

「……………は？」

エギルから予想外の事を言われて思わず間の抜けた声が漏れてしまった。

「ああそうか、クレハは大鎌の相手をしていたから視界に入ってたのか。なるほど、お前が不用意に尾の射程に入った理由がやっとわかったよ」

「……………どういふ……………ことだ？」

「アイツの尾だが、攻撃モーションに入るたびにブンブン振り回してたんだよ。あれに当たるとあぶねえだろうなってことで、俺達は尾の動きも確認し続けてたんだよ」

「……………なるほど、流石攻略組様だ」

俺は大鎌に必死でそこまで確認できてなかったが、周りからボスを観察していたメンバーたちにはしつかり尾の危険性を理解していたってことか。

「それなら……問題ない。さつき言ったとおり、3つの隊にわかれて攻撃を続けてくれ。……A隊はキリト、アスナ、ヒースクリフの3人。B隊とC隊はお前の……判断で割り振ってくれ」

「3人!? おいおい大丈夫なのか?」

「あの大鎌は……少数の方が回避しやすい。流れ弾なんかで……不意打ち食らったら、即死してもおかしくない。……クラインあたりならあのメンバーにも割り込めるだろうが、アイツには……B隊の指揮を任せたいからな。ついでに言うと……C隊を指揮するのはエギルだ」

S A O 内で最強クラスの3人を集めたA隊がヒットアンドアウェイで大鎌を引きつけ、攻略組の精鋭で作ったB隊とC隊でサイドから攻撃。シンプルだがこれが一番効率がいい。

攻撃モーションが分かってなかったらかなり危険な作戦だが、モーションが分かっているなら話は別だ。殆どの動きをルーチン化出来る上に、防御よりも回避を成功させやすい。

「了解、隊列は理解した。他になにか伝えることは?」

「……A隊に関しては回避を最優先だ。大鎌の火力は確認してないが……相手は75層のボスなのに……プレス攻撃なしのハンデ付き。十中八九あの鎌の火力がバカ高いは

「ずだ」

「B隊とC隊は？」

「そつちは防衛優先……尾の火力なら下手に避けて食らうより、しつかり防いだほうが良い。B隊とC隊はメンバーも多いから、避けるとお互いを邪魔しかねない」

色々と頭を巡らせたが、結局この方法が一番安定度が高いはずだ。この方法なら時間がかかっても死傷者0で倒すことも夢じゃない。大鎌の対処だけが少し不安だが、ヒースクリフは事前に予習済みなうえに、キリトの反応速度と火力にアスナのAGIが加われば、完全に俺の上位互換と言っている。

サイドからの攻撃隊も、メンバーそれぞれが俺以上のレベルと装備を整えている。尾の攻撃で消耗するとしても、命の危険が有るほどじゃない。

作戦を伝え終わるとほぼ同時に、ボス部屋の壁際まで到着した。俺はエギルから降り、壁際に座り込むようにして倒れる。

「よう、おつかれさん。後は俺達に任せろ。最初はボスを前にして少し怯えていた攻略組メンバーも、お前がガンガン攻撃避けるのを見て、大分強気になっていた。作戦立てもそうだが、そつちの効果も絶大だぜ」

「そりゃあ………良かった。」

命かけて体張ったかいがあつたつてもんだ。

「それじゃ、俺は作戦を伝えてくる。お前はここでゆっくり休んでな。多少居眠りしても誰も攻めやしねえよ」

「俺がその気じゃなくても、勝手に……眠りこけることになるだろうな。もう視界の殆どが真っ暗だ」

だが、まだここで終わりじゃない。

「あと最後に……1個だけ伝えなきゃならないことが有る」

「ん？まだ何かあるのか？」

さつき偶然確認できたことがあるが、この場でそれを公開して良いのかは分からない。このタイミングで不用意に公開してしまったら、俺が眠っている間に、大惨事になってしまう可能性もある。

だから、後の判断はアイツに任せる。

闘技場でのことを知っているアイツなら、俺と同じ答えに行き着くかもしれない。

「ボス戦が終わったあとでいい。キリトにだけ伝えてくれ……『アイツは初めから知っていた』って」

「なんだそりゃ？ボス戦が終わった後ってことは攻略とは関係ないことか？」

エギルは俺が何を言っているのかわからないらしい。

まあ、当然か。

「わからないならいいんだよ……特に重要な事じゃない」

「まあ、お前がそういうんなら分かったよ」

「……頼んだ」

「あ、あとそうだ。今度は俺から1個だけ言わせてくれ」

そう言いながら、エギルはポーシヨンの入った小瓶を俺に握らせる。

「お前のHPを見てるところがちがひやひやするからな。せめてそれ飲んでから寝てくれ」

「HP?」

目線を左下に向けてHPバーを確認すると、俺のHPは1割も残っていないなかった。

バーの色は真っ赤に染まり、危険を伝えるように僅かに点滅している。

「おいおい……まじかよ」

「やっぱり見てなかったか。特に焦る様子もなく作戦を話したからもしかしたらと思っただが」

2撃目を食らったら死ぬとは思っていたが、まさかここまで削られているとは思わなかった。尾の攻撃でふつとばされたって事実と、その後のことで頭が一杯で自分のことなんて全く眼中になかった。

「助かったよ。……ああ、俺はもう限界だ。後はお前たちに任せるよ……」

「任せとけよ。目が覚めたら76層だからな」

斧を担いでボスに走っていくエギルを見ながら、俺はポジションを飲み干す。じわじわと回復しているHPを確認しつつ、俺の意識がゆっくりと落ちていくのを感じる。

俺のやるべきことはひとまず終わりだ。ボスの攻撃パターンを暴いて、ボス撃破のための作戦立てもできた。ついでにやろうと思つた確認作業も最後の最後でやれた。

後のボス戦は攻略組メンバーに任せよう。

後の判断はキリトに任せよう。

目が覚めた時は76層。

そうなるかどうかは、キリト次第だ。

劍影のクレハ

一面に広がる黄昏色の空。

まばらに広がる雲を照らす夕日の光が辺り一面を照らしている。

俺の周りには何も無い。今立っている地面すらも透明で、雲よりも上にいるのか下にいるのかも分からない。全く見覚えもない。

気を失い、目を覚ましたと思っただらこの光景が広がっていた。

まだわずかに痛む頭を更に痛めるような状況に、俺は頭を抱えるしかない。

「……………だっ、だっ、だっ」

・ ・ ・

ともかく、今は状況を整理することにしよう。

ヒースクリフと共闘して75層のボスモンスタアの攻撃パターンを引き出すことは成功したはずだ。俺たちの集めた情報は確かにエギルに伝えた。戦い方まで細かく話したし、そのあとポーションを飲んで気を失ったところまではつきり覚えていた。

ただそのあと何が起こったのかはわからない。十中八九、今の状態を引き起こしたのは俺が気を失った後に起こったことが原因だ。

考えうるパターンとしては3つ。

1つ目は無事にボス攻略が完了し、今俺がいるこの場所こそが76層であるということ。それなら俺に見覚えがないことに説明がつく。……が、現実的に考えてそれはないだろう。これだけ何も無い空間が広がっていた階層なんて今までなかったし、それ以前に俺以外のプレイヤーが1人もいない。76層に上がったつてのにこれだけ人がいないってのはおかしいだろう。

「つてことこの線はなしだな」

脳内で整理したことを小さくつぶやき、次の考えに入る。

2つ目は……正直考えたくはないが、ボス攻略中に俺がボスモンスターに殺されてしまったパターン。ボス部屋の端っこまで連れていかれたとはいえ、何かのはずみで攻撃が当たった可能性は0じゃないだろう。だとすれば死後の世界的なものが今俺がいる場所つてことになる。場所も雲の上っぽいし、雰囲気もイメージ通りだ。けど……

「もしそうなら、なんでこの服装のままなんだろうな」

この線もあり得ないだろう。というのも、俺の今の服装がボス部屋で戦っていた時と全く同じだったからだ。紺色の和服を戦闘用にアレンジした布製の装備をしているうえに、腰には愛^{ド・ライ}刀^{ド・ライフ}を刺したまま。現実の俺が死んだっていうのに、この服装である世行きつてのはさすがにないだろう。

そうなつてくるともう最後のパターンか。

いや、正直初めから分かっていた。唯一ある雲以外のものが俺の予想を裏付けてくれている。

静かな音を立てながら崩れる、あの鉄の城が。

「どうやら、目が覚めたようだね。クレハ君」

ふいに後ろから声をかけられた。長い間というわけではないが、ここ最近は頻繁に聞

いていた男の声だ。振り返ると、そこには白い鎧を身にまとった、銀髪の男が立っていた。

「ヒースクリフ……。ちようどいい、今一体どういう状況なんです？」

「ふつ、君はまだ私をそう呼んでくれるのか。本当は、すべてわかつているんだろう？」

ヒースクリフは自嘲的に、それでどこか寂しそうに静かに笑った。

「まあ、大体の予想はついてるけど、俺がわかるのは結果だけだ。俺が気絶した後何があつたのかは完全に俺の推測でしかない」

「結果がわかつているだけでも十分だと思いがね」

そういいながら、ヒースクリフはまた静かに笑う。

「君とこう話していると、初めて君の店を訪ねた時を思い出すよ。どうだろう、あの時のように、状況を知る私に君の推測を話してもらい、答え合わせをするというのは」

「……また面倒なことを言い出しますね。まあいいでしょう」

ヒースクリフは俺の横に立ち、崩れていく城を見つめながら話を進める。

「じゃあまずは、君がわかつているという結果を先に聞かせてもらいたい」

俺も同じように城を眺め、その間に答えることにした。

「あそこで崩れている城がすべて物語っている。役目を終えたアインクラッドが崩れているってことは、ゲームが終わったってことでしょうか？」

「…真つ先にその答えを導き出せる辺りは、流石というべきだろうね」

別に、真つ先つてわけでもないんだけどな。ただありえそうな状況を考えていって、消去法で導きただけだ。それに、そうなるような布石を俺が打っておいたつてことも関係してる。まさかここまででの結果になるなんて思つてもみなかったけどな。

「それで、正解なんですか？」

「もちろん正解だ。君の言う通り、SAOはクリアされた」

「……やっぱりそうか」

もちろん予想していたことだ。わかっていた。

わかってはいたが、なぜだろう。喜ぶべきことのはずなのに、寂しいと思つている自分がいるのは。

「では次の問だ。75層という中途半端な階層でゲームをクリアしたのはなぜだと思う？」

「そりゃあ、ラスボスが倒されたからでしょうね」

俺はあつさりと言つてのける。

「ほう、それはつまり。茅場晶彦が最初に提示した100層という最終到達地点自体がブラフで、75層のボスモンスターこそがラスボスだった、ということかね？」

「そんなわけないでしょう。確かにスカルリーパーは強敵だったけど、モーシオンすべ

て理解した攻略組メンバーが全員でかかれば倒すのが難しい相手じゃない。そんなモンスターがこれだけのゲームのラスボスに設定されるはずがない。加えて言うと、茅場晶彦が言ったことも真実のはずだ。わざわざそんな無意味なブラフをプレイヤーに張る必要がない」

あの状態でボタンタッチしたボス攻略が失敗するはずがない。攻略組メンバーは必ずあのボスモンスターを撃破したはずだ。今までのボス攻略で1, 2を争う強敵にはなったかもしれないが、あのモンスターがSAOのラスボスを務めるには及ばないと思う。SAOのラスボスともなれば、もつと理不尽で絶望を与えるようなモンスターになるはずだ。

「では君は、75層で本来ならば100層に現れるはずのボスモンスターを撃破したため、ゲームがクリアされたと言いたいのかね」

「ええ、もちろん」

「ゲームにバグが発生し、何かの間違いでラスボスが現れたと?」

「いいや、このゲームにバグなんて発生しないでしょう。ラスボスなら、あの部屋にずーっといましたよ」

ヒースクリフはさつきとは違い、満足そうに笑うと、俺に最後の問を投げかけた。

「では問おう。そのラスボスとは一体どこにいたのかな？」

今までとは違い核心的な問だ。

思えば、この人は俺の口からこの答えを聞き出すためにこんな面倒な問答を始めたのかも知れない。ただまあ、この人の気持ちもわからないでもない。これでおそらく、この世界は本当に最後のだから……。

俺はまっすぐと腕を上げ、横に立っている男を指さし、その間に答えた。

「ヒースクリフ、あなたがこのゲームのラスボスだ。いや茅場晶彦って呼んだほうがいいか？」

俺の答えを聞いたヒースクリフは、さして驚くこともなく、ゆつくりと俺のほうを見た。今まで何度も見たと、実に満足そうな笑みを浮かべながら、ヒースクリフは答えた。

「正解だ、クレハ君。私が、ヒースクリフこそが茅場晶彦であり、このゲームの最終ボスだ」

俺が気絶した後、ボス攻略は順調に進行した。懸念事項だったHPによるボスモンスターのモーション変更でも大きな被害はなく、75層のボス攻略は死者0で終了した。攻略組メンバーは皆ボス部屋に倒れこみ、荒れた呼吸を整えながらもお互いの健闘を称えあっている。

ヒースクリフは、そのプレイヤーたちを見ていた。自分の作り上げた世界で生き、戦う戦士達に、暖かく、慈しむような視線で。

その瞬間、背後から超速で迫るプレイヤーを察知した。ライトエフェクトを纏った片手剣

を突き出しながら突っ込んできたその攻撃を防ぐことはできず。剣は盾を交わして体に突き刺さる……ことはなかった。

自らに設定した設定により、ヒースクリフのHPバーはイエローゾーンに落ちること

はない。剣は見えない壁に阻まれ空中で静止し、Immortal Objectの表示を残した。

システムの不死。それがただのプレイヤーに付与されることはない。されるとすれば、それはゲームマスターのPC以外にありえない。だがSAOにゲームマスターは存在しない。存在するのはゲームの絶対的支配者である茅場晶彦のみ。ということは、この男こそが……。

そのことにほかの攻略組メンバーが気付かないはずがない。

ボス部屋は混沌とした。今まで自分たちが慕い、忠誠を誓っていたプレイヤーが今まさに自分たちを追い込んでいるゲームマスターだったのだから。茅場は全プレイヤーを麻痺状態にして、自らの正体を看破したプレイヤーにチャンスを与えることにした。

そのプレイヤーが自分との戦いに勝利すればゲームをクリアとすると。

黒の剣士キリトは、決闘を受け入れた。

「そのあとのことは分かるだろう。キリト君との決闘に敗北し、このゲームに残ったすべてのプレイヤーを開放することとなった」

「……………」

ヒースクリフとの問答が終わった後、実際に起こったことをヒースクリフに説明してもらったわけなんだが、なんともまあめちやくちやな話だ。

「半信半疑な状態で、よく攻略組のトッププレイヤーに攻撃をしかけられたなあいつ……………」

もし間違ってたらどうするつもりだったんだよあいつ。間違つて殺しましたーじゃすまないぞ。

「おや？キリト君はクレハ君から受け取ったメッセージで確信を得たと言っていたが？」

「あー……まあ確かに、メッセージは残しましたが、まさかここまでのことをしでかすとは思わないでしょ」

「参考までに聞かせてもらいたい。君が私の正体に気が付いた理由と、キリト君へ残したメッセージを」

ヒースクリフは純粋に疑問に感じているらしい。俺がいつ気が付いたのか、そしてなぜそれを確信することができたのか。アルゴにしか話してなかったが、まあちようどいい機会だ、説明しておこうか。

「まず最初に疑問に思ったのは闘技場でやった決闘。キリトとの戦いでの最後、あなたは流石に早すぎだ」

「ふむ、やはりそこか。とっさのことで思わずシステムのオーバーアシストを使ってしまった。しかし戦っていたキリト君ならともかく、よく気が付いたものだ」

「集中してみたら何かがおかしいってことだけは分かりましたよ」

まあ、集中してみたのは完全に偶然なんだが、そこは伏せておこう。

「だが、それだけでは私を茅場晶彦だと見抜くには弱いだらう」

「ああ、そこからアルゴと情報を集め始めたつてのはあるが、もちろんそれ以外にも理由はある」

「聞かせてもらおうか」

ヒースクリフは本腰を入れて俺から話を聞き出すらしい。これで最後だし、俺も自分の中の突っかかりを消す最後のチャンスだ。のっかっておこう。

「あなたはこの世界に対しての知識が豊富すぎだ。刀を装備しているわけでもないのに

ソードスキルを把握していたり」

「……なるほど、それも決闘の時のことか」

この人は刀スキルに突きのソードスキルが存在しないことまで把握していた。敵モンスターが使ってくる場合もあるが、刀スキルなんてマイナーなスキルの攻撃パターンを使い手以外が知っているなんてそうそうない。調べたところ、この人が刀を使っていたなんて情報なかったしな。

「まあそれ以外にもいろいろあるが、最終的に確信を得たのはボス攻略の時」

「ボス攻略……というと、つい先ほどのスカルリーパー戦のことかね？」

「その通り。俺は始めからこのボス戦であなたに対する疑念を確信に変えることを考えていた」

どれだけ調べても確信を得られるような情報は一切存在しなかった。情報を扱うスペシャリストであるアルゴと協力して調べたにもかかわらずだ。そうなってくると、あとはもう本人がボ口を出すのを待つしかない。となれば、狙うのは多少なり余裕のなくなる戦闘中だ。

「あのボス戦で俺はあなたのことも観察していた。絶対に自分が死なないような細工はしているはずだと思っていたから、そんなそぶりを見せないかどうかを逐一かがつていたって訳」

まあそのせいでいつも以上に早く限界が来たけどな。

「あの切迫した状態でそこまでやってのけるとは恐れ入る。……だが、先ほどのボス戦で私はそんな失態をした覚えはないのだがね」

「いいや、あなたは失敗した。大失敗だ。といつても、俺以外は絶対に気がつかないような失敗ですけどね」

「それは実に興味深い内容だ」

「これに気づけるのは俺だけだ。この人を観察して、この人と戦ったことのある俺だからこそ気づける失敗。」

「俺がスカルリーパーに吹き飛ばされて倒れているとき、あなたはスカルリーパーの攻撃を全て防ぎきった。寸分の狂いもなく、敵をまつすぐ見据えて完璧にだ」

「……確かに防いだ。だがそれは君と攻撃モーションを暴いたあとの話だろう?」

「ああ、確かに暴きましたね。正面の大鎌から始まる連続攻撃に関しては」
「なるほど」

俺はスカルリーパーの攻撃をかわすことができずに大ダメージを負った。それは攻撃が尻尾から繰り出されるものだったからだ。そもそも俺はスカルリーパーの攻撃パターンに尻尾攻撃があるなんて知らなかったし、一緒に戦っているヒースクリフも戦闘中にそんなことは一言も話していなかった。

「しかし、私はキリト君やクレハ君との決闘の際も攻撃を防ぎきっている。見たことのないモーションでも防ぎきれないという保証はないのではないかな？」

「あー違う違う。問題なのはただ防ぎきったってことじゃなく、敵をまっすぐ見据えてつてところですよ」

「…それに一体なんの問題がある？」

大有りだ。こと、俺とこの人の間じやあ特に。

「決闘で俺が狙った癖。あなたはとつきに盾を出して防ぐとき、必ず盾の後ろに顔を隠す。あれだけの連撃を受けているのに、あなたは敵をまっすぐ見据えて防ぎきった。そんなの、攻撃モーションを最初から知っていたっていつてるようなものだ」

ホントに、偶然だったとはいえ最後の最後にボロを出してくれて助かった。まあボロというにはあまりにもわずかで、俺にしか伝わらないようなものだったけどな。

「それは確かに、大失敗だな。……全く恐れ入ったよ、こうしてこの世界が終わるところまで含めて、君の作戦だったとはね」

「いやいや、まさかあなたの正体を看破しただけでこんな結果になるなんて思わないでしょう。この結果を引き起こしたのは他でもないキリトだ。俺はキリトに、『アイツは始めから知っていた』ってメッセージを残しただけ」

まったく、本当になんてことをしでかしたんだあいつは。あいつにメッセージを残し

たのは、あの場でヒースクリフの次に発言力があるやつだと思ったからだ。あいつがヒースクリフの正体に気がついたなら、攻略組の前でヒースクリフを問い詰めるなりして交渉のテーブルに引つ張ることも可能かもしれない位に考えていたのに、まさか決闘してゲームクリアするところまでいくなんて考えないだろう。

「本当に、君は素晴らしいプレイヤーだったよ」

「なにをいきなり」

「君は私の作りたかった世界を存分に体現して見せた。SAOに生きるプレイヤー達の日常の1つとして万屋を営み、ソードアート・オンライン 剣の芸術の名に恥じない戦いで人々を魅了して見せた」

「……」

ヒースクリフは本当に、本当に心から満足した表情をしていた。

「あと数分でこの世界は終わる。その前に1つクレハ君に依頼をしたい」

「依頼？」

突然なにを言い出すんだと思ったが、俺の思考はヒースクリフに剣の切っ先を向けられたことで中断された。

「SAOのラスボスとしての私の役目は終わった。ここからは私個人の我儘であり要望だ。『剣影のクレハ』、最後に手合わせ願いたい」

「……なるほど、そういうことか」

前の決闘の時とは違い、まっすぐと本心をぶつけてくるヒースクリフに対して、俺にも思うところがあった。

まっすぐと向けられるヒースクリフの視線に答えるように俺は顔を上げる。

「わかった。その依頼、万屋秋風が賜った。こんな状況だが、しっかり報酬は頂くからそのつもりで」

刀を右手に、鞘を左手に構えて俺は答える。

「ふっ、承知した。私に叶えられることであれば何でも答えよう」

S A O が終わり始めているためか、決闘申請は来ない。これはヒースクリフの言うとおり、本当にただの手合わせなのだろう。

「決闘方法は前回と同じ。攻撃がクリーンヒットした時点で終了だ」

「了解。悪いが気絶したばかりなもんでね、短期決戦で決めさせてもらいますよ」

「ほう？前回の戦いでは私の防衛を破れなかったはずだが？」

勝ち誇ったような笑みを浮かべてそういうヒースクリフに対し、俺も負けじと言ってやる。

「あの時は観客が沢山いたんでね、あえて使わなかった奥の手があるんですよ」

リズからもらったA G I ブーストのポーションを飲みながら俺は言う。決闘でポー

シヨンを使うのはどうなんだと思わなくもないが、レベル差つてもんが有る。ヒースクリフも文句を言うそぶりもないし、許してくれているようだ。

「なるほど、ではその奥の手とやらがどんなものなのか、見せてもらおうか」

おしやべりは終わりだと言わんばかりに、お互いに剣と視線を相手に向け、前屈みとなつて体制を整える。

そしてどちらからとも言えず走りだし、

万屋秋風、最後の依頼が始まった。

ヒースクリフに向かつて走りながら、俺は高速で思考をまとめ続ける。

奥の手が有ると言ってもそんなに簡単に成功するようなものでもない。結構運に左右されるものもあるし、何より準備段階としてヒースクリフに隙を作らせないといけない。口で言うには簡単だが、この人相手に隙を作らせるのがどれだけ大変なのか俺は

知っている。だがやってやれないことは無い。さつき言った通り短期決戦でないところ人には勝てっこないんだ。SAO最後の決闘ならどうせなら勝って終わってやろうじゃないか。

刀を前に構え、突進するように突き攻撃を放つ。ヒースクリフはその手にもった巨大な盾の表面を使って受け流すようにその攻撃を後ろへと向ける。

ひとまずは予想していた通りの動きを誘発出来たがやはりそう上手くはいかない。予想より体制を崩されたせいで次の追撃が浅くなりそうだ。

右足を軸にしてそのまま180度回転し、振り向きざまに何度も刀で切り付ける。その攻撃もあっさりと防がれるがそれも想定内だ。ヒースクリフにどれだけ防がれてもいいから攻撃の手を緩めるな。連続攻撃でもって相手の余裕をうばえ！

ガキーン！

つと今まで聞いていた盾の音とは違い、鈍い音が響き渡ったと思った瞬間。右手がしびれるような感覚に襲われる。隙を与えず振り下ろし続けていた刀が、盾ではなくヒースクリフの剣によって防がれていた。

「盾にはこういう使い方もある」

その言葉が聞こえた瞬間、ヒースクリフの巨大な盾が俺めがけて迫っているのに気づいた。

「つーやべえ…」

ギリギリで鞘を体と盾の間に挟み込んで受け流すことには成功したが、体制を崩して倒れ込んでしまった。こんだけでかい盾がクリーンヒットしたらこの程度じゃすまなかつたかもしれない。追撃を食らって一発アウトの可能性も十分あり得る。

体制を崩した状態ではあるが、むしろこれはチャンス。

ヒースクリフ今は俺に対して優位に立てたと思っただけだ。だからこそ、ここで仕掛ける！

「おらよー」

倒れ込んだ体制から起き上がる瞬間、左手に持った鞘をヒースクリフめがけて投げつける。前回初手で試した作戦と同じ動きだが、不意を衝くには十分だろう。投げた盾を追いかけるように、俺もヒースクリフに近づいていく。

ヒースクリフめがけて飛んだ鞘は盾によって防がれ、盾の下にガランと音を立てて転がった。

「同じ手が通用するともっ？」

「思ってるわけがないでしょう」

急な反撃が絶対に来ないと言い切れる状態さえ作ればそれでいい。ヒースクリフの脳内には前回の攻撃が思い浮かんでいないはずだ。ここから不用意に盾を収めて攻撃

に転じることは無いだろう。

下準備はこれで終わりだ。

「うおおおおおおお！」

右手に持った刀が濃紺のライトエフェクトを纏い、光りはじめる。

刀スキル奥義『散華』

両手で構えた刀から放たれる5連の重撃。めったに使わないソードスキルを使って、俺は勝負に出る。

1撃目、2撃目とソードスキルを撃ち込んでいる中、攻撃を防ぎながらヒースクリフが落胆したような声を上げた。

「クレハ君。ソードスキルは私がデザインし、組み込んだシステムだ。そのモーシヨン
のすべてを、私が把握していないとでも？ 攻撃をすべて防がれた君は圧倒的に無防備に
なる」

「……………」

3撃目、4撃目……

「非常に残念だが決闘はここで終わりだ。僅かな可能性ではあるが、あの時のようなシステムを超越した現象をもう一度垣間見ることを期待して、とどめを刺させてもらおう」

5 撃目……

「終わりだ、クレハ君」

5 連撃を防ぎ切ったヒースクリフが盾から体を出し、剣を振りかぶった。

ソードスキル終わりの俺には、システムの硬直時間が……

「終わらねえよ」

ソードスキルを発動している最中は体がシステムのアシストによって勝手に動かされる。その動きは多少の体制の違いはあれど、ほぼすべて同じ動きになる。

だったらもし、その動きの先に異物が有ればどうなる？

たとえば、自分で投げた刀の鞘をソードスキル中に踏んで体制を崩したとしたら……？

「なに!?!」

「ソードスキルのモーションの間に異物を挟んだらどうなるか!?! 答えはこれだ!!」

体制を崩して地面に倒れ込んだ俺は刀を手放し両手で受け身を取った。そのまま両手の軸に体を回転させ、回し蹴りの要領でヒースクリフへ足払いをかける。完全に意識の外から放たれたその攻撃をヒースクリフが防ぐことはできず。俺以上に体制を崩して倒れ込んだ。

「これで終わりだ！」

「ぐ……おおお！」

体制を正して防ごうとするヒースクリフだが間に合うはずがない。ポーションの効果でAGIにブーストが掛っている上に、刀も、鞘も手放した俺が放つ攻撃は、どんな態勢からでも発動できる最速の攻撃だからだ。

頭に一瞬、頬にかわいらしい3本線のおひげを付けた相棒と、ピンク髪の世話焼きな親友の顔が浮かんで、思わず笑ってしまった。

体術スキル『エンブレイザー』

俺の右手が、ヒースクリフの胸を貫いた。

宣言した通りの短期決戦。5分にも満たないこの決闘は、俺の勝利という形で幕を下ろした。

「完敗だ。ああ、言い訳もできないほどの完敗で、いつそすがすがしい気分だよ」
「そりゃあよかった」

座り込んだままのヒースクリフは、本当にさわやかに笑いながら言った。俺の一撃で砕けた胸の鎧を見つめながら、彼は話を続けた。

「ソードスキルの発動キャンセルを意図的にやってのけるとはね。開発者としてもプレイヤーとしても、非常に重い一撃を食らった気分だ。自身の無力さを痛感する」

「まあ若干反則じみた作戦なんで、闘技場では使わなかったんですけどね。これもバグっていうよりは仕様だし」

ずっとこけたあとともソードスキルが発動し続けていたらかなり意味不明な動きになるだろうしな。その光景の方がよっぽどバグってるみたいに見える。普通のプログラマなら強制的にキャンセルさせるように設計するのが自然だ。俺もこれに気付いたのは一人でMobと戦ってる時に、敵の落とした剣を踏んでずっとこけた時だからな。あの時はこのキャンセル機能にかなり感謝したものだ。

「しかし、私が負けたという事も事実。依頼と、私の正体を看破した事に対する報酬を与えなければ」

「報酬って言われてもな……」

SAOもあと数分ですべてが終わる。そんな状態で報酬といわれても何も思い浮かばない。

「物のためしだ。君がSAOでやり残したことを言ってみたまえ」

「そうだな……」

そういわれて、自然に手が伸びたのはさっきまで使っていた愛刀だった。紺色の鞘と柄、長ドズの形状を模していて、『乾いた命』ドライド・ライフなんて皮肉った名前を冠するこの刀に対して、俺は意外と思いいれれを持っていた。

「この刀、できればもう少し長いこと使いたかったな……」

刀の柄をなでながら俺は思う。リズを持って極上と言わしめるこの刀を俺はまだ十

分に使いきっていない。やり残したこと、と言えるかは分らないが、もつとこの刀を使つてやりたかった。

「ふむ、承知した」

「いや、承知したつて言つても、この世界が終るつていうのに一体何をどうするつもりなんでしょう？」

「心配することは無い。君がVRMMOという物から離れない限り、分かる日が来る」

「はあ……」

最後まで訳の分らない事を言う人だ。まあ、一応その言葉だけは覚えておくことにしよう。

「ではもう一つ。私が叶えられる事であれば答えよう」

「あなたに叶えられる事といわれても……ああ、一つだけあつたな」

「ふむ、では言つてみたまえ」

SAOでやり残したことと言われれば沢山ある。アルゴ、リズ、キリト、アスナ、クライン、エギル、シリカ、それ以外にも交流をもつた色んなプレイヤーがいる。その人たちに別れの挨拶も何にもしていない。茅場晶彦の力なら、その時間を作ることも可能なのかもしれないが、彼、彼女達も一刻も早く現実世界に戻りたいだろう。そんな人た

ちを俺の勝手で引き留めるわけにはいかない。

だったらただ一つ。あいつらの代わりにこいつにやっておかないといけなことが有る。

俺はヒースクリフにゆっくり近づくと、

右腕で思いつきその顔を殴りぬいた。

「ぐあ……………」

小さく悲鳴を上げて、1メートルほど後ろに倒れ込んだヒースクリフに対して、俺は言う。

「報酬だ。俺の、俺たちの怒りを受け入れろ」

冷たく言い放った俺の言葉に返事は帰ってこない。

「お前のせいで沢山の人が死んだ。βテスト時代からの知り合いも、この世界で知り合った人も。俺の店に依頼に来たプレイヤーが、その次の日には居ないなんてこともあった。良いやつも悪い奴もいた。俺が会ったことのない、俺の友達の友達もお前のせいで死んだんだ。その時残されたやつがどれだけ悲しんだと思う？どれだけ苦しんだ

と思う？俺は、何が有ってもお前を許さない。茅場晶彦、俺はお前が大嫌いだ」

俺は俺の中に合ったこの男への思いをそのまま言葉にした。

体制を立て直したヒースクリフは、まっすぐとした目で俺を見続けている。

「だけど……」

この男に対して思う事は、それだけでもなかった。

「出会いが無かったら、別れもなかった。この世界を作ってくれたことには感謝しているし、ヒースクリフとしてのあなたは嫌いじゃない」

これが、俺の本心だった。この男のしたことは許される事じゃない。沢山の人が犠牲になって、たくさんの人が悲しんだ。それは分かっている。分っているが、どうしても、この世界を愛している自分がある。

「君の……」

不意に、ヒースクリフが口を開いた。

「君たちの言い分は受け止めた。言いたいことはもつともだ。だがしかし、私は今までの私の行動に後悔は無い。私は現実世界のあらゆる法則を超える世界を追い求め続けていた。そして、その私の作り上げた世界で、私の作った世界の法則をも超える力を見ることが出来たのだから」

「……あなたはそういうと思ってたよ」

この人がどういう人なのか、俺は最初から分かっていた。俺の怒りをぶつけた所で何にもならないこともわかっていた。でも、あいつらの、死んでいった奴らのことを思うと、言わずにはいられなかった。

崩れゆく鉄の城を見ながらヒースクリフは静かに立ち上がり、俺に告げた。

「2つの報酬、確かに支払ったよ、クレハ君」

「……」

彼は今何を思っているのだろう。自分が作った世界が崩壊していく中で、彼の中に残ったのは一体何なんだろう。俺はなぜか、そんなことを考えていた。

気が付くと、彼は銀髪の騎士から、白衣を纏った研究者の姿へと変わっていた。研究者は俺に背を向けて歩き始めた。

「それじゃあクレハ君。私はもう行くよ。君との最後の戦い、非常に楽しかったよ」

「ちよ……ちよつとまでよー」

急に告げられた別れに、俺は戸惑い、思わず呼び止めてしまった。呼び止めたところで何もすることは無い。ただ、なぜかこのままいかせたくないと思ってしまった。

ヒースクリフ、いや、茅場晶彦は静かに笑うと、歩みを止めずにこういった。

「ラスボス撃破おめでとう、クレハ君。選別として、1つ助言をしておこう。現実世界で君は静かに平穩に暮らしたいと思っているかもしれないが、それはなかなか難しいだろ

う。今のうちに腹を括っておくことだ」

最後の最後までよくわからないことを言い残していく人だ。

ゆっくりと離れていくその背中が強く印象に残った。

「また会おう、クレハ君」

その言葉を耳にした瞬間、俺の視界は白で覆われ、何も見えなくなつた。

・ ・ ・

目を開けると白い蛍光灯と、白い天井が視界に入った。

……まぶしいな。

どうやら俺は寝転がっているらしい。体にかかっている布団の感触が何とも懐かしい。自分の肌で物を感じているこの感覚はSAOにはなかった。つまりここは……

「帰ってきたのか……」

S A O が終わり、現実に戻ってきた。

つまりは、そういう事なのだろう。

だがまだ視界がぼやけている。2年間も眠っていたのだから体のどこかに異常が出ていてもおかしくない。これもきつと時間をかけて直していくしかないのだろう。

ゆつくりと体を起こし、頭についているナーヴギアを外す。

こいつのせいで2年間も閉じ込められていたんだよな、なんて考えながらナーヴギアを眺めていると、急に隣から声が聞こえた。

「おはようー！」

「っ!!」

急に声を掛けられてかなり驚いたが、なんとか手に持ったナーヴギアは落とさずに済んだようだ。恐る恐る声のした方を見てみると、俺のベットによりかかるようにして、1人の少女がこつちを見ていた。色白だが活発そうな印象を受ける少女だ。

「青崎紅葉くんだよね？」

「そ、そうだけど……」

久しぶりに呼ばれた本名に若干の違和感を感じつつも、俺は答えた。俺の名を呼んだ少女は満面の笑みでこつちを見ているが、俺には全くこの少女に見覚えがない。

いったいだれだ？この娘。

そう考えていると、少女は待ちきれなかったかのように声を上げる。

「ずっとお礼が言いたかったんだ！君が僕を助けてくれたんだよね！」

……………は？

彼女の言っていることが全く理解できない。完全に置いてきぼり状態だ。そんな俺をしり目に少女は嬉しそうにしゃべり続けている。

やっと現実世界に帰ったというのに、俺はもうすでに恋しく思っていた。

あの、デスゲームでの日常を

番外編

女子会

「はい、シリカの分のコーヒー。砂糖は2つでよかったわよね？」

「あ、はい。ありがとうございますリズさん」

「クレハ君が作って行つたクツキーだけだとすぐなくなっちゃうと思つて、私もケーキ作つただけで、食べたい人いるかな？」

「おおさつすがアーちゃん気が利くネ！聞くまでもなく全員が食べるにきまつてるじゃないカ」

手慣れた手つきでコーヒーを用意するリズさんと、同じように手際よくウインドウを操作してフルーツのたくさん乗つたケーキをオブジェクト化するアスナさん。2人のおかげで、机の上にお茶会に必要なものがほとんどと並んでいきます。

やつぱりほとんど毎日お茶会に参加してる2人はすごく手際がいいです。

数えるくらいしか参加していないわたしとピナは何をしていいのかまったく分かりません。最初こそ準備を手伝おうと張り切っていたんですけど、あまりにも手際が良すぎて手伝おうとするほうがかえって邪魔になる気がして、今はおとなしく椅子に座つて

待機しています。じっと座っているのが退屈だったのか、ピナは少し前からソファの上ですやすや眠つちやつてますし。

「いやー、クー坊のスーツもいいけど、アーちゃんのケーキも楽しみだネ。ナ、シーちゃん？」

「は、はい。そうですね、アルゴさん……」

わたしの横で足をパタパタ揺らしながら、アルゴさんは楽しそうに体を揺らしています。

こうして見ていると、同じ年くらいに見えちやいますけど、年上なんですよね、アルゴさん。具体的な年齢を聞いたことはないですけど、クレハさん達と話している感じだと結構上みたいです。MMOでリアルの情報を知るのはマナー違反、ということもあつて誰も口にはしませんが、かなり謎の多い人ですよね……。

そうこうしているうちに、机の上には豪華なスーツとコーヒーが並べられていきます。

「よし、これで全部そろったわねー」

「4人分のお皿とコーヒーも準備できたし、そろそろ始めましょう」

準備を終えたりズさんとアスナさんが、わたしとアルゴさんの正面に並んで座ります。

今日のお茶会はいつも通りクレハさんのお店で開かれています。参加メンバーはリズさん、アスナさん、アルゴさん、そしてわたしの4人だけです。

そうです。今日はとっても珍しい……

「それじゃあ！ 第1回万屋秋風女子会を始めます！」

女性陣だけの女子会なのです。

・
・
・

クレハさんが用意していったコーヒートクッキー、アスナさんの作ったケーキを食べながら、4人だけの女子会が始まりました。料理スキル完全習得の2人が作った食べ物ということもあって、味は絶品。こんな料理が毎日食べられるんだったら、わたしも料理スキルとってればよかったかな。クレハさんは毎日遊びに来てもいいって言ってくれてるんですけどね。なぜだかちよつぴり緊張してしまうのと、なにもしていないわた

しがお茶会だけ参加するのは申し訳なくて、クレハさんに用事があつた時に、そのまま参加させてもらった何度かしがお茶会には来れてないんですね。今日は勇気を振り絞つて遊びに来たんですけど、クレハさんは不在みたいでした。

「そういえば、今日はどうしてクレハさん達がいらないんですか？ ずいぶん急いで出かけていたみたいですけど……」

「あれ、シリカちゃんに言つてなかったっけ？ クレハ君達がいらない理由」

「あたしも聞いてないわよ。家の外でシリカと合流して家に入ろうとしたら、クレハが凄い速さで家から飛び出つたんだから。後から飛び出してきたキリトとクラインとエギルには声かけたけど、クレハを追つかけるのに必死で挨拶くらいしかしなかったし。家に入つたらアスナが1人でお茶会の準備してて、『今日は女子会よー』っていうからそのまま手伝い始めただけだし」

「そ、そういえばそう……だったかな？」

アスナさんは完全に忘れていたようで、いつものような明るい笑顔ではなく苦笑いです。こういう感情表現がわかりやすいのは、SAOならではですね。

「じゃあそこはオネーサンが説明してあげようじゃないか！」

「アルゴ？ いやいや、あんたあたし達より後に来たじゃない。なんで知ってるのよ」

「まあ細かいことはいいじゃないかー」

「細かいことじゃないと思うんですが……」

アルゴさんの情報収集能力は私たちの常識で考えられるレベルじゃないので、今更考え始めるのも無駄かもしれないですね。リズさんやアスナさんも呆れ気味ですが納得しているようですし。アスナさんは答えを知っているようなので、アルゴさんの話を聞いた後にアスナさんに答え合わせをしてもらいましょう。

「そもそもクー坊達は最初から出かける予定があつたわけじゃないんだ。エギルが持ってきたクエストの情報を知って、クー坊が慌てて出かけたってだけなんだヨ。ま、その情報をエギルにあげたのはオレツチなんだけどナ」

「そんなに急がないといけないようなクエストなんですか？」

「いんや全く。クエストに期限が設けられてるわけでも、時間が指定されてるクエストトってわけでもないヨ」

「じゃあどうして……」

さっぱりわかりません。わたしの知ってるクレハさんといえば、あまり慌てたりうろたえたりするような人ではなくて、いろんな準備をしつかりしてから行動するタイプというイメージです。たまに突拍子もないことをしたり、変なことを言ったりしますけど……。

「あー、あたし何となく分かったわ。そんなに急ぎでもないクエストで、ほかの3人より

先にクレハが飛び出すようなクエストって言ったらーっしかないじゃない」

「流石リっちゃん。まあ前にも似たようなことあったらしいからナー」

リズさんはもう分かったみたいです。アスナさんも苦笑ですし、たぶんリズさんの考えていることは正解なんでしょう。

「えつと…一体何のクエストなんです？」

「まあシリカちゃんには分かり辛いかな。答えを言っちゃうと、そのクエストってコーヒーに関するクエストなのよ」

「コーヒー……ですか？」

思わず手に持ったカップを見ちゃいました。確かに、言われてみればクレハさんといえどコーヒー好きというイメージもあります。思い返してみれば、いつ見てもクレハさんが持っている飲み物はコーヒーだったような…。

最初は苦いイメージがあつてカフェオレばかり作ってもらつていましたけど、最近コーヒーも飲んでみたいって話をしたら丁寧にわたしの好みの味に合うように調整して用意してくれたりもしました。

「そうそう。報酬でコーヒーミルっていう調理器具が手に入るクエストがつい最近見つかったんだヨ」

「クレハ君のコーヒー愛って凄いから、エギルさんから話を聞いた瞬間飛び出していつ

たのよ。そのあとクレハ君抜きでエギルさんの話の続きを聞いたら、そのクエストが大量討伐系のクエストだっていうから、キリト君たちが追いかけて手伝いに行っただけ」

「……目に浮かぶわね」

「それであんなに急いでたわけですね」

説明を受けると納得の理由でした。クレハさんのコーヒー好きのイメージは、わたしが思っている以上にすごいみたいです。リズさんはクエストの話聞いただけでピョンと来ていたみたいですし、付き合いが長い人からしたら常識なんでしょうか？

「けどコーヒーミルなんてマニアックな調理器具が報酬なんて変わったクエストね。そんなのクレハ以外に欲しがる人いるわけ？」

「言われてみればそうよね……。そもそも料理スキルを取得してるプレイヤーにしか意味のないアイテムだし、料理スキルを使ってコーヒー作ってるのなんてクレハ君くらいじゃない？」

確かにリズさんとアスナさんの言う通りですよ……。わたしみたいに料理スキルを持つている知り合いがいれば譲ったりすることもできますけど、ほとんどの人はNPCのショップに売りに行くぐらいしか使い道がないですね。

そんなクエスト……というより、アイテムが作られることになんとか違和感ありま

す。

「あー、それに関してはちよつとオレツチに心当たりがあるかな」

「なによそれ、あんたそんな情報まであつめてるわけ？」

「いや、これに関しては完全に仮説だヨ。情報を集めたわけでも、裏を取ったわけでもない。……というより、ほんとに仮説通りだったとしても裏はとれないかな」

アルゴさんにしては珍しく歯切れが悪い感じです。

「おもしろそう。仮説でもいいから聞かせてよアルゴさん」

「そうですよ、わたしも興味あります！」

「ウーン、情報屋としては確証のない情報を公開するのは気乗りしないんだけどナー……」

「いいじゃないただの雑談なんだし。それに、仮説があるって言い出したのはアルゴよ。ここまで話しちやつたんだから、最後まで話しちやいなさいよ」

アルゴさんは少し考えた後諦めたように小さくため息をつく、いつものような笑みで話始めました。

「……ま、いい力。みんなはS A Oのクエストがどうやって作られてるか知ってるかな？」

「どうやって……？ 最初から用意されてる訳じゃないんですか？」

「なーんか昔クレハに聞いたような覚えもあるのよねー。AIが自動で作ってるみたいな話」

「私はキリト君に聞いたかな。確かカーディナルシステムっていう名前のAIが自動生成してるのよね?」

「大正解!流石アーちゃん」

……さっぱり分からなかつたです。

そんな私の顔を見てか、こほんとちいさく咳ばらいをしてアルゴさんが詳しく説明してくれました。

「カーディナルシステムっていうのは、エラーチェックだったりバグのメンテナンスだったり全部やってくれるゲームのバランスサーのことなんだ。細かい抜け道みたいなものも自動的にチェックして調整してるらしい。その仕事の1つとして、クエストの自動生成とかもやってる。もともと、SAOを始める前に雑誌とかで読んで知識だから、多少は変わってるかもしれないけどナ」

「SAOのゲームバランスはAIが自動で調整してるってこと?」

「そういうことらしいナ。クエストに関しては、SAO内の膨大な情報をもとにして作られるそうダ。クエスト報酬も『全アイテムの内どのアイテムがよくつかわれているか』、『よく消費されるアイテムの種類は何か』みたいな、いろんな情報からSAO内で

の需要を割り出して調整してららしいゾ。ま、MMORPGである以上、冒険に関するものが重視されるようにはなってるみたいだけどナ」

アルゴさん以外の3人が思わず『へー』っと声をあげてしまうほどアルゴさんの説明とは分かりやすく、知らない内容でした。SAOを始める前に楽しみで色々調べたりはしてましたけど、中身のことはさっぱりわからなくて詳しく見てはいませんでしたから。

「今更だけど、裏ではすっごいことしてんのねーSAOって」

「ほんとですねー。人が直接管理しなくてもこんな広い世界のバランスがとれちゃってるんですから」

「でも、だったら尚更おかしいんじゃない？ SAO内の需要を割り出してクエストを作ってるのに、今回クレハ君たちが受けに入ったクエストって全然需要がないと思うんだけど……」

アスナさんの言う通り、コーヒーマルを欲しがるプレイヤーなんてクレハさん以外にいないんじゃない？ という話から始まったことを考えると、話が噛み合っていないような気がしますね……。

「あーアルゴさんの仮説っていうのは、そのカーディナルシステムっていうものの故障とかで、たまに今回みたいなクエストができちゃうっていうことですか？」

「あーなるほど、そう考えると自然かもね。こんだけ大きな世界を管理してるんだから、そのくらいいのバグはあってもおかしくは……」

「ぎーんねん、はずれだね」

私の横でアルゴさんがつこり笑って大きなバツ印を手で作っています。……結構自身あつたのに。

「今回みたいなクエストがほかにも出てきてたら、オレツチも同じように考えたかもナ」
「え？ ないんですか？」

「全くないってわけじゃなんだけどナ。今回みたいに明らかに需要の低い報酬のクエストは今までも何回かあつたヨ。けど、そのすべてのクエストにちよつとした共通点があるせいで、シーちゃんの説に説得力がなくなつちやうんだナ」

「なによ、その共通点って」

アルゴさんはいたずらつ子みたいな笑顔を崩さずに話を続けます。

「今まで発生した需要の低いクエスト報酬って、全部コーヒーに関するアイテムなんだヨ。今回のコーヒーを作る用のアイテムだったり、コーヒーの材料になる豆だったり」

「は？」

「え？」

リズさんと一緒に間の抜けた声を出してしまいましたけど、どういふことなんでしょ

う？ 私はもうさっぱりお手上げ状態です。

「それこそバグなんじゃないの？ 意味わかんないじゃない」

「いや、ちよつと待ってリズ。それならちよつと筋が通った説明ができちゃうかも……」
「え？……うそでしょ？」

さつきまで考え込んでいたアスナさんが声を上げたので、3人の視線が一気にアスナさんを集まります。なんとなくアスナさんが呆れたような顔をしてるのが気になっちゃいますけど……。

「攻略組で前線に立っていると良く思うんだけど、SAO内のシステムの完成度つてもものすごく高いの。あれだけたくさんの人が戦ってるのに、システムの抜け道つて滅多に見つからないし、見つかったとしてもすぐに修正されたり。…たまに普通はやらない様なこととして無理やり突破しちゃう人もいるけど」

「……大体誰のこと言ってるかわかるわね」

「キリトさんですかね……」

「アーちゃんも人のこと言えないと思うけどナ」

キリトさんもアスナさんも、わたし達じや考えられないようなことをよくしますもんね。アスナさんと比べるとキリトさんのそういうところは抜きんでますけど。

「とにかくSAO内のAIで、それもゲームのバランスなんて重要な機能がバグつ

「ちやううなんてことないと思うのよ」

「そうだな。オレツチも同じ意見だ」

「じゃあなんでこんなクエスト、っていうかアイテムができるのよ。需要のチエックとかしてるなら、需要の無いアイテムなんて作る必要ないじゃない。矛盾してない？レアアイテムとかで希少価値の高いものがあるのはわかるけど、コーヒーを作るための機械とか、コーヒーを作るためにしか使えない材料なんて、欲しがる人以前に扱える人がいないわけだし」

リズさんの言う通りです。凄く頭のいいカーディナルシステムっていうのがクエストを作っているのに、あまり人が欲しがらないようなアイテムを作っちゃってるっていうのはなんだか変ですよ。

「需要ならあるじゃない。現に今も大急ぎでクエストを受けに行った人がいる訳だし。その人はちゃんとそのアイテムを扱えるわよ」

「いや、そりゃあクレハは欲しがらるわよ。年中コーヒーばかり飲んでるコーヒーマンなんだから」

コーヒーマンって……。

聞きなれない言葉なのに誰一人否定しようとしなないのはなぜなのでしょう。

「じゃあヒントをあげようか。無意識のうちに別物って考えてるかもしれないけど、『S

A O全体の需要』って括りの中には、もちろん『クー坊の需要』も含まれてるヨ」
「そりゃあそうでしょ。クレハもS A Oの中にいる訳で、あいつが消費したアイテムも……当然……」

リズさんの声がどんどん小さくなっていくにつれて、アルゴさんのニヤニヤ顔がどんどんあからさまになっていってます。あの、何となくわたしにもわかっちゃったような気がするんですけど、つまり……。

「クレハが今まで飲んでコーヒーの消費量だけで、カーディナルシステムが必要があるって判断するレベルに到達したってわけ？」

「だーい正解！オレツチの仮説と見事に一致したナ」

アスナさんはやつぱり、といった顔でコーヒーを飲んでいきます。

つまり、料理スキルでコーヒーを作るのはおそらくクレハさんだけなんですけど、そのクレハさんがものすごくたくさんコーヒーを飲んでるせいで、カーディナルシステムが多少なり『コーヒーに需要がある！』って思っちゃってるってことですよね。

「流石にそれはないでしょ、って言いきれないあたりがクレハの怖いところね。……そりゃあ確かに裏を取ることもなんてできないわね。仮説って言った意味が分かったわ」
「よくよく考えると、クレハさんがコーヒー以外の飲み物飲んでるの、見たことないです」

「ココアとかカフェオレとかも作ってたみたいだけど、それもコーヒー作りの延長でチャレンジしただけって感じよね」

「ま、クー坊だけってわけじゃないけどナ。現に今ここで4人飲んでるわけだし。そう考えると、まれにクエスト報酬としてコーヒー系のアイテムが出てきてもおかしくはないだろ？」

全員が手元のコーヒーを見つめます。

「なんか、私たちもずいぶんクレハ君に影響されたよね……」

「お茶会が日課になってるし……」

「リアルにいたときよりコーヒー飲む頻度ふえたナ」

「わたしなんて、リアルでコーヒー飲んだことなかったですよ」

誰も口には出しませんが、みんな同じことを考えていそうです。

『恐るべし。クレハさんのコーヒー愛』

『恐るべし。クレハのコーヒー愛』

『恐るべし。クレハ君のコーヒー愛』

『恐るべし。クー坊のコーヒー愛』

女子会が始まってからどれくらいが時間が経ったでしょうか。沈みかけていた夕日が見えなくなつて空は真っ黒に染まっています。

「それにしてもクレハ達おっそいわねー。大量討伐系のクエストなんてあの4人だったらあつという間に終わるでしょうに」

「イヤー。詳細はオレツチもまだ調査中だけど、結構いろんなNPCのところをたらい回しにされるクエストらしいからナ、そういうところで時間食ってるんじゃないのか？」

「へー、アルゴがまだ情報を集めきつてないなんて珍しいわね」

「こんなクエストの情報集めたって誰も買わないだ口？」

「……それもそうね」

「めずらしくクレハ君が暴走するタイプのクエストだしね。エギルさんが苦労してそう

な気がするわ」

「あはははは……」

暴走するクレハさんって見たことないので、なんだかちよつと見てみたい気がしますけど、今日聞いた話だとなんだかわたしには手に負えない気がします。

「SAOで女子会なんて初めてだったな。今後はたまに4人であつまってやっていかない?」

「あ、それいいかも!アスナの家だったら広いしできそうだしね」

「たまにはいいかもナ。∴女子会って言ってもSAOの話ばかりしてた気がするけど」

「それはそうだけど、逆に女子会つぼい話ってなんなのよ。あたしはリアルでもあんまりそういうのしたことないから分かんないわよ?」

「私も女子会高だったからなー。女子会だけっていうのは当たり前前の環境だし、わざわざ女子会を開こうとはしてなかったわね。一般的な女子会ってどんな話をするのがいいのかしら」

「うーん、どうなんでしよう?」

「少なくともSAOの話はしないでだろうナ」

確かに良く分からないですね。女子会って何する物なんでしよう。

わたしも女の子だけでお茶会を開くから女子会ってことで参加させてもらってましたけど、いざ考えると良く分らないです。リアルでは女の子と一緒に遊んだりフリーストフードに言ったりしてましたけど、それを女子会っていうのはなんだか違うような気がします。

そういえば、昔テレビで見た番組で女優さんとかが集まった女子会番組！っていうのをやってた気がしたような。確かその時話してたトークテーマは……。

「恋バナとかしたら女子会っぽい気がしますねー」

「あ、その話しちゃうんだ」

「え」

「エ」

あれ？アスナさんが『やつちやつたー』って顔しちやつてますし、リズさんとアルゴさんは苦い顔をして固まっちゃいました……。なにかまずいこと言っちゃいましたか？

アスナさんはキリトさんと結婚してますから、恋バナといわれてものろけになっちゃうから良くないのかな？けどアスナさんってあんまりそういうのろけ話とかを積極的にするタイプじゃない気がするんですけど。2人ともすごくお似合いなので回りから色々と冷やかされちゃうこともあるみたいですけど、それも本人たちも本気で嫌がって

るわけじゃないみたいですし。

……いえ、わたしもキリトさんに関してはまだ諦めてませんけど！望み薄なのはわかってますけど、まだリアルでのチャンスが残ってますから！けどアスナさんもすごく良い人だし、そんな2人を邪魔するのが辛いといふかなんというか。

……えーと。わたしのことは置いておくとして、苦い顔をして目を合わせてくれなくなつた2人についての方が問題なんですが。

恋バナの話題でこんな空気になるなんて思つてもみなかつたんですが、なんでなんでしょう。そんなにリズさんやアルゴさんは好きな人の話をしたくないんですかね？2人とも仲がいいし、いつもクレハさんとお茶会したりしてるから、てつきりもうそう言う話はしちやつてるのかと思つてたんですけど。

……あれ？そういえば2人ともクレハさんとよく一緒にいますよね。前にクレハさんに聞きましたけど、クレハさんの武具のメンテナンスはリズさんが専属でやつてるみたいですし、お店のお休みの日も一緒にしてました（今日もお休みの日みたいですし）。アルゴさんとクレハさんがコンビで情報集めをしてるっていうのはSAO内でも結構有名な話ですもんね。

あれ？もしかして2人ともクレハさんのことが好きつてこと？確かにリズさんもアルゴさんもクレハさんに対してはすごく心を開いているみたいですし。そう考え始め

ると心当たりがある場面がたくさん思い浮かびます。えーと、そうするとわたしはほとんどもない地雷をふんだんじゃあ……

「あの、アスナさん。もしかして2人ともクレハさんのこと……?」

「まあ、普通気づくわよね。シリカちゃんは今思ってることが正解」

「……もしかしてわたし、触れちゃいけない話題に触れちゃいましたか?」

「そんなことないわよ。気が付いてないのでクレハ君本人くらいだし。エギルさんとか私くらい付き合いが長い人を見るとあからさますぎて恥ずかしくなっちゃうくらいなもの。お互いこのことに関しては気づいてるみたいだし、リズとアルゴさんの関係がこの話題で崩れることはないわよ。むしろ、問題なのは2人のアプローチをクレハ君が全くと言っていいほど気が付かないってこと」

「そ、そうなんですか……」

こそこそ話でアスナさんに確認を取ってみましたが、大当たりだったみたいです。付き合いがそんなに長くないわたしが気付いちやうくらいなんですから、アスナさんから見ればそれはもう当たり前のことなんでしょう。

確かに、クレハさんってそういう話に無頓着というか、人のことを優先して自分のことほっぽちやうタイプですもんね。思いつきりあからさまにアプローチしないと気が付いてくれないような気がします。……乗り遅れてアスナさんにとられちゃったわ

「たしが言うのもなんですけど。」

「そのせいで、この2人と恋バナしようとしてもできないのよ」

「えっと、それはどういう…」

意味なんですか？と聞こうとしたところで、リズさんが割って入ります。

「聞こえてるわよシリカ」

「アーちゃんもな」

2人にジト目でにらまれちゃいました。ちよ、ちよつと怖いです。

「あたしだってねえ、そりやあアスナみたいな甘酸っぱい恋愛トークしてみたいわよ。けど仕方ないじゃない！『NPCのレストランで綺麗なスイーツ出してくれる所見つけたから今度行こう』って誘ったら、次の日には料理スキルでそのスイーツを完全再現してお茶会に持って来ちゃうようなやつなのよ!! そんなことされたら今後どうやって誘えば言いわけ!!」

「そうだゾ！フラワーガーデンでデート向けのクエスト見つけて一緒に行ったのに、終始クエストについての情報収集しかなない！そりやあ普段から2人でクエストの情報収集してるけどサ！わざわざオフの日に誘ってるんだからもうちよつと察してくれてもいいじゃないカ！」

「う、うわあ」

「この2人と恋バナしようとする、結局いつも愚痴大会になっちゃうのよ」

クレハさん、残念過ぎますよ。キリトさんもなかなかアプローチに気づいてくれない人でしたけど、さすがにそこまではなかったような。しかも今の感じだとそれだけじゃなくて似たようなこと沢山あるみたいです。

「2人とも照れ屋で直接的なアプローチをかけてないっていうのもあるけど、クレハ君が鈍すぎるのが大問題なのよ」

「普通気づきそうなものですけど……」

「うーん。私が思うに、クレハ君がクオーターっていうのが原因なんじゃないかなーと
思うんだけどね」

「クオーター……ですか?」

あまりリアルの話はしたことなかったんですけど、クレハさんってクオーターだった
んですね。

「私も料理を習ってる時に聞いたんですけど、年に何回かはヨーロッパの方にあるお爺さ
んの家に行ってたんだって。海外の人たちって日本の人達と比べてすごくフランクで
しょう? ハグが挨拶だったり親愛の印に頬にキスしたり。そういう海外にとつての当
たり前と、日本人同士の恋愛的距离感がごちゃ混ぜになってるから、アプローチをアプ
ローチとして気づかないんだと思うの」

「な、なるほど」

「それに付け加えて自己評価の低さも問題かな。クレハ君って極端に自分を過小評価してるから、『自分が好かれてる』っていう思考になりにくいんじゃないかな」

言われてみると確かに。クレハさんは戦闘でもすごく強くて頼りになりますけど、自分でそれをアピールしたりしませんね。『キリトの反応速度は異常だ』とか、『チームを指揮させるならクラインに任せるといい』とか、人のいいところを教えてくれたりはするんですけど。

「ほんつとどうすりやいいのよ。もう2年近くたつたのよ？あーもう！思い出したら腹立ってきたわよ！」

「オレツチなんかβテストの時からだゾ？あーあ、オネーサン自身なくなっちゃうヨ。こーんな美人達が周りにいるのにクー坊ときたらホントに……」

「え、えーとえーと……」

2人が落ち込んじゃったというか、やさぐれ始めちゃってるので何とかフォローしようと思っただけですけど、何を言ってもいいやら……

「アスナさん、どうしましょう」

「そんなに心配しなくても大丈夫よシリカちゃん。いつものことだから」

そうは言われてもこのどんよりした2人の空気に耐えられそうにないです。早く

帰ってきて！クレハさん！

「ただいまー」

わたしの願いが届いたのか、店の入り口の方から大きな声が響いてきました。ナイス タイミングです！

「いやーそれにしても疲れたな、今回のクエストはよう」

「全くだ。まさかあんなにいろんなNPCのところをたらいまわしにされるとは」

「結局、最期の雑魚モンスター的大量討伐はほとんどキリトとクレハが倒しやがったからな」

「フラストレーションたまってたんだよ。コーヒーミルが貰えるっていうのに、あれだけもったいぶられたんだから少しぐらい暴れても許されるだろ。あー帰ってすぐコーヒーミル使おうと思ってたのに、これは明日にした方がよさそうだな」

クラインさん、キリトさん、エギルさん、そしてクレハさん。

みなさんずいぶん疲れた様子で帰ってきました。クエストに出かけてからかなりの時間が経ってますから、当然といえは当然ですけど。

「お、おかえりなさい！遅かったですね！」

助かりました。アスナさんは慣れてるみたいでしたけど、いつも元気な2人がどんどんやさぐれて行くのはなかなか辛かったですし、原因がわたしの提案した話だったので

余計に責任感じちゃいましたよ！

「みんなお帰り、ずいぶん遅かったね。そんなに大変なクエストだったの？」

「いや、大変ってことはなかったんだが散々NPCのところを行ったり来たりさせられてな。無駄に時間ばかり食っちゃった。結局問題のモンスター大量討伐もクレハとキリトの野郎がほとんど倒しやがったし、俺とクラインは何のために付いていったんだかな」

「まったくだぜ。飯の一杯でも奢ってもらわなきゃ割に合わねーよ」

「俺は別についてこいなんて言ってるだけだ。そもそもそれを言うならお前らだって、今回の報酬はパーティメンバー全員に配られたんだからレアアイテムゲットしてるだろうが。それでチャラだよ」

「う、そりゃあそうだけだよ」

「ハハハ！恩を売ろうとしても、クレハ相手じゃ分が悪いなクライン」

クレハさんの言葉に、さっきまで不満そうだったエギルさんとクラインさんが黙っちゃいました。そういわれると、需要が低いといっても一応レアアイテムですし、物珍しさで欲しがる人が出てくるかもしれません。NPCのお店で売るだけでも利益になりますから、クラインさんとエギルさんからしたらむしろ得だったのでは？

「じゃあキリト君ももらったの？」

「ああ、コーヒー作りの道具みたいだけど、一応料理スキルを持つてたら使えるみたいだからな。これはアスナにあげるよ」

「ホント？ありがとうキリト君！」

キリトさんたちはやっぱり仲良しですね。確かにアスナさんだつたら料理スキルを完全習得してますし、使うにしろ使わないにしろ、料理スキル用のレアアイテムはうれしいですね。

「それで？この2人はなんでこんな不機嫌なんだ？俺たちが帰つてきてから一言も喋つてないんだが」

「え、えーとそれは何というか……」

『クレハさんが2人のアプローチに全然気づかなくていじけちゃいました』なんて言えるわけじゃないです。リズさんはボリボリ音がなるくらい力強くクッキー食べてますし、アルゴさんはジト目でちびちびコーヒー飲んでますし……2人ともちよつとかわいいですけど。

「まあいいか。ほらリズ、お前にこれやるよ」

そういうとクレハさんはウィンドウを操作して何かアイテムを実体化しました。すごくきれいな赤色をした大きな鉱石です。お店のライトの光を反射して透き通る鉱石はものすごくきれいで宝石みたいです。

「何よいきなり……ってこれヒイロカネインゴット!? 超レア鉱石じゃない!」

「前のお茶会の時に欲しいって言ってただろ? フィールドボスのドロップ品で出るって聞いたから、今日の朝取りに行ったんだよ」

うわー、リズさんすつごく顔が緩んでいます。

「あ、あたしが欲しいって言ってたの覚えてて、わざわざフィールドボスまで倒しに行ったの?」

「そりゃあな。まあちようどクラインのパーティがフィールドボス狩りに行くって言うてたから、タイミングもよかったんだ」

「そう……まあ、その……ありがと」

「ああ」

ずっとほしかったレアアイテムが手に入ったってことよりも、クレハさんが自分が欲しがってたものを覚えてくれてたことがうれしいんですね。わたしも好きな人からふいにプレゼントとかもらったらうれしいですもん。しかもわざわざボスモンスターのところまで行ってくれたんですから。

「アルゴにはこれな」

「え? オレツチにもあるのか?」

「あたりまえだろ」

今度実体化したアイテムはアルゴさんにあげるみたいですけど、あれなんでしょう？
手のひらサイズの…鉢植え？

「これってフラワーガーデンで売って奴じゃあ…」

「ああ、この前行ったときに珍しく欲しそうにしてたと思ってな。今回のクエストでフラワーガーデンにも行ったからついでに買ってきたんだ」

「べ、別に欲しそうになんてしてなかっただろ」

「店の前通るたびに歩くスピードは遅くなるし、この鉢植えをチラチラみてるしバレバレだ。どうせ欲しいけど自分のキャラじゃないとか思って買うの恥ずかしくてたんだろ」

「うぐう……」

アルゴさん、鉢植え握りしめてうつむいちゃいました。…なんだか、年上のはずなのにすごくかわいい。

「ま、まあもらっておいてあげようかな」

「おう、そうしてくれ」

口ではいつも通りですけど、顔がゆるゆるになってますよ、アルゴさん。2人ともさつきまでクレハさんの愚痴でやさぐれてたとは思えないくらい照れちゃってます。

「ほら、大丈夫だったでしょ？」

「ははは、ほんとですね」

「クレハ君は全然女心を理解してくれないけど、たまに天然でああいうことやっちゃうからずるいのよね」

クレハさん、リズさん、アルゴさんはちよつと照れてますけどもういつもみたいな様子で話し始めてます。こうしてみると、あの3人の中でも群を抜いて仲良しさんですね。結婚しちやつてるキリトさんとアスナさんは除いて、ですけど。クレハさんに対する恋愛模様で3人の関係が崩れちやつたらどうしようかと思いましたが、この様子だと全然問題なさそうな気がしますね。そう簡単に、この3人の関係性は崩れなさそうです。やさぐられてた2人もすっかり上機嫌ですしね。

皆さんを見ているだけで、なんだか不思議な気持ちになります。マスコット感覚でわたくしに近寄ってくるプレイヤーや、ビーストテイマーというだけで理不尽な嫉妬をぶつけてくるプレイヤー達とは違う。付き合いもそんなに長くないのに、なぜだか心から信頼できる人たちに囲まれている今のわたしを、昔のわたしはきつとうらやましがるでしょうね。

「どうした？そんな寂しそうな顔して」

「え？そ、そんな顔しちやつてましたか？」

確かにちよつと後ろ向きなことを考えちやつてましたけど、まさか顔に出ちやつてい

るとは。SAOは表情がわかりやすくて便利だなんて思っていましたけど、これは周りの人から見ても同じなんです。

「自分だけ土産が無くて寂しかったのか？悪いな、今日来るって知らなかったんだ」

「い、いえいえ！そういうわけじゃないので全然大丈夫ですよ」

「ならいいんだが……。あ、そういうえぼずつと前からシリカに渡そうと思つて物があつたな。今回の土産つてわけじゃないけどちようどいいタイミングだ、今渡してもいいか？」

「え？あ、はい、それは全然問題ないですけど」

わたしに渡すもの？クレハさんに何か頼んでた覚えはないんですけど……。

そういいながらクレハさんが取り出したのは、バラみたいなオレンジ色の花の束でした。50本ぐらいがきれいな白い布で束にされていて、絵本とか昔のおとぎ話で王子様もっているみたいな大きくてロマンチックな花束です。

「うわあ……すつごく綺麗」

「ビーストテイマー専用のアイテムらしい。タイムモンスターが寝る場所に広げておいてやると、次の日1日バフがつくそうだ。使用制限回数があるみたいだから使い時は考えた方がいいぞ」

「けど、いいんですか？みたところ、かなりレアアイテムにみえるんですけど」

「偶然ドロップしたただけだから気にしないでいい。俺が持つても使えないからな」

「そう、ですか。ありがとうございます！ピナも喜ぶと思います」

クレハさんから綺麗な花束を受け取りました。：肝心のピナはあれからずっと寝てるんですけどね。

「シリカにはいつも世話になってるからな。ささやかなお返しだ」

「え？そんな、わたしは何にも……むしろわたしがクレハさんにお返ししないといけないくらいで」

「そんなことはないぞ、俺の周りの奴ときたら、攻略組のトッププレイヤーだったり攻略組兼道具屋だったり、情報屋だったり人気鍛冶職人だったり、特殊なポジションにいるやつばかりだ。ま、シリカもピーストテイマーっていう特殊な立場な訳だが、シリカから聞く中層プレイヤーの一般的な情報がどれだけ役に立っていることか」

「…そうなんですか？確かに、中層プレイヤーが困っていることとか、伸び悩んでる原因とかの話は前にしましたけど」

「その情報はかなり重要なんだよ。SAOの中で一番多いのが中層プレイヤーだ、その中層プレイヤーが求めているものが分かるってのはかなり助かる。もともとモチベーションの高い攻略組よりも、中層プレイヤーを奮起させて戦力を上げることの方が難しいんだ。実際シリカからもらった情報のおかげで、何組かの中層プレイヤーが今じゃ準

攻略組レベルまで育ってる。まあそういう打算的な考えを除いても、シリカには助けられてるよ。ここにいるのメンバーもいつつもシリカに会いたがってるしな。リズなんか『シリカはいつ来るんだー』っていつつも言ってるし、アルゴは『そろそろシーちゃんの話聞きたいな』とか遠回しに俺に誘うように催促してくるしな」

「そんな……」

そんなふうに思ってくれてたんですね……。

「遠慮してるのか忙しいのかは分からないが、シリカさえよければなるべく遊びに来てくれると助かる。逐一あいつらをなだめるのも面倒だし、なにより俺もシリカが来てくれた方がにぎやかで楽しいしな」

「はい……はい！絶対また来ます！明日も来ます！」

「ああ、そうしてくれ」

「ありがとうございます。クレハさん」

クレハさんに言ってもらった簡単な言葉で、今まで遠慮していたことが馬鹿らしくなってきました。SAOに閉じ込められて、こんなにうれしかったことがあったでしょう。ピナが死んだあの時、キリトさんに手を差し伸べられた時と同じくらい、うれしい。今後どんなことがあっても、もしSAOがクリアされたとしても、この人たちの繋がりは無くしたくない。わたしはずっとこの人たちのそばにいたい。クレハさ

んに渡された花束を抱きしめながら、わたしはそんなことを思っていました。

「おークレハ、ずいぶん大胆なプレゼントだな。花束なんてまるでプロポーズみたいじゃねえか」

「ぷ、ぷろっ!!」

「面白半分で変なこと言うなよ。お前の分のコーヒー入れてやらないぞ」

「おおつとそりゃ勘弁」

エギルさんがニヤニヤしながらそんなことを言ってきました。全く意識してませんでしたけど、確かにそう見えますよね、今のわたしって。なんだか、自覚するともものすごく恥ずかしくなってきました。クレハさんには全くそんな気がないってことはわかってるんですけど、そういう問題ではなくただ照れくさいというか…

「フーン…よかったなーシーちゃん」

「ホントねー。綺麗な花束ねー」

「り、リズさん？アルゴさん？あの…目が怖いんですけど」

さつきまであんなにうれしそうに顔してたのに、今度はなんだかすごく悪い顔してます。面白いおもちゃを見つけたみたいなの。

「そういえばさつきは全然シリカの話してなかったわよね。続きしましょうよ続き」

「それはいいナ、なんだったらオレッツチがシーちゃんの恥ずかしいマル秘情報のはなし

でもしようか？」

「あら、いいわねそれ」

「え、ちよつとなんですかそれ」

「…私もちよつと興味あるかも」

「アスナさんまで!!」

全く心当たりはないんですけど、情報源がアルゴさんっていう時点でもう嫌な予感しかしないのでぜひやめてほしいです。

「そんなに警戒しなくてもダイジョウブだった。フリfrisカートの装備品を初めて着たときに、リアルで人気だった美少女戦隊アニメの変身ポーズを鏡の前で練習してたとかそんなレベルだからナ」

「な、なんで知ってるんですかあ!!」

しかもそれって結構最近の話ですし……そういえば確かにあの時って情報収集のためにアルゴさんとパーティ組んで35層のクエストに参加してた時だったような。アルゴさんはちよつとお風呂に入ってたのでバレないと思っただのに！は、恥ずかしい

……

「ふふ、シリカちゃん可愛いわね」

「アルゴの情報力はえげつないからなあ……」

「ま、聞いてる分にはおもしろえからいいけどな」

「キ、キリトさん聞いちやダメです！アスナさんもクラインさんも面白がってないで止めてくださいよお！」

キリトさんもクラインさんも全然止めてくれる気配がないです。確かにわたしも他人事だったらダメだって思いながらも止めはしなしかもしれませんが、今はまさに自分が恥ずかしいので止めてほしいです。

「他人事みたいに言ってるけど、キー坊はこの前アーちゃんに内緒で無駄なレアアイテム買ってたよナ。クラインは毎日挨拶してくれる女の子がいて『絶対俺に気がある！モテ期到来だ！』って息巻いてたのに、実はNPCだったシ」

「う、うわあ…：クラインさん、それはちよつと」

「おいキリの字！あのバカ鼠を黙らせるぞ！」

「任せるクライン！捕まえてそれ以上喋らせるな！」

「ニヤツハツハー！遅い遅い！」

キリトさんとクラインさんがアルゴさんを捕まえようとしていますけど、アルゴさんの動きが速すぎて全然捕まる様子がないです。あ、逆にキリトさんがアスナさんに捕まっちゃいました。アスナさんすつごく笑顔ですけど、目が全然笑ってないのですごく怖いんですが、たぶんさつきアルゴさんが言ってたレアアイテムの件で怒ってるみたいです

ね。正座させられちゃってます。

リズさんとエギルさんは面白がってクラインさんがアルゴさんを捕まえられるか賭けようなんて話してますし、なんだかもうぐつちやぐちやです。……わたしの恥ずかしい情報が暴露された意味ってあつたんでしょうか。

「どうでもいいけど、お前ら俺の店で暴れるなよ」

「ははは、やっぱりにぎやかですね。クレハさんのお店」

「主に俺以外の奴らがな。こういうのは嫌いか？」

「いいえ。むしろ、大好きですよ」

「そりゃあ良かった」

ちよつと恥ずかしい思いもしちゃいましたけど、この人たちと居たいって気持ちには変わりません。さつきクレハさんに言った通り、明日も絶対に来ようと思います。その時は、このお花のお礼を何か用意しないとイケないですね。お礼のお礼つてことになるので、少しおかしな気もしますけど。

この人たちとのにぎやかな日常の中に、わたしももつと入ってみたいです。

「てめえアルゴ！机の上を飛び越えるのはずるいだろ！」

「クラインあと30秒以内に捕まえろ！500コルかかってんだぞ！」

「アルゴー、店の外に逃げるのは無しだからね！」

「ニヤハハハハ！まかせろりっちゃん」

「キリト君。この前無駄遣いしないって話したよね？」

「いや、それはその……つい魔が差してとうか」

けど、流石にこの状態は……いろいろと大変そうとうか何とうか。

「……あいつら止めるの手伝ってもらっていいか？」

「……自信はないですけど、頑張ります」

この人たちと一緒にいたいんですが、このままいくと、わたしはクレハさんと同じ苦
労人のようなポジションになってしまう気がします。